

加賀市

梶井衛生センター遺跡

加賀市

梶井衛生センター遺跡

2023

石川県埋蔵文化財センター
(公財)石川県埋蔵文化財センター

2023

石川県教育委員会
(公財)石川県埋蔵文化財センター

かじい えいせい
梶井衛生センター遺跡

2 0 2 3

石 川 県 教 育 委 員 会
(公財)石川県埋蔵文化財センター



調査区全景（北西上空から）



調査区全景（北東から）





16



14



13



29



22



2



449



12

1 区 SD01 出土壺、割貫桶蓋

例 言

- 1 本書は梶井衛生センター遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県加賀市梶井町地内である。
- 3 調査原因は北陸新幹線建設事業（金沢・敦賀間）で、同事業を所管する独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は公益財団法人石川県埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」）が、石川県教育委員会から委託を受けて、平成28（2016）、30（2018）～令和4（2022）年度に実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。現地調査については発掘調査作業及び空中写真測量図化作業等に係る関連作業の支援を国際文化財株式会社（現場代理人 青嶋邦夫・安村健）に委託し、県埋文センターの監理のもと実施した。
- 5 調査に係る費用は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構が負担した。
- 6 現地調査は平成28・令和2年度に実施した。期間・面積・担当（当時）は下記のとおりである。
 - (1) 平成28年度
期 間 平成28年10月24日～平成29年1月20日
面 積 2,540㎡
担 当 調査部 国関係調査グループ
担当者 浜崎悟司（課長補佐）、越前慎子（専門員）、横山純子（嘱託調査員）、野口沙愛（嘱託調査員）
 - (2) 令和2年度
期 間 令和2年7月8日～令和2年8月5日
面 積 150㎡
担 当 調査部 特定事業調査グループ、国関係調査グループ
担当者 熊谷葉月（主幹）、中谷光里（嘱託調査員）
- 7 出土品整理は平成30年度、令和元・2・3年度に実施し、調査部国関係調査グループおよび特定事業調査グループが担当した。遺物実測・トレース・観察表作成・遺構番号注記作業は、平成30年度に国際文化財株式会社、令和2年度に株式会社アコードに委託し、県埋文センターの監理のもと実施した。
- 8 自然科学分析は、令和元年度に木製品の樹種同定、微細物分析、花粉分析、植物珪酸体分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に、令和3・4年度には木製品の樹種同定を株式会社古生態研究所に委託して実施し、その成果を第4章に記した。
- 9 報告書の作成は令和2～4年度に実施し、編集・刊行は令和4年度に特定事業調査グループが担当した。執筆（当時）は、第1章第3節、第3章第4節、第5章第2節を伊藤雅文（調査部参事）、第2章、第3章第4節を歌代若菜（特定事業調査グループ主事）、第5章第1節・第3節を浜崎悟司（国関係調査グループ課長補佐）、第3章4節d項を久田正弘（県関係調査グループ専門員）、第4章第1節を株式会社古生態研究所、2節をパリノサーヴェイ株式会社が執筆し、必要に応じて文末に文書を記した。また、第1章第1・2節は、浜崎の原稿を伊藤が補筆した。全体の編集を伊藤がおこなった。
- 10 調査には下記の機関および個人の協力を得た。
独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、加賀市教育委員会、浅野良治、戸根比呂子、望月精司
- 11 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。

12 本書についての凡例は下記のとおりである。

(1) 遺構図その他の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系（世界測地系：測地成果2000）に準拠した。

(2) 水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。

(3) 遺構の名称は、下記の略記号に番号（算用数字）を付し表記した。

SA：柵列、SB：掘立柱建物、SD：溝、SE：井戸、SI：竪穴建物・平地式建物、SK：土坑、P：柱穴・小穴、SX：その他（不明遺構等）

(4) 土層注記の標記は、農林水産省水産技術会議事務局監修『標準土色帖』

(5) 出土遺物番号は挿図、観察表、写真で対応する。なお、実測時の遺物番号との対応については、出土遺物観察表に記載している。

(6) 遺物実測図については、須恵器は断面黒塗り、その他は白抜きとし、弥生土器・土師器の赤彩処理は薄い網掛け、内面黒色処理は濃い網掛けでその範囲を示した。

(7) 引用文献、参考文献および註は各章あるいは節等の末尾に記載した。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 現地調査の経過	3
第3節 整理作業等の経過	6
第2章 遺跡の位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 遺構と遺物	13
第1節 調査の概要	13
第2節 1・3区検出遺構	14
第3節 2・4区検出遺構	50
第4節 出土遺物	61
第4章 自然科学的分析	151
第1節 出土木製品の樹種同定	151
第2節 微細物分析・花粉分析・植物珪酸体分析	162
第5章 総括	173
第1節 遺跡について	173
第2節 遺構・遺物に関する補遺	174
第3節 壺形土器大量出土の意味	175

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	出土土器の保管状態……………	1	第37図	1区溝実測図 (S=1/80・1/40) ……	39
第2図	北陸新幹線 (金沢・福井間) 概略図……………	1	第38図	1・3区ピット・小穴実測図1 (S=1/60) ……	40
第3図	調査区位置図 (S=1/5,000) ……	2	第39図	1・3区ピット・小穴実測図2 (S=1/60) ……	41
第4図	調査状況 (1区SD01掘削) ……	4	第40図	1・3区ピット・小穴実測図3 (S=1/60) ……	42
第5図	調査状況 (1区SE01井戸枠取り上げ) ……	4	第41図	1・3区ピット・小穴実測図4 (S=1/60) ……	43
第6図	調査状況 (2区SD10周辺) ……	4	第42図	2・4区全体図 (S=1/500) ……	44
第7図	調査状況 (3区SA01周辺) ……	5	第43図	2・4区部分図1 (S=1/100) ……	45
第8図	整理作業 (記名・分類・接合作業) ……	6	第44図	2・4区部分図2 (S=1/100) ……	46
第9図	整理作業 (1区SE01井戸枠実測) ……	6	第45図	2・4区部分図3 (S=1/100) ……	47
第10図	整理作業 (1区SE01井戸枠写真撮影) ……	6	第46図	2・4区部分図4 (S=1/100) ……	48
第11図	遺跡の位置……………	7	第47図	2・4区部分図5 (S=1/100) ……	49
第12図	北陸西南部の地形……………	8	第48図	2区SI01平面・断面図 (S=1/100・1/60) ……	52
第13図	遺跡の位置と環境 (S=1/25,000) ……	9	第49図	2区SB02実測図 (S=1/60) ……	53
第14図	江沼地域の古墳群……………	11	第50図	2区SB03実測図 (S=1/60) ……	54
第15図	グリッド配置図 (S=1/1,000) ……	15	第51図	2区SB04実測図 (S=1/60) ……	55
第16図	主要遺構配置図 (S=1/1,000) ……	16	第52図	2区SB05平面・断面図 (S=1/60) ……	56
第17図	1・3区全体図 (S=1/500) ……	17	第53図	2・4区井戸土坑実測図 (S=1/60) ……	57
第18図	1・3区部分図1 (S=1/100) ……	18	第54図	2区SD10・11 4区SD01実測図 (S=1/60・1/100) ……	58
第19図	1・3区部分図2 (S=1/100) ……	19	第55図	2区SD14・07・08・03実測図 (S=1/60・1/100) ……	59
第20図	1・3区部分図3 (S=1/100) ……	20	第56図	2・4区ピット・小穴実測図 (S=1/60) ……	60
第21図	1・3区部分図4 (S=1/100) ……	21	第57図	遺物実測図1 (S=1/3) ……	71
第22図	1・3区部分図5・上層 (S=1/100) ……	22	第58図	遺物実測図2 (S=1/3) ……	72
第23図	1・3区部分図6・SD01下層 (S=1/100) ……	23	第59図	遺物実測図3 (S=1/3) ……	73
第24図	1区SB01平面・断面図 (S=1/60) ……	24	第60図	遺物実測図4 (S=1/3) ……	74
第25図	3区SA01実測図 (S=1/60) ……	25	第61図	遺物実測図5 (S=1/3) ……	75
第26図	1区SE01平面・断面図 (S=1/60) ……	27	第62図	遺物実測図6 (S=1/3) ……	76
第27図	1区SK01・02・03実測図 (S=1/60) ……	28	第63図	遺物実測図7 (S=1/3) ……	77
第28図	1区SK04・05・07・08実測図 (S=1/60) ……	29	第64図	遺物実測図8 (S=1/3) ……	78
第29図	3区SK01実測図 (S=1/60・1/20) ……	30	第65図	遺物実測図9 (S=1/3) ……	79
第30図	1区SD01実測図 (S=1/80) ……	32	第66図	遺物実測図10 (S=1/3) ……	80
第31図	1区SD01遺物出土状況図1 (中層1) (S=1/60) ……	33	第67図	遺物実測図11 (S=1/3) ……	81
第32図	1区SD01遺物出土状況図2 (中層2) (S=1/60) ……	34	第68図	遺物実測図12 (S=1/3) ……	82
第33図	1区SD01遺物出土状況図3 (中層3) (S=1/50) ……	35	第69図	遺物実測図13 (S=1/3) ……	83
第34図	1区SD01遺物出土状況図4 (下層1) (S=1/60) ……	36	第70図	遺物実測図14 (S=1/3) ……	84
第35図	1区SD01遺物出土状況図5 (下層2) (S=1/60) ……	37	第71図	遺物実測図15 (S=1/3) ……	85
第36図	1区SD01遺物出土状況図最下層 (S=1/60) ……	38	第72図	遺物実測図16 (S=1/3) ……	86
			第73図	遺物実測図17 (S=1/3) ……	87
			第74図	遺物実測図18 (S=1/3) ……	88
			第75図	遺物実測図19 (S=1/3) ……	89

第76図	遺物実測図20 (S=1/3)	90	第107図	遺物実測図51 (S=1/3)	126
第77図	遺物実測図21 (S=1/3)	91	第108図	遺物実測図52 (S=1/3)	127
第78図	遺物実測図22 (S=1/3)	92	第109図	遺物実測図53 (S=1/6・1/3)	128
第79図	遺物実測図23 (S=1/3)	93	第110図	遺物実測図54 (S=1/6・1/3)	129
第80図	遺物実測図24 (S=1/3)	94	第111図	遺物実測図55 (S=1/6・1/3)	130
第81図	遺物実測図25 (S=1/3)	95	第112図	遺物実測図56 (S=1/6)	131
第82図	遺物実測図26 (S=1/3・1/2・1/1)	96	第113図	遺物実測図57 (令和2年度調査1) (S=1/3)	132
第83図	遺物実測図27 (S=1/12)	102	第114図	遺物実測図58 (令和2年度調査2) (S=1/3)	133
第84図	遺物実測図28 (S=1/12)	103	第115図	遺物実測図59 (令和2年度調査3) (S=1/1・1/2・1/3)	134
第85図	遺物実測図29 (S=1/8・1/6)	104	第116図	遺物実測図60 (令和2年度調査4) (S=1/6)	135
第86図	遺物実測図30 (S=1/16・1/8)	105	第117図	遺物実測図61 (S=1/3)	137
第87図	遺物実測図31 (S=1/8)	106	第118図	木材(1)	158
第88図	遺物実測図32 (S=1/8)	107	第119図	木材(2)	159
第89図	遺物実測図33 (S=1/8)	108	第120図	木材(3)	160
第90図	遺物実測図34 (S=1/6)	109	第121図	木材(4)	161
第91図	遺物実測図35 (S=1/6)	110	第122図	花粉化石群集	166
第92図	遺物実測図36 (S=1/6)	111	第123図	植物珪酸体含量	167
第93図	遺物実測図37 (S=1/6)	112	第124図	種実遺体(1)	170
第94図	遺物実測図38 (S=1/6)	113	第125図	種実遺体(2)	171
第95図	遺物実測図39 (S=1/6)	114	第126図	種実遺体(3)	172
第96図	遺物実測図40 (S=1/6)	115	第127図	百間川原尾島遺跡検出稲株痕跡分布図および 稲株痕跡(註10を改変)	175
第97図	遺物実測図41 (S=1/6)	116	第128図	「稲株痕跡」の「作土の中央盛り上がり」 (註11より)	176
第98図	遺物実測図42 (S=1/6)	117	第129図	稲の根系分布	176
第99図	遺物実測図43 (S=1/6)	118	第130図	昭和9年の手取川大水害の様子 (註13から引用)	177
第100図	遺物実測図44 (S=1/6)	119			
第101図	遺物実測図45 (S=1/6)	120			
第102図	遺物実測図46 (S=1/4)	121			
第103図	遺物実測図47 (S=1/4)	122			
第104図	遺物実測図48 (S=1/4)	123			
第105図	遺物実測図49 (S=1/4)	124			
第106図	遺物実測図50 (S=1/3)	125			

表 目 次

第1表	調査・整理体制組織表	3	第7表	樹種同定結果1・2・3	152～154
第2表	遺跡地名表	10	第8表	種類別樹種一覧表	156
第3表	製鉄関連遺物観察表	137	第9表	土壌試料一覧	162
第4表	土器等観察表1～11	138～148	第10表	微細物分析結果	164
第5表	石器観察表	149	第11表	花粉分析結果	165
第6表	木製品観察表1・2	149～150	第12表	植物珪酸体含量	166

図版目次

巻頭図版 1	調査区全景（北西上空から） 調査区全景（北東から）	1 区西部 1 区中部遺構検出状況
巻頭図版 2	1 区SD01出土壺	1 区中部
巻頭図版 3	1 区SD01出土壺	1 区中部
巻頭図版 4	1 区SD01出土壺、刳貫桶蓋	写真図版11 1 区SD01上空から
写真図版 1	1 区中～西部全景 1 区～2 区近景（南から）	1 区SD01完掘状況
写真図版 2	2 区西半 調査区上空から東北東方向を望む	写真図版12 1 区SD01最下層 1 区SD01土層断面
写真図版 3	1 区全景（西から） 1 区全景（東から）	写真図版13 1 区SD01遺物等出土状況
写真図版 4	1 区SB01 1 区SB01 P48 1 区SB01 P111 1 区SB01 P50	写真図版14 1 区SD01遺物出土状況
写真図版 5	1 区SB01 P97南から 1 区SB01 P105南から 1 区東ピット群（北から） 1 区P77西から 1 区P63南から	写真図版15 1 区SD01遺物出土状況
写真図版 6	1 区P82南から 1 区P93西から 1 区P87東から 1 区P106南から 1 区SE01	写真図版16 1 区SD01遺物出土状況
写真図版 7	1 区SE01井戸側板 1 区SE01側板 1 枚取り外し	写真図版17 1 区SD01遺物出土状況
写真図版 8	1 区SE01上層 1 区SE01枠内断面 1 区SK01 1 区SK02 1 区SK02 D1断面 1 区SK02 D2断面 1 区SK03断面 1 区SK04断面	写真図版18 1 区SD01遺物出土状況 大型壺出土状況
写真図版 9	1 区SK05断面 1 区SK08 1 区SK02・03完掘（西から） 1 区確認坑 1 区P38 1 区P42 1 区河川上面	写真図版19 1 区SD01東肩部遺物出土状況 1 区SD01西肩部状況 1 区SD02a 1 区SD03 1 区SD04 1 区SD05
写真図版10	1 区西部	写真図版20 2 区西部完掘状況
		写真図版21 2 区西部ピット群
		写真図版22 2 区SI01 2 区SI01柱組 2 区SI01 P1土層断面 2 区SI01 P2土層断面 2 区SI01 P3土層断面
		写真図版23 2 区SI01 P5土層断面 2 区SI01 P6土層断面 2 区SI01のSD05土層断面 2 区SI01のSD04遺物出土状況 2 区堀立柱建物
		写真図版24 2 区SB02 2 区SB03 2 区SB04 2 区SB05 2 区SB02 P24 2 区SB03 P19 2 区SB03 P20 2 区SB03 P21
		写真図版25 2 区SB03 P22 2 区SB04 P8

	2区SB04 P12	写真図版36	1区SD01出土土器
	2区SB04 P13	写真図版37	1区SD01出土土器
	2区SB05 P4	写真図版38	1区SD01出土土器
	2区SB05 P5	写真図版39	1区SD01出土土器
	2区SB05 P3	写真図版40	1区SD01出土土器
	2区P69	写真図版41	1区SD01・SE01出土土器
写真図版26	2区SE01完掘状況	写真図版42	2区SD03、SD04、SD11、SK01出土土器
	2区SE01土層断面	写真図版43	2区SD11、SD10、SD14出土土器
	2区SE01	写真図版44	2区SD14出土土器
	2区SE01井戸底の状況	写真図版45	2区SD14、1区SD01出土土器
	2区SK01土層断面	写真図版46	1区SD01出土土器
	2区SK02土層断面	写真図版47	1区SD01出土土器
	2区SK03土層断面	写真図版48	1区SD01出土土器
写真図版27	2区SD03完掘状況	写真図版49	1区SD01、SD02、SK01、SK02、SK03等 出土土器
	2区SD03土層断面		
	2区SD03	写真図版50	1区SK02、2区SK02、SK03、SE01 出土土器
	2区P01		
	2区P02	写真図版51	2区SE01、SD07、SD08出土土器
写真図版28	2区SD10・11	写真図版52	2区SD08出土土器
	2区SD10・11土層断面	写真図版53	1区包含層等出土土器
	2区SD10土層断面	写真図版54	1区包含層等出土土器
	2区SD11土層断面	写真図版55	2区包含層等出土土器
	2区SD11遺物出土状況	写真図版56	2区包含層等、1区包含層等出土土器
写真図版29	2区SD07	写真図版57	1区包含層等出土土器
	2区SD08・14土層断面	写真図版58	1区包含層、2区包含層等出土土器
	2区SD08遺物出土状況	写真図版59	出土石器
	2区SD14遺物出土状況	写真図版60	1区SE01出土木器
写真図版30	3区近景（北から）	写真図版61	1区SE01出土木器
	4区近景（南から）	写真図版62	1区SE01、SD01出土木器
写真図版31	3区全景	写真図版63	1区SD01出土木器
	3区SK01とSA01	写真図版64	1区SD01出土木器
写真図版32	3区SA01 P1	写真図版65	1区SD01出土木器
	3区SA01 P2	写真図版66	1区SD01出土木器
	3区SA01 P3	写真図版67	1区SD01出土木器
	3区SK01土層断面	写真図版68	1区SD01出土木器
	3区SK01遺物出土状況	写真図版69	1区SD01出土木器
	3区SK01井戸枠出土状況	写真図版70	1区SD01出土木器
	3区SK01完掘状況	写真図版71	1区SD01、2区SI01出土木器
写真図版33	4区全景	写真図版72	1区SD01、2区SI01出土木器
写真図版34	4区SD01	写真図版73	3・4区出土遺物
	4区SD01土層断面	写真図版74	3・4区出土遺物、土器の墨書
	4区SD01遺物出土状況	写真図版75	土器の墨書
	4区SK01完掘状況	写真図版76	土器の墨書
	4区SK01土層断面	写真図版77	出土鉄滓
	調査区遠景（分校チャカヤマ古墳群から）	写真図版78	出土鉄滓
写真図版35	1区SD01出土土器		

第1章 調査の経緯と経過

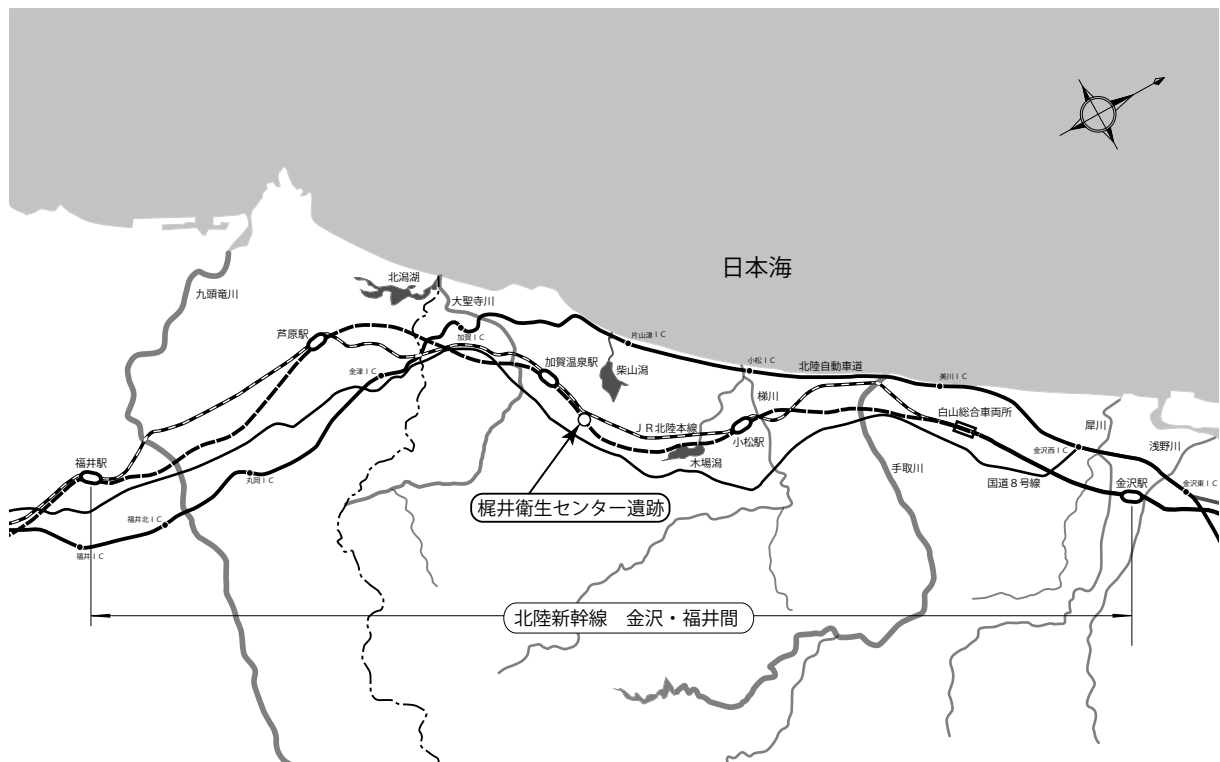
第1節 調査の経緯

梶井衛生センター遺跡は、遺跡地図のもととなった昭和47年作成の「埋蔵文化財包蔵地調査カード」によると、昭和37年の耕地整理工事中に須恵器・土師器が出土したことにより発見された。遺物発見当時、遺跡として行政的に認識されず、カード作成時によく遺跡と認識されたようである。その時のカードには「衛生センター」が建設されていたためか「調査不能」という記述がある。遺跡名はこの施設の名前から来たものである。

衛生センター建設工事で採集されたと思われる遺物が、昭和39年4月15日の日付で取り上げられている。おそらく石川県立大聖寺高等学校地歴部による調査と思われるが、活動記録誌の「郷土」に記載はない。大聖寺高校に収蔵されたが、現在は加賀市が保管している。遺物はリング箱に入れられ、新聞紙に包まれた状態にあり、全ての土器にネーミングがなされている。一部、須恵器と土師器に選別されている。今回の報告にあたり、編集者である伊藤が全ての土器を確認し2、3点の中世の土器があったことを確認した。これは本報告の事実関係を補足するものである。



第1図 出土土器の保管状態



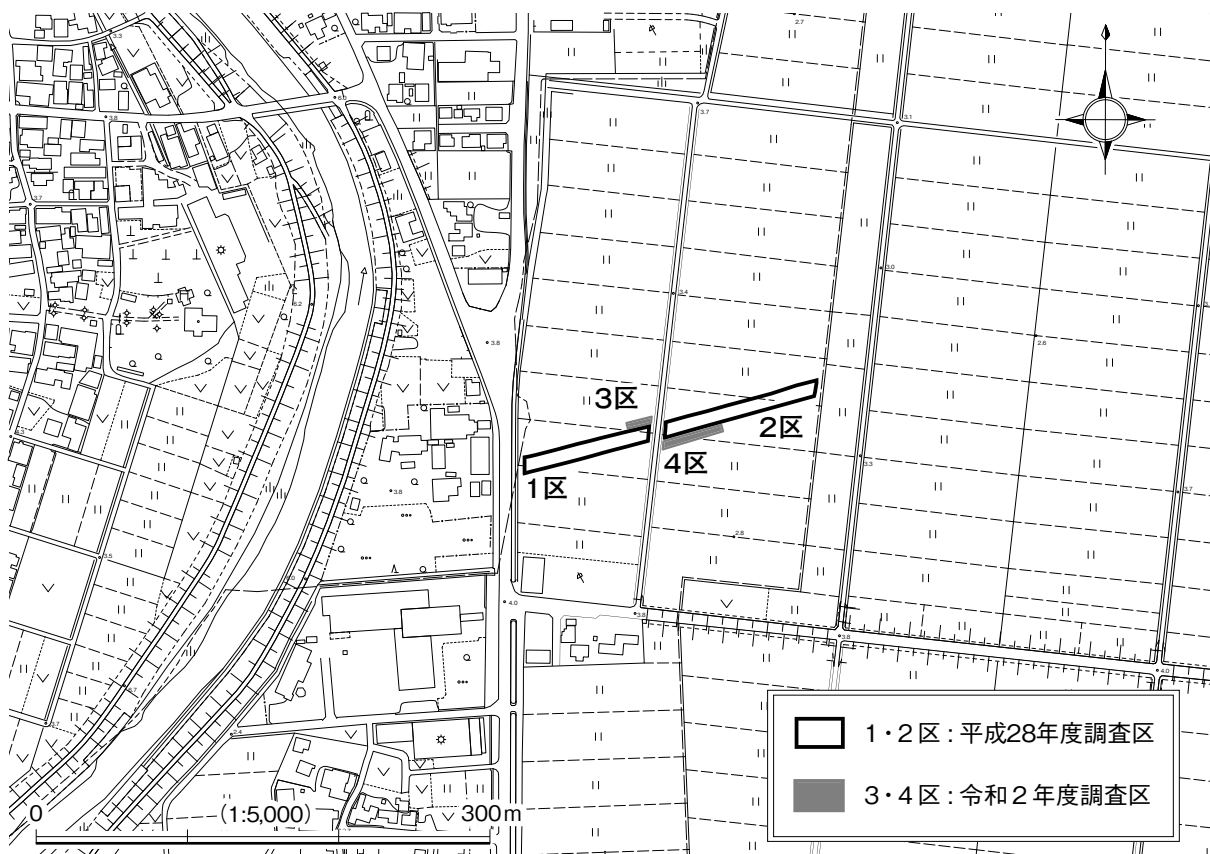
第2図 北陸新幹線(金沢・福井間)概略図

発掘調査は、鉄道建設・運輸施設整備支援機構を建設主体とする北陸新幹線建設事業に伴い、石川県教育委員会及び（公財）石川県埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」）により実施されたものである。

北陸新幹線は「国民経済の発展及び国民生活領域の拡大並びに地域の振興を図るため、全国新幹線鉄道整備法に基づき建設される新幹線鉄道」である。平成9年（1997）には長野オリンピック開催に合わせ、東京駅から長野駅まで部分開業し、平成27年には長野駅から金沢駅までの区間が開業した。それに伴い、石川県内では平成10～22年度にかけて、河北郡津幡町地内から白山市の白山総合車両所の区間まで発掘調査が実施された。そのような中で福井県敦賀市までの延伸が決まり、金沢から敦賀までの区間の整備が、平成24年6月に国土交通省による工事実施計画の認可を受けて北陸新幹線（金沢・敦賀間）建設工事が着工し、8月19日には起工式が行われている。その後、平成27年1月に政府において令和7年度の完成・開業を3年前倒し、令和4年度の開業を目指すことが決定された。

白山総合車両所から福井県境までの工事計画範囲における埋蔵文化財の取り扱いについては、鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部大阪支社（以下「事業者」）から石川県教育委員会文化財課（以下「県文化財課」）に照会があり、県文化財課は計画範囲内に22ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が存在することを回答し、周知の埋蔵文化財包蔵地については、文化財保護法第94条に基づき発掘調査等の保護措置が必要となる旨伝えた。

その後、双方の協議により、用地買収が済んで試掘を実施する環境が整った範囲から、詳細分布調査、試掘等を順次実施することとなった。その結果、16遺跡について本調査の必要が決定された。平成25年度には白山総合車両所内の本線部分に係る宮保B遺跡や北出遺跡の本調査が実施された。また、平成27年度には新幹線小松駅舎部分の八日市地方遺跡の調査が実施され、平成28年度以降本格的に調査が実施された。



第3図 調査区位置図 (S=1/5,000)

県埋文センターは、金沢・敦賀間の令和4年度中の開業を見据えて、分布調査結果から埋蔵文化財調査が膨大な調査面積となるため、調査の効率化と期間短縮を目的に平成27～29年度に実施した発掘調査においては民間会社による発掘調査支援を導入した。その主な委託内容は、仮設建物等の整備、現場の保守・管理、基準杭の設定、発掘機材の準備、作業員への指示・安全管理、図面等の作成、台帳等の作成、空中写真測量などである。また、平成30年度以降には、梶井衛生センター遺跡のほか、先に発掘調査された遺跡のいくつかにおいて、北陸新幹線建設工事に伴う取付道路工事箇所を対象とした発掘調査が実施された。特に令和2年度には、計7件の調査が行われた。これらは発掘件数が多いものの本線沿いに点々と分散した小規模調査区であり、本線工事が盛んに行われる中において調査工程や調査期間に変動のあることが見込まれたことから、県埋文センター直営により調査を実施した。さらに令和2年度においては、事業者と協議の結果、当該区域の新幹線工事業者により表土除去や表土移動が実施された。

第2節 現地調査の経過

a 平成28年度調査

平成28年度の発掘調査は北陸新幹線本線箇所を対象とし、現地調査は平成28年10月24日～平成29年1月20日にかけて実施した。調査面積は2,540㎡である。調査体制は第1表のとおりである。

第1表 調査・整理体制組織表

年 度	平成28年度	平成30年度	令和元年度
業務内容	発掘調査	出土品整理（直営） および出土品整理（委託）	出土品整理、自然科学分析（委託）
業務主体	（公財）石川県埋蔵文化財センター （理事長 田中新太郎）	（公財）石川県埋蔵文化財センター （理事長 田中新太郎）	（公財）石川県埋蔵文化財センター （理事長 田中新太郎）
総 括	柴田政秋（専務理事）	紺野欽一（専務理事）	紺野欽一（専務理事）
事 務	釜親利雄（事務局長）	釜親利雄（事務局長）	釜親利雄（事務局長）
総 務	長嶋 誠（総務GL）	山口 登（総務GL）	伊藤 直（総務GL）
経 理	西 邦広（総務G専門員）	西 邦広（総務G専門員）	山崎 修（総務G専門員）
担 当	福島正実（所長）	藤田邦雄（所長）	垣内光次郎（所長）
	藤田邦雄（調査部長）	垣内光次郎（調査部長）	伊藤雅文（調査部長）
	伊藤雅文（国関係調査GL）	国関係調査グループ	国関係調査グループ
	浜崎悟司（国関係調査G課長補佐）		
	越前慎子（国関係調査G専門員）		
	横山純子（国関係調査G嘱託調査員）		
	野口沙愛（国関係調査G嘱託調査員）		
年 度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
業務内容	発掘調査、出土品整理（直営）および 出土品整理（委託）、原稿作成	出土品整理、自然科学分析（委託）、 原稿作成	自然科学分析（委託）、原稿作成、 報告書刊行
業務主体	（公財）石川県埋蔵文化財センター （理事長 徳田 博）	（公財）石川県埋蔵文化財センター （理事長 徳田 博）	（公財）石川県埋蔵文化財センター （理事長 北野喜樹）
総 括	田村彰英（専務理事）	田村彰英（専務理事）	田村彰英（専務理事）
事 務	北谷俊彦（事務局長）	北谷俊彦（事務局長）	北谷俊彦（事務局長）
総 務	伊藤 直（総務GL）	北谷祥子（総務GL）	杉林賢明（総務GL）
経 理	山崎 修（総務G専門員）	杉林賢明（総務G主幹）	西田智恵（総務G主幹）
担 当	伊藤雅文（所長）	伊藤雅文（所長）	川畑 誠（所長）
	川畑 誠（調査部長）	川畑 誠（調査部長）	土屋宣雄（調査部長）
	澤辺利明（特定事業調査GL）	特定事業調査グループ	特定事業調査グループ
	熊谷葉月（特定事業調査G主幹）		
	中谷光里（国関係調査G嘱託調査員）		

平成28年4月1日に事業者と石川県、石川県と県埋文センターの間で北陸新幹線発掘調査にかかる全ての遺跡を一括した委託契約を締結した。新幹線建設事業に係る発掘調査は4月の早い段階で着手するために、前年度1月には調査工程の大枠を決めて、4月当初に調査着手する遺跡を決めたため、梶井衛生センター遺跡は4月当初から調査に着手するグループから外れた。しかし、調査事務所や駐車場、排土置場などの調査に必要なヤードの調整や排水、重機の進入など調査条件の確認を調査予定遺跡全てに行い、2月中に鉄道運輸機構にこれらの条件を提示した。3月末には、発掘調査支援業務にかかる設計書作成依頼をおこない、年度当初に支援業者を決める入札ができるよう準備した。

梶井衛生センター遺跡の発掘調査は、西任田遺跡、中ノ庄遺跡を担当していた二つの調査班のうちの1班が調査終了後に着手する工程を組んだ。10月17日付で県埋文センターから法第92条1の発掘調査届を県文化財課に提出し、同日付で加賀市教育委員会及び地元の梶井町に調査の案内をだした。21日には発掘調査に対する通知が県教委から出された。発掘調査支援業者を決める入札が10月3日におこなわれ、10月5日には支援業者(国際文化財株式会社)とセンター担当及び担当GLの間で、発掘調査の実施にかかる打合せを持ち、週1回程度の工程会議を持つこととした。

当センターの重機掘削は10月24日からじまった。機構の施工業者により、残土と耕作土と発掘調査で掘削した土砂が混じらないように土木シートが設置されていた。同日、支援業者からの準備状況の説明があり、作業員募集に苦慮しているとの説明があった。表土掘削作業と事務所建て上げなどの調査準備や環境整備を並行しておこなった。

発掘調査は東西に細長い調査であったので、中央に横断する農道により、その西側を1区、東側を2区として実施した。現地調査は10月24日に着手し、10月24日～11月4日にかけて1区、続いて2区の重機による表土除去を行った。表土除去作業に並行して11月1日から作業員による遺構検出を開始した。当初作業員は数名という状態であったが、数日後には20名近くとなり、ようやく作業が本格化した。遺構は、弥生時代中期の溝や古墳時代前期の平地式建物、奈良～平安



第4図 調査状況(1区SD01掘削)



第5図 調査状況(1区SE01井戸枠取り上げ)



第6図 調査状況(2区SD10周辺)

時代の掘立柱建物や井戸、溝などを検出した。以後1・2区で作業場所を変えながら遺構掘削を進め、11月29日に第1回目（1区西部および2区中央部・東部）のラジオコントロールヘリコプターによる空中写真測量を実施した。続いて1区中央部・東部および2区西部の遺構検出、遺構掘削作業を行い、12月21日に第2回目（1区東部および2区西部）の空中写真測量を実施した。年が明けた1月13日に第3回目（1区中央部）の空中写真測量を実施した。以後、補足調査を実施し1月20日に現地を事業者へ引渡し、現地調査を完了した。（浜崎・伊藤）

b 令和2年度調査

令和2年度の発掘調査は、北陸新幹線建設工事に伴う取付道路工事箇所の260㎡を対象とした。しかし、本事業にかかる他遺跡の発掘調査において本線工事が平成28年度発掘調査範囲を越えて及んでいることが本年度調査で判明した。このような事案が当該年度調査予定遺跡に及んでいる可能性があり、試掘することによりその損壊範囲の把握につとめた。その結果、本遺跡についても一部損壊されていることが判明した。文化財課は鉄道運輸機構とその対応について協議し、慎重な工事施工を事業者を求めることとなり、当センターに対しては調査対象面積を減じる計画に変更することとした。

文化財課からは6月30日付で、「工事の計画変更に伴う発掘調査対象箇所の変更」という理由で、260㎡を150㎡とする計画変更協議があり、同日付で同意した。契約の変更は、年度末精算見込み時に行うこととした。

調査区は、平成28年度調査1区北側に続く部分を3区、同2区南側の部分を4区とした。現地調査は令和2年7月8日～同年8月5日にかけて実施した。調査体制は第1表のとおりである。

令和2年4月1日に事業者と石川県、石川県と県埋文センターの間で委託契約を締結し、県埋文センターからは発掘届を県文化財課に提出した。6月8日には事業者、県文化財課、県埋文センター、新幹線工事施工業者による現地打合せを行い、調査工程、調査範囲、事務所や排土のヤード、排水処理、現地作業での注意点などを協議・確認した。6月18日付で法第92条1の発掘調査届を県教委に提出し、あわせて加賀市と梶井町に発掘調査案内を出した。

現地調査は7月8日に着手した。7月10日に鉄道運輸機構が用意した重機による表土除去をおこなった。7月13日から作業員による遺構検出に着手し、同日には基準杭を設定したほか、文化財課により前述の事案による遺跡の損壊状況の確認をおこなった。検出した遺構は、平成28年度調査区から続く弥生時代の溝や、平安時代の掘立柱建物などがある。7月30日にラジオコントロールヘリコプターによる空中写真測量を実施した。以後、補足調査を実施し8月5日に現地を事業者へ引渡し、現地調査を完了した。埋蔵物の発見届を8月5日付で大聖寺警察署長あてに届け出し、8月20日付で文化財認定の通知を受けた。（伊藤）



第7図 調査状況（3区 SA01 周辺）

第3節 整理作業等の経過

出土品整理から報告書作成・刊行にいたる整理作業については、発掘作業と同様に、事業者の依頼を受けた県教委から県埋文センターへの委託事業として実施した。平成31・令和元年度までは国関係調査グループが担当し、翌年度以降は特定事業委調査グループが担当した。北陸新幹線建設にかかる発掘調査では膨大な遺物が出土したことから、事業期間中に出土遺物の実測・トレース作業を終了することが困難な状況であった。そのため、県埋文センター直営による出土品整理に加え、直営による遺物の記名・分類・接合を行ったのち、実測・トレースおよび観察表作成作業を業者に委託し実施した。

平成28年度調査出土遺物整理作業は、平成30年度に遺物の洗浄を行い、その後、土器・石器の実測・トレースを国際文化財株式会社に委託した。平成31・令和元年度には、大型木製品の実測・トレースを直営作業で行い、その樹種同定をパリーノ・サーヴェイ株式会社に委託した。また同社には花粉分析及び微細物分析も委託した。令和2年度には木製品の実測・トレースを株式会社アコードに委託した。さらに、報告書原稿の執筆も開始した。令和3年度には樹種同定委託を株式会社古生態研究所に委託し、報告書原稿作も引き続き行なった。

令和2年度調査出土遺物整理作業は、遺物洗浄を同年度内に行い、令和3年度に遺物の実測・トレースを直営作業で行った。令和4年度には樹種同定を株式会社古生態研究所に委託し、同研究所には、3年にわたって行なった樹種同定にかかる全体的なまとめもあわせて依頼した。

令和4年度は、平成30年度以降に遺物整理と分析委託を5カ年度にわたって分割しながら、少しずつ行なったために、各種の調査データと整合とりながら、最終的な原稿を作成し、編集・刊行を実施した。

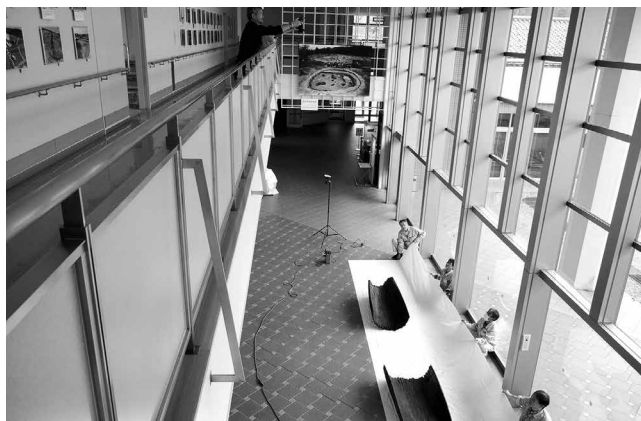
以上を俯瞰すれば、平成30年度から令和3年度に遺物整理を行い、平成31・令和元年度から令和4年度に分析委託、令和2年度以降に原稿執筆、図版作成、出土品の写真撮影などを行い、令和4年度に報告書の編集・校正等作業を経て刊行した。(伊藤)



第8図 整理作業（記名・分類・接合作業）



第9図 整理作業（1区 SE01 井戸枠実測）



第10図 整理作業（1区 SE01 井戸枠写真撮影）

第2章 遺跡の位置と環境

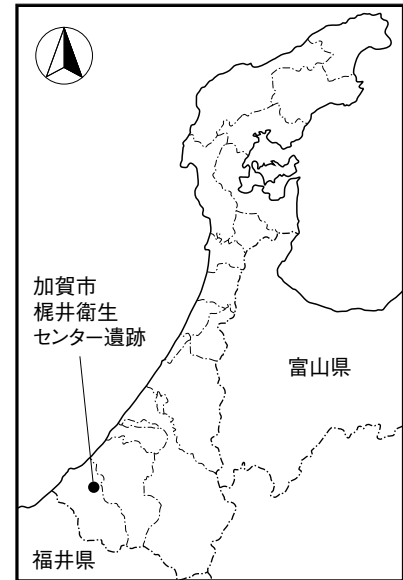
第1節 地理的環境

梶井衛生センター遺跡は加賀市梶井町に位置する。加賀市は石川県の最西端に位置し、北は日本海、東は小松市、南から西にかけては福井県あわら市・坂井市・勝山市に接する。市域は平成17年に旧江沼郡山中町と合併し、現在は305.87km²となった。人口は令和5年1月1日現在で63,461人である。交通はJR北陸本線と国道8号線が市域の平野部を東西に並走し、海岸沿線を走る北陸自動車道は南側で内陸に入り、福井県境を越えたあたりでJR北陸本線・国道8号線と交差する。繊維・機械金属工業を基幹産業とする一方、加賀市が発祥とされる九谷焼や、高い木地挽物技術をもつ山中漆器などの伝統工芸も盛んである。また加賀市内に点在する山中温泉、山代温泉、片山津温泉は、小松市の栗津温泉とともに加賀温泉郷として知られる。

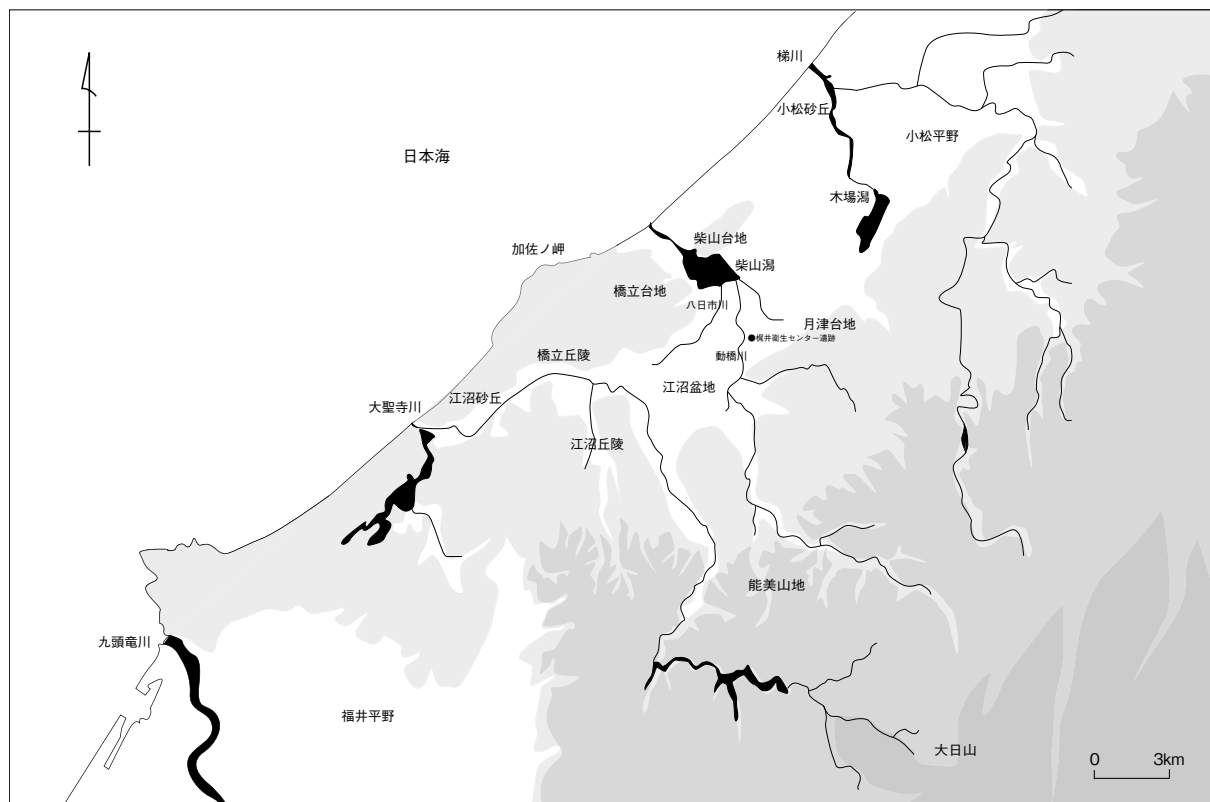
地形は低地、山地、丘陵台地に大別され、本遺跡が位置する江沼盆地は、東部に月津台地、西部に橋立丘陵、南部は江沼丘陵に囲まれている。盆地の北部には柴山潟があり、潟の対岸には柴山台地が広がる。加賀市の水系は大日山を水源とする動橋川と大聖寺川に大別され、盆地内には動橋川や、八日市川などの小河川が柴山潟に注ぐ。周辺にはほかにも今江潟（現在は開拓事業により消失）・小松市域の木場潟がみられ、「加賀三湖」と称されている。柴山潟と今江潟が干拓事業で縮小・消失する以前は、柴山潟と木場潟は河川を通じて今江潟に流れ込み、小松市を流れる梯川と合流して日本海に注ぎ込んだと考えられる。

梶井町は加賀市東部に位置し、動橋川下流域右岸と一部左岸に及ぶ。周辺は動橋川が江沼丘陵から江沼盆地に流れ出る地点に当たり、動橋川が大きく蛇行した結果として形成された自然堤防と後背湿地が入り組んでいる。梶井町については全域が江沼平野上にあり、町域の大部分は後背湿地を水田として利用し、氾濫原の微高地上には集落が形成される。

本遺跡については梶井町北側の動橋川右岸に位置し、遺跡の北側は動橋町との町境に近い。周辺は水田に囲まれ、遺跡の西側は県道39号線山中伊切線が通っている。近隣には梶井遺跡や松山C、松山D遺跡などの集落遺跡や古墳が見つかり、かつては現在よりもさらに細かな微高地が点在し、その微高地上に集落や古墳が占地していたことが知られる。



第11図 遺跡の位置



第12図 北陸西南部の地形

第2節 歴史的環境

ここでは主に本遺跡が位置する江沼盆地及びその周辺の台地や丘陵上の遺跡、また柴山潟の対岸にある柴山台地上の遺跡について一部取り上げる。

旧石器時代・縄文時代

本遺跡周辺では旧石器時代の遺跡は見つかっていないが、橋立丘陵裾部に位置する大菅波コシヨウズワリ遺跡で柳葉形尖頭器が出土している。縄文時代になると、中期までは橋立丘陵、月津台地などの台地上や、江沼丘陵縁辺部に遺跡が散見され、片山津玉造遺跡（78）、打越A遺跡（86）、津波倉遺跡（58）などがみられる。また、この時期は柴山台地上に柴山貝塚や柴山水底貝塚遺跡など、柴山潟と密接に関連した遺跡が形成される。また橋立丘陵裾部には大菅波コシヨウズワリ遺跡や小菅波国道遺跡がみられる。一方で縄文時代後晩期になると台地上の遺跡の実態は不明瞭になり、江沼丘陵上でもこの時期の遺跡はほとんどみられない。動橋川中流域に営まれた横北遺跡（45）は後期中葉から晩期中葉にあたる数少ない一例である。

弥生時代

弥生時代前期においても柴山潟を利用した集落の展開が見られ、柴山水底遺跡や柴山出村遺跡では潟縁の低地を利用して水稻農耕を行っていたと考えられる（安2002）。中期以降になると、柴山潟から加賀三湖に流れる河川の水利を生かした遺跡分布に変化し、各水系で土器が散見されるようになる。梯川流域では小松市八日市地方遺跡が成立し、柴山潟周辺では八日市川流域の猫橋遺跡（69）が



第 13 図 遺跡の位置と環境 (S=1:25000)

第2節 歴史的環境

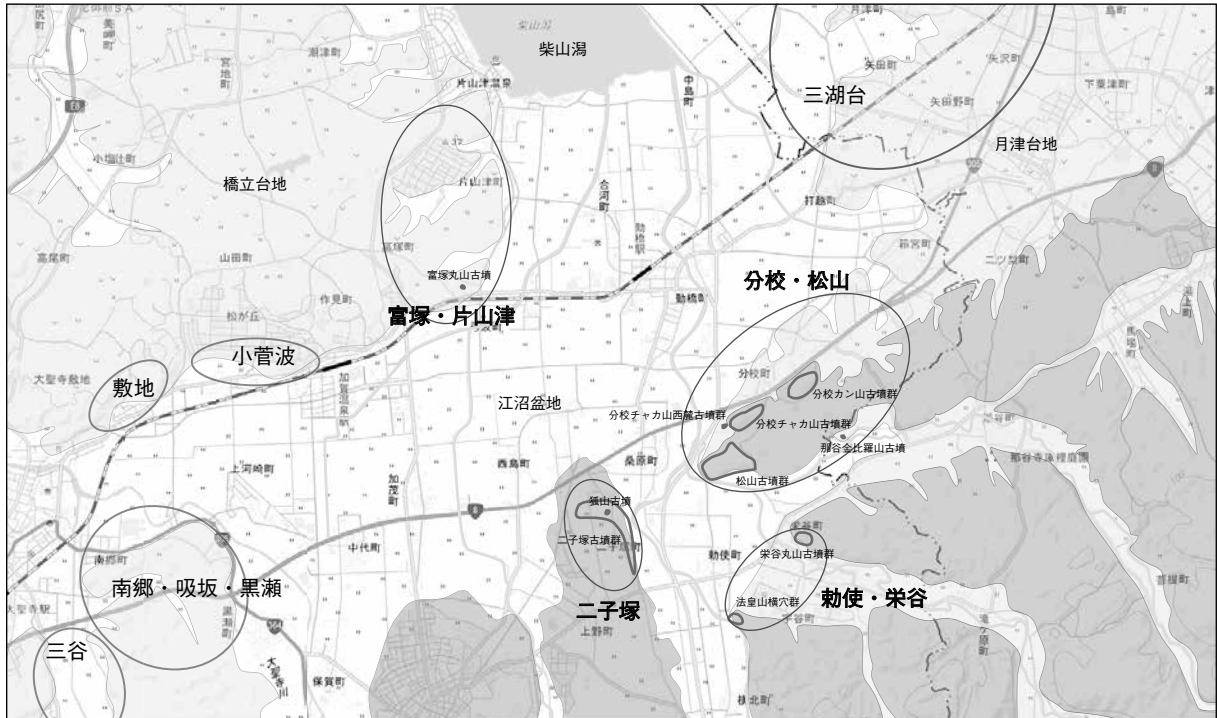
第2表 遺跡地名表

No.	遺跡名	出土品	種別	時代	No.	遺跡名	出土品	種別	時代
1	横井衛生センター遺跡	須恵器、土師器	散布地	弥生～中世	47	小坂モリアナ遺跡	高坏罎、蓋坏	散布地	古墳～中世
2	動橋遺跡		塚跡	中世	48	上野ヨシコ墓跡	須恵器	墓跡	奈良・平安
3	動橋バンテン遺跡		散布地	古墳・中世	49	上野古墳群		古墳	古墳
4	横井遺跡	須恵器、土師器	散布地	古墳～平安	50	上野高岡山陣跡		陣跡	安土桃山
5	松山C遺跡	須恵器、土師器、子持勾玉、紡錘車、鉄刀、和同開珎	集落	古墳・平安	51	山代イチャイヨリ遺跡		集落	その他
6	松山D遺跡	弥生土器、須恵器、土師器、埴輪、陶磁器	集落・古墳	弥生～中世	52	山代新遺跡	須恵器、土師器	散布地	奈良・平安
7	分校B遺跡		散布地	平安	53	上野遺跡	須恵器、土師器、中世陶器	散布地	奈良・平安、中世
8	分校A遺跡		散布地	古墳	54	二子塚クマノミヤ遺跡	須恵器、土師器、布目瓦	散布地	古墳後期
9	分校山王古墳群	直刀、鉄鍬、刀子、玉、須恵器	古墳	古墳後期	55	二子塚東田遺跡	弥生土器、土師器、管玉、同原石、ガラス玉、鉄器、須恵器	集落	弥生～奈良・平安
10	分校高山古墳	鍬、管玉、勾玉、小玉	古墳	古墳	56	狐山古墳	神祇鏡、衝角付貫、小玉、短甲、刀、剣、鉾、刀子、鍬、鍬製帯金具	古墳	古墳中期
11	分校C遺跡	中世土師器、瓦質土器、陶磁器、銅製花瓶	墳墓	室町～近世	57	二子塚古墳群	円筒埴輪、形象埴輪（人物）	古墳	古墳
12	分校カン山古墳群	鍬、鉄剣、鉄斧、鉄鏝、管玉	古墳	古墳前期	58	津波倉遺跡	縄文土器、石斧、石鏝、石鏝	集落	縄文
13	分校チャカ山古墳群		古墳	古墳前期	59	二子塚遺跡	須恵器、土師器	散布地	古墳
14	分校チャカ山西麓古墳群		古墳	古墳後期	60	庄・西島遺跡	須恵器、土師器	散布地	弥生・奈良～中世
15	那谷金比羅山窯跡群	須恵器	製陶	7c	61	西島B遺跡	和同開珎、土師器	散布地	奈良
16	那谷金比羅山古墳	須恵器	円墳	7c末	62	西島A遺跡	須恵器、瓦	集落	平安
17	分校ブドウ山古墳		古墳	古墳	63	西島C遺跡	須恵器、鉾渾、羽口	散布地	奈良
18	分校古墳群	須恵器	古墳	古墳	64	津波倉廃寺	須恵器、土師器、軒丸瓦、丸瓦、平瓦	社寺	奈良
19	分校窯跡群	須恵器	窯跡	古墳	65	桑原遺跡	土師器	散布地	古墳
20	松山窯跡群	須恵器	窯跡	古墳	66	手塚屋敷跡	土師器	屋敷跡	不詳
21	松山東古墳群		古墳	古墳	67	八日市遺跡	須恵器、土師器	散布地	弥生・古墳
22	松山古墳群		古墳	古墳前期	68	都もどり地蔵遺跡	須恵器、土師器	散布地	奈良・平安
23	松山城跡		城跡	南北朝	69	猫橋遺跡	縄文土器、弥生土器、木器、骨角器、石器、土鏝、自然遺物	集落跡	縄文～古墳
24	松山B遺跡	土師器（壺棺）	散布地	古墳	70	弓波遺跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼	散布地	縄文～中世
25	松山横穴		横穴墓	古墳後期	71	弓波廃寺	軒丸瓦、丸瓦、平瓦、須恵器、土師器	寺院跡	奈良
26	松山A遺跡	土師器、碧玉片	散布地	奈良・平安	72	忌部神社遺跡	土師器	古墳	古墳
27	松山陸奥遺跡	陶磁器	窯跡	江戸末期	73	富塚丸山古墳	剣、勾玉、鍬、甲、管玉、金環、埴輪	古墳	古墳
28	勅使遺跡	弥生土器、須恵器、土師器、布目瓦、陶磁器	散布地	弥生、奈良～中世	74	富塚遺跡	須恵器、土師器、銅形石末成品	散布地	奈良・平安
29	勅使館跡	中世土師器、陶磁器、瓦器、漆器	館跡	鎌倉・室町	75	片山津天神古墳		古墳	古墳
30	栄谷A遺跡	須恵器、土師器	散布地	奈良・平安	76	片山津ミサラン城跡		城跡	不詳
31	栄谷白山神社遺跡	弥生土器、土師器	散布地	奈良・平安、中世	77	富塚古墳群		古墳	古墳
32	栄谷室の上古墳	石棺	古墳	古墳	78	片山津玉造遺跡	縄文土器、石器、土師器、管玉、同末成品、原石、勾玉末成品、砥石、鉄器、須恵器	集落跡	縄文・古墳～中世
33	栄谷B遺跡	須恵器、土師器	散布地	奈良・平安	79	片山津本村古墳群		古墳	古墳
34	栄谷丸山古墳群	直刀、刀子、鉄鍬、金環、銀環	横穴墓	古墳後期	80	片山津ウノ古墳群		古墳	古墳
35	宇谷遺跡	須恵器、土師器	散布地	奈良・平安	81	片山津堂後遺跡	縄文土器、石斧、石鏝、弥生土器	散布地	縄文・弥生
36	宇谷A遺跡		散布地	平安・中世	82	片山津古墳群		古墳	古墳
37	宇谷北遺跡		横穴・地下式塔	中世	83	片山津本町遺跡		集落	古墳
38	退谷護法寺跡		社寺	古墳	84	動橋遺跡	須恵器、土師器	散布地	平安
39	宇谷野ヶ市野1号塚		塚	不詳	85	合河遺跡	枕石？	散布地	不明
40	宇谷野ヶ市野2号塚		塚	不詳	86	打鐵A遺跡	土器、石斧、石鏝	散布地	縄文前期
41	宇谷野ヶ市野A遺跡	土器、石鏝、石鏝	散布地	縄文	87	打鐵城跡		城跡	安土桃山
42	宇谷野ヶ市野B遺跡	須恵器	散布地	不詳	88	熊名古墳群		古墳	古墳
43	宇谷ベノフタ遺跡	須恵器	散布地	不詳	89	矢田新遺跡	杯蓋、土師器、塗彩土器、陶質土器、加賀焼	集落跡	奈良・中世
44	法皇山横穴群	方頭柄頭、直刀、刀子、鉄鍬、帯金具、金環、銀環	横穴墓	古墳後期	90	丸山古墳	石棺、須恵器	古墳	古墳
45	横北遺跡	土器、石斧、石鏝、凹石、石鏝、石鏝	散布地	縄文後期					
46	横北横穴群		横穴墓	古墳後期					

みられる。動橋川流域の本遺跡でもこの時期の遺構や遺物が見つかった。この時期は加賀三湖周辺と各水系流域の遺跡は八日市地方遺跡を中核として展開するが、弥生中期後葉に入ってから八日市地方遺跡が縮小するとともに、各水系に展開していた遺跡はある程度規模をもつ遺跡へと変化していく（下濱 2019）。後期になると動橋川周辺には庄・西島遺跡（60）や勅使遺跡（28）、二子塚東田遺跡（55）がみられ、八日市川流域の自然堤防・後背湿地には猫橋遺跡や弓波遺跡（70）、八日市遺跡（67）が展開する。猫橋遺跡や弓波遺跡では弥生時代中期から途切れた碧玉製の管玉製作を再度活発に行い始める。猫橋遺跡では船の部材を転用した井戸枠や河川跡なども見つかったことから弥生時代終末期より水運のポイントとして機能していた可能性が指摘されている（本田 2002）。また、八日市遺跡では鍛冶や銅製品の鑄造が行われていたほか、川岸に祭祀施設が設けられ、剣形木製品や桃の種、ヒョウタンなどが出土しており、水辺の祭祀が推測されている（中屋 2019）。

古墳時代

古墳時代になると、加賀市内では江沼盆地を取り巻くように古墳群が密集し、水系や低地、丘陵単位で古墳群がまとまってみられる。本遺跡に近い動橋川流域には分校・松山地域、勅使・栄谷地域、二子塚地域に古墳群が認められる。分校・松山地域では、前期には分校カン山古墳群（12）や分校チャカ山古墳群（13）が営まれ、中でも分校カン山1号墳は主軸長約37mの南加賀地域最古の前方後円墳で、船載方格規矩四神鏡が出土した。中期には松山古墳群（22）が営まれるのに加え、二子塚地域の狐山古墳（56）があらわれる。狐山古墳は主軸長約54mの前方後円墳で、国指定遺跡に指定されており、平野部に築造されている点で珍しい。後期には分校チャカ山西麓古墳群（14）、二子塚古墳群（57）、また勅使・栄谷地域では約200基の横穴（未開口含む）を有する法皇山横穴群（44）や栄谷丸山古墳



第14図 江沼地域の古墳群

群（34）が出現する。終末期には那谷金比羅山古墳（16）がみられ、北陸で唯一の横穴式石槨をもつ円墳として知られる。分校・松山地域では前期から後期にかけて古墳がつくられるのに対し、他二地域は突如この地域にあらわれ、短期間の造営にとどまる点で違いが見られる。また八日市川水系には、橋立台地上に富塚・丸山地域の古墳群がみられ、径約 50m の大型円墳である富塚丸山古墳（73）は 6 世紀後半に比定される。一方で、上記の古墳より低地に位置する松山 D 遺跡（6）で円墳が見つかり、松山 C 遺跡（5）でも円筒埴輪片が出土しており、低地でも未発見となっている古墳が他にも存在している可能性が高い。

また、小松市戸津町から加賀市松山町にのびる標高 40m から 100m の那谷丘陵上には、南加賀窯跡群と呼ばれる県内最大規模の窯跡地帯が存在し、須恵器生産については 6 世紀から 10 世紀中頃まで操業する。須恵器生産を主体としつつも土師器・埴輪・陶器・瓦などがつくられ、能美・江沼両郡の古墳や集落に運ばれた様子がみられる。動橋川流域では那谷金比羅山窯跡群（15）、分校窯跡群（19）、松山窯跡群（20）といった窯が 6 世紀後半頃に築かれた。松山 D 遺跡からは松山、分校窯跡群から運ばれたと思われる土師質円筒埴輪や須恵器が出土している（谷内ほか 2013）。

集落は弥生時代から引き続き営まれている遺跡が多く、動橋川流域には二子塚東田遺跡、八日市川流域には片山津玉造遺跡や猫橋遺跡、弓波遺跡などがある。二子塚東田遺跡や片山津玉造遺跡では古墳時代前期から碧玉製の石製品を生産しており、それより低地に位置する猫橋遺跡や弓波遺跡でも弥生時代に引き続き玉作りが行われている。

奈良・平安時代

奈良・平安時代になると、動橋川流域には梶井遺跡（4）、分校 B 遺跡（7）、松山 C、松山 D 遺跡、勅使遺跡、庄・西島遺跡、西島 A 遺跡（62）などの集落遺跡が見られ、本遺跡でもこの時期の遺物が出土している。松山 C 遺跡では古代の鉄剣や「米」と書かれた墨書土器が大量に出土し、江沼郡の異

称の一つ「ヨネ」であるとして、官衙遺跡や江沼臣の居宅などと推測されている（湯川ほか 2001）。庄・西島遺跡についても、範囲内である西島 A 遺跡で墨書土器、西島 B 遺跡（61）で明治時代に約 50 枚の和同開珎が出土したことから、政治的な中枢を担った可能性が考えられる。また、庄・西島遺跡の中にある津波倉廃寺（64）や、弓波遺跡に隣接する弓波廃寺（71）など古代寺院跡の存在が知られ、寺域や伽藍配置などは未だ不明であるが、周辺遺跡から布目瓦が出土している。

加えて、橋立丘陵上には 27 か所の製鉄遺跡が点在し、橋立製鉄遺跡群と称される。柴山潟を軸に、長期の生産が行われていた可能性がある（望月 2020）。

中・近世

中世以降では、南北朝期に築かれたとされる松山城跡（23）や、室町時代の堡跡とみられる動橋堡跡（2）、鎌倉・室町時代の館跡である勅使館跡（29）などがあげられる。分校 C 遺跡（11）では 15 世紀から 16 世紀の墓域が確認され、青銅製花瓶が出土した。近接する宇谷町・栄谷町は、小松市那谷町・滝ヶ原町・菩堤町とともに中世の寺院・横穴・地下式坑で知られ、関連が推測される（谷内・山川ほか 2013）。集落については弓波遺跡や勅使遺跡で古代に引き続きみられるが、古代以前と比較すると低調になる。これはより安定した地盤を居住地に選定した結果、現集落と重なって未発見となっている可能性がある（湯川ほか 2001）。また、前述の南加賀古窯跡群では、12 世紀後半から 14 世紀末頃まで加賀焼の生産が行われた。

江戸時代末期から明治初頭には丘陵裾の段丘部に再興九谷の松山焼窯跡（27）が操業している。

引用・参考文献

- 石川考古学研究会 1978「江沼古墳群分布調査報告」『石川考古学研究会々誌 第 21 号』石川考古学研究会
加賀市史編纂委員会 1978「原始古代」『加賀市史 通史 上巻』pp.177-312 加賀市役所
樫田 誠 2020「江沼地域の古墳」『新修 小松市史 資料編 17 考古』石川県小松市
木越隆三 1977「遺跡の位置及び歴史的環境」『加賀市横北遺跡発掘調査報告書』石川県教育委員会
下濱貴子 2019「位置と環境」『八日市地方遺跡Ⅴ』石川県小松市埋蔵文化財センター
戸根比呂子 2013「二子塚狐山古墳」『季刊考古学 別冊 19 若狭と越の古墳時代』（株）雄山閣
中屋克彦 2019「八日市遺跡」『石川県埋蔵文化財情報 第 40 号』pp.18-21（公財）石川県埋蔵文化財センター
本田秀生 2002『加賀市猫橋遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
三浦純夫 1989「遺跡の位置と環境」『那谷金比羅山古墳 那谷金比羅山窯跡群』石川県埋蔵文化財センター
望月精司 2020「古代製鉄遺跡」『新修 小松市史 資料編 17 考古』石川県小松市
安 英樹 2002「位置と環境」『加賀市柴山貝塚・柴山出村遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
谷内明央ほか 2013『加賀市松山 D 遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
谷内明央・山川史子ほか 2013『加賀市分校 C 遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
湯川善一ほか 2001『加賀市松山 C 遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター

第3章 遺構と遺物

第1節 調査の概要

a 調査の方法と基本土層

発掘調査は第1章第2節でも述べたように、新幹線本線部分を対象とした平成28年度とそれに付帯する側道等を対象とする令和2年度の2回実施したが、4年の空白期間があることや調査面積が大きく異なることから、調査区のグリッドはそれぞれ異なっていた。本報告では、平成28年度調査に合わせたグリッドにより報告する。また、遺構番号についても、複雑である。平成28年度調査の1・2区で通し番号がつけられた遺構は掘立柱建物のみであり、井戸や土坑及び溝、小穴などほかの遺構については同じ遺構番号が各調査区に存在する(例えばSK01は1～4区に存在するなど)。したがって、本報告における遺構名の表現は、地区名+遺構記号+遺構番号とする。例えば1区SK01のようである。

平成28年度調査区は、調査区域の中央を南北に縦断する農道を境に西を1区、東を2区とした。令和2年度調査はそれぞれの調査区に接するような調査区域であった。1区に北接する調査区を3区、2区に南接する調査区を4区として調査を行った。調査区グリッドについては、1・2区と3・4区では調査年が開いたことや3・4区の調査範囲が狭小であったことから、共通した調査グリッドを設定していない。

調査区域は表土直下が遺構面となっており、後世における削平がかなり激しいことがわかる。地形的には西に向かって緩やかに標高を上げており、東に位置する2区の東端の標高が2.4m前後、西に位置する1区の西橋の標高が2.7mと約30cmの差がある。この微細な地形は、調査区西にある動橋川が形成する自然堤防に由来するものである。さらにみると、調査区中央に位置する1・2区の接する部分が標高約2.9mと最も高く、遺構分布が顕著となっている。

1区西端から50mで検出した自然流路であるSD01までの間には30～40cm程度やや低い部分が存在する。この位置には顕著な遺構が存在せず、河川跡に由来する低湿な部分であったと思われる。これは上述した地形的なことを踏まえ、SD01に傾斜する下がる地形として認識できる。そして、SD01東岸は標高2.9mと調査区で最も高い位置にある。以上から、SD01の状況は、西にゆるやかに下がりながらSD01の河川に連続し、東側は微高地にさえぎられて、それに起立する地形であることがわかる。

調査区全面に10m四方のグリッドを設定した。遺構が県道を越えてさらに西に延びる可能性を勘案しグリッドを設定した。そして、南北ラインをアルファベット、東西ラインを数字であらわし、その交点をグリッド杭名とした。調査区西端の南北ラインをNo.12として10m毎東にナンバーを数え、東端ではNo.31となる。東西ラインは、Fラインとして北端がMラインとなった。グリッドの名称は、区域の南西の杭をもって代表して表示している。

b 遺構の配置

前項でも記したとおり、1・2区が相接する部分が最も地形的に高く標高約2.9mで、遺構分布が顕著である。余談だが、地形の背稜をなす部分に現在の農道が通りその両側に水田が作られているのは地形的に理にかなった農地構築である。この部分は調査区におけるもっとも安定した場所なのである。

この場所の西に自然河川（1区SD01）があり、遺構群とこの河川が密接な関係にあったと理解される。

主要遺構はこのSD01東に展開する。前述のようにSD01より西側は低湿で安定した地盤でなかったと思われる。そして、SD01から40m弱の場所に弥生時代中期の平地式住居（2区SI01）があり、この狭い範囲に遺構が分布するという地形に制限された遺跡である。1区SD01から大量の遺物が出土していることからすれば、狭い範囲にある遺構群であるが、この1区SD01の自然河川に関連した遺跡であるといえる。

1区SD01と並行するように約4mの距離置いた東岸に古代の掘立柱建物（1区SB01）がある。それを北からの視野を遮るように塀（3区SA01）があり、関連する遺構であろう。1区SB01から東に約40mに4棟の総柱建物がある。総柱建物は一部重複がみられ、同時併存は最大3棟である。これら建物群の間は空地となっている。さらに1区SB01に柱筋に接するように井戸（1区SE01）がある。このような古代の遺構は建物と倉庫と考えられる2区の総柱建物から構成され、塀の存在からまとまりのある施設であることがわかる。

1区SD01中・下層は古墳時代初頭ごろの遺物を大量に包含する河川で、完形に近い土器が多数出土することもあり、マツリ執行の痕跡とも考えられる。この時代の遺構としては、溝（2区SD14）がある。さらにSD01とのほぼ中間にSD10とSD11があるものの、顕著な遺構はない。

なお、調査区東端で溝状の落ち込み（SD03）を検出したが、土坑の可能性もある。

第2節 1・3区検出遺構

a 掘立柱建物・柵

1区SB01

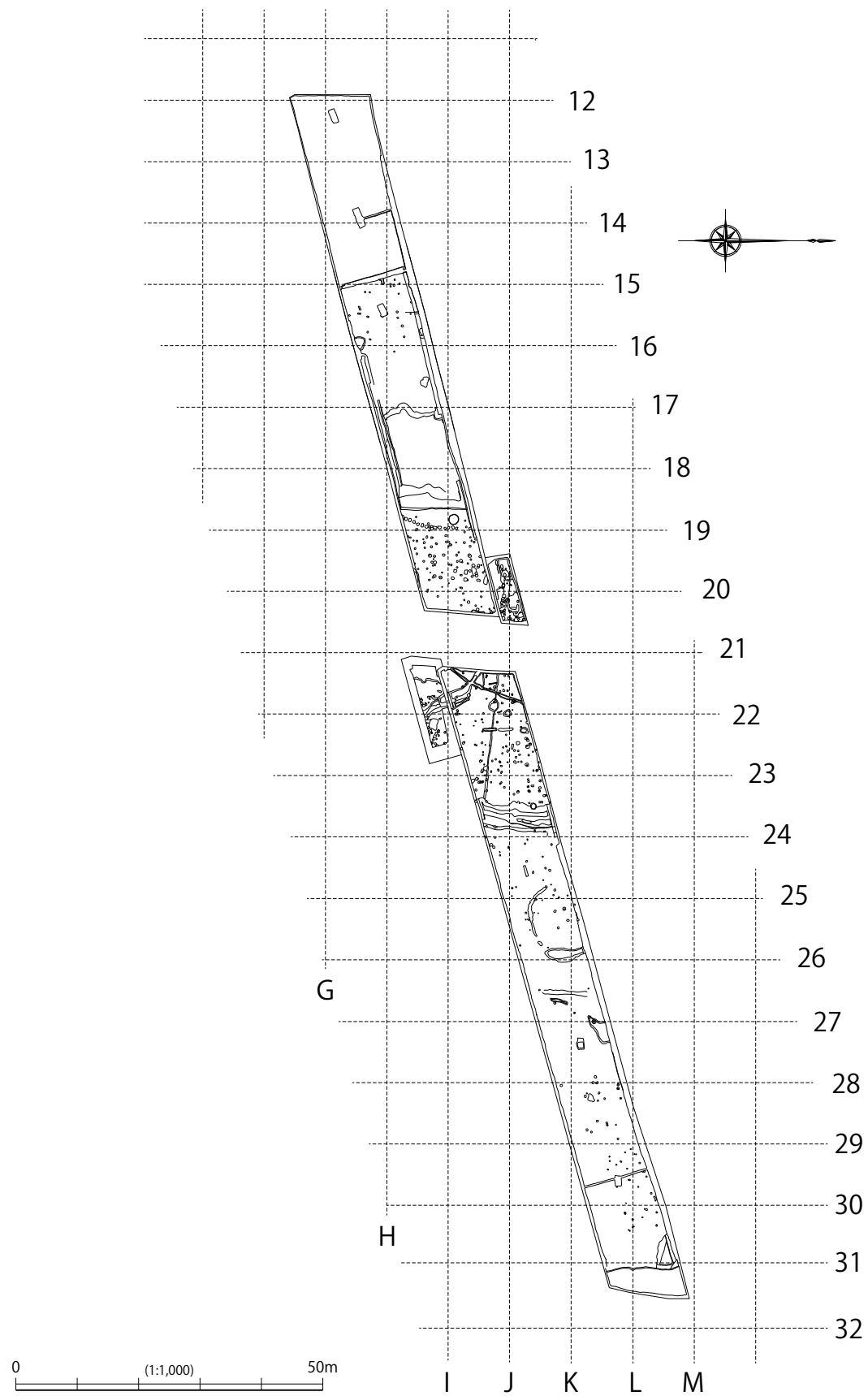
1区のH20・I20グリッドで検出した。梁行3間（4.45m）、桁行3間（6.4m）で、ほぼ真北の軸を持つ建物である。梁の柱間が桁のそれよりも狭い。桁の柱間がおおむね7尺（2.1m）で配置されるのに対し、梁の柱間はおおむね5尺（1.5m）で配置され、柱の掘方も桁のものより小ぶりである。しかも南の柱筋にあるP111やP105は浅く簡略的なものといえる。さらに河川や井戸に面する側の柱筋には浅く小さな落ち込みが連続している。以上より、側柱建物と考えられ、しかも簡易な構造と判断される。

柱の掘方から遺物の出土に乏しく、時期の決め手に欠くが、SE01と密な関係性を重視すれば、7世紀頃の建物と考えられる。

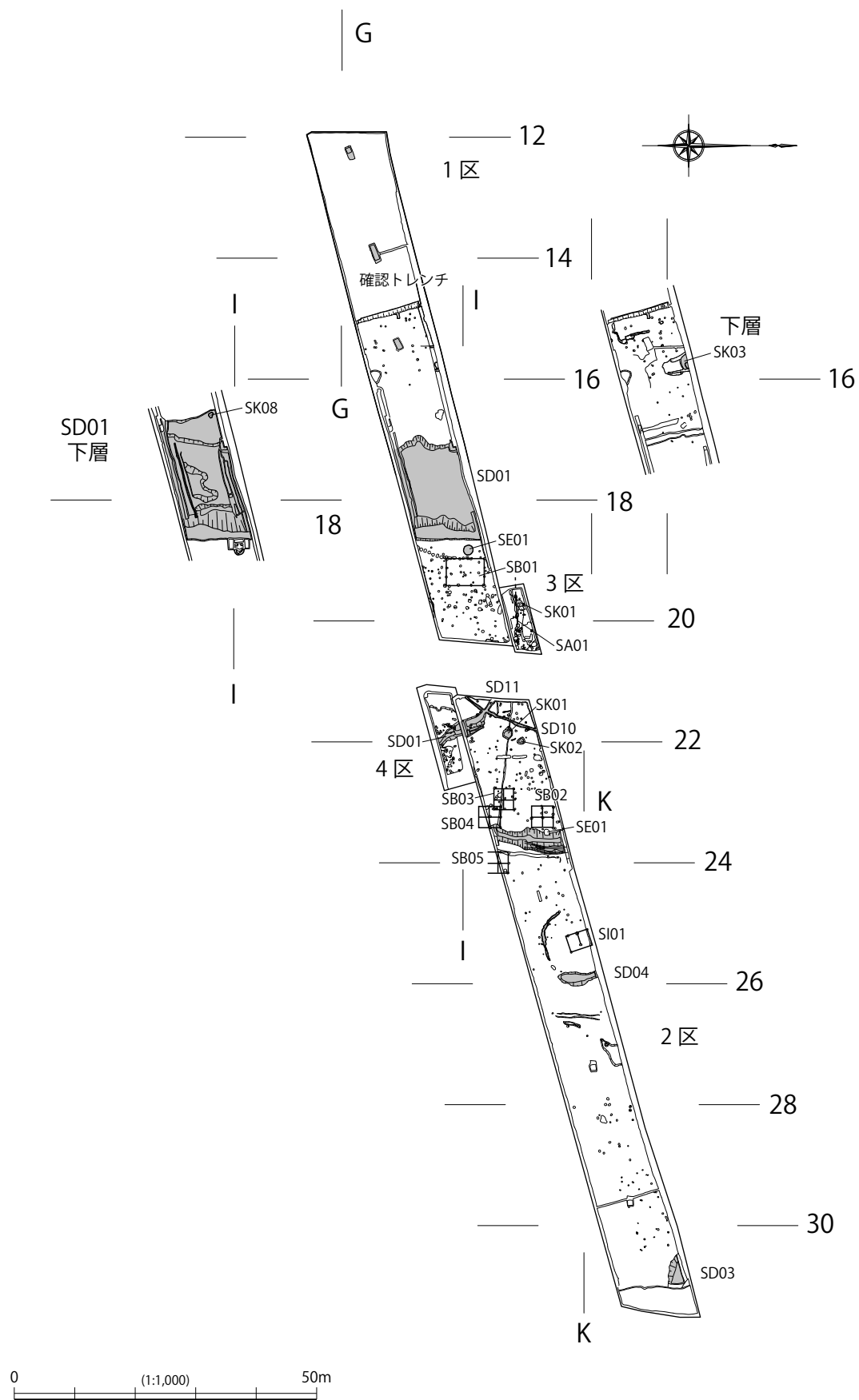
3区SA01

3区のI19～20グリッドで検出した柱列である。この柱列と対になる遺構は1区SB01を想定している。調査では4本の柱を確認し、P01と東にあるP02間に平安時代の井戸であるSK03があるために検出できていない。この柱列は西にさらに伸びる可能性が高いが、攪乱等により不明である。また、農道を挟んだ2区にその延長が認められないので、東側についてはこれ以上伸びないと思われる。

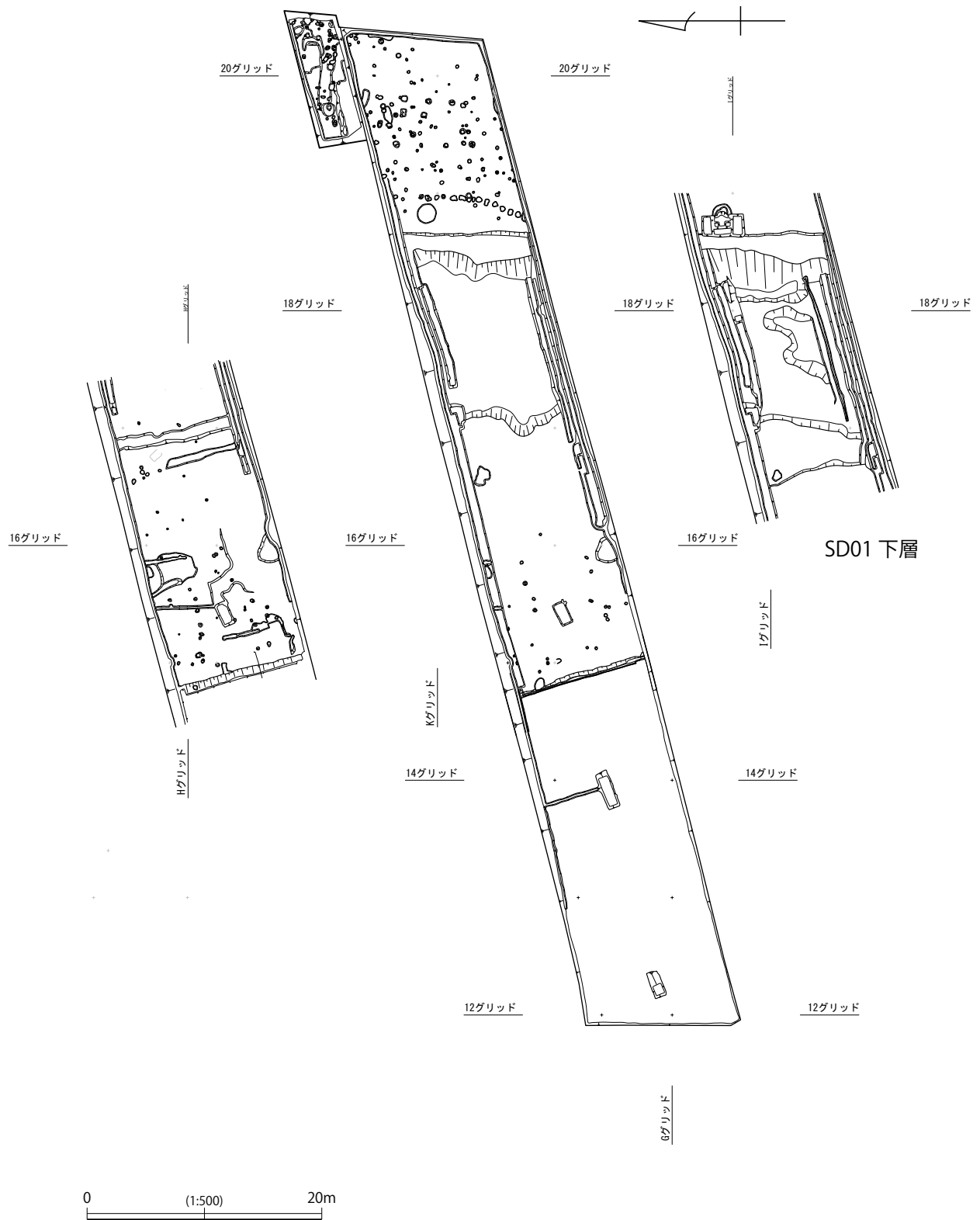
柱列は現状で約6.5mの長さを確認し、柱間はおおむね5尺（1.5m）間隔にある。P02は浅いが、それ以外が20～30cmの深さがある一方で、柱底の高さをそろえていない。つまり起伏に合わせて柱を掘り込んで立てていることから塀である可能性が高い。そしてこの遺構は、1区SB01と10m程度の東に展開する空間を北から遮蔽あるいは区画する意図を持ったものである。



第15図 グリッド配置図 (S=1/1,000)

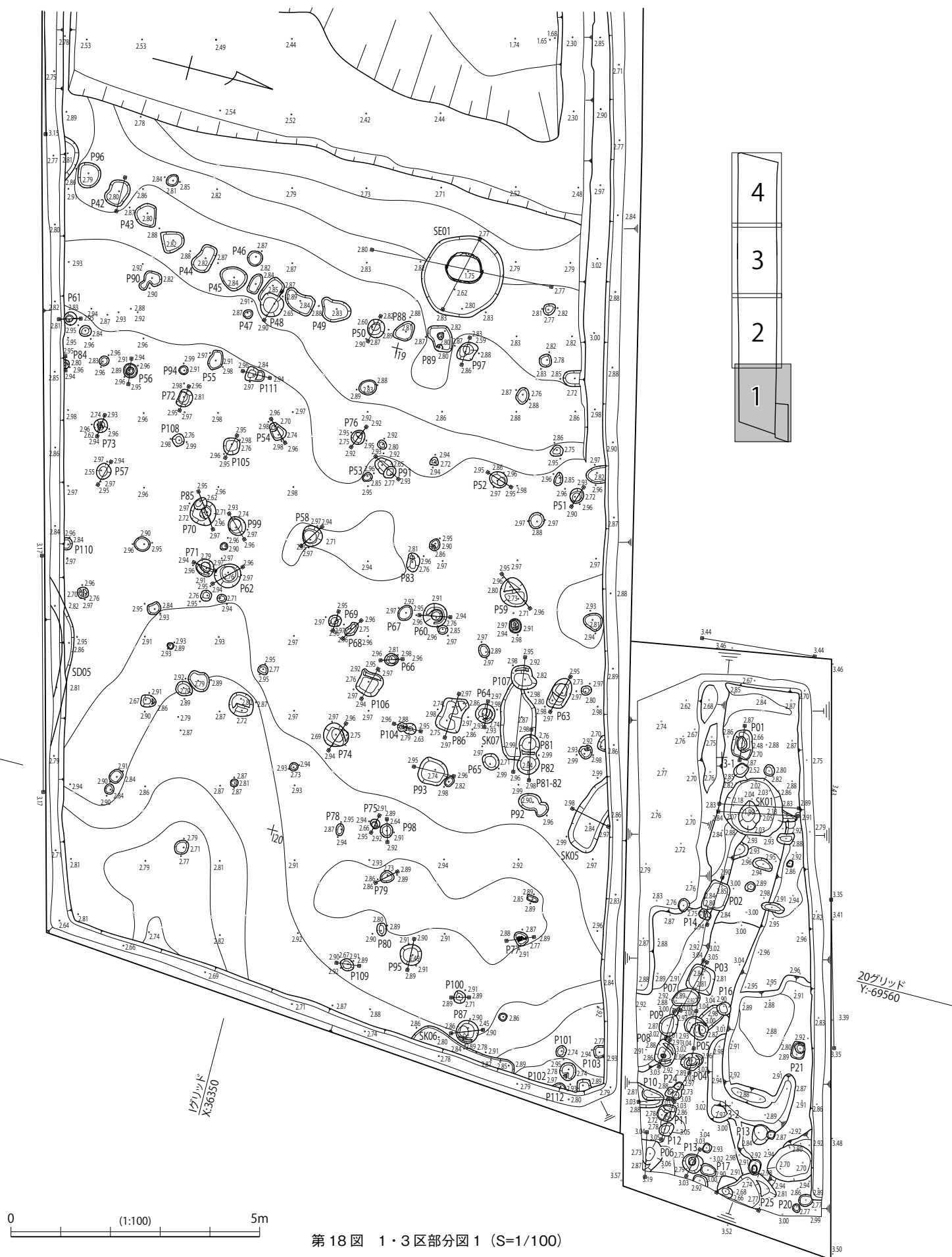


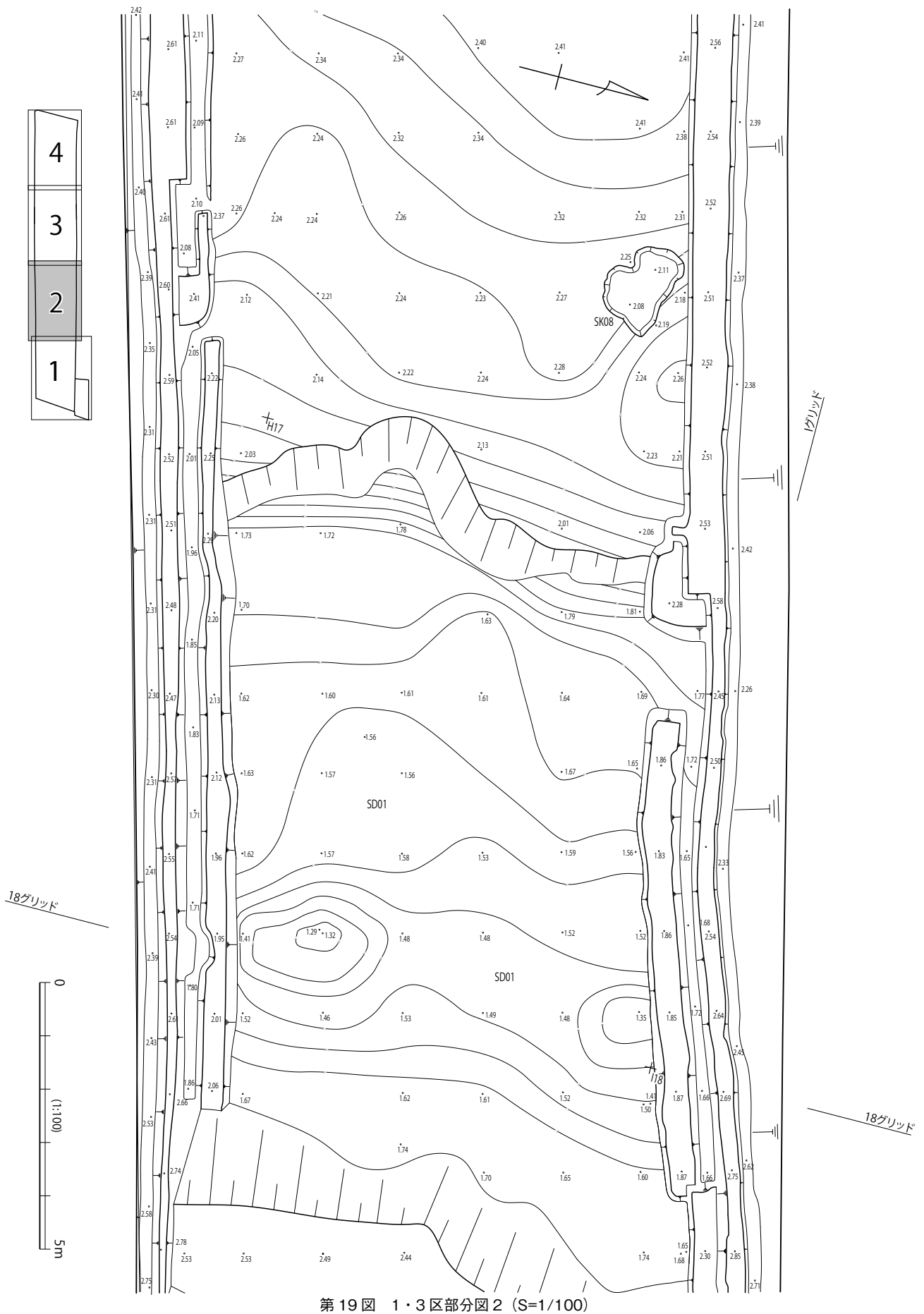
第16図 主要遺構配置図 (S=1/1,000)

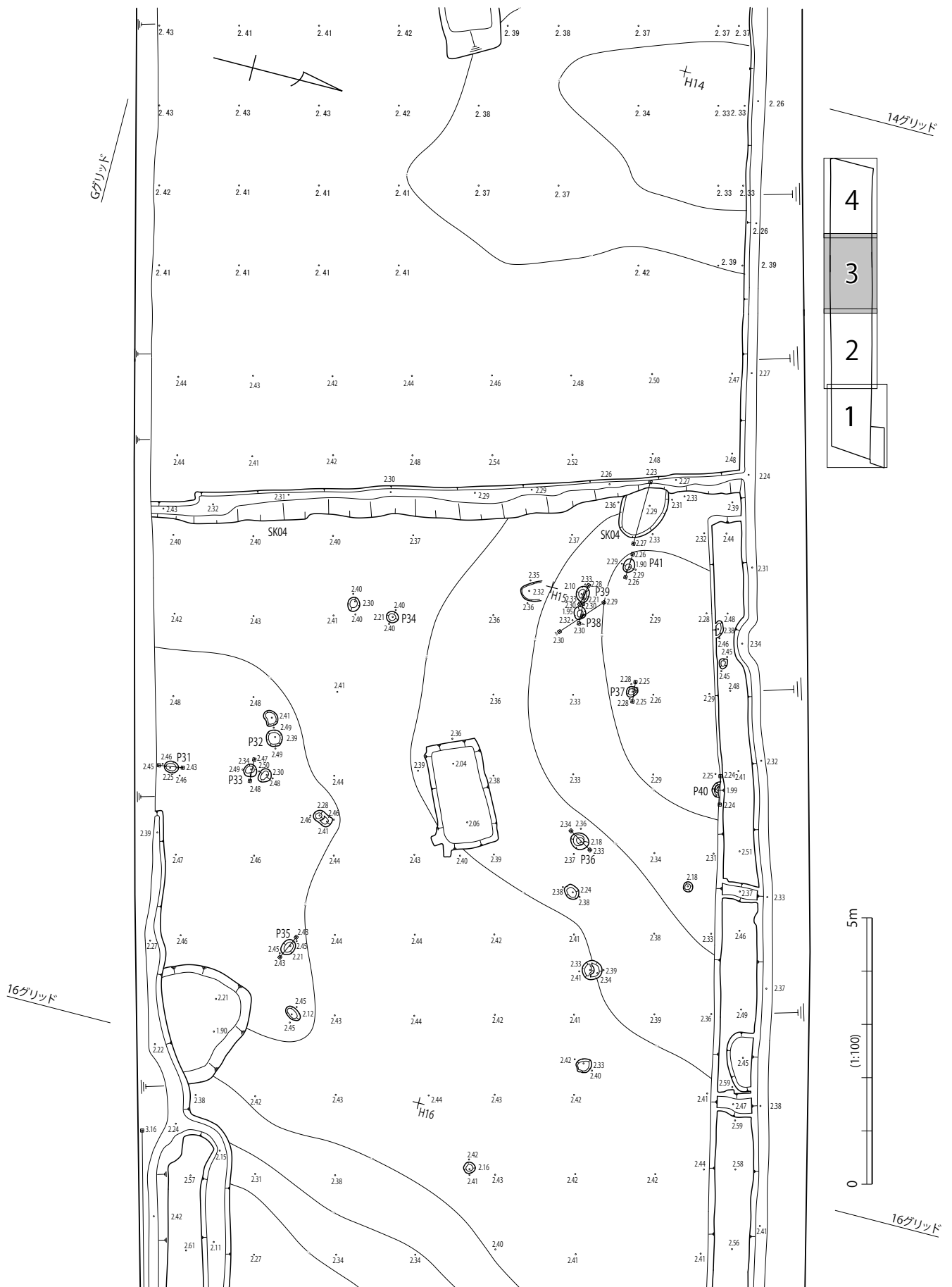


第 17 図 1・3 区全体図 (S=1/500)

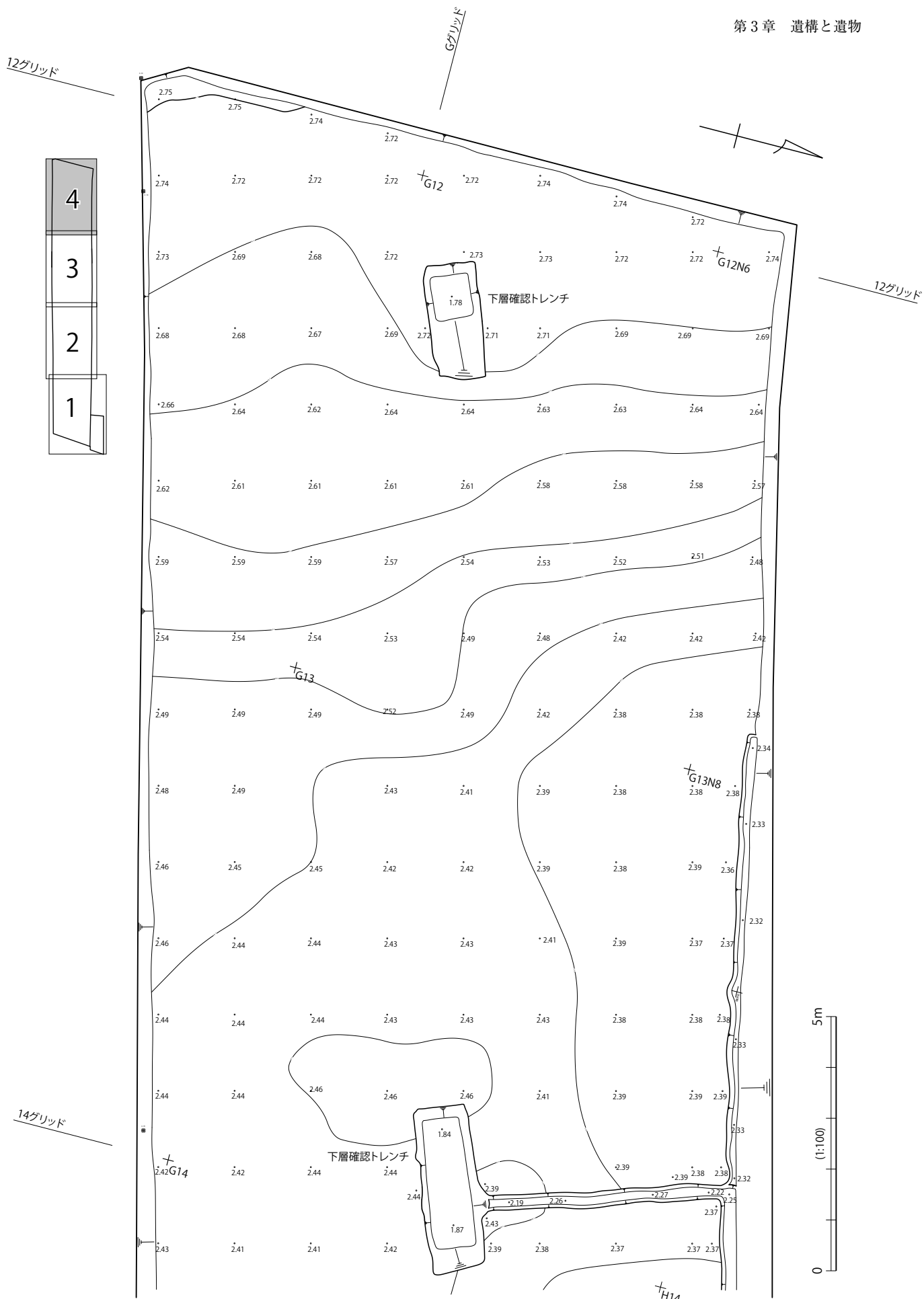
第2節 1・3区検出遺構



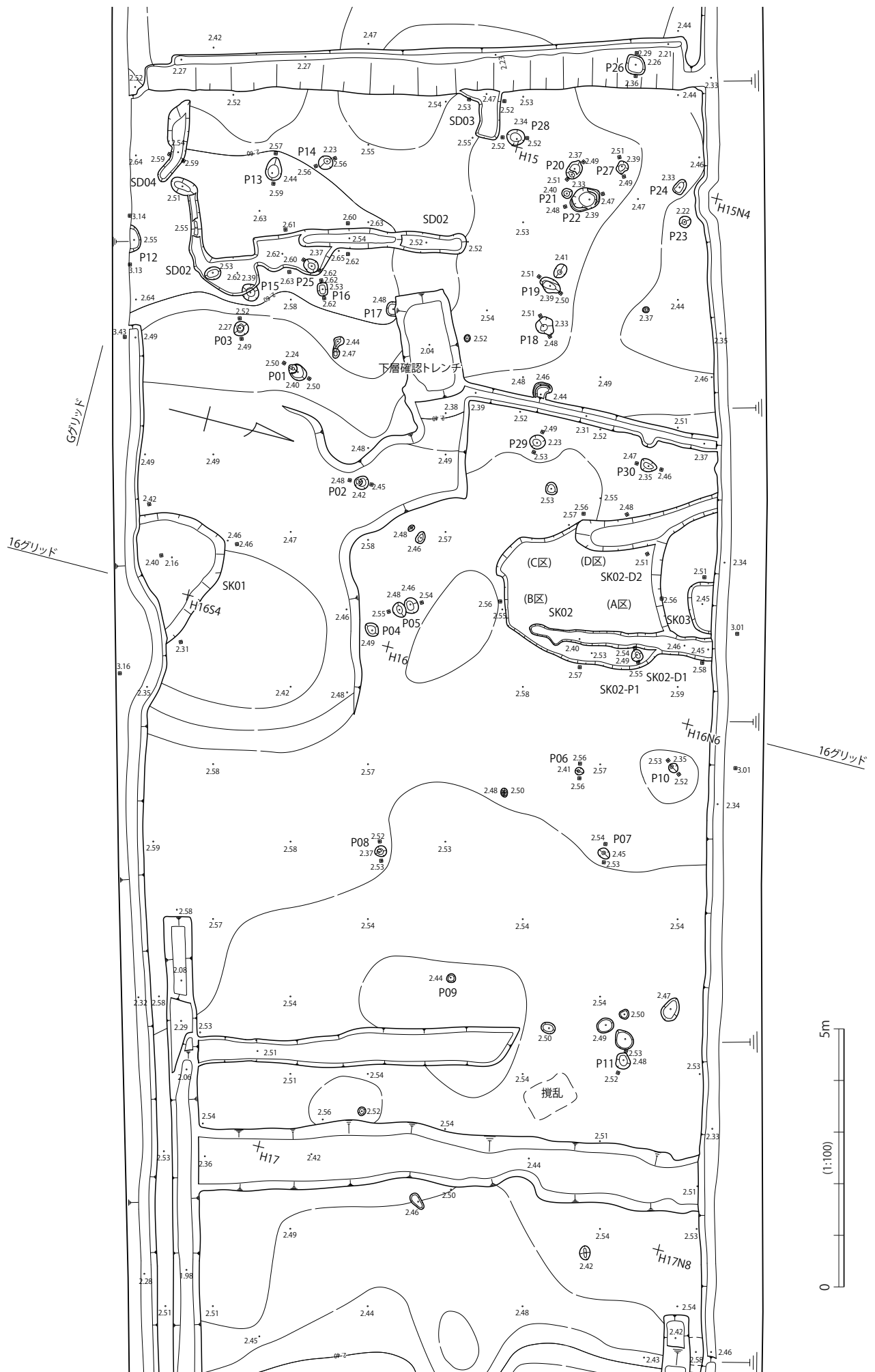




第20図 1・3区部分図3 (S=1/100)



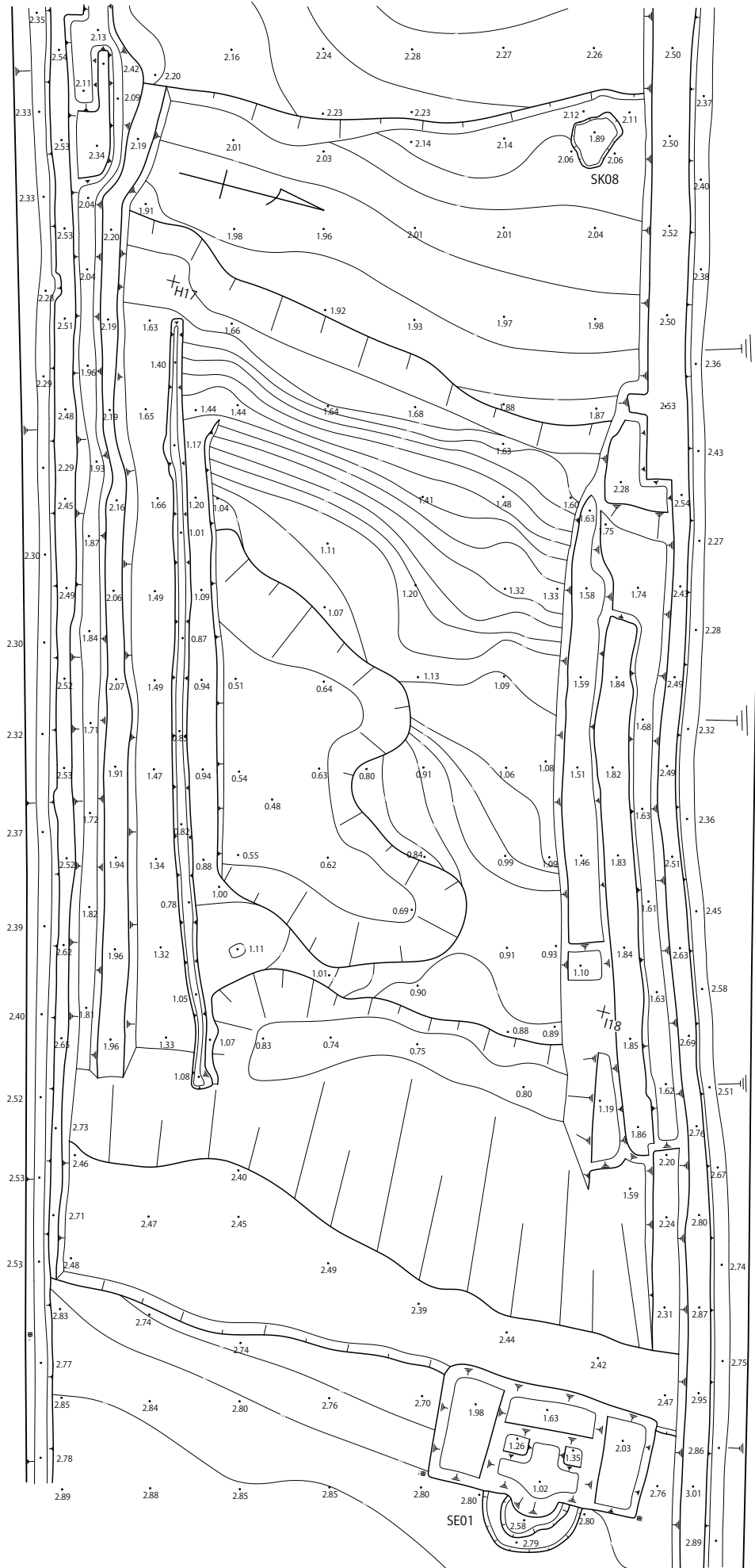
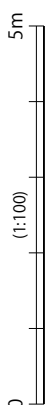
第21図 1・3区部分図4 (S=1/100)



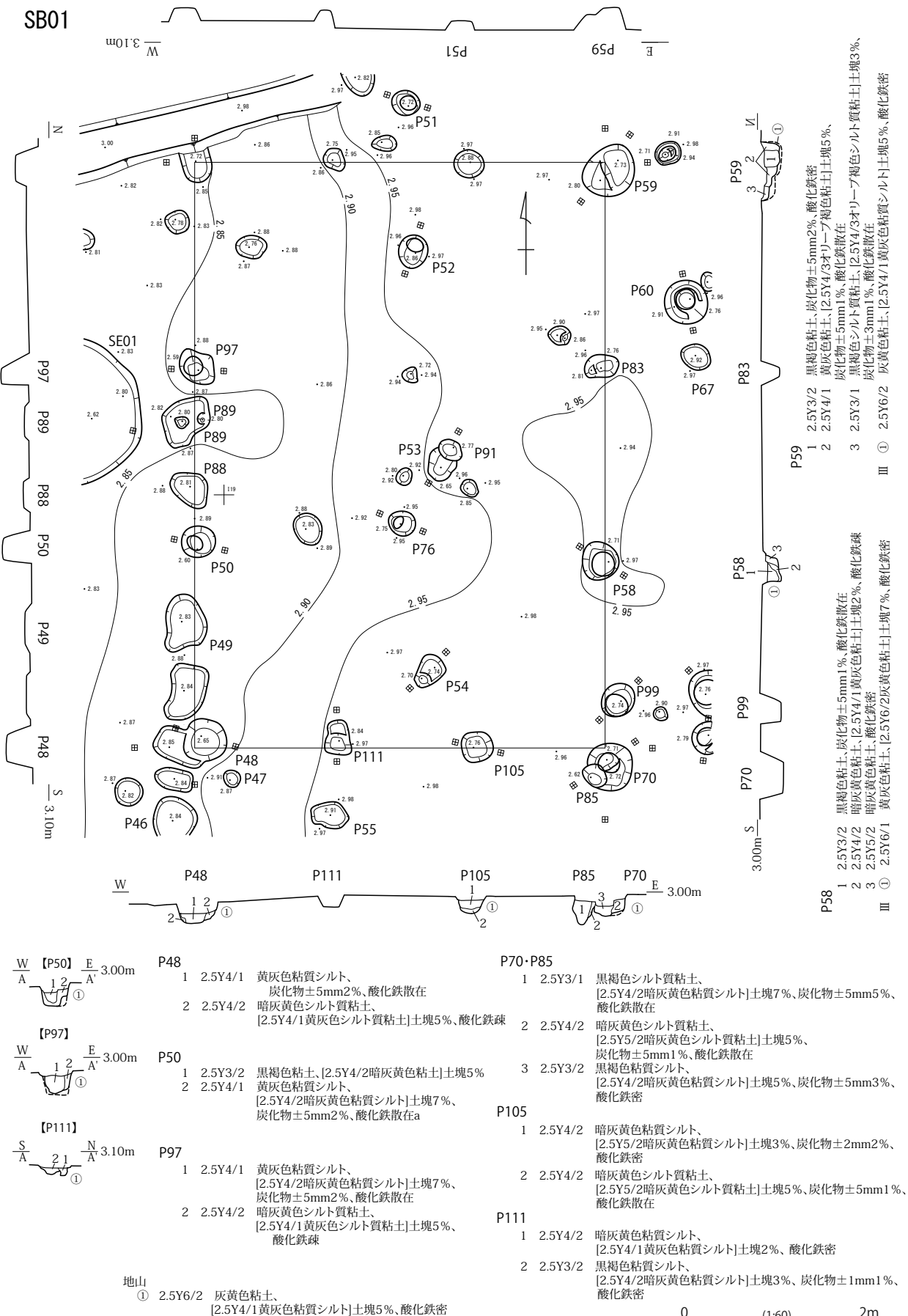
第22図 1・3区部分図5・上層 (S=1/100)

18グリッド

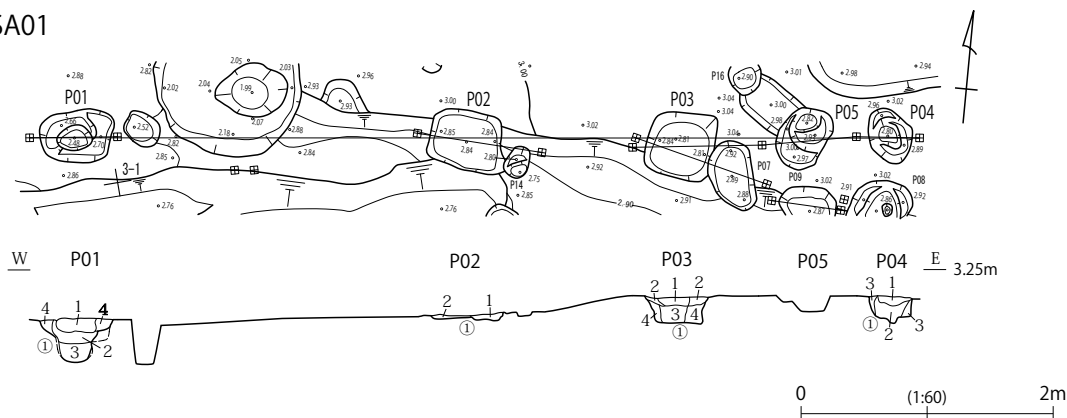
18グリッド



第 23 図 1・3 区部分図 6・SD01 下層 (S=1/100)



3区 SA01



3区 P01

- 1 2.5Y4/1 黄灰色シルト
(灰黄色シルトブロックやや多(下部)、炭粒やや多、鉄分多)
- 2 5Y6/1 灰色シルト(黄灰色シルトブロック少、炭粒少、鉄分やや多)
- 3 5Y6/1 灰色シルト(にぶい黄橙色細砂やや多、炭粒微、鉄分少)
- 4 5Y4/1 灰色シルト(黄灰色シルトブロック多、炭粒やや多、鉄分多)
- ① 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト(灰色シルトブロック多、炭粒少、鉄分多)

3区 P02

- 1 2.5Y4/1 黄灰色シルト(灰色シルトブロックやや多、炭粒少、鉄分多)
- 2 5Y5/1 灰色シルト(5Y4/1 灰色シルトブロック多、炭粒やや多、鉄分多)
- ① 2.5Y5/1 黄灰色シルト(灰色シルトブロック多、炭粒少、鉄分極多)

3区 P03

- 1 2.5Y4/1 黄灰色シルト(灰黄色シルト小ブロック微、炭粒少、鉄分少)
- 2 5Y4/1 灰色シルト(5Y5/1 灰色シルトブロック少、炭粒やや多、鉄分少)
- 3 5Y3/1 オリーブ灰色シルト
(灰オリーブ色シルトブロック多、炭粒やや多、鉄分多)
- 4 5Y6/2 灰オリーブ色シルト(灰色シルトブロック多、炭粒少、鉄分多)
- ① 5Y6/2 灰オリーブ色シルト(灰色シルトブロック多、炭粒少、鉄分極多)

3区 P04

- 1 5Y4/1 灰色シルト(灰オリーブ色シルトブロックやや多、炭粒やや多、鉄分やや多)
- 2 7.5Y4/1 灰色シルト(10Y6/1 灰色シルトブロック多、炭粒やや多、鉄分やや多)
- 3 7.5Y6/1 灰色シルト(5Y4/1 シルトブロックやや多、炭粒少、鉄分多)
- ① 5Y6/2 灰オリーブ色シルト(灰色シルトブロック多、炭粒少、鉄分多)

第25図 3区 SA01 実測図 (S=1/60)

b 井戸・土坑

1区 SE01

1区のI19グリッドで検出した井戸である。掘方はほぼ円形を呈し、直径1.6～1.7mの規模である。その中心からやや西寄りに2つの船材を合わせた井戸枠があり、検出面で0.65～0.48mの楕円形を呈し、検出面からの深さは約90cmである。掘方の断面形は漏斗状を呈し、枠材先端は掘方とほぼ重複した特徴があり、設置時に枠材をさらに打ち込んでいると思われる。また東側の掘方には40×60cm方の平坦な部分があり、井戸構築時の足場の可能性がある。井戸枠材は船の舳先と艫(とも)の部分である。船の両端を切り落としたのち、互いの舷側を合わせたものである。しかも井戸として一定の空間を得るためにそれぞれの端部を切り落としている。おそらく一つの船の両端を利用したものであろう。枠材は、西側にまず艫部分を置き、船尾側を下になるように、底から約40cmは掘方を直に掘りこむことで直立させている。東側から舳先の先端側を下になるように船縁を合わせるようにしている。このような作業の足場として掘方東にある平坦な部分が存在するものと考えられる。

井戸枠内の堆積は攪拌等の土層の乱れがない。そこには黒色粘土があり有機物の安定した堆積である。上層に行くにしたがって黒味が薄れ、灰色が強くなる。上面から須恵器杯B(80)やそれより下層にスギの棒材(366・367)が出土している。さらに最下層から焼き歪みのある須恵器杯蓋(78)および須恵器提瓶口縁(79)が出土しているので、7世紀を前後することに開削された井戸で、9世紀ごろまでの長期間にわたり開口していたと考えられる。

1区 SK01

1区のG16グリッドで検出した浅い落ち込みで、南の調査区外にさらに伸びる。現状で平面三角形を呈し、幅2.5m、長さ1.7m、深さ約20cmである。土坑底は皿状を呈し、埋土は黄灰色粘土で、層の中途に酸化鉄が密な部分がある。この層に鎌柄?(477)や曲物底板(478)などの木製品が出土して

いる。土器が出土していないので時期を明確にできないが、古代であろうか。

1区 SK02・03

1区のH16グリッドで検出した浅い落ち込みで、溝を介して溝と土坑が一体となった遺構で、北の調査区外にさらに伸びる。幅3m、長さ4.2mの規模である。SK02は南に3mの幅広い部分を持つ円環状で、その内部東寄りに方形を呈するSK03がある。SK03は長さ約1m、幅0.45m以上で調査区外にさらに伸びる。SK03底面はほぼ平坦で、黒褐色粘質土を埋土とする。

SK02はSK03外側の円環状部分。SK02の東西両側から溝が直線的に伸び、東側をSK02-D1、西側をSK02-D2と区別した。溝底には板のはめ込みや柱を立てるなどの痕跡は見られず、深さも10cm前後と浅い。この2本の溝に挟まれた部分も浅い落ち込みを形成し、全体として南に幅広い円環状をなす土坑となっている。どのような機能の遺構なのかわからないが、古代末ごろの時期と考えられる。SK02からは比較的多くの土器が出土し、須恵器杯蓋(187、188)や皿、杯Bのほか、双耳瓶(195、196)や土師器甕や内黒杯(191)などが出土している。10世紀前葉の遺構であるがその機能は不明と言わざるをえない。

1区 SK04

1区のH15グリッドで検出した土坑で、SD01西側の下層遺構になる。水田畔による段差により、西側が消失しているが、それほど大きなものではなさそうである。幅0.8m、長さ0.85m以上を測り、5cm程度の浅い落ち込みである。底面には凹凸があり、この落ち込みが人為的なものかどうか断定できない。自然の窪みである可能性がある。

1区 SK05

1区のI20グリッドで検出した溝状の落ち込みで、北の調査区外に伸びている。3区まで伸びているかどうかかわからないが、伸びていたとしても3区の攪乱範囲内で収まっている。幅0.6m、長さ1.5m以上で、深さ15cm程度と浅い。

1区 SK07

1区のI20グリッドで検出した細長い落ち込みで、長さ1.55m、幅0.7m、深さ10cm弱を測る。SK05に近い。人為的な土坑でない可能性が高い。

1区 SK08

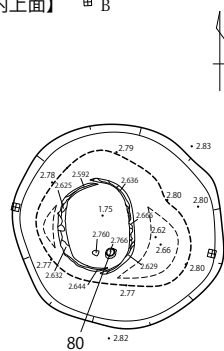
1区H17グリッドで検出した不定形な落ち込みである。SD01西側の最上層除去後に確認できた遺構で、SD01西側の岸から約4m西側にある。長さ1.6m、幅1.3m、最大深0.2mである。この土坑内からは数個体の土器が出土し、布留甕のほか、鉢や高坏などがみられる。周囲に遺構が認められず、単独の土坑である。土師器甕(73～75)、土師器鉢(76)、土師器高坏(77)が出土しており、SD01と同時期である。

3区 SK01

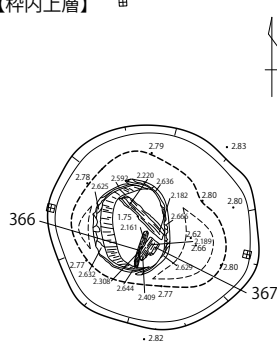
3区のI20グリッドで検出した縦板組の井戸である。井戸枠材は部分的にしか残っていない。掘方はほぼ円形を呈し、直径1.15m、深さ約0.8mを測る。井戸枠は全体的に崩れているが、おおむね方形を指向していたようで、一辺40～50cmの大きさである。井戸枠内土層を見る限り、縦板を抜いた様子はなく、井戸枠材が自然崩壊したようである。それは隅柱がないことからくる構造上の脆弱性に由来する。井戸底には礫が敷かれていたようだが、井戸枠内を超えた分布となっており、井戸構築時の足場を兼ねていた可能性も考えられる。出土遺物は比較的多く出土し、須恵器杯(484～487)、土師器鍋(489)、土師器甕(490～494)がある。484は「泉」と墨書され、硯に転用された杯蓋である。おおむね9世紀頃の土器でありおそらく、井戸廃棄時の祭祀使われた土器が廃棄されたものであろう。

【SE01】

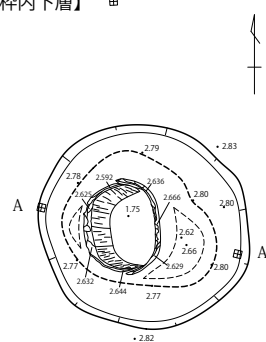
【杵内上面】 田 B



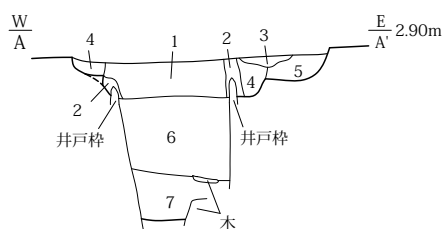
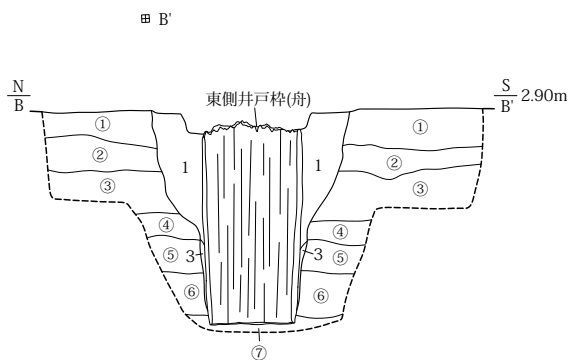
【杵内上層】 田



【杵内下層】 田



0 (1:60) 2m

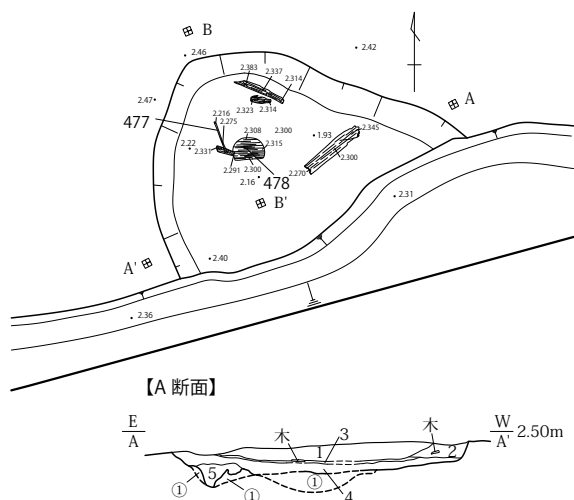


- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト
[2.5Y3/1黒褐色粘質シルト]土塊5%、[2.5Y5/3黄褐色粘質シルト]
土塊3%、酸化鉄密
- 2 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト
- 3 2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土、[2.5Y4/2暗灰黄色シルト質粘土]土塊2%
- 地山 ① 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト、[2.5Y3/1黒褐色粘質シルト]土塊5%、酸化鉄密
- ② 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト
[2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト]土塊10%、[2.5Y3/1黒褐色粘質シルト]
土塊5%、酸化鉄散在
- ③ 7.5GY5/1 緑灰色シルト質粘土、炭化物±5mm1%、酸化鉄散在
- ④ 2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土
[7.5GY5/1緑灰色シルト質粘土]土塊10%、炭化物±5mm1%
- ⑤ 2.5Y4/1 黄灰色シルト質砂
[7.5GY5/1緑灰色シルト質砂]土塊10%、炭化物±5mm1%
- ⑥ 2.5Y2/1 黒色粘土
[2.5Y4/1黄灰色粘土]土塊3%、[2.5Y4/2暗灰黄色粘土]土塊2%
- ⑦ 5Y5/1 灰色粘土、[7.5GY砂質シルト]土塊1%、礫±50mm

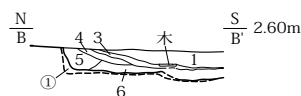
- 1 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト
[2.5Y3/2黒褐色粘質シルト]土塊7%、炭化物±5mm3%、酸化鉄密
- 2 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト
[2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト]土塊3%、炭化物±5mm2%、酸化鉄散在
- 3 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト
[2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト]土塊2%、炭化物±5mm1%、酸化鉄散在
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土
[2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土]土塊5%、炭化物±5mm1%、酸化鉄散在
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト
[2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト]土塊7%、炭化物±5mm3%、酸化鉄密
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、酸化鉄密
- 7 2.5Y2/1 黒色粘土、炭化物±5mm1%

第26図 1区 SE01 平面・断面図 (S=1/60)

【SK01】



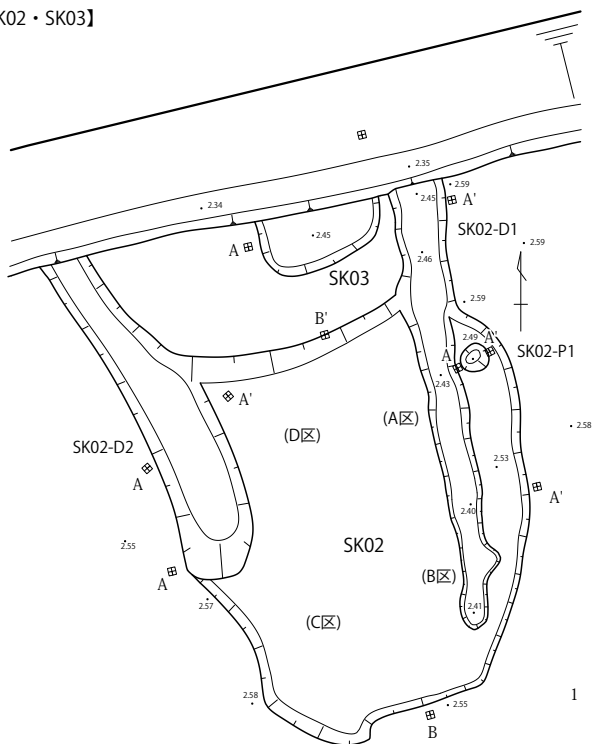
【B断面】



<SK01>

- 1 2.5Y4/1 黄灰色粘土
[2.5Y4/2暗灰黄色粘土]土塊15%、炭化物±5mm2%、酸化鉄密
- 2 2.5Y3/1 黒褐色粘土
[2.5Y4/2暗灰黄色粘土]土塊7%、炭化物±5mm1%、酸化鉄散在
- 3 2.5Y4/1 黄灰色粘土、炭化物±2mm1%、酸化鉄密
- 4 2.5Y4/1 黄灰色粘土、炭化物±3mm1%、酸化鉄散在
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質粘土
[2.5Y6/1黄灰色シルト質粘土]土塊7%、炭化物 ±5mm3%、酸化鉄密
- 6 2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土
[2.5Y6/1黄灰色粘土]土塊10%、酸化鉄散在
- ① 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト、酸化鉄散在

【SK02・SK03】

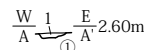


【SK02-D1・SK03】



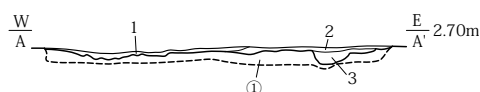
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、炭化物±5mm7%、酸化鉄密
- 2 2.5Y4/1 黄灰色粘土、炭化物±3mm1%、酸化鉄散在
- 3 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト
[2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト]土塊10%、炭化物±5mm5%、酸化鉄密
- ① 2.5Y6/2 灰黄色粘土、酸化鉄密

【SK02-P1】



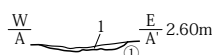
- 1 2.5Y3/2 黒褐色粘土、
[2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト]土塊2%、酸化鉄疎 炭化物±3mm2%、
- ① 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト、酸化鉄散在

【SK02A断面】

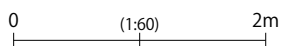


- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質砂
[2.5Y3/1黒褐色粘質シルト]土塊15%、[2.5Y5/1黄灰色粘質シルト]土塊5%、炭化物±5mm5%、酸化鉄散在
- 2 2.5Y3/1 黒褐色粘土[2.5Y4/2暗灰黄色粘土]土塊7%、炭化物±5mm1%、酸化鉄散在
- 3 2.5Y5.2 暗灰黄色粘質シルト、炭化物±1mm3%、酸化鉄密

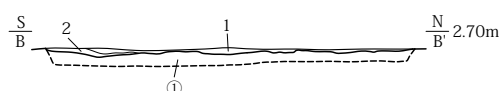
【SK02-D2】



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質砂、炭化物±10mm2%、酸化鉄疎
- ① 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト、酸化鉄散在

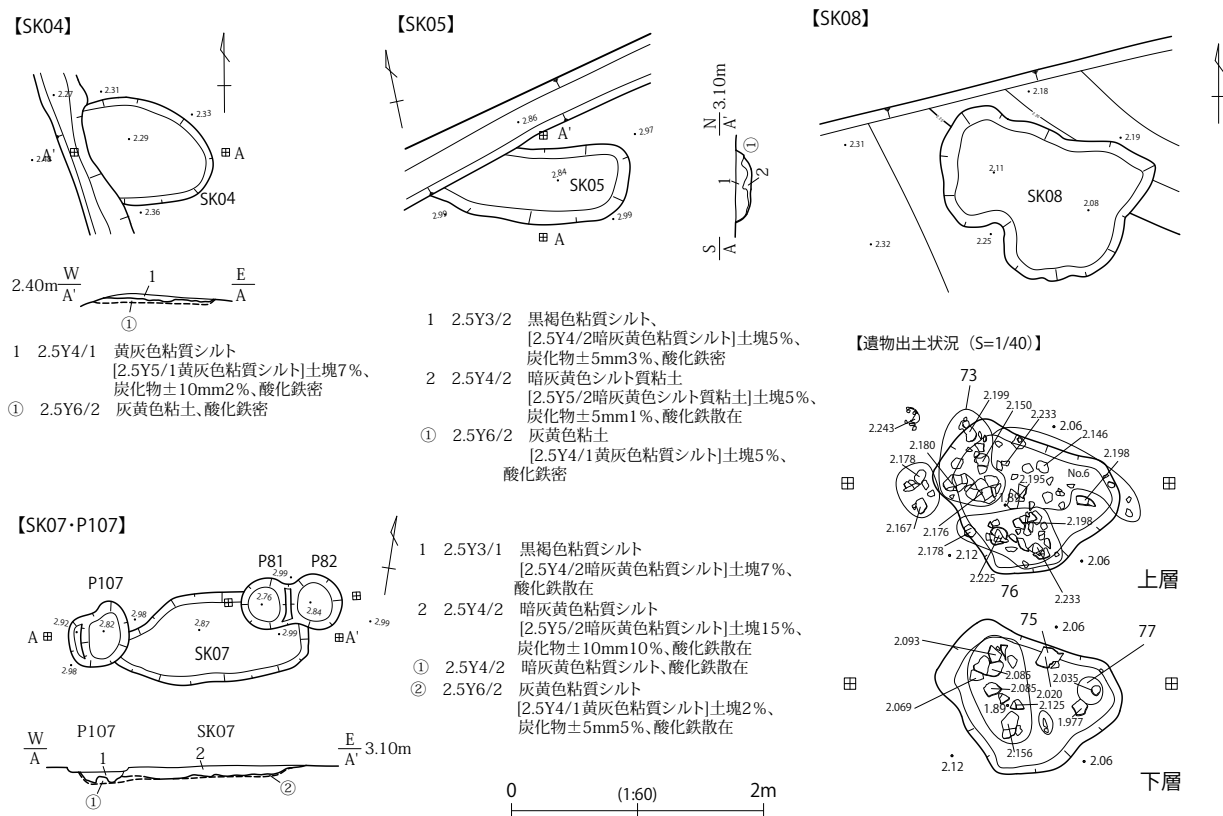


【SK02B断面】



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質砂
[2.5Y3/1黒褐色粘質シルト]土塊15%、[2.5Y5/1黄灰色粘質シルト]土塊5%、炭化物±5mm5%、酸化鉄散在
- 2 2.5Y3/1 黒褐色粘土、[2.5Y4/2暗灰黄色粘土]土塊7%、炭化物±5mm1%、酸化鉄散在
- ① 2.5Y4/1 黄灰色粘土、炭化物±3mm1%、酸化鉄散在

第27図 1区 SK01・02・03 実測図 (S=1/60)



第28図 1区SK04・05・07・08実測図 (S=1/60)

c 溝

1区SD01

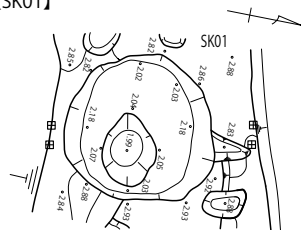
1区を南北に横断する最大幅20m、深さ約2mの自然流路である。SD01東岸に1区SE01や1区SB01があり、西岸以西にはほとんど遺構が分布していないことから、この流路が遺跡を区切るものであったことがわかる。遺構検出面からの埋土は上層・中層・下層・最下層と認識した。以下土層断面図をもとに報告する。上層は、黄灰色粘質土からなる層で、25cm前後の厚みとなっている。ほぼ水平堆積となっており、遺物の出土は極めて少ない。第30図の土層No.10には土中鉄分の酸化が顕著で、アシ・ヨシ類の繁茂が予想される。そしてSD01西側にはテラス状の段が見られ、地形の低い東側への連続する堆積として上層が存在し、SD01が完全に埋積する状態と認識できる。中層は暗灰黄色粘質土で、土中鉄分の酸化が顕著である。上層同様に水平堆積しており、15cm程度の厚みしかなく、上層と一連の堆積と判断できる。上層と中層によりSD01東側の低地部分を埋積したことになる。

遺物の取り上げとそれを記録した空中写真測量による平面図に記された中層・下層が土層断面図にある中層・下層と一致しないようである。つまり、大量に遺物が出土した下層の中における遺物の上下関係（土層状態を反映したと思われるが）を示すものとして、中層・下層という認識がなされたと考えられる。したがって、以下に記述する中・下層は、土層断面図にある下層を指すものとの認識している。

上層出土遺物には、124のような5世紀末葉の須恵器杯身や7世紀を前後する125の須恵器杯があるほか、8世紀から10世紀にわたる土器が出土している。年代幅のある遺物が出土しているが、10世紀にかかる物は少ないようである。したがって、平安時代前葉である9世紀ごろにはほぼ川が埋まったものと考えられる。中層からの遺物は、古墳時代前期の土器とともに6世紀中葉の須恵器杯(71)

第2節 1・3区検出遺構

【SK01】

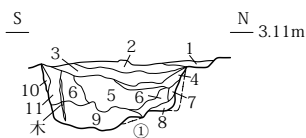


＜東側断面図＞

- 1 2.5Y6/2 灰黄色シルト(鉄分沈着
暗褐色土の縦長ブロック含む)
- 2 10YR5/6 黄褐色細砂
- 3 2.5Y4/2 灰オリーブ色細砂
- 4 7.5Y5/1 灰色細砂
- 5 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト
植物繊維若干含む

0 (1:60) 2m

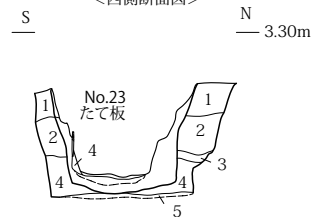
＜東側断面図＞



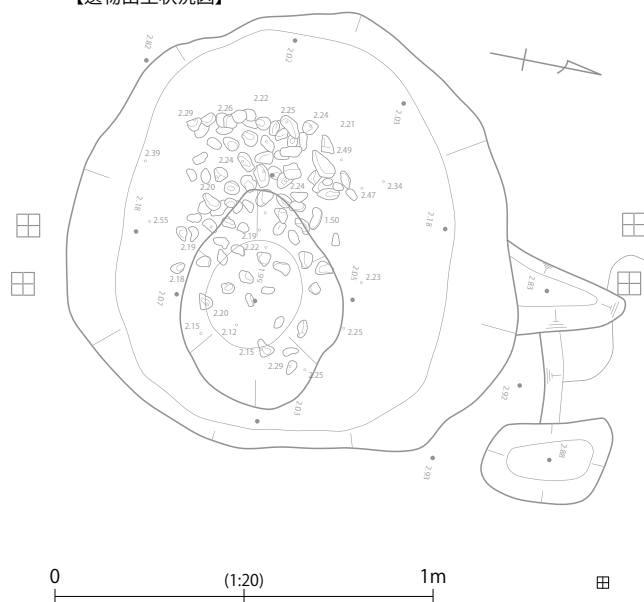
＜西側断面図＞

- 1 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト:(攪乱)
- 2 2.5Y4/1 灰色シルト(炭化物片(炭粒含む)やや多 土器片少 鉄分多)
- 3 5Y5/1 灰色シルト(5Y4/1 灰色シルトブロック少 灰黄色粘質土ブロック微 炭粒多 鉄分やや多)
- 4 7.5Y4/1 灰色シルト(灰オリーブ色シルトブロック少 炭粒少 鉄分やや多)
- 5 2.5Y4/1 黄灰色シルト(灰黄色粘質土ブロック多 炭粒(大粒含む)やや多 鉄分やや多)
- 6 10YR4/1 褐灰色シルト(灰色シルトブロック少 炭粒少 鉄分少)
- 7 5Y6/2 灰オリーブ色シルト(灰色シルトブロックやや多 炭粒少 鉄分やや多)
- 8 10YR6/1 灰色シルト(10Y5/1 灰色シルトブロックやや多 炭粒少 鉄分やや多)
- 9 7.5Y4/1 灰色シルト(オリーブ灰色シルトブロックやや多 オリーブ黒色シルト小ブロック微 炭粒やや多 鉄分少)
- 10 5Y7/1 灰白色シルト(灰色シルトブロック少 炭粒少 鉄分やや多)
- 11 10YR4/1 褐灰色シルト(灰黄色シルトブロック多 炭粒少 鉄分やや多)
- ① 5Y7/1 灰白シルト(灰色シルトブロック多 炭粒多 鉄分極多)

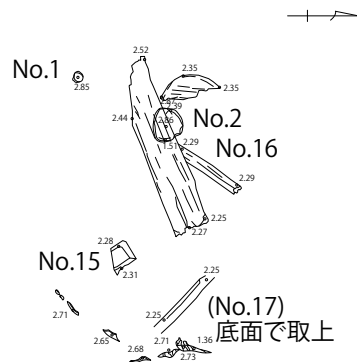
＜西側断面図＞



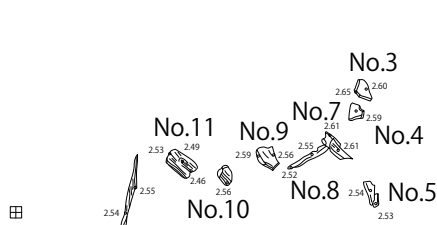
【遺物出土状況図】



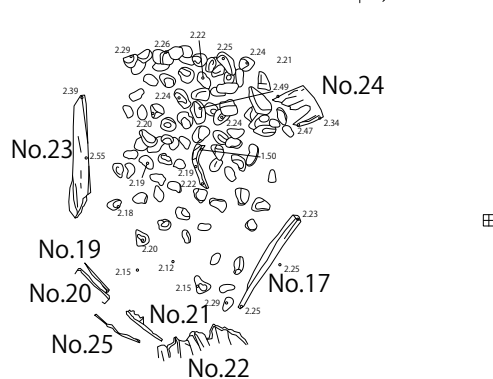
3区 SK01 遺物出土状況図①・②(S=1/20)



3区 SK01 遺物出土状況図③(S=1/20)



3区 SK01 遺物出土状況図④(S=1/20)



第29図 3区 SK01 実測図 (S=1/60・1/20)

やそれよりもやや時期が下る土器（68～70・72）もある。中層とした遺物の出土標高を見ると、標高 1.5 m（395）など土層断面図に示される中層の印象とかなり異なる。遺物取り上げと土層断面の認識が異なっているのであり、中層とした遺物と下層とした遺物で層位が示す年代的な前後関係ではなく、相対的な層の上下関係と認識したのは前述のとおりである。

中層以下が、SD01 流路部分の主要な堆積で、古墳時代前期である。川底は中央部分が最も低いものの、ほぼ平坦な状態となっている。川底の一段深くなった部分に堆積した約 40cm の層を最下層とした。黄灰色粘質土だが、シルト質で、一定の水量が推定される。最下層からの遺物の出土はないが、下層との境に直口壺（9）のほか建築部材（448・397 等）が出土している。最下層の遺物というよりも、下層に属すると考えられる。

最下層と中層の間の約 1m の層を下層とし、非常に多くの土器や木製品が出土した。遺物の取り上げは、土層 No. 21 が「下層粗砂」とし、一定量の水流が存在したようである。中層近くには黒色系の粘質土が水平堆積しており、帯水状態にも生育する植物の繁茂による堆積土の有機化が見られる（土層 No. 16～18）。それより下部には No. 20・21 のような砂質系の土があり、その東西川岸には粘土が堆積しているので、川の中央に水流があるような状態であったと考える。前述したように、中層から下層にかかると認識して取り上げた多量の遺物が層位的な上下関係を持って出土した。土層 No. 24～27 は「下層ピート」として取り上げた。すなわち、土層断面図上では下層としたものを実際の遺物の取り上げでは一括した層位と判断したようである。

下層からは、建築部材としての木製品が顕著にみられ、木製農具や木製工具柄が少ない特徴がある。製品としては、わずかに木製桶蓋（449）や木製槽（395 など）、船材（398）があり、大型木製品が目立つ。木製品廃棄に際し、器種の選別がうかがえる。土器では、南西岸近くにほぼ完形の 10 個体の中型壺が集中しているのが注目される。この壺はほぼ同大で同じ容量の壺ばかりが 1 か所に集積していたのである。おそらく意図的な埋積と考えられる。土器や木器に祭祀的な遺物が二重口縁壺（15）がある程度で非常に少ないものの、一般的な解釈として、生産にかかる祭祀行為であると推定できよう。ただし、調査担当者は水稻にかかる諸作業の一環と考えており、第 5 章参照。

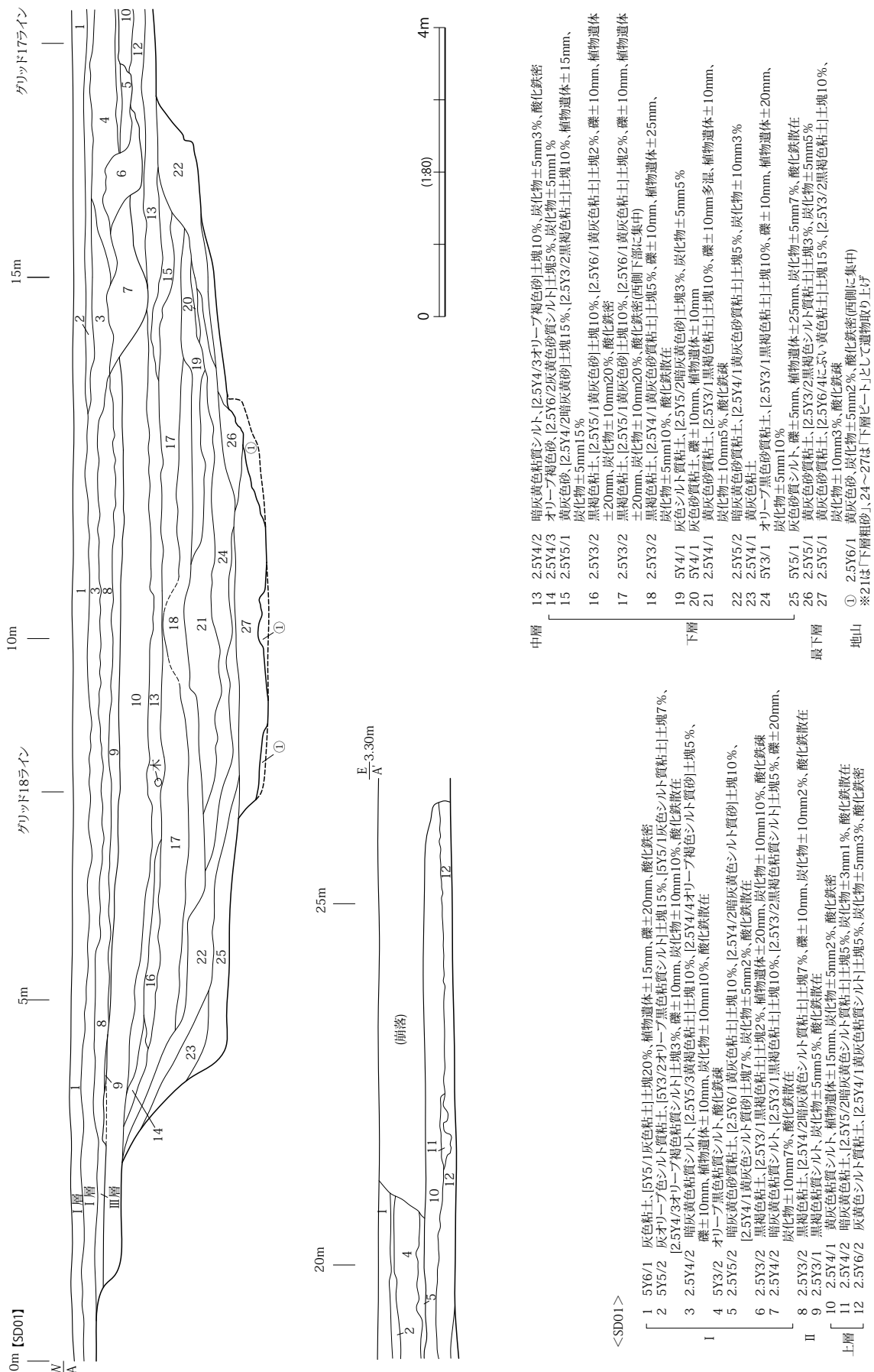
1 区 SD02、03、04

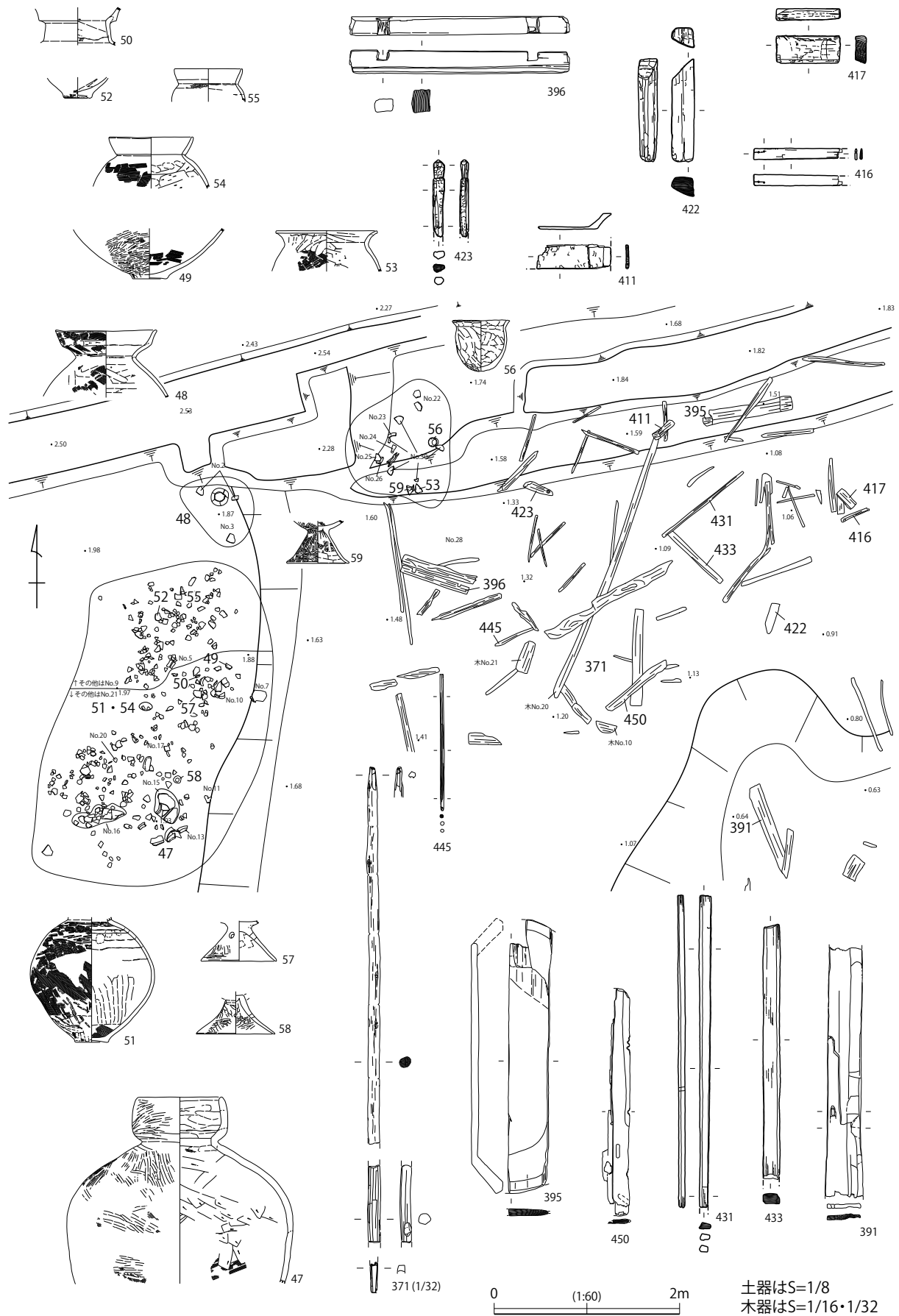
1 区 G16 グリッドで検出した上層の遺構である。不定形な溝で、逆 L 字状を呈している。溝底に凹凸があり、屈曲部分が幅広く浅い。このような点で、一つの溝とは考え難い。SK02 近くに位置するので、機能はわからないが SK02 溝部分と同じ性格を持つのであろうか。溝の中ほどの底から管状土垂がまとまった状態で 4 個体出土した。

SD04 は SD02 が屈曲部分の延長にあり、SD02 北端から直角に曲がったと想定した場合の延長に SD03 がある。これらをつなぐと方形の溝となることから、一連の遺構である可能性が高い。ただし、SD02 埋土は、黄灰色粘質シルト、SD03 が黄灰色粘土、SD04 が明灰黄色粘土と微妙に異なるものの、ほぼ同じである。SD03 から「大」墨書須恵器杯身（179）が出土している。

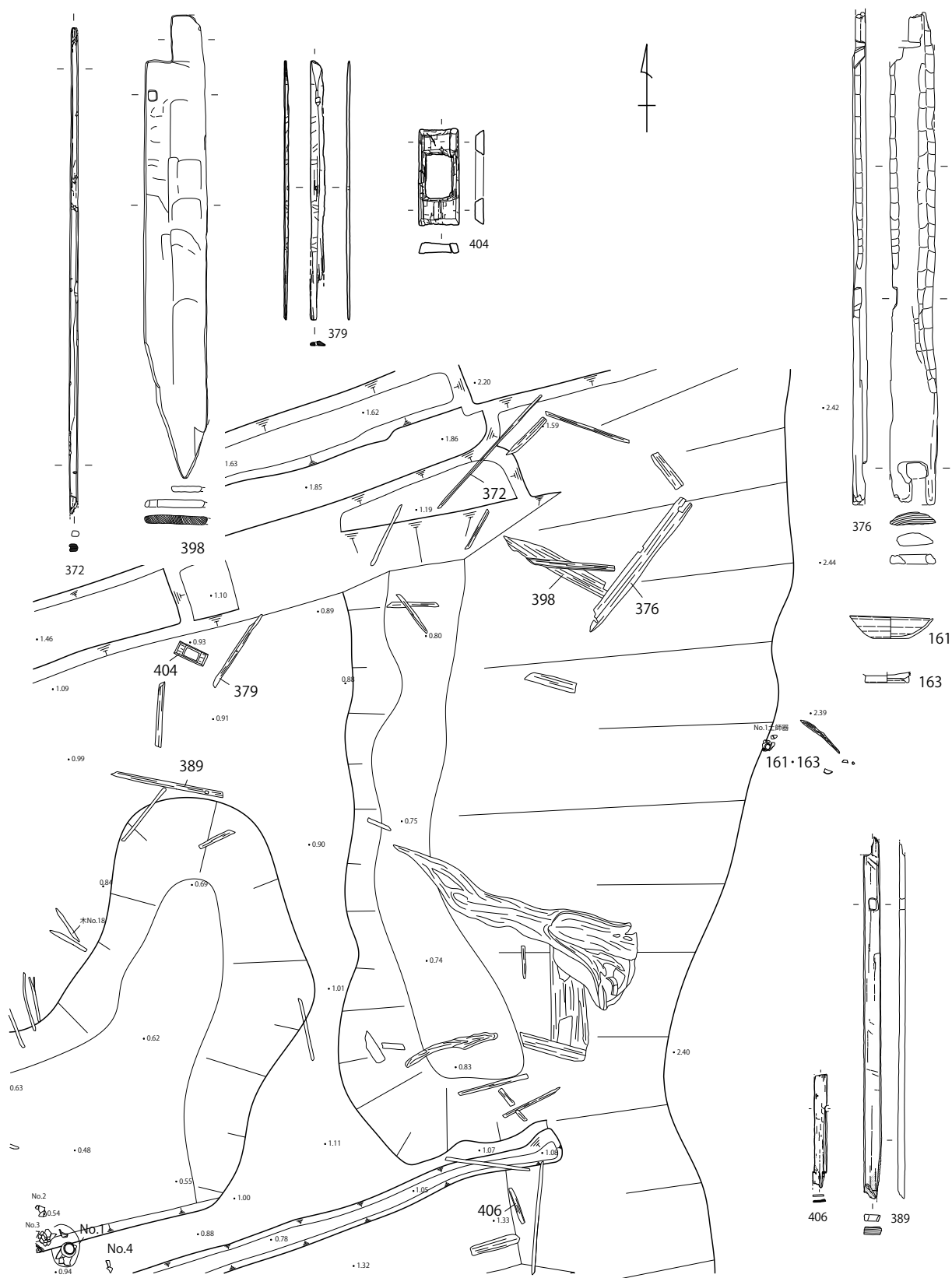
1 区 SD05

1 区 H20 グリッドで検出した。半円状態の溝で、調査区南断面で溝であることがわかる。調査担当は、稲作に関する遺構と考え、埋土をサンプリングしたものの、分析していない。



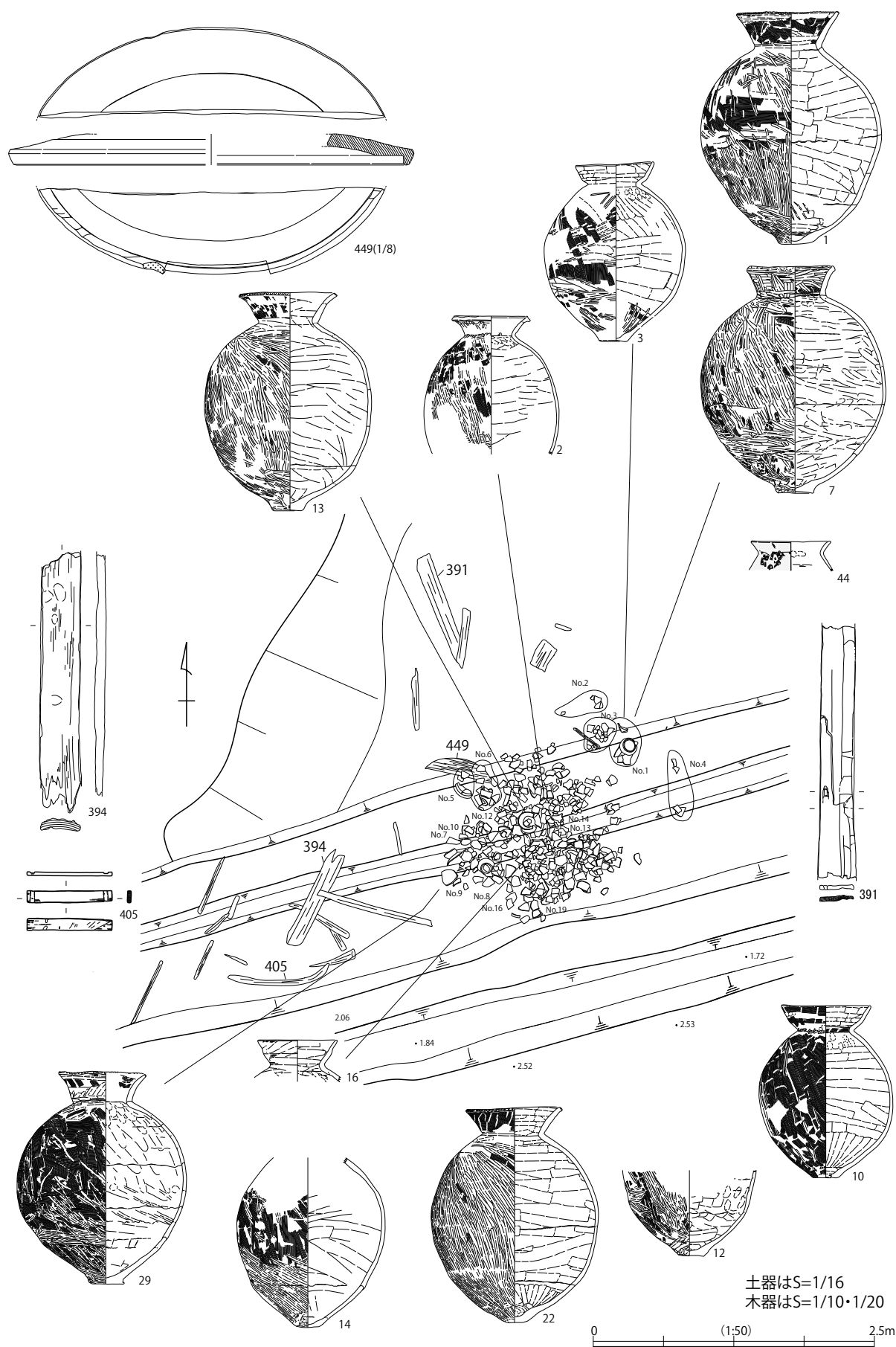


第 31 図 1 区 SD01 遺物出土状況図 1 (中層 1) (S=1/60)

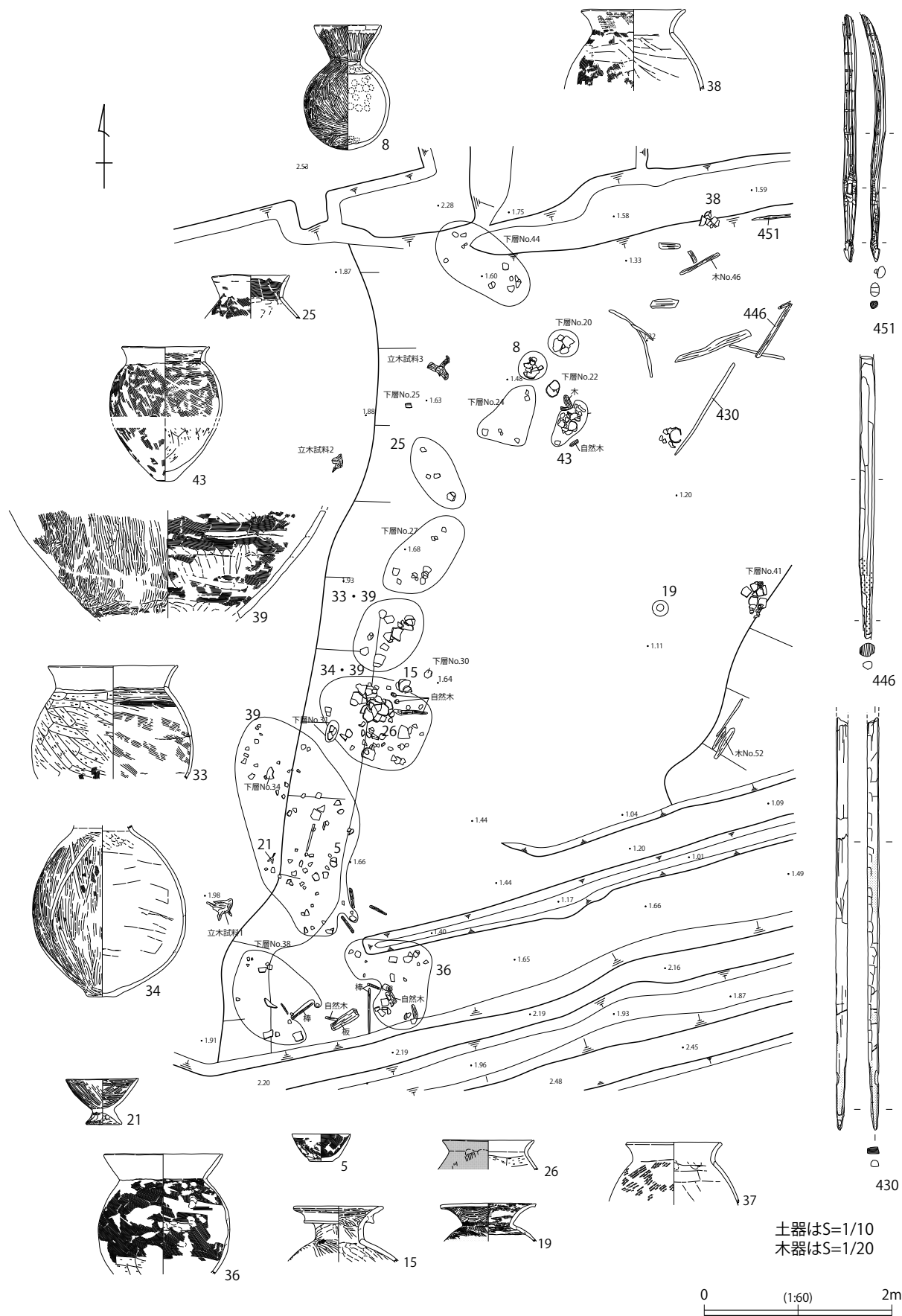


土器はS=1/8
木器はS=1/16

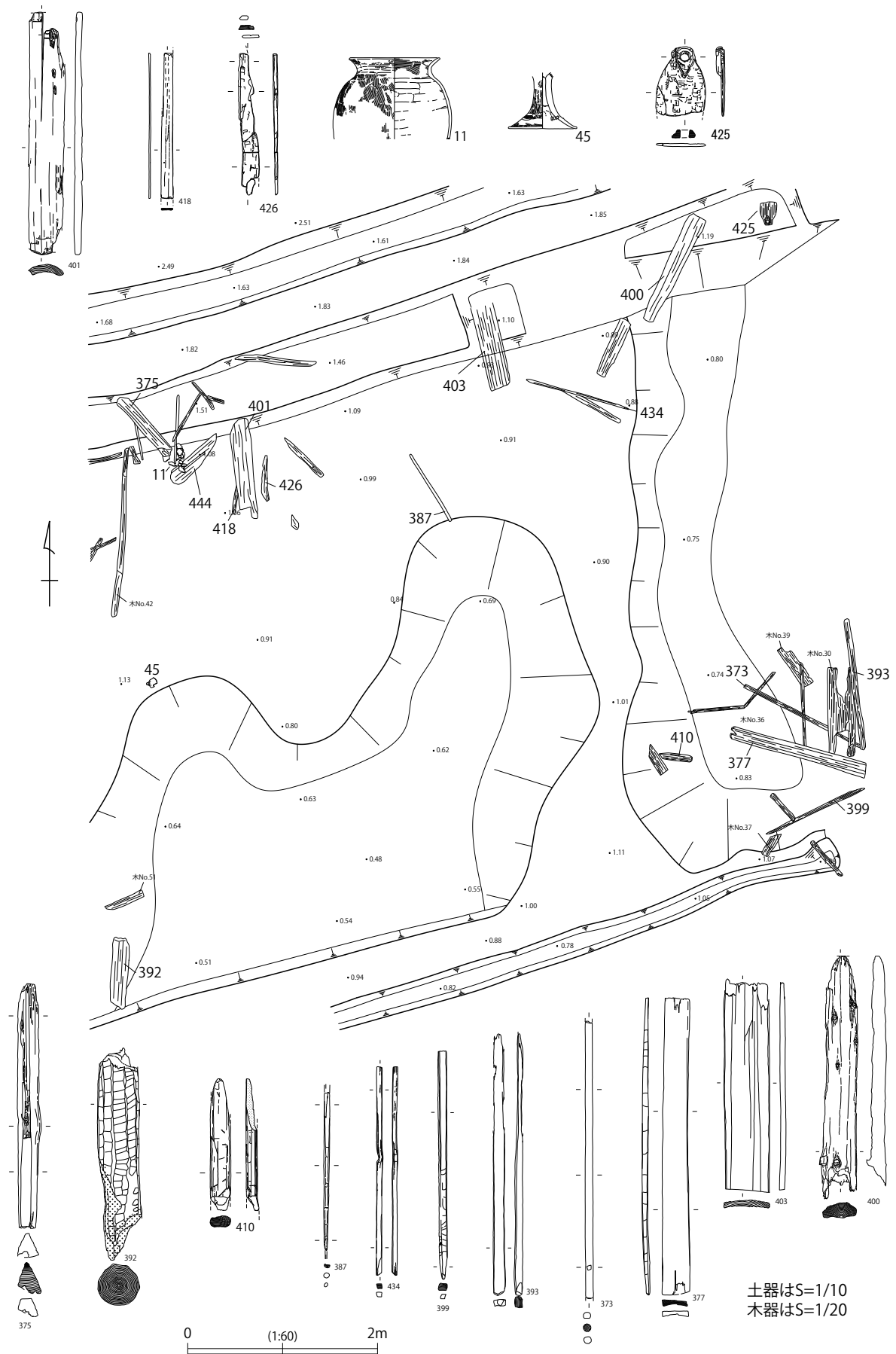
第32図 1区 SD01 遺物出土状況図2 (中層2) (S=1/60)



第33図 1区SD01遺物出土状況図3(中層3)(S=1/50)

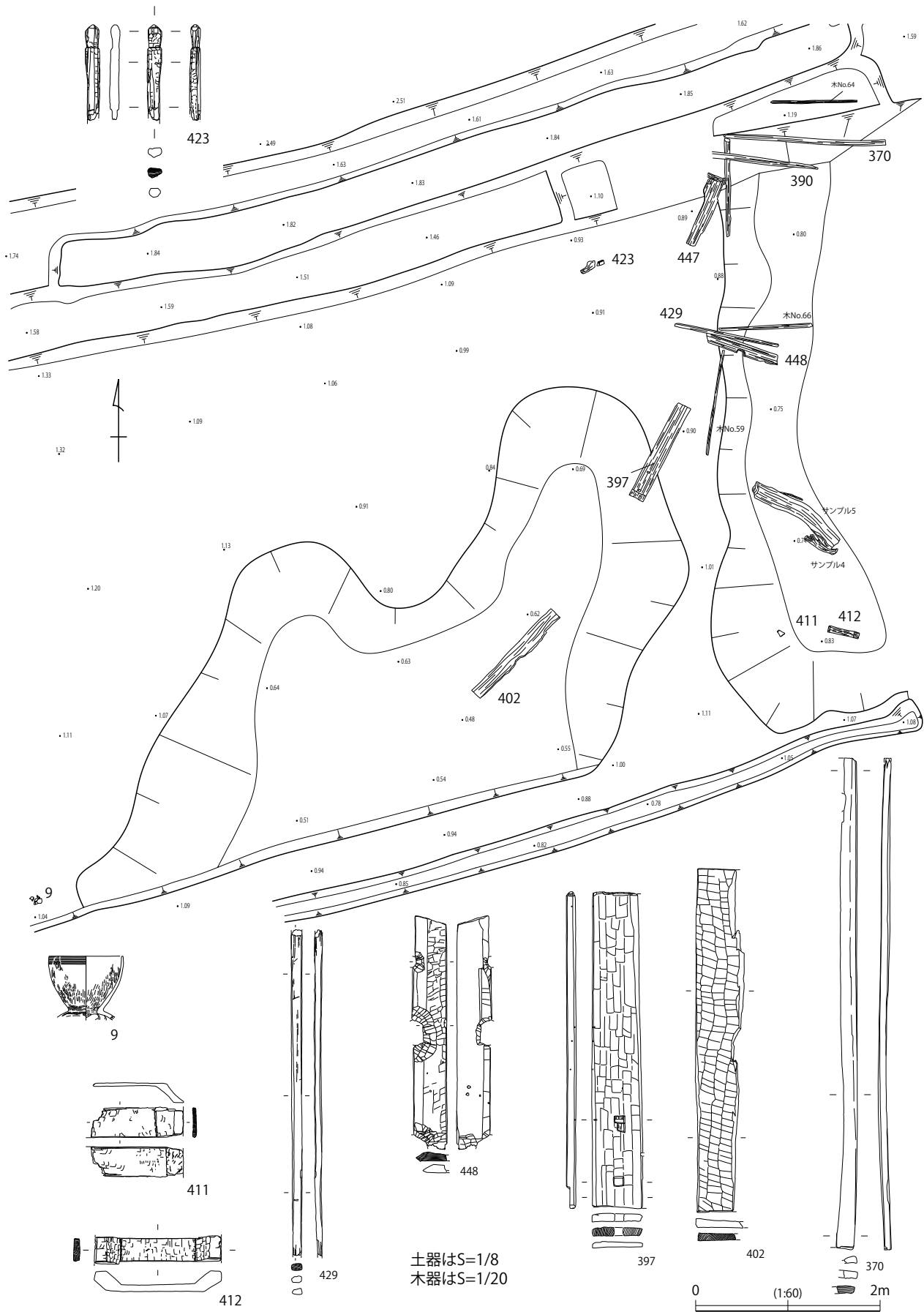


第 34 図 1 区 SD01 遺物出土状況図 4 (下層 1) (S=1/60)

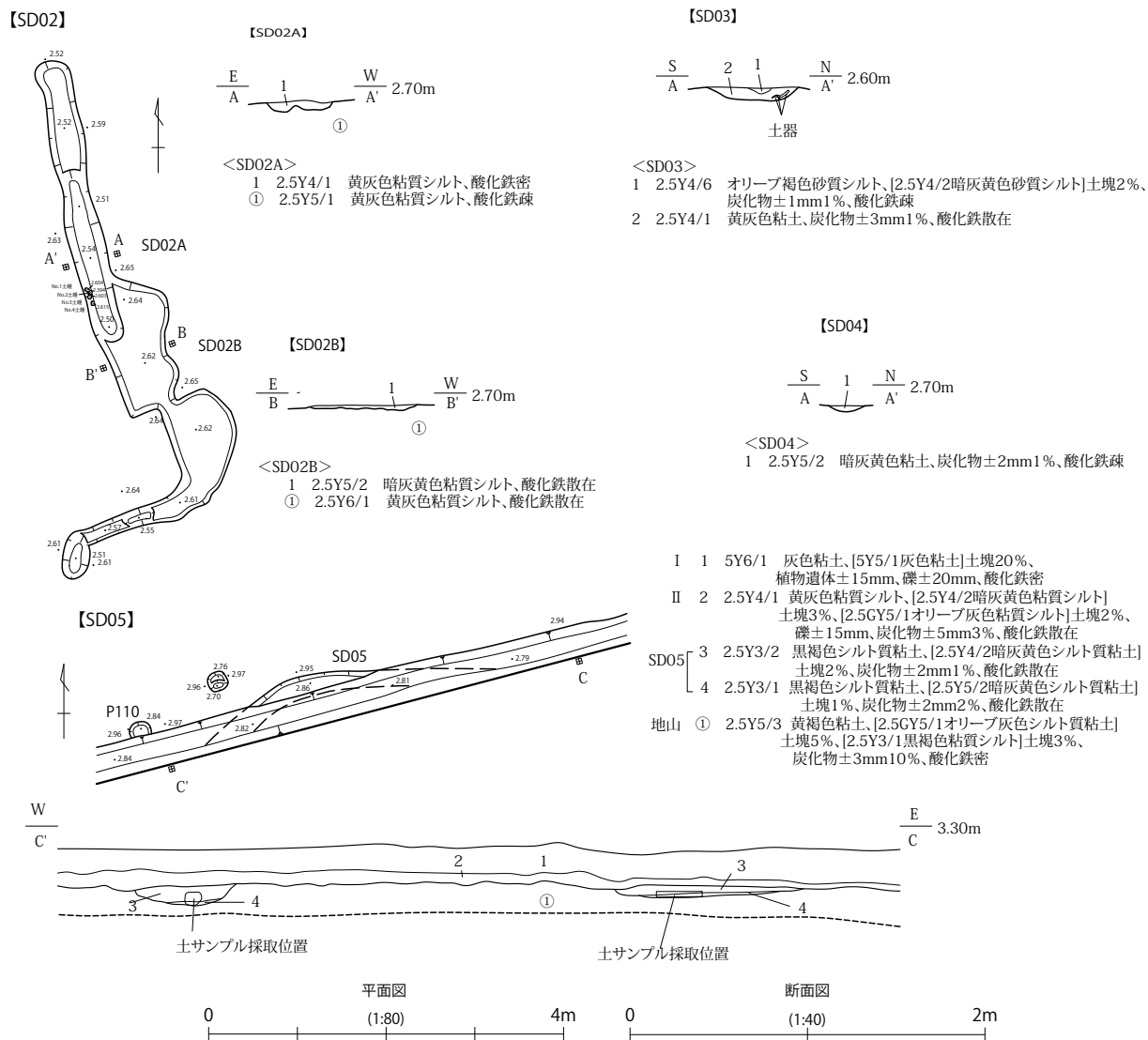


第35図 1区 SD01 遺物出土状況図5 (下層2) (S=1/60)

第2節 1・3区検出遺構

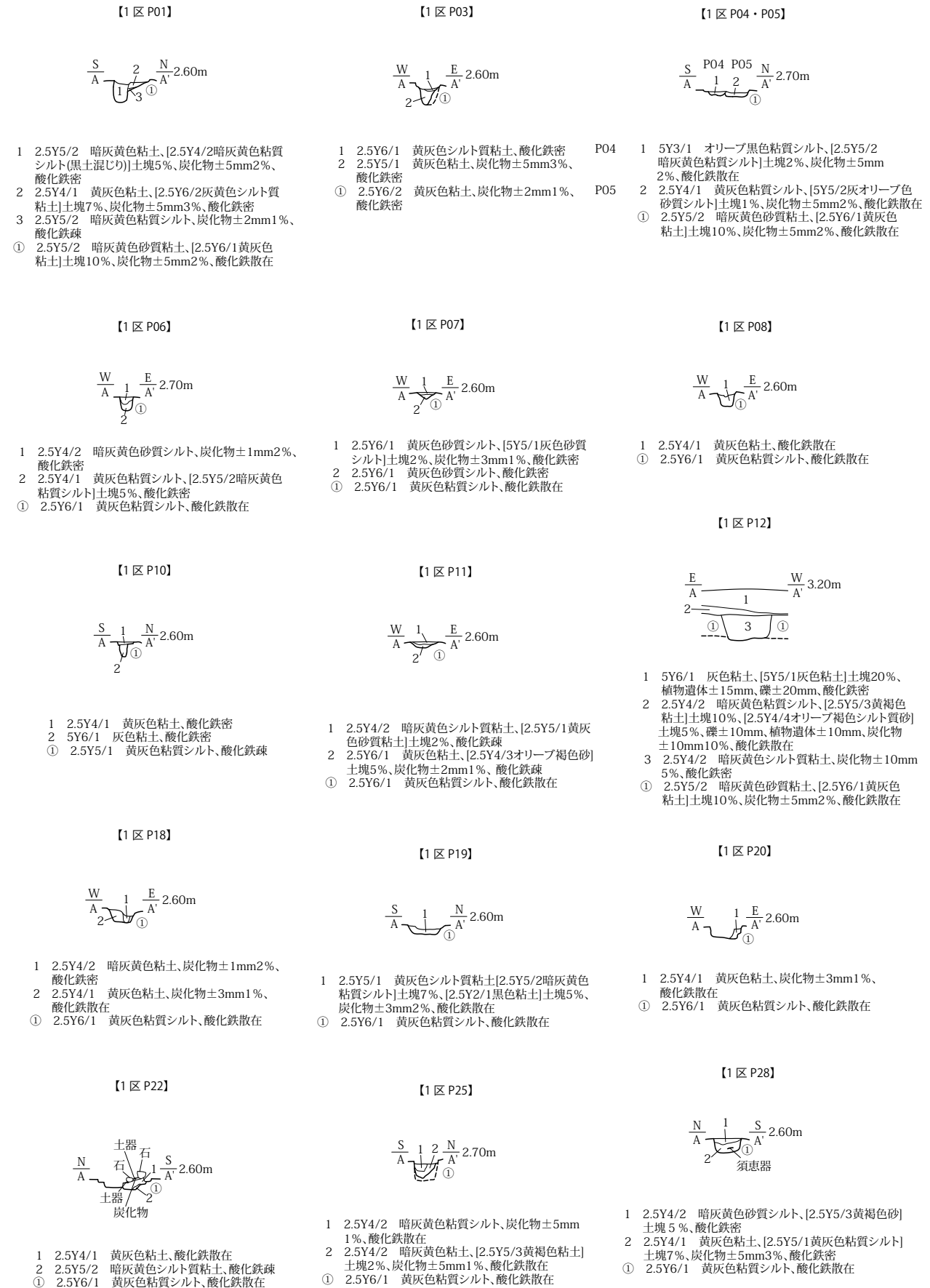


第 36 図 1 区 SD01 遺物出土状況図最下層 (S=1/60)

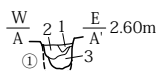


第37図 1区溝実測図 (S=1/80・1/40)

第2節 1・3区検出遺構

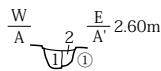


【1区 P29】



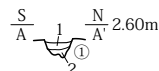
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト、[2.5Y5/3黄褐色砂]土塊5%、酸化鉄密
- 2 2.5Y4/1 黄灰色粘土、[2.5Y5/1黄灰色粘質シルト]土塊7%、炭化物±5mm3%、酸化鉄密
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土、炭化物±3mm2%、酸化鉄散在
- ① 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト、酸化鉄散在

【1区 P31】



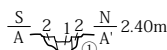
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質粘土、[2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土]土塊5%、[2.5Y6/4にぶい黄色砂質粘土]土塊2%、酸化鉄密
- 2 2.5Y5/1 黄灰色粘土、炭化物±1mm2%、酸化鉄散在
- ① 2.5Y6/2 灰黄色粘土、酸化鉄密

【1区 P33】



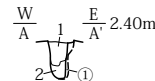
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、炭化物±5mm3%、酸化鉄密
- 2 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、酸化鉄密
- ① 2.5Y6/2 灰黄色粘土、酸化鉄密

【1区 P36】



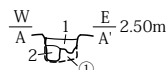
- 1 2.5Y5/1 黄灰色砂質粘土、炭化物±3mm1%、酸化鉄疎
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、炭化物±5mm3%、酸化鉄密
- ① 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質粘土、[2.5Y6/1黄灰色粘土]土塊10%、炭化物±5mm2%、酸化鉄散在

【1区 P37】



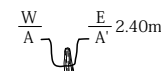
- 1 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、炭化物±3mm2%、酸化鉄散在
- 2 2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土、酸化鉄密
- ① 2.5Y6/2 灰黄色粘土、酸化鉄密

【1区 P35】



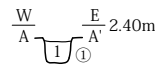
- 1 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、酸化鉄密
- 2 2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土、酸化鉄密
- ① 2.5Y6/2 灰黄色粘土、酸化鉄密

【1区 P38A】

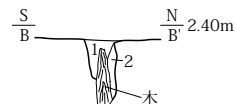


- 1 2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土、炭化物±3mm1%、酸化鉄疎
- ① 2.5Y6/2 灰黄色粘土、酸化鉄密

【1区 P38A】



【1区 P38B】



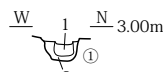
- 1 2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土、炭化物±3mm1%、酸化鉄疎
- 2 2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土、[2.5Y6/2灰黄色粘土]土塊30%、炭化物±3mm1%、酸化鉄疎
- ① 2.5Y6/2 灰黄色粘土、酸化鉄密

【1区 P41】



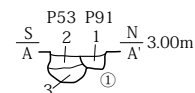
- 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土、炭化物±5mm2%、酸化鉄疎
- ① 2.5Y6/2 灰黄色粘土、酸化鉄密

【1区 P51】



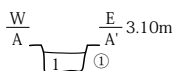
- 1 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト、[2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト]土塊5%、炭化物±5mm3%、酸化鉄密
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土、[2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土]土塊5%、炭化物±5mm1%、酸化鉄散在
- ① 2.5Y6/2 灰黄色粘土、[2.5Y4/1黄灰色粘質シルト]土塊5%、酸化鉄密

【1区 P53・P91】



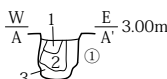
- 1 2.5Y4/1 黄灰色粘土、[2.5Y4/3オリーブ褐色粘土]土塊5%、炭化物±5mm1%、酸化鉄散在
- 2 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト、[2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト]土塊10%、炭化物±2mm1%、酸化鉄密
- 3 2.5Y3/1 黒褐色粘土、炭化物±5mm2%、酸化鉄疎
- ① 2.5Y6/2 灰黄色粘土、[2.5Y4/1黄灰色粘質シルト]土塊5%、酸化鉄密

【1区 P54】



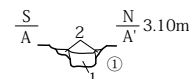
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土、[2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土]土塊5%、炭化物±10mm10%、酸化鉄疎
- ① 2.5Y6/2 灰黄色粘土、[2.5Y4/1黄灰色粘質シルト]土塊5%、酸化鉄密

【1区 P57】



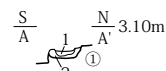
- 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土、[2.5Y4/2暗灰黄色粘土]土塊10%、炭化物±5mm3%、酸化鉄散在
- 2 2.5Y3/2 黒褐色粘土、[2.5Y4/2暗灰黄色粘土]土塊5%
- 3 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、[2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト]土塊3%、炭化物±5mm2%、酸化鉄散在
- ① 2.5Y6/1 灰黄色粘土、[2.5Y6/2灰黄色粘土]土塊7%、酸化鉄密

【1区 P60】



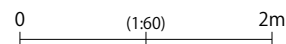
- 1 2.5Y3/2 黒褐色粘土、[2.5Y5/2暗灰黄色粘土]土塊2%、炭化物±10mm2%、酸化鉄散在
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土、炭化物1mm1%、酸化鉄密
- ① 2.5Y6/2 灰黄色粘土、[2.5Y4/1黄灰色粘質シルト]土塊5%、酸化鉄密

【1区 P61】

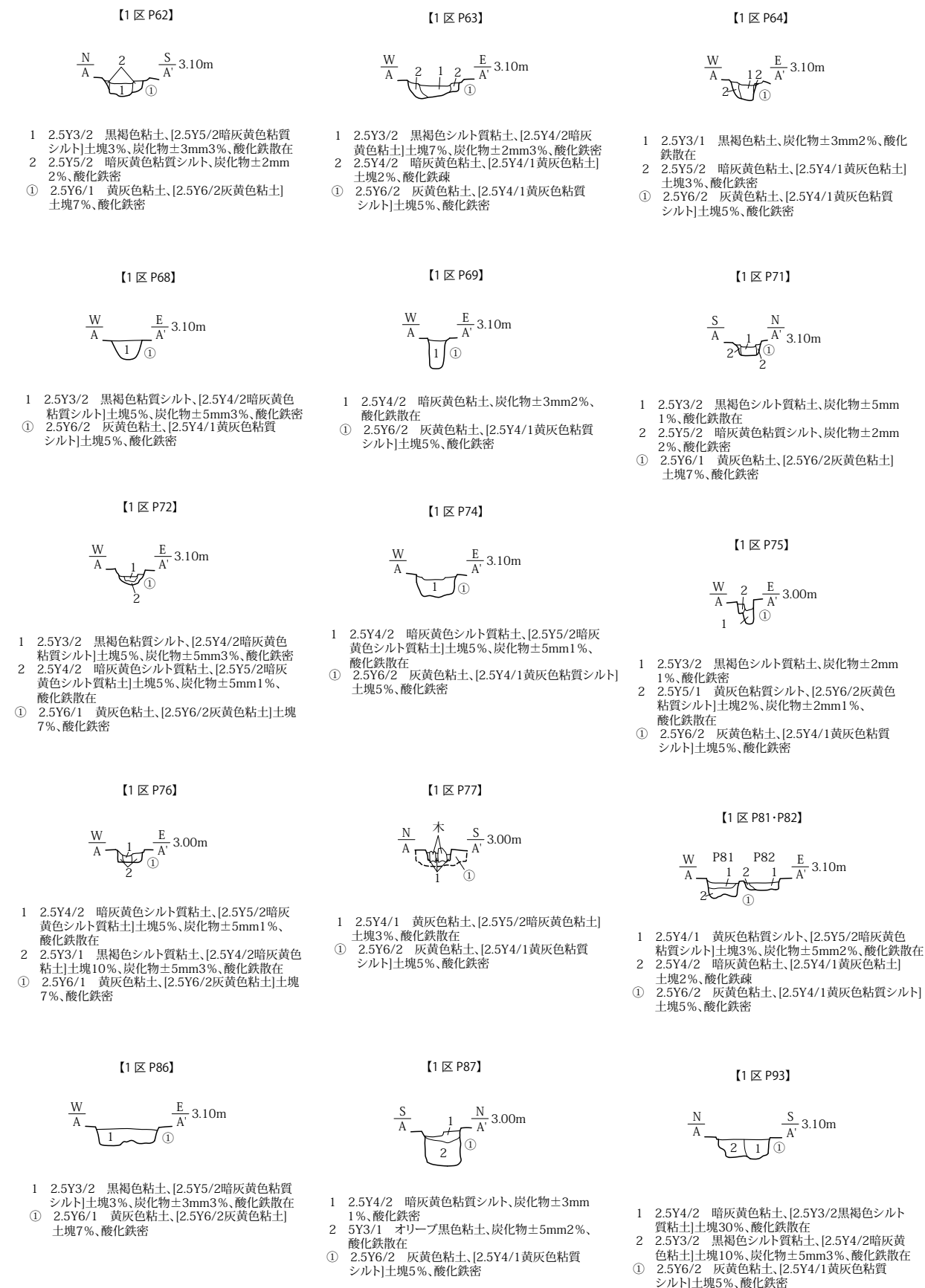


- 1 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト、[2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト]土塊5%、炭化物±5mm3%、酸化鉄密
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土、[2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土]土塊5%、炭化物±5mm1%、酸化鉄散在
- ① 2.5Y6/1 黄灰色粘土、[2.5Y6/2灰黄色粘土]土塊7%、酸化鉄密

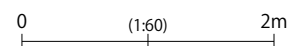
第39図 1・3区ピット・小穴実測図2 (S=1/60)



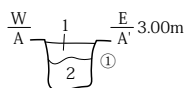
第2節 1・3区検出遺構



第40図 1・3区ピット・小穴実測図3 (S=1/60)

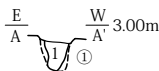


【1区 P95】



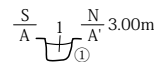
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土、[2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土]土塊5%、炭化物±5mm1%、酸化鉄散在
 2 2.5Y3/1 黒褐色粘土、[2.5Y5/2暗灰黄色粘土]土塊5%、酸化鉄疎
 ① 2.5Y6/2 灰黄色粘土、[2.5Y4/1黄灰色粘質シルト]土塊5%、酸化鉄密

【1区 P98】



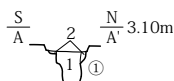
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、炭化物±2mm2%、酸化鉄疎
 ① 2.5Y6/2 灰黄色粘土、[2.5Y4/1黄灰色粘質シルト]土塊5%、酸化鉄密

【1区 P100】



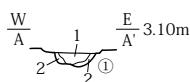
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土、炭化物±3mm2%、酸化鉄散在
 ① 2.5Y6/2 灰黄色粘土、[2.5Y4/1黄灰色粘質シルト]土塊5%、酸化鉄密

【1区 P104】



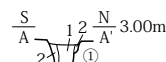
- 1 2.5Y3/2 黒褐色粘土、[2.5Y4/2暗灰黄色シルト質粘土]土塊7%、炭化物±5mm1%、酸化鉄散在
 2 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト、[2.5Y4/1黄灰色粘質シルト]土塊3%、炭化物±2mm3%、酸化鉄散在
 ① 2.5Y6/2 灰黄色粘土、[2.5Y4/1黄灰色粘質シルト]土塊5%、酸化鉄密

【1区 P106】



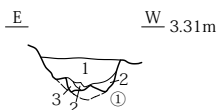
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、[2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト]土塊3%、炭化物±2mm2%、酸化鉄密
 2 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト、[2.5Y4/1黄灰色粘質シルト]土塊3%、炭化物±2mm3%、酸化鉄散在
 ① 2.5Y6/2 灰黄色粘土、[2.5Y4/1黄灰色粘質シルト]土塊5%、酸化鉄密

【1区 P109】



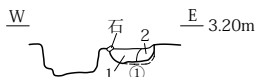
- 1 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、[2.5Y4/1黄灰色粘質シルト]土塊1%、炭化物±1mm1%、酸化鉄密
 2 5GY4/1 暗オリーブ灰色粘質シルト、[2.5Y3/1黒褐色粘質シルト]土塊1%、炭化物±1mm1%、酸化鉄散在
 ① 5GY4/1 暗オリーブ灰色砂質シルト、酸化鉄疎

【3区 P06】



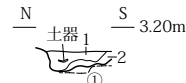
- 1 7.5Y4/1 灰色シルト(7.5Y5/1 灰色シルトブロック少 炭粒やや多 鉄分多)
 2 5Y7/1 灰白色シルト(灰色シルトブロックやや多 炭粒少 鉄分やや多)
 3 7.5Y6/1 灰色シルト(灰色シルトブロック少 炭粒少 鉄分少)
 ① 5Y6/1 灰色シルト(5Y4/1 灰色シルトブロック多 炭粒少 鉄分極多)

【3区 P07】



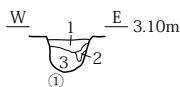
- 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト(灰黄色シルト小ブロックやや多 炭粒やや多 鉄分多)
 2 5Y4/1 灰黄色シルト(灰黄色シルトブロック多 炭粒少 鉄分多)
 ① 5Y6/2 灰オリーブ色シルト(灰色シルトブロック多、炭粒少、鉄分極多)(P03と共通)

【3区 P10】



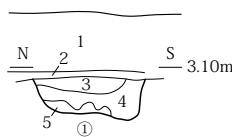
- 1 5Y3/1 オリーブ黒色シルト(灰オリーブ色シルト小ブロックやや多 炭粒やや多 鉄分やや多)
 2 7.5Y4/1 灰色シルト(灰白色シルトブロックやや多 炭粒やや多 鉄分やや多)
 ① 5Y6/2 灰オリーブ色細砂(灰色シルトブロック多 炭粒やや多 鉄分極多)

【3区 P13】



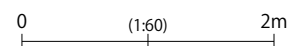
- 1 2.5Y4/1 黄灰色シルト(黄灰色シルト小ブロックやや多 炭粒少 鉄分多)
 2 5Y6/1 灰色シルト(5Y4/1 灰色シルトブロック微 炭粒微 鉄分多)
 3 5Y4/1 灰色シルト(灰オリーブ色シルトブロック多 炭大粒少 鉄分多)
 ① 5Y6/2 灰オリーブ色シルト(灰色シルトブロック多 炭大粒少 鉄分極多)

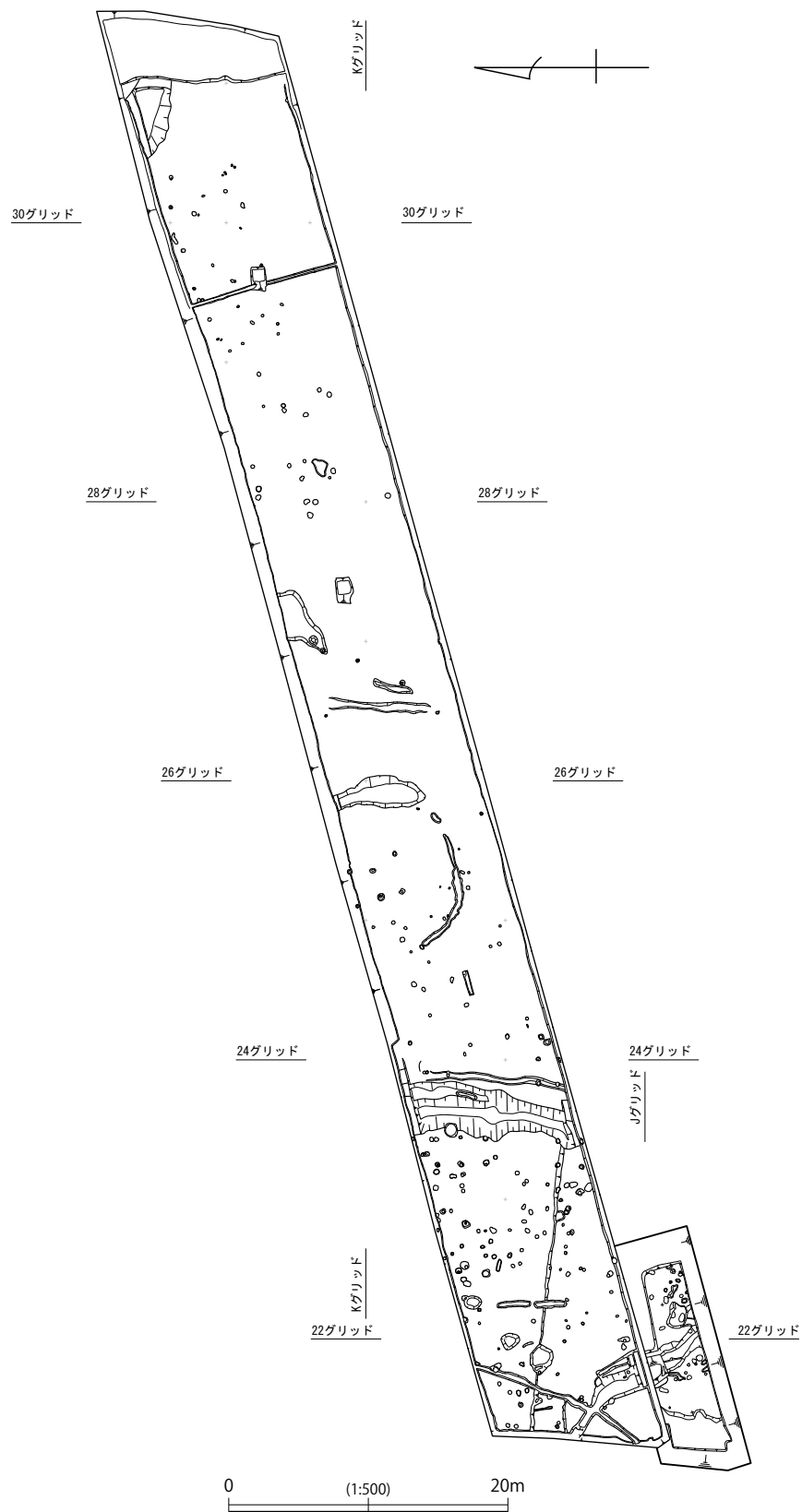
【3区 P25】



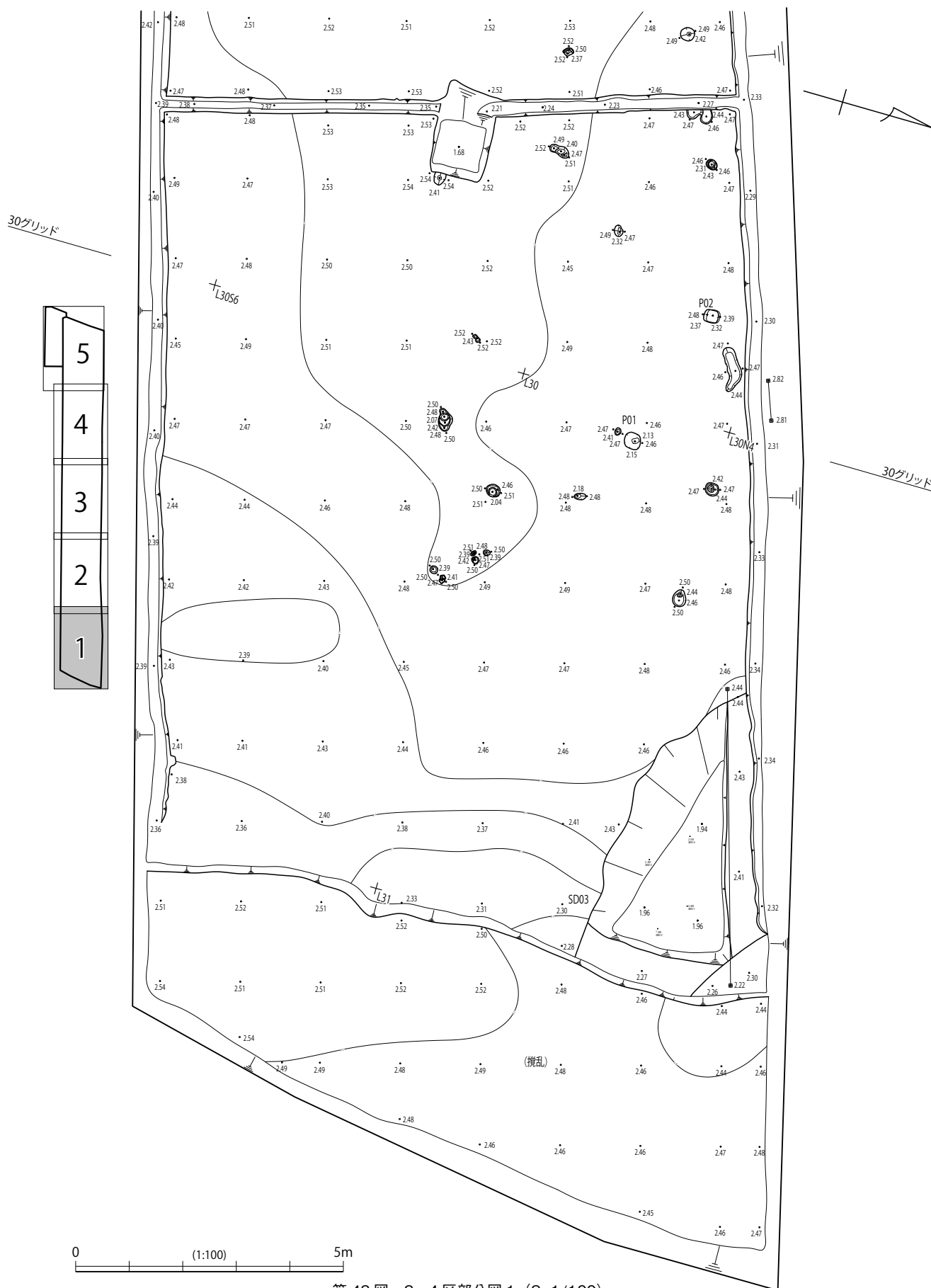
- 1 盛土
 2 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土(旧床土)
 3 2.5Y4/3 暗オリーブ褐色粘質土(旧床土)
 4 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土(細かい炭化物 灰黄色土粒含む)(P25覆土)
 5 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト(地山質 暗灰黄色土ブロック少し含む)(P25覆土)
 ① 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト(地山)

第41図 1・3区ピット・小穴実測図4 (S=1/60)



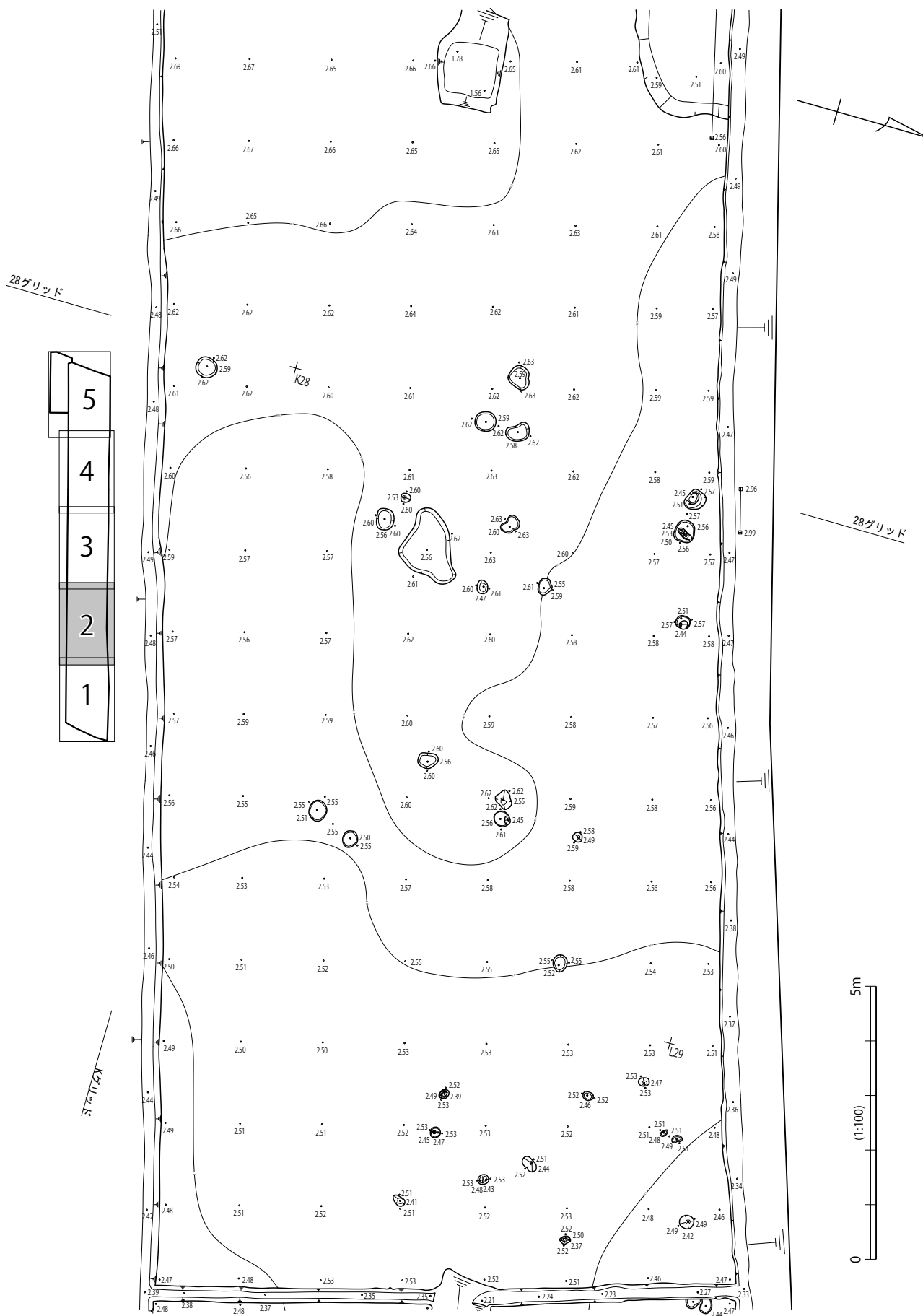


第 42 図 2・4 区全体図 (S=1/500)

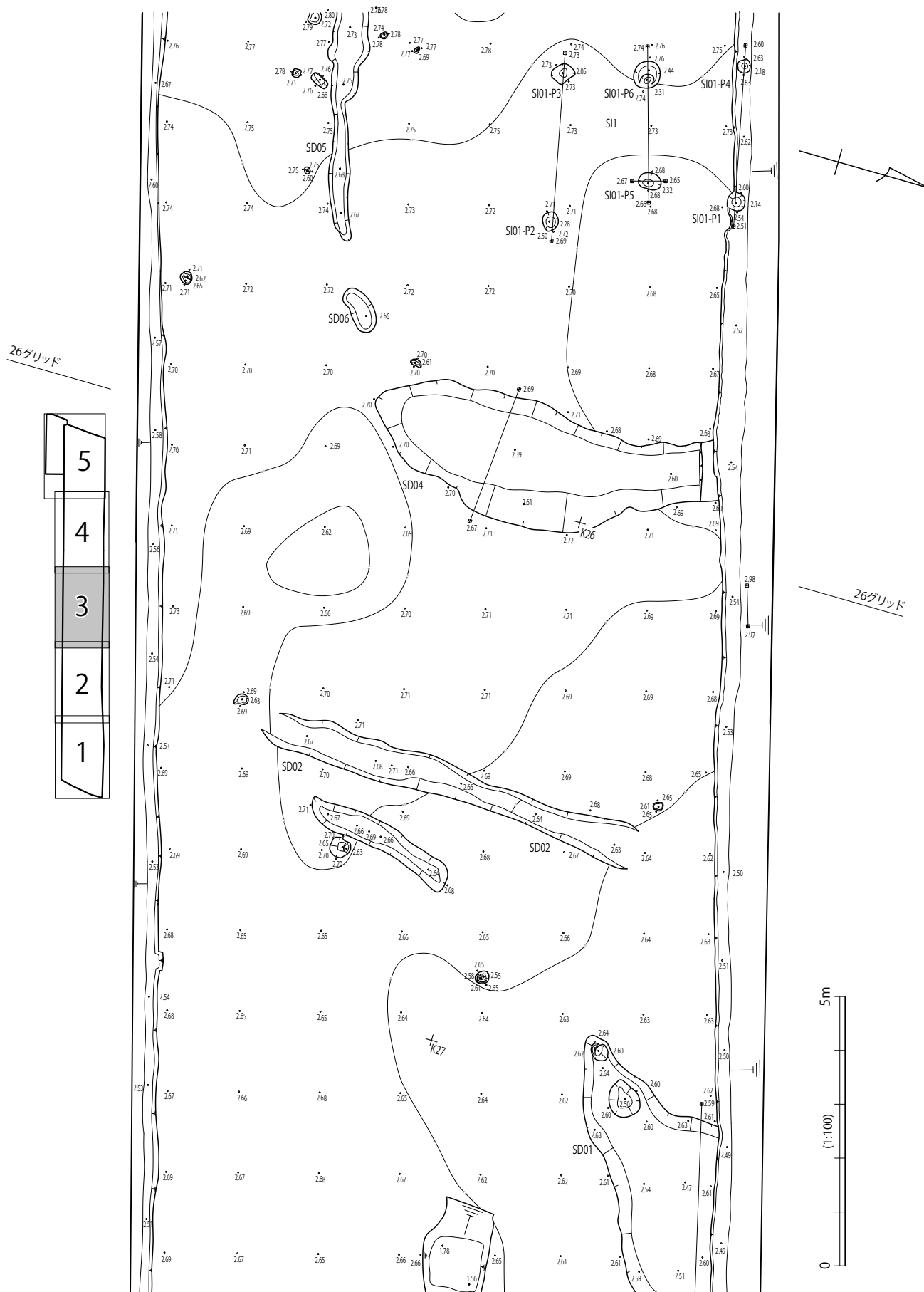


第43図 2・4区部分図1 (S=1/100)

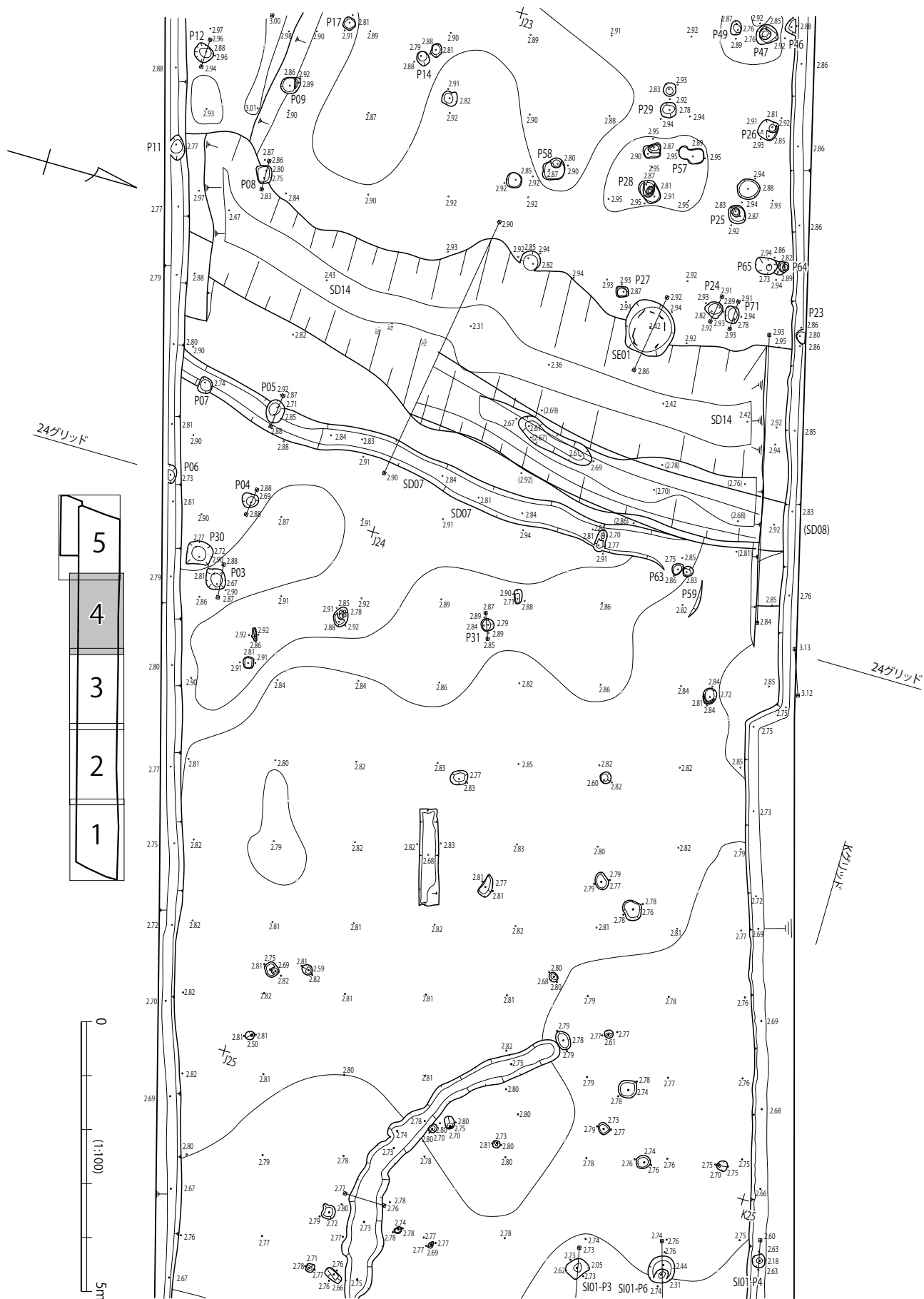
第2節 1・3区検出遺構



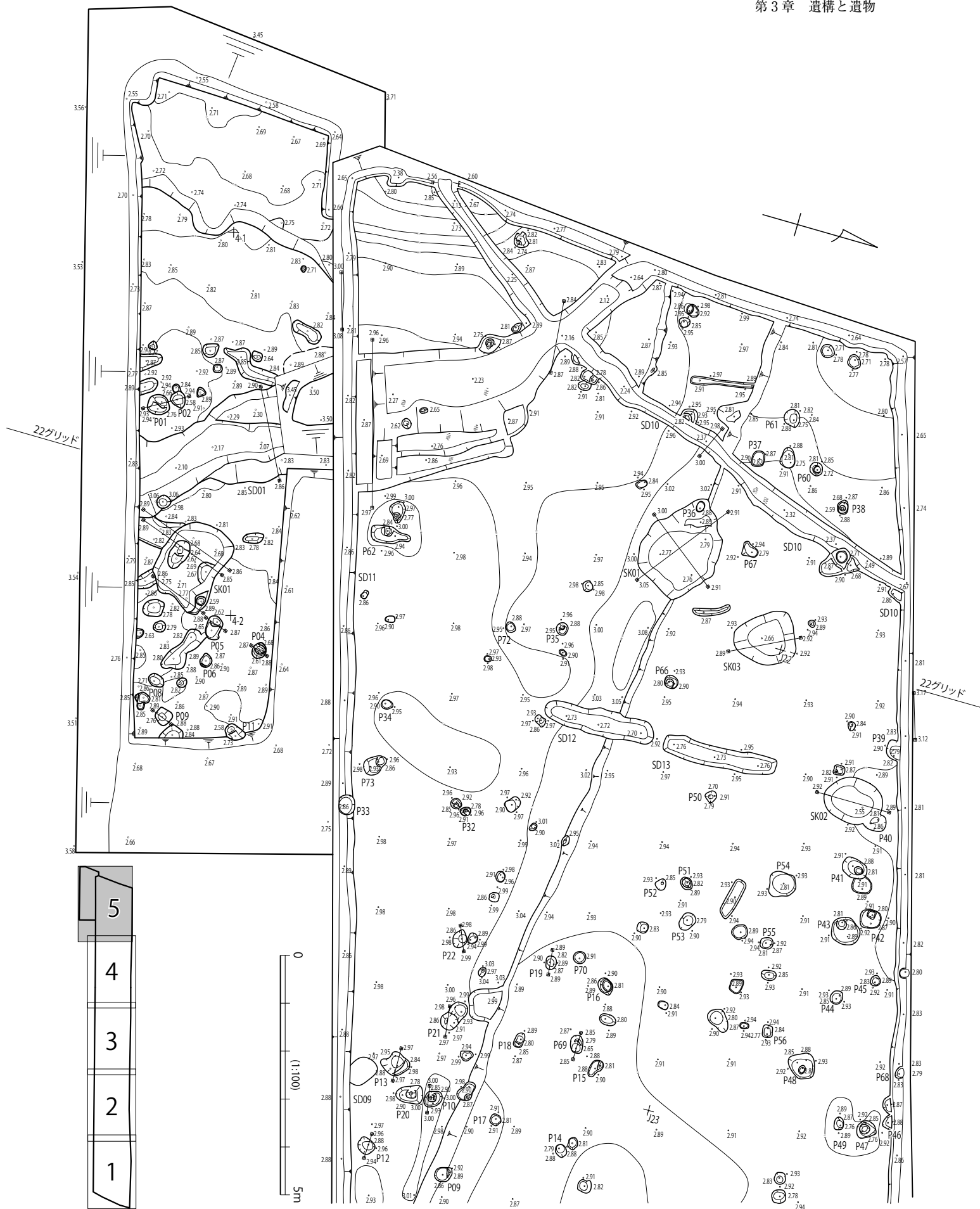
第 44 図 2・4 区部分図 2(S=1/100)



第45図 2・4区部分図3 (S=1/100)



第46図 2・4区部分図4 (S=1/100)



第47図 2・4区部分図5 (S=1/100)

第3節 2・4区検出遺構

a 平地式建物

2区 SI01

2区 J26・K26 グリッドで検出した。建物の柱は調査区内で全て確認できたが、北側3分の1ほどが調査区外となっている。外周溝（2区 SD04～06）は部分的に途切れているが、後世の削平により溝底の浅い部分の溝上端が失われたためである。正確な形状を示せないが、柱筋に面する溝が直線的であることやコーナーが明確でないことから、隅丸方形を呈すると考えられる。外周溝内側の規模では、東西で推定約10.5m、南北の推定11mである。柱は、梁行1間（2.5m、2.65m）、桁行2間（3.35m、3.5m）である。桁の中柱（P6、P5）は柱間のほぼ中間に位置するものの、隅の柱（P1～P4）を結ぶ柱筋から少し外れるが、いずれの柱は標高2m前後である。東側の外周溝（2区 SD04）は幅広く最大で2.25mで、その北で1.05mの幅となっており、幅広い部分で最も深く0.3mを測る。南から西にかかる外周溝は幅0.3～0.5mで10cm程度の深さしかない。このように全く違う形状の外周溝だが、埋積状況は全く同じで、上から黒褐色粘質土で、底に黄灰色粘土が薄くみられる。周溝は自然堆積により土壌化された様子が見られる。実際の居住範囲を知る手がかりはないが、東側の周溝規模が大きいことや、やや開き気味に北に延びて途切れる2区 SD05から、西からの出入りを想定できよう。2区 SD04から大型壺（87）と土錘（88）が出土した。弥生時代中期末である。なお、調査担当者は「松菊里型」を想定するが、さらなる検討が必要と考える。

b 掘立柱建物

2区 SB02

2区 J24 グリッドで検出した、梁行2間（3.5m）、桁行2間（3.45m）の総柱建物だが、南西隅の柱を検出していない。建物軸は北から1度東に振っている。柱筋は微妙にずれており（P25～27）、梁間も東側が1.85m、西側が1.6mと異なっている。総柱であることや中心となる柱（P28）がちょうど柱筋の交点にくることから高床であることがわかる。建物形状から倉庫であると考えられる。

2区 SB03

2区 I23 グリッドで検出した。梁行2間（3.5m）、桁行2間（3.25m）の総柱建物である。建物軸は北から2度20分東に振っている。北の桁の柱間は1.4m、南は1.85mと柱間隔が異なる。梁間の中柱が柱筋から外れており、P21が20cm北に、北側の梁中柱を北20cmずれるP15としたが、P69と考えることもできる。P17も微妙にずれている。しかも中心となる柱であるP18はほかの柱より小さい掘方である。建物形状から倉庫であると考えられるものの、簡便な構造の印象が強い。なお、2区 SB04と南東隅で重複している。SD14との関係から考えれば、SB04の建て替えであろう。

2区 SB04

2区 I24 グリッドで検出した。現状で南北1間（1.65m）、東西2間（3.6m）を検出したが、さらに南に1間伸びる2間×2間の総柱建物と考えている。建物軸は北から0度30分東に振っている。2区 SB03や04では梁あるいは桁柱間が異なる構造であったが、S04はわからない。建物東端が古墳時代初頭の2区 SD14と重複している。当該箇所は溝がやや西に張り出しており、その上端に柱が及んでいる（P08・11）ので柱の沈下があり、2区 SB03へ建て替えしたのであろう。

2区 SB05

2区 I23 グリッドで検出した。現状で南北1間(1.5m)、東西2間(3.3m)を検出したが、さらに南に1間伸びた2間×2間の総柱建物と考えている。建物軸は北から4度30分東に振っている。建物西柱(P05・07)が2区 SD07 と重複している。

c 井戸・土坑**2区 SE01**

2区 J24 グリッドで検出した。2区 SD14 西岸と井戸掘方の半分が重複している。SB02の柱筋と接している。直径0.95mのほぼ円形を呈した掘方で、深さ0.65mと浅い井戸である。井戸枠は痕跡程度の板材が見られ、縦板組のようである。井戸枠は掘方内側約10cmの位置にあり、縦板のみの井戸枠に強い強度を想定しがたい。それは、非常に浅い井戸であることから、肯首される。井戸の大きさの割に比較的多くの遺物が出土した。須恵器杯蓋(204)や杯身(201～203・205)須恵器皿(206)、土師器甕(208)である。201と203底に文字が墨書されている。田嶋編年Ⅳ2期の土器が主体であり、9世紀末から10世紀初頭の時期である。2区 SB02 とは近接しており、同時併存は想定しがたい。また、簡便な構造の井戸であることや遺物の状態から、祭祀的な様相といえよう。

2区 SK01

2区 I22 グリッドで検出した。2区 SD10 近くに位置するP36と重複する土坑である。円形に近いが歪んだ形状を呈し、1.5m～1.7mを測る。そこは明確な面があり、レンズ状の堆積となった土層状況である。上下層の間には薄く黄灰色粘質土があり、土坑として再掘削されるなどの整えられたことを示すと考ええる。出土遺物では、弥生時代の甕(89～91)を図化した。口縁端部に刻みなどがなく、弥生後期にかかる時期であろう。

2区 SK02

2区 J23 グリッドで検出した。P40と重複した楕円形の土坑である。長径1.25m、短径0.95m、深さ0.35mを測る。上層に明灰黄色粘質土、下層に黒褐色粘質土が厚く堆積しており、長期間にわたり開放状態であったことがわかる。遺物の出土はなく、時期などは不明である。

2区 SK03

2区 J22 グリッドで検出した。SK01と02の間に位置する台形を呈する土坑である。1.26m×1.07m、深さ0.26mを測り、凹凸のある底部である。2区 SK02と同じ埋土状況なので、ほぼ同時代の遺構と認識したい。出土遺物のうち、須恵器杯蓋(200)を図化した。9世紀ごろの遺構であろう。

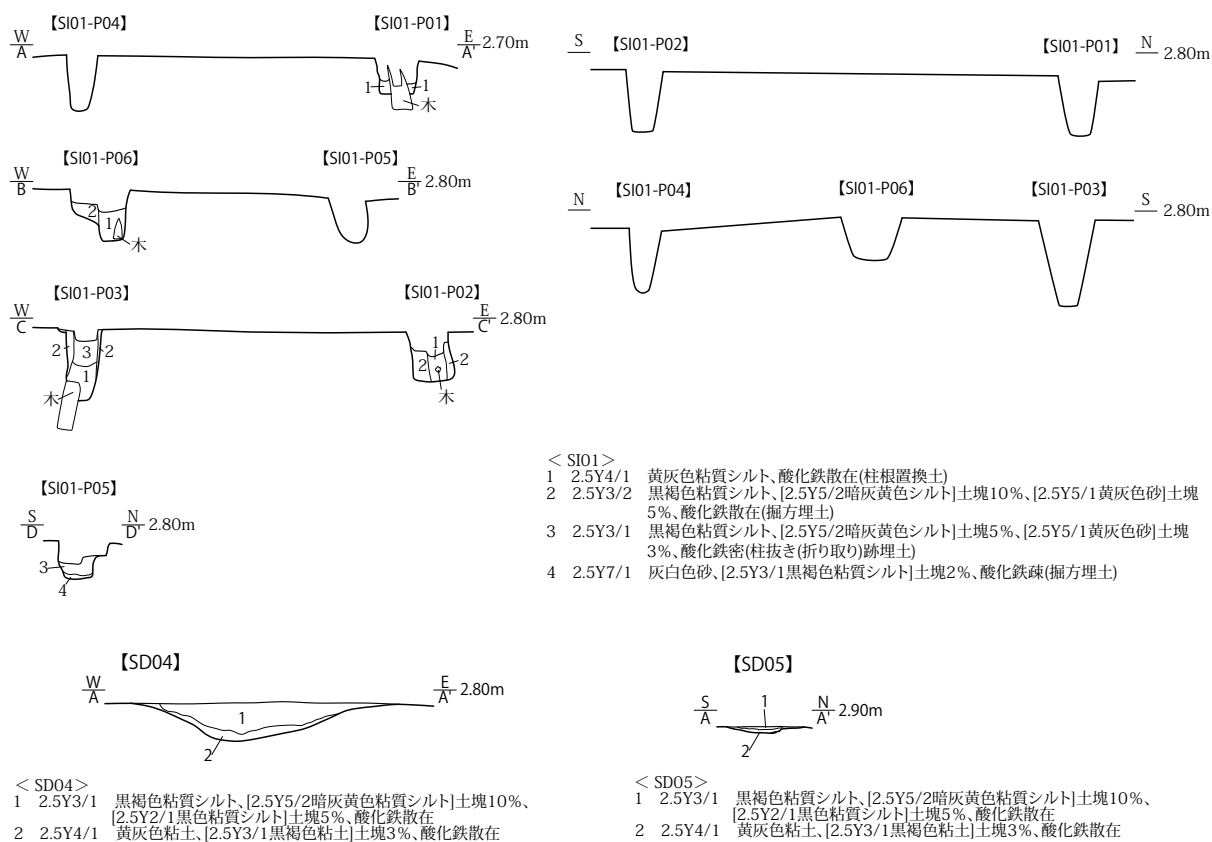
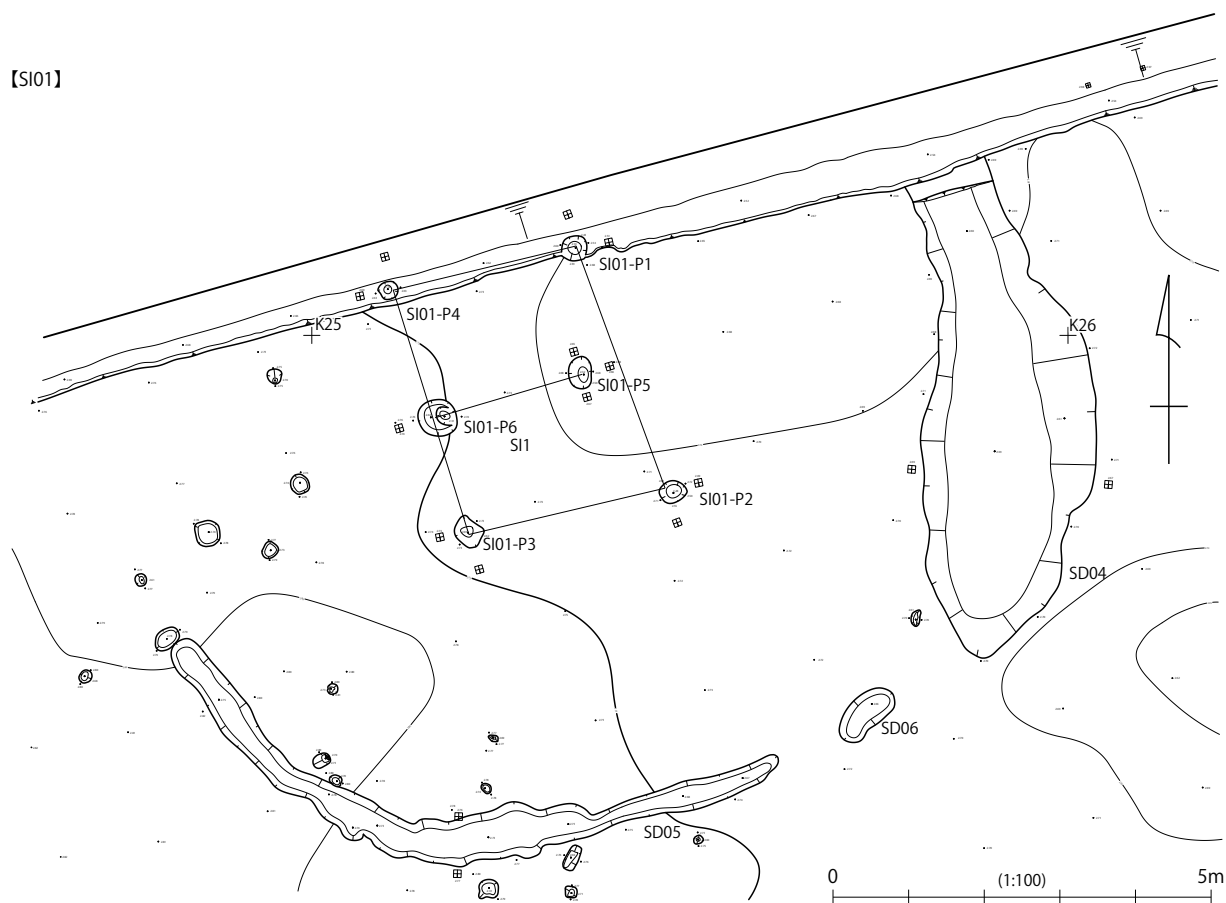
4区 SK01

4区 H22 グリッドで検出した。2区 SD11の延長にあたる4区 SD01 東に近接する土坑である。いびつな方形を呈し、1.7m×1.3m、深さ約20cmを測り、底面には凹凸が見られる。下層にはオリーブ黒色粘質土があり、有機物を含み土壌化が進んでいる。遺物の出土がほとんどなく、時期等は不明である。

d 溝**2区 SD03**

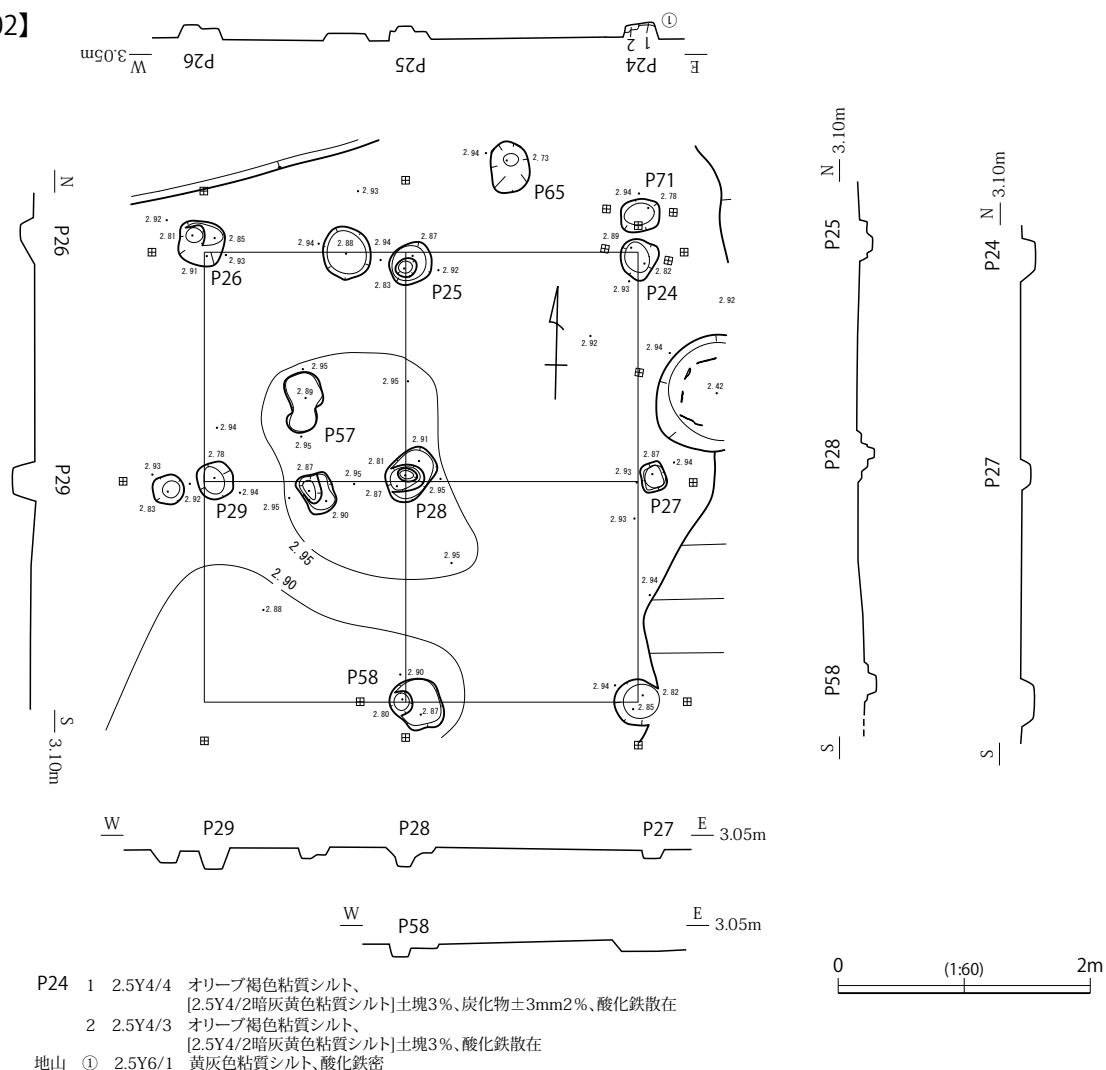
2区 L31 グリッドで検出した。遺構の東側の延長分には大規模な攪乱が及んでおり、しかも東隣りの田面がかなり低いことなら、2区 SD03の延長部分はすでに失われていると判断できる。幅3～

【SI01】



第48図 2区 SI01 平面・断面図 (S=1/100・1/60)

【SB02】



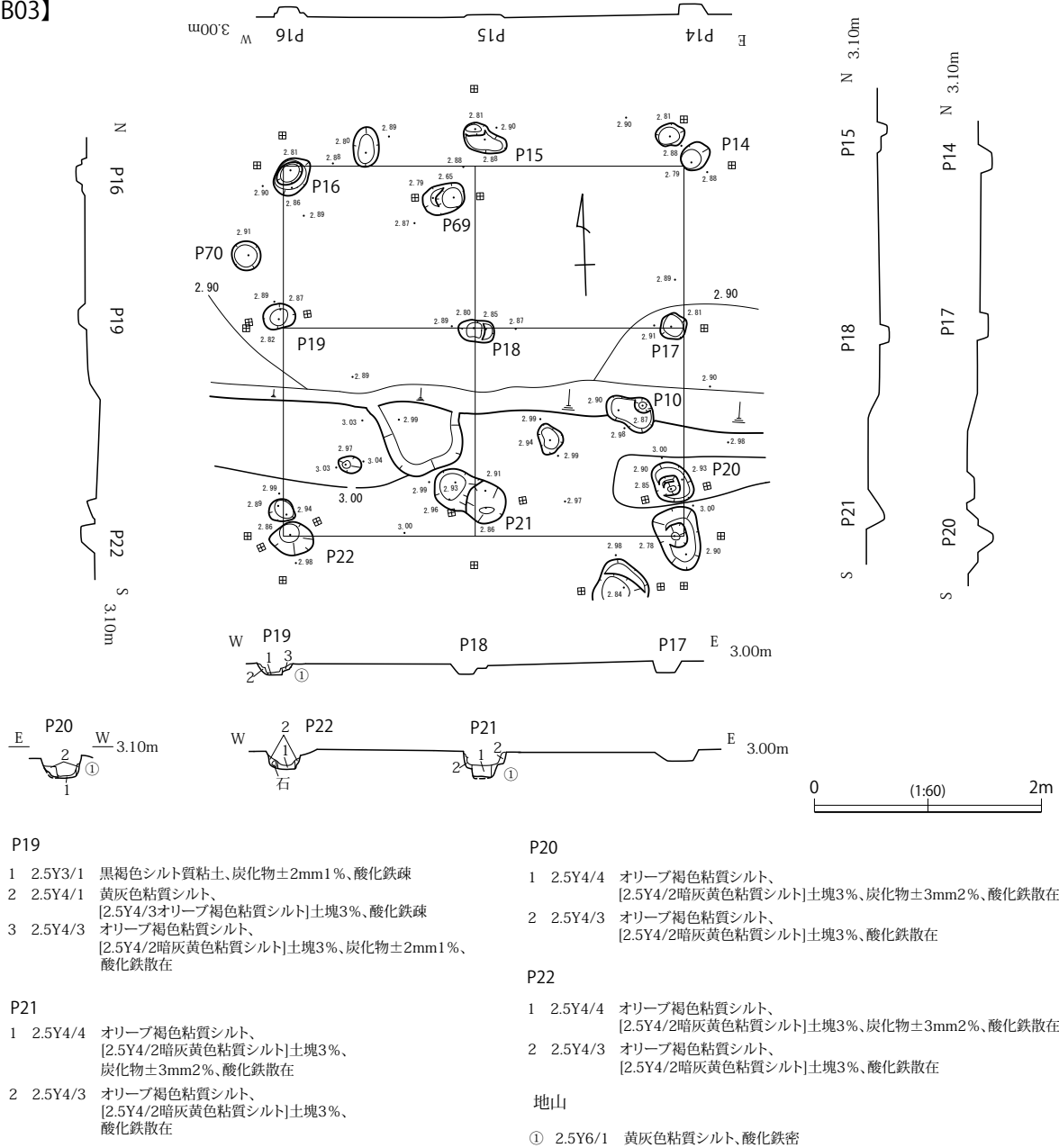
第49図 2区SB02実測図 (S=1/60)

4m、深さ0.5mを測り、溝底は平坦となっている。地形的に、南東隅から北西に流れる溝である。全体的に黄灰色粘質土が堆積しており、活発な流水状態であるとか、水の淀んだ状態を示す堆積状況にない。タタキ成形による甕やハケメ主体の甕が出土しており、明確な時期を示しがたいが、弥生時代中期末～後期頃と思われる。2区SI01と時期的に平行する。灰釉碗（86）があるが、近くにあるカク乱等からの混入である。

2区SD10

2区I22・J22グリッドにある南北に流れる溝である。幅0.3m～0.5m、深さ0.6m前後を測る細くて深い溝で、そのため箱形の形状を呈する。2区SD11が埋積したのちに掘り込まれた溝である。下層から、黒色粘土、黒褐色粘質土、褐色粘質土となっており、上部になるにしたがって明るい土色である。溝底は北になるに従い低くなっており、水の流れる方向を示す。かなり有機物を包含する土であるので、泥土のたまりやすい環境であったことがわかる。擬凹線を持つ有段口縁甕（96）や有段口縁甕（97～99）のほか、器台（101）や高坏（102）が出土し、弥生時代後期後半の時期である。

【SB03】

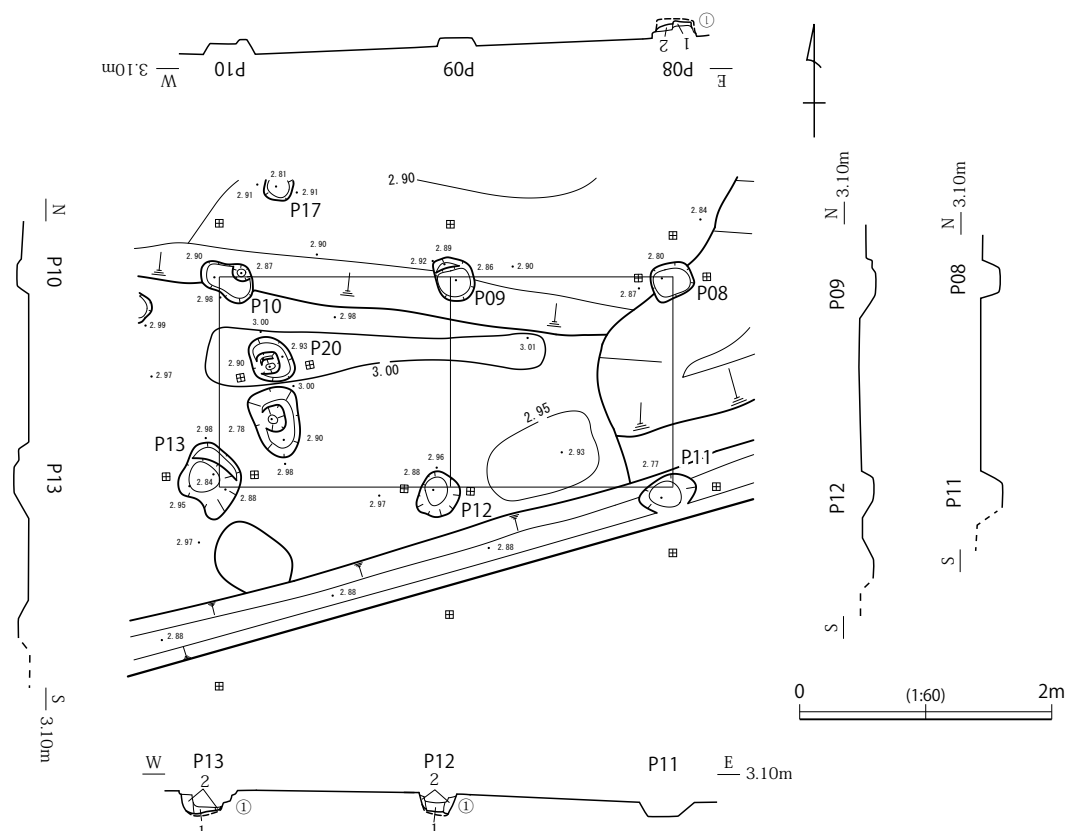


第50図 2区SB03実測図 (S=1/60)

2区SD11・4区SD01

2区I22グリッド、4区H22グリッドで検出した2区SD10と直交する溝で、それよりも古いことは前述した。幅は一定せず、西端で0.85m、2区調査区南端で2.2mと大きくなっており、4区でも1.1m～1.9mとなっている。溝の流れはほぼ平坦で、しかも2区と4区で検出した溝底のレベルが異なるので、水流の方向はわからない。溝西端が急激に浅くなっているため、水の溜まりのような状態と考えられる。このような視点で遺構平面形を観察すると、2・4区にまたがる部分の溝は直線的で、東側の溝岸が緩やかになっている部分がある。溝の下層には灰色～黄灰色粘質土が厚くたまり、水が溜まっている状況がうかがえるものの、有機物が少ないことから管理された状態といえる。上層には有機物を出とする土が堆積し、植物の繁茂により自然に埋積した状態である。2区SD11からは弥生時代中期の

【SB04】



P08

- 1 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質シルト、
[2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト]土塊3%、炭化物±3mm2%、酸化鉄散在
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質シルト、
[2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト]土塊3%、酸化鉄散在

P13

- 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土、炭化物±2mm1%、酸化鉄疎
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質シルト、
[2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト]土塊3%、炭化物±2mm1%、酸化鉄散在

P12

- 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土、炭化物±2mm1%、酸化鉄疎
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質シルト、
[2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト]土塊3%、炭化物±2mm
酸化鉄散在

地山 ① 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト、酸化鉄密

第51図 2区 SB04 実測図 (S=1/60)

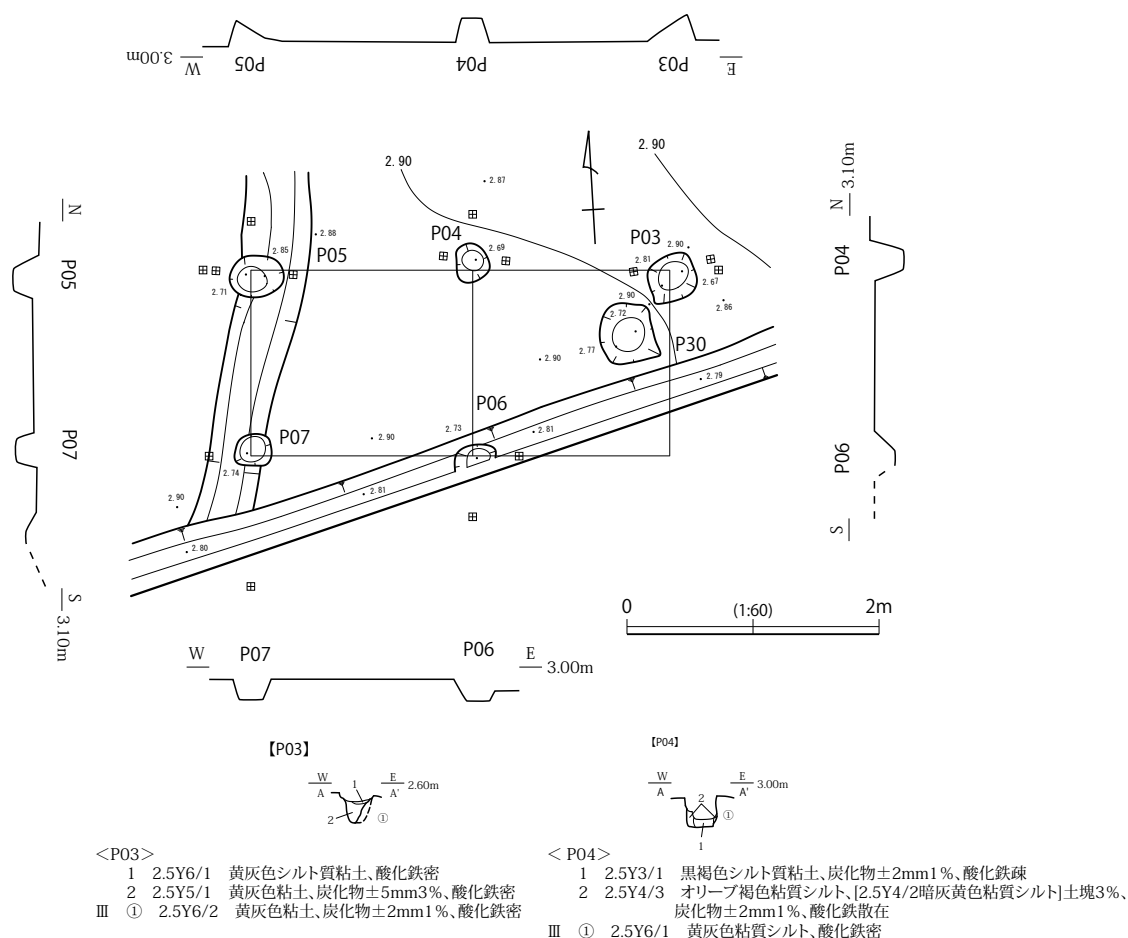
甕 (92) や後期前葉の甕 (93) が出土しているほか、4区 SD01 からは弥生時代中期の壺 (496) や把手 (497) が出土しており、溝の時期としては弥生時代中期から後期にかかるところであり、2区 SI01 と概ね時期的に平行するであろう。

2区 SD07・08・14

I24、J24 グリッドで検出した幅 2.0m ～約 3.5m、深さ 0.4 ～ 0.5m の溝である。SD14 の東側上層に SD08 とした溝状の堆積を確認し、部分的に平面形を確認した。また、SD14 の東に平行して流れる幅約 0.5m の溝を SD07 とした。これらを一括して記述したい。

SD07 は深さ数cmしかない浅い溝で、2区 SB05 に切られており、北端は SD14 に接する。黒褐色粘質土を埋土とする。SD08 は SD14 の上層溝にあたり、それが埋没する最終段階の流路のような状態である。SD08 を溝として認識できた部分は SD14 の東岸の段状になった部分であり、SD14 上層土で

【SB05】

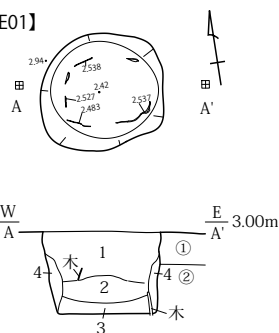


第52図 2区SB05平面・断面図 (S=1/60)

ある暗灰黄色粘質土と大きな違いはない。しかし、出土した土器は全く異なる時代のものであるので、一連の堆積にかかるものではない。常識的に考えれば、溝を重複した状態でSD08の開削で、SD14の上層が早々の再堆積したためであろうか。SD08掘削後に早く人為的に埋められた可能性もあろうか。SD08からは須恵器平瓶(210)や高坏蓋(211)、杯(212～223)、土師器甕(231)や鍋(230)などが出土している。TK209型式の須恵器(213)などやや古層を示す遺物があるが、8世紀から9世紀の遺物があり、硯に転用した焼台(229)があるなど、小さな遺構の割に多彩な遺物である。この遺物は、この遺跡を形成した人々が窯業生産に関わっていたことを示すものであろう。

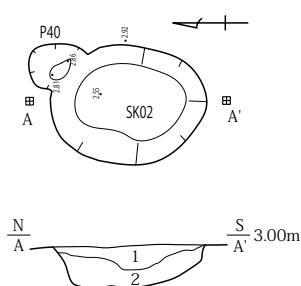
SD14は横断面漏斗状を呈し、平角な底面を形成しない。第55図中のBアゼで溝底に黒褐色土が見られるものの、全体的に有機物を多く包含する土は見られない。粘質土系の土が主であり、日常的な水の流れが想定される。SD14からは土師器甕や鉢、台付鉢、高坏、装飾器台が出土している。

【2区 SE01】



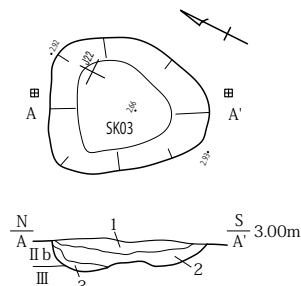
- 1 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト
[2.5Y5/1黄灰色砂質シルト]土塊2%、
炭化物、±5mm5%、酸化鉄密
- 2 5Y3/1 オリーブ褐色粘土
[5Y4/1灰色粘質シルト]土塊2%、
礫±50mm極多混、炭化物±5mm5%
- 3 7.5YR4/1 褐灰色粘質シルト、礫±80mm多混
- 4 2.5Y3/1 黒褐色粘土
[2.5Y5/2暗灰色粘質シルト]土塊2%
炭化物±5mm3%
- ① 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト、酸化鉄密
- ② 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト

【2区 SK02】



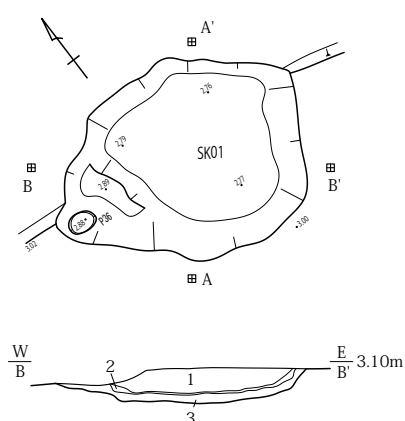
- 1 2.5Y4/2 暗灰色粘質シルト、酸化鉄密
- 2 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト
[2.5Y5/1黄灰色シルト]土塊7%、
粘[2.5Y3/2黒褐色粘質シルト]土塊5%
炭化物±5mm3%、酸化鉄散在

【2区 SK03】



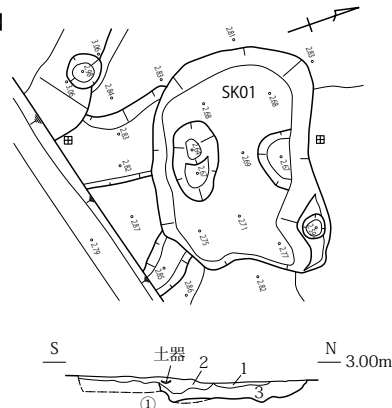
- 1 2.5Y4/2 暗灰色粘質シルト、酸化鉄密
- 2 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト
[2.5Y5/1黄灰色シルト]土塊7%、
[2.5Y3/2黒褐色粘質シルト]土塊5%
炭化物±5mm3%、酸化鉄散在
- 3 ベース(II b、III)層土塊と2層土塊の混土
- II b 5Y8/4 淡黄色粘質シルト
- III 5Y8/4 淡黄色細砂

【2区 SK01】



- 1 2.5Y4/2 暗灰色粘質シルト、
[2.5Y5/1黄灰色粘質シルト]土塊10%、炭化物±5mm2%、酸化鉄密
- 2 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト
[2.5Y2/1黒色粘質シルト]土塊2%、炭化物±10mm5%、酸化鉄密
- 3 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト、[2.5Y5/1黄灰色粘質シルト]土塊7%、酸化鉄密

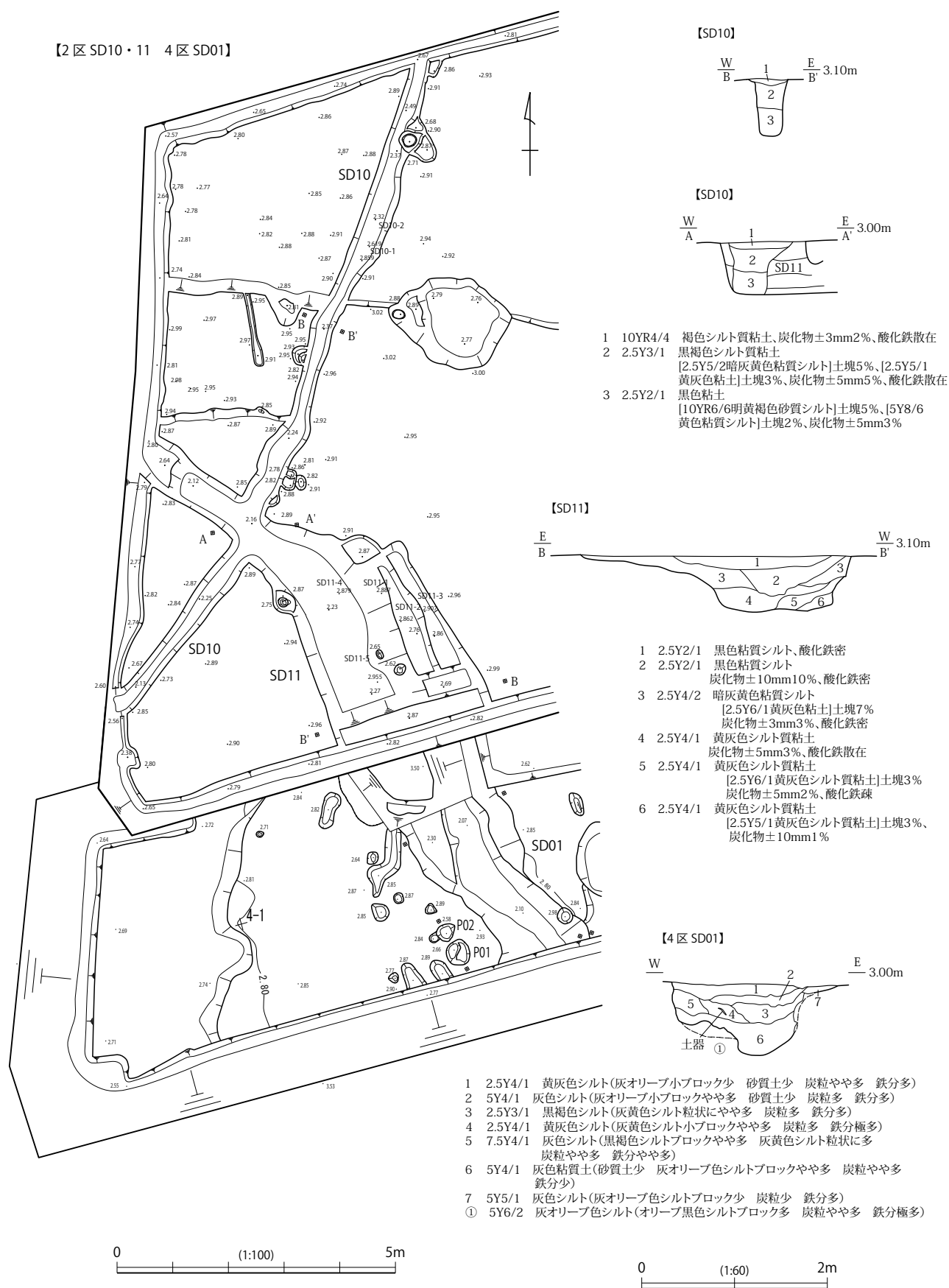
【4区 SK01】



- 1 5Y5/2 灰オリーブ色シルト
(黒褐色シルトブロック多、炭粒やや少、鉄分多)
- 2 5Y3/1 オリーブ黒色シルト
(灰オリーブ色シルトブロックやや多、炭粒少、鉄分やや多)
- 3 5Y3/1 オリーブ黒色シルト
(粘り有 灰オリーブ色シルトブロック多、炭粒やや多、鉄分多)
- ① 5Y6/2 灰オリーブ色シルト
(黒褐色シルトブロック多、炭粒やや多、鉄分極多)

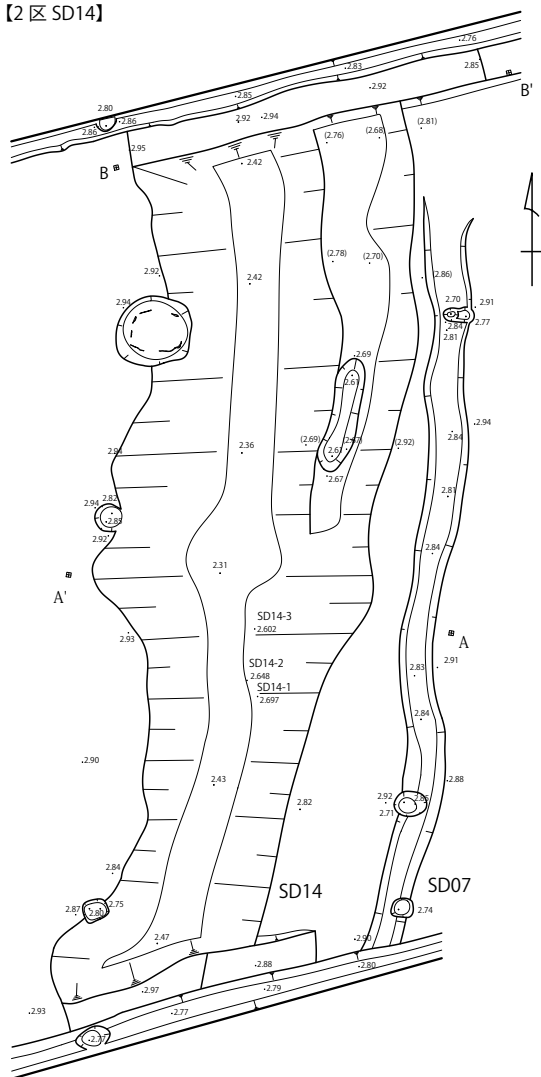
0 (1:60) 2m

第53図 2・4区井戸土坑実測図 (S=1/60)

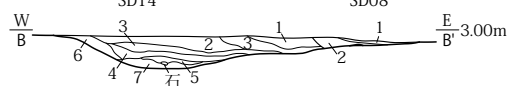


第54図 2区 SD10・11 4区 SD01 実測図 (S=1/60・1/100)

【2区SD14】



【北側】



< SD08 >

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、炭化物±5mm2%
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、炭化物±15mm3%、酸化鉄密

< SD14 >

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、炭化物±5mm2%
- 2 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト、炭化物±5mm5%、酸化鉄散在
- 3 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、[2.5Y3/2黒褐色粘質シルト]土塊2%、炭化物±5mm2%、酸化鉄密
- 4 5Y5/2 灰オリブ色砂質シルト、炭化物±5mm5%、酸化鉄散在
- 5 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、炭化物±3mm2%、酸化鉄密
- 6 2.5Y5/1 黄灰色シルト質粘土、[2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土]土塊1%、炭化物±10mm2%、酸化鉄密
- 7 2.5Y3/2 黒褐色シルト質粘土、[2.5Y6/1黄灰色シルト質粘土]土塊3%、炭化物±10mm5%、酸化鉄散在

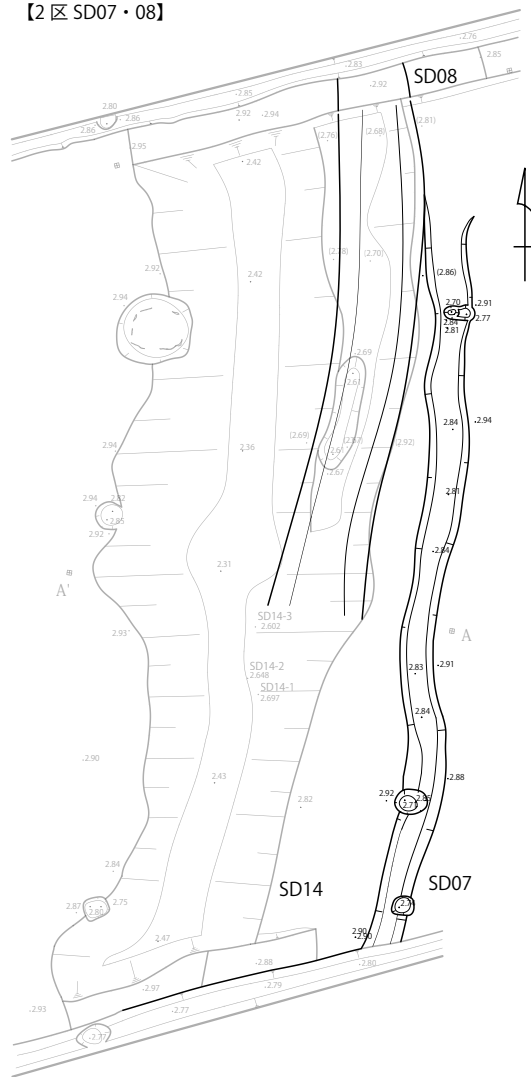
【SD03】



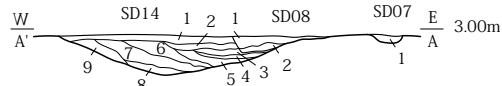
< SD03 >

- 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土、[2.5Y3/2黒褐色シルト質粘土]土塊10%、酸化鉄密
- 2 2.5Y6/1 黄灰色砂質粘土、[2.5Y5/1黄灰色粘土]土塊5%、酸化鉄密
- 3 2.5Y2/1 黒色粘土、[2.5Y4/1黄灰色粘土]土塊15%、[2.5Y3/1黒褐色粘土]土塊3%、酸化鉄散在
- 4 2.5Y4/1 黄灰色粘土、[2.5Y3/1黒褐色粘土]土塊5%、酸化鉄散在
- 5 2.5Y4/1 黄灰色粘土、[2.5Y3/1黒褐色粘土]土塊3%、酸化鉄散在

【2区SD07・08】



【中央畦】



< SD07 >

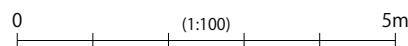
- 1 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト、炭化物±5mm1%、酸化鉄散在

< SD08 >

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト、炭化物±5mm2%、酸化鉄散在
- 2 10YR5/1 褐灰色砂質シルト、炭化物±5mm3%、酸化鉄密

< SD14 >

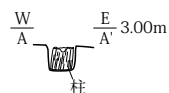
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、炭化物±5mm5%、酸化鉄散在
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト、炭化物±15mm3%、酸化鉄密
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄色砂、炭化物±10mm2%、酸化鉄密
- 4 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト、[2.5Y6/1黄灰色砂質シルト]土塊2%、炭化物±5mm3%、酸化鉄密
- 5 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト、炭化物±5mm5%、酸化鉄散在
- 6 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、[2.5Y3/2黒褐色粘質シルト]土塊2%、炭化物±5mm2%、酸化鉄密
- 7 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、炭化物±3mm2%、酸化鉄密
- 8 2.5Y5/1 黄灰色シルト質粘土、[2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土]土塊1%、炭化物±10mm2%、酸化鉄密
- 9 2.5Y5/1 シルト質粘土、[2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土]土塊3%、炭化物±5mm2%、酸化鉄密



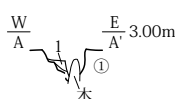
第55図 2区SD14・07・08・03実測図 (S=1/60・1/100)

第3節 2・4区検出遺構

【2区 P31】

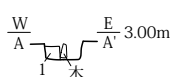


【2区 P69】



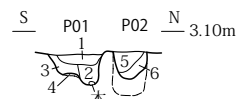
- 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土、炭化物±2mm1%、酸化鉄疎
① 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト、酸化鉄密

【2区 P71】



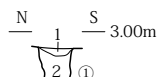
- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質シルト、[2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト]土塊3% 酸化鉄散在

【4区 P01・02】



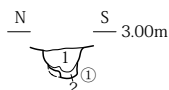
- 1 2.5Y3/1 黒褐色粘質土(砂少し含)
2 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 (暗灰黄色土ブロック2cm大少し含)
3 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 (黒褐色土ブロック3cm大少し含)
4 2.5Y6/2 地山:灰黄色粘質シルト
5 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土(炭化物若干含む)
6 2.5Y5/2 暗灰黄色土(灰黄色土ブロック含む)

【4区 P04】



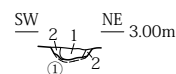
- 1 5Y4/1 灰色シルト (オリーブ灰色シルト小ブロック少 炭粒やや多 鉄分少)
2 2.5Y3/1 オリーブ黒色シルト (灰オリーブ色シルトブロック少 炭粒少 鉄分少)
① 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト (オリーブ黒色シルトブロック多 炭粒やや多 鉄分極多)

【4区 P05】

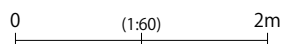


- 1 2.5Y3/1 オリーブ黒色シルト (灰オリーブ色シルトブロックやや多 炭粒少 鉄分やや多)
2 2.5Y5/2 灰オリーブ色シルト (オリーブ黒色シルトブロックやや多 炭粒微 鉄分少)
① 4区 P04共通

【4区 P09】



- 1 5Y3/1 オリーブ黒色シルト (灰オリーブ色シルト小ブロックやや多 炭粒やや多 鉄分少)
2 5Y5/2 灰オリーブ色シルト (オリーブ黒色シルトブロックやや多 炭粒少 鉄分多)
① 4区 P04共通



第 56 図 2・4区ピット・小穴実測図 (S=1/60)

第4節 出土遺物

a 土器

土器の年代観については、弥生時代から古墳時代にかかる土器について西念・南新保編年（楠1996）を参考とし、古墳時代須恵器は陶邑田辺編年、奈良・平安時代の土器については、田嶋明人氏の北陸古代土器編年（田嶋1988、2013）を参照している。

1区 SE01（第65図）

78は須恵器坏H蓋。焼歪みが大きく、片口のようにになっている。内面には黒色有機物が5cm方の範囲に広がり、その周縁が厚くなっている。漆ではない。口縁の一端に人為的な1.5cm長の打ち欠けがあり、黒色有機物はこの欠け部分に痕跡を残していないので、使用後の欠けとみられる。79は須恵器提瓶口縁。2条1組の沈線間に縦位のカキメ。78、79ともに井戸枠内最下層から出土し、78はⅠ₂期（7世紀前半）、79はⅠ～Ⅱ期（6～7世紀）とみられる。80は須恵器有台塼。高台貼り付け時の粘土接合部がきれいに消されず、底面の回転糸切り痕を残す。上層から出土し、Ⅵ₂～₃期（10世紀前葉～中葉）とみられ、井戸廃絶の年代と考えられる。（歌代）

1区 SK01（第72図）

184は内黒土師器塼で高台部を欠損する。口縁端部がわずかに肥厚する。185は土師器鍋。口縁のみで内面段状になっている。186は須恵瓶類。底部は回転糸切りがある。（伊藤）

1区 SK02（第73図）

187は須恵器坏蓋。口縁の垂下部は小さく痕跡程度で、鈕がない可能性が高い。188は須恵器坏蓋。鈕のない可能性高い。天井部内面に墨痕あり、転用硯だが使用度は低い。187、188ともにⅥ₂期（10世紀前葉）。189は須恵器盤。底部と体部の境が曖昧。190は須恵器有台塼。底面は糸切りと思われるが、最終調整は高台をつける際のナデとみられる。189、190は187、188とほぼ同時期と考えられる。191は内黒土師器有台塼。底面はきれいなナデ。外面赤彩。192は土師器甕。被熱によりもろい。193は土師器長胴甕。194は土師器長胴甕。口縁端部直下まで煤。195は須恵器瓶類。ラッパ状に広がる口縁に端部は小さく突出して面を持つ。肩が張った体部は細長く直線的で口径とさほど変わらない大きな底部となる。自然釉が全面にある。196須恵器双耳瓶。大きな耳で体部上半をほぼ占める。耳には2つの孔を開けている。外面に厚い自然釉がかかっている。197は須恵器鉢。口縁端部は左右に広がりつつ上に面を持つ。頸部は直立。198は須恵器坏もしくは塼の小破片。口縁部に重ね焼きの痕がみられる。199は土師器長胴甕。体部上半のタタキからロクロナデに変わる位置の破片である。本遺構出土遺物は、全体を通してⅥ₂期（10世紀前葉）の様相がみられる。（歌代）

1区 SK08（第65図）

73は土師器甕。短く外反する口縁部で緩やかにまがる頸部である。外面はタタキ成形ののち下からハケメでナデ上げている。内面は外面からのタタキを手で受け止めているようで、指頭圧痕があるほか、板ナデで平滑にしている。口縁部はハケメで形を整え、不足分を粘土継ぎ足しにより口縁端部を作る。外面に煤があるほか、被熱により器壁が剥落している。74は土師器甕。外面のハケメは細かく、内面は強い指ナデ。75は布留甕を意識した甕。図面では一見有段口縁となっているが、実際はそうでない。口縁端部の肥厚はない。肩部近くの外面はヨコ位のハケメで、以下にそれ以前に施された縦位

のハケメがある。内面のヘラケズリはそれほど顕著でなく、軽い状態。外面に煤、内面にコゲがある。76は「く」の字口縁の鉢。内外面に粘土積み上げ痕を残す部分もあり、全体的にナデ仕上げ。頸部の締まりがなく、底部は丸みを帯びている。77は高坏脚部。脚部はやや膨らみを持ちつつ裾にむかって開く端部に至る。外面は斜め方向のヘラミガキ、坏部接合部と脚裾部のみヨコのヘラミガキがみられる。内面は内から外に向かうハケメの後ナデを施す。(伊藤)

1区 SD01 下層 (第57～63図)

1は土師器直口壺。底面をヘラケズリで平らに調整し、やや縦長の球形の体部。体部内面は強い板ナデによりケズリのような砂粒の動きがある。外面は、ハケメの後ヘラケズリだがナデも多用している。口縁端部は小さな面を持ち、幅5mm前後の工具で刻み目を入れている。2は土師器壺。体部外面はタタキの後、縦方向のヘラミガキを粗く施すことで平滑にしている。内面はナデにより成形されて仕上げされている。頸部に絞り痕。3は有段気味口縁の壺。底面はヘラケズリで上げ底状。体部下半はハケメ及び外面にヘラミガキ。それより上位は主にタタキ成形によっており、その後ハケメやナデを施すが、タタキの痕跡を多く残している。4は小型有段甕。擬凹線を意識しているようで、口縁の端面をハケ工具で調整後ヨコナデを施す。外面に煤。5は鉢。底部はケズリや指によるナデにより成形され、体部及び内面はハケメ調整。6は鉢と思われるが下にさらに続く可能性もあり確定できない。底部は丸く作った後、周囲に粘土を足して平底にしている。

7は土師器壺。短い「く」の字の口縁と、ほぼ球形の体部から円盤状の底部。底部はヘラケズリによって上げ底気味となっている。体部中位よりやや下で粘土紐の接合が観察できる。体部内面はほとんどナデ調整、外面はハケメの後粗いヘラミガキ。口縁内外面ともハケメ後ヘラミガキ。口縁端部の仕上げのヘラミガキは粗い。8は直口壺。やや内湾気味の口縁端部に丸底球形の体部。内面に指頭圧痕や頸部に絞り痕、外面はヘラミガキ。外面のヘラミガキは縦位を基本とし、口縁内面はそれ以外に横方向のヘラミガキも多用されている。9は土師器直口壺。しまった頸部から内湾しすぼまり気味の口縁となり、口唇部にヘラによる沈線が4～5本描かれている。丁寧な調整で焼成もよく、端正な作りである。東海系か。10は有段口縁壺だが段の屈曲は緩やかである。底部はやや上げ底となり、一見穿孔されたかのような破損の穴がある。内面は板ナデが見られ、調整度合いによりケズリに近いところもある。外面は縦位のハケメを密に施し、その後ヘラミガキを粗く施す。口縁屈曲より上段はハケメで成形調整し、内面はきれいなナデ。口縁屈曲部下段はハケメとナデから調整され、上段よりも粗い。頸部外面には明確な屈曲を作り出そうとして工具を押し当てた痕跡がある。11は甕。体部内面は強い横方向の指ナデがり、頸部に指頭圧痕が目立つ。体部から口縁部にかけてハケメが施され、頸部のみ整形によるヨコナデがある。口縁部内面もハケメで、これにより調整と整形を兼ねているのである。12は壺底部である。底部から体部にかかる部分に明瞭な粘土積み上げ痕が内面にある。主に内面は板ナデ及びナデによって仕上げられ、外面はハケメやその工具を強く押し当てるような調整。最終的にはヘラミガキを粗く施し、平滑にする意図がうかがえる。

13は壺。やや縦長の体部から「ハ」の字に開く口縁で、頸部にヨコ方向のヘラミガキを施すため、見る方向によっては有段気味となる。外面はハケメ後ヘラミガキ、底部はヘラケズリすることで若干の上げ底に仕上げられている。口縁端部に小さな面を作り、4mm幅の工具で平均3mm間隔に刺突する。14は壺底部。底部近くはヘラケズリにより、不要部分を除去した成形。体部にかかる部分をヘラミガキというよりも工具を押し当てるような幅広のヘラミガキとなっている。体部との接合は明瞭に粘土積み上げ痕を残し、外面はハケメ。内面は総じてナデと板ナデで仕上げている。15は二重口縁壺。体部内面は指による強いナデを中心に向くように引き上げ、直立する頸部に続く。口縁の屈曲部で「く」

字の擬口縁を作り、この段に粘土を継ぎ足して二重口縁としている。口縁部はナデ仕上げと思われるが、剥落しており不明。16は有段口縁を意識して作られた壺。内外面とも指によるナデにより整形し、最終調整としている。このため、有段部分は不明確で緩いつくりとなっている。17は有段口縁壺で、直立する口縁外面に擬凹線がある。内面には口唇部とそれより下位に指オサエがみられ、端部を外反させている。18は二重口縁壺。頸部以下が熱を受けているようで、器壁があられている。特に内面の剥落が著しい。口縁部の屈曲に対応する内面には段が見られず、頸部も直に立ち上がらないなど、有段口縁的である。口縁端部には浅い沈線をめぐらす。19は「く」字の壺。口縁端部は小さく面を持ち、外反気味のラッパ状に開く。ハケメの後ヘラミガキだが、口縁部のミガキは入念。20は高坏。大きく開く坏部上半は内外面ヘラミガキだが、坏下半の脚との接合付近は小さなケズリを加えることで整形しており、最終調整を行っていない。21は脚付鉢。鉢の受け部を作った後に脚部を作ったようで、きれいに作った口縁に比べ、脚裾は工具のアタリや粘土の溜まりが見られるなど対照的な作りとなっている。

22は直口壺。底部はヘラケズリによって仕上げられ土器を置いても不安定になっている。やや下膨れの体部。内面の下半には指ナデ、中位から上には板ナデ。外面はハケメ後ヘラミガキ。口縁端部には面があり、幅5mm前後の工具による刺突がめぐる。頸部は横方向の強いヨコナデにより、小さな有段状となっている。23は有段口縁甕。口縁端部内面に外反させるため指オサエがある。外面煤。24は甕。球状の体部に屈曲度の大きな開く口縁部。体部内外面ともハケメだが外面が粗くそれぞれのハケ原体が異なる。25は壺。外面及び口縁内面はハケメ。口縁外面は一部はけが及ぶが基本的にナデ仕上げ。そのためか輪積み粘土紐痕が見える。26は甕。外面は粗いハケメ、また外面には煤が厚く覆っている。27は高坏。坏部の摩滅が著しい。脚部内面には横方向のケズリが施され、ナデによる仕上げ。外面はヘラミガキ。円孔の四方透かし。28は赤彩高坏の脚部、内面には指オサエやハケメを残す。29は壺。ヘラケズリで底面を削り出し、やや縦長球形の体部。内面体部下半は板ナデ、上半は指によるナデとなっている。外面はハケメの後粗いヘラミガキ。頸部は整形の後ヨコナデを施し体部との境を明確にする。口縁端部には小さな面があり、幅5mm程度の工具による刺突が見られる。

30はタタキ成形の甕。外面のタタキは口縁まで及んでおり、その後ナデやハケメにより口縁を成形。31は甕、口縁内面はハケ調整。外面に煤。32はタタキ成形の甕。外面タタキで内面ヘラケズリ。外面タタキは頸部の屈曲まで及んでいる。33は甕。体部外面はケズリを基本とし、部分的にハケメが見える。内面はハケメで、頸下部がヘラ様の工具でなでつけている。34は壺。やや下膨れ気味の体部にヘラケズリによる円盤状の底部。体部内面は板ナデの工具が強くあたったところがケズリのようにになっている。外面はハケメ後ヘラミガキだが部分的にハケメを残す。外面に煤が付着しており、幅4～7mmの煤のない帯が交差するように認められ、籠目であろう。この籠目が頸部近くまで及んでいることから、体部全体を包むような構造である。35は甕。外面をタタキ成形、内面は下半にヘラケズリ、上半を板ナデ様。36は甕。体部内面にはハケメがあり、指オサエも残す。外面体部下半はヘラケズリ、上半がハケメ。激しく被熱したせいか、外面ばかりでなく、内面もあばた状となった剥落となっている。37は甕。外面は粗いタタキがあり、内面は板のような工具によりナデ。頸部内面に指オサエも顕著。外面煤で、器壁表面は被熱のために大きく剥落している。38は甕。内面は指ナデを多用した成形。外面はハケメで整形。口縁部はハケメを残すようにヨコナデ整形。

39は壺。大型品の底部である。内面には粘土積み上げ痕跡を残す。40は有段口縁壺で、口縁がわずかに内傾する。41は有段口縁の小甕、擬凹線としてのハケメの条線は粗い。体部のハケメは横方向の次に縦方向に施す。外面の煤は厚い。42は有段口縁甕、口縁端部を外に小さく突出する。擬凹線は

ない。43は甕。内面の体部下半にヘラケズリ上半にハケメ、外面は全面にハケメがある。ハケメは内外面とも口縁部まで及んでいるが、口縁成形にヨコナデにより消されている。44は甕。粗い作りで、ランダムなハケメ。45は器台脚部。装飾器台の可能性が高い。脚裾から3cm弱に突帯の剥がれた跡がある。2孔が対となった透かし孔が2方向にあるが、一カ所の透かし孔は埋まっているので、孔を開けた後突帯をつけたものである。46は甕。外面タタキ成形の後ハケメ、内面はハケメで、粘土紐痕残す。口縁端部は摘み上げたように小さく突出して外に面を作る。(伊藤)

1区SD01中層(第63～65図)

47は内湾する筒状口縁のある大型壺で山陰系。肩が張る体部で図面では直に体部が伸びているが、接点が小さくこのようなプロポジションかどうか不明。体部最大部分で明瞭な接合痕を残す。口縁部は体部と同程度の厚みがあり、指によるナデやヘラミガキを部分的におこなうなど、苦労しながら製作している様子がみてとれる。

48は有段状の口縁を持つ壺。口縁には粘土紐積み上げ痕跡を段の内側に部分的に残す。口縁部外面はハケメ調整で、ヘラケズリは一部分のみのイレギュラーな調整。49は壺底部。上げ底気味の底部はヘラミガキが施され、その大きさの割に大きな体部となりそう。内面はハケメがみられ、全面黒色を呈しており、黒色処理されているかもしれない。50は二重口縁壺。摩滅が顕著で調整は不明だが、頸内面に粘土接合痕が明瞭に見える。51は壺。口縁を失っている。底面はヘラケズリで整形し、底部内外面ハケメ調整。体部内面中位から上は指ナデが顕著で、上半には粘土紐痕跡を残す。頸部内面に円周にめぐるハケメがあり、口縁接合後の調整。52は壺底部。底面はヘラケズリが施され、部分的に潰れた高台風となっている。53は甕。内面は強い板ナデによるナデが部分的にあり、ケズリのように見える。外面は細かなハケメで、斜めに工具の当たった跡がある。口唇部外面に粘土紐積み上げ痕跡がある。54は甕。口縁接合状況により、頸部に小さく明瞭な段があるが有段口縁でない。体部上半内面には指頭圧痕がみられ、図よりも実際は頸近くまでヘラケズリが及んでいる。55は甕。内面には部分的に粘土紐積み上げ痕跡を残す。外面に煤。56は鉢で外全体に煤が付着。内面にも有機物がコゲ状となっている。丁寧なナデ調整だが、口縁端部が粘土紐痕跡残し、端部処理が未調整など調整のアンバランスさがある。57は高坏。脚内面にはケズリのようなナデが中心から裾に向かって施されている。58は高坏。太い杯部との接合から裾広がりにより脚部が伸びる。三方透かし。59は高坏。脚内面には絞り目とともに横方向のケズリのようなハケメ。杯部にはハケメが残っている。赤彩と思われる。60は鉢。口縁部は緩い屈曲で、背面に比べて外面の頸部屈曲は不明確。全面にヘラミガキが施され、外面赤彩。61は甕。外面に煤。厚ぼったい口縁端部。62は甕。内面はヘラケズリ、外面はハケメで、頸部にハケ工具があたった痕跡がある。外面に煤。

63は内黒土師器碗。内面黒色処理しヘラミガキ、外面口縁部がヨコナデ以外は摩滅のため不明。64は須恵器坏H蓋だが一般的な蓋とは器形・調整がやや異なる。口縁は直に立ち上がり低平な天井部。天井部全体に回転ヘラケズリが丁寧に施され、口縁との境に稜を思わせるような作りとなっている。ロクロ回転は時計方向。65は二重口縁壺だが、口縁の伸びがみられず、有段口縁的。66は直口壺口縁。口縁端部は内湾気味。67は山陰系を意識した有段口縁甕。段の突出は鈍い。有段状に作るために口縁内面に明瞭な窪みがめぐる。内面はヘラケズリ、外面はハケメ。体部上半から頸部にかけてハケメ後ヨコナデ。68は須恵器坏蓋。焼成不良で、還元されておらず、赤みを呈する。TK43型式。69は須恵器坏蓋、TK209。天井部回転ヘラ切り後ナデで、ヘラ切痕跡を消している。70は須恵器坏蓋。焼歪みあり、ロクロ回転は時計回り。71は須恵器坏身、TK43型式。天井部に厚く自然釉かかる。72は須恵器坏H、TK209型式。底部回転ヘラケズリ。精良な胎土で、しっとりとした質感である。(伊藤)

1区SD01上層(第70・71図)

124は礎でTK43(6世紀前半)か。125は須恵器坏蓋。精良な胎土。TK209(7世紀前半)。126は須恵器坏H身。底部回転ヘラ切り後軽く平らになるようにケズリなどの調整を加えている。TK43か。127は須恵器坏H身。体部高3cm弱と低い。全体に焼きひずんでいる。ロクロは時計周り回転。TK209。128は須恵器坏H身。外底面ヘラ切りの痕跡が残る。TK209か。129は須恵器坏H身。底部が落ち込むような器形。ヘラ切りの痕跡をきれいにナデ消している。130は須恵器坏A。131は須恵器坏A。132は須恵器坏A。130～132はⅣ期(8世紀後半)に該当する。133は須恵器坏A。134は須恵器坏A、体部外面凹凸顕著。135は須恵器坏A。133～135はⅤ₁期(9世紀前葉)に該当する。136は須恵器盤。焼成により上げ底となっている。内面は使用により摩耗している。Ⅴ期(9世紀前葉～中葉)である。137は須恵器盤。焼成が悪く灰白を呈す。丸底風の底部を呈し、Ⅴ₁期(9世紀前葉)とみられる。138は須恵器有台盤。口縁端部はわずかに外反する。Ⅲ～Ⅳ期(8世紀前葉～9世紀初頭)に該当する。139は須恵器坏B。Ⅳ₂～Ⅴ期(8世紀末～9世紀中頃)とみられる。140は須恵器坏B。高台は貧弱で自重により潰れている。Ⅳ期(8世紀中葉～9世紀初頭)に該当する。141は須恵器坏B。142は須恵器有台碗。底部付近をヘラケズリ後、高台貼り付け。体部はロクロ回転による凹凸が顕著。143は須恵器有台碗。144は須恵器坏B。外に踏ん張る高台から、Ⅲ～Ⅳ期(8世紀～9世紀初頭)と推測される。145は須恵器鉢で、くの字に屈曲して口縁となる。口唇部はわずかに外反するようだが、焼成不良により軟質で不明。鉄鉢模倣を意図した鉢かと思われる。146は須恵器坏蓋。外面に墨書だが判読不能。器壁が厚く、壺蓋かもしれない。147は須恵器坏B、深い坏部。底外面に墨書だが判読不能。148は須恵器坏Aで、体部外面に墨書だが判読不能。149は須恵器坏Aで還元不良。底面に墨書(「加」か)。150須恵器坏身。底部に墨書だが判読不能。151は須恵器壺蓋。天井部にはつまみがあったようで、剥落している。壺口縁に入る垂下部は直線的で2.5cm以上あり、かなり長い。蓋内面に自然釉がかかっている。壺と別々に焼かれたものである。152は須恵器球胴壺蓋。端正な宝珠の鈕。Ⅳ₁～Ⅱ期(8世紀中葉～9世紀初頭)に該当する。153は須恵器瓶類の口縁部。頸部と口縁端部は接合しない。頸部には2.5cm間隔で3本の沈線がある。肩部には厚く降灰がみられる。平瓶の可能性がある。154は須恵器瓶類底部。底部内面までガラス質の自然釉。底部外面に付着物をはがした痕跡。155は須恵器瓶類の底部。底部は厚さ4mm強と薄く、体部には沈線がある。156は須恵器短頸壺で、体部下半回転ヘラケズリ。内面まで降灰及ばない。Ⅰ～Ⅱ期(6世紀～7世紀)とみられる。157は須恵器鉢である。口縁下2.5cmに突帯があり、口縁内面には小さな凹みが回る。Ⅳ₂期(8世紀末～9世紀初頭)に該当する。158は須恵器広口瓶口縁。159は須恵器甕もしくは壺口縁。小さく垂下する突出がある。実測図よりもう少し傾きが大きくなる可能性がある。160は須恵器甕口縁。口縁部はロクロによる凹凸顕著。158～160は口縁部のみで分かりにくいがⅤ期以降(9世紀前葉以降)とおもわれる。161は土師器碗で口縁端部が小さく外に屈曲する。底部糸切りと思われるが不明。Ⅶ₁期(10世紀後葉)とみられる。162は土師器碗。摩滅著しいが、非常に薄い作り。161と同じ時期か。163は土師器有台碗で摩滅が著しい。高台が剥離した部分に糸切りのような痕跡が見える。164は土師器有台碗で、摩滅が著しい。165は内黒土師器有台碗。166は内黒土師器有台碗で摩滅著しく、調整は不明。167は内黒土師器有台碗だが、焼成が不十分で褐色気味の色調。高台に煤の痕跡があり、高台の内面を灯明皿に使用した可能性。168は土師器有台鉢。摩滅が著しい。Ⅶ₁期(10世紀後葉)に該当し、163～168は概ね同じ時期の遺物と思われる。169は土師器甕。外面に煤。170は土師器長胴甕口縁。実測図の傾きより寝るような口縁。171は土師質土鍾。孔径16mm、重量91.8gで、紐が擦れた痕跡はなく使用感は少ない。172は土師質土鍾。孔径10～13mmで、重量93.5g。孔周辺の紐ずれはなく、使用感少ない。173は

土師質土錘。孔径16mmで図の上部分の孔が棒を抜き取る際にできた突出が残っている。重量74.7 gで、使用感が少ない。174は土師質土錘。孔径16～20mm、97.4 gの重量がある大型品である。一方の孔端部が欠損しており、使用によるものか。(歌代)

1区SD02 (第72図)

175～178は手づくね成形による土師器質の土錘で、両端面は明確な面を持つ。175は重さ75.1 g、孔径15mmで太鼓形。176は重さ83.5 g、孔径12～15mmで、太鼓形。177は重さ78.6 g、孔径15～17mmで一方が紐ずれ摩滅。太鼓形。178は重さ90.5 g、孔径15mmで太鼓形。いずれも同じ規格で作られており、同形同大の土錘である。(伊藤)

1区SD03 (第72図)

179は須恵器坏A。外底面に墨書あり。「大」と実測されているが、実際は「文」か。(歌代)

1区ピット (第72図)

180は手づくね成形による土師質土錘。重さ3 gと軽い。口径4mm前後。181は土師器碗。遺存状況が悪く、もろい。182は土師器鍋口縁。小破片なので、口径不確定。183は加賀焼甕。口縁から外面にかけて釉がかかっている。184は内黒土師器碗。遺存状況がよい。185は土師器鍋。口縁内側には山型の凸帯とその両側に溝を作っている。186は須恵器瓶類底部。回転糸切り痕がある。(伊藤)

1区包含層ほか (第76・77・79・80・81図)

235は土師器壺。236は弥生土器甕、外面に煤。(伊藤)

237は須恵器坏Gの蓋。一部焼膨れがみられる。外面に降灰とともに窯体内のごみ等付着。Ⅰ₂期(7世紀前半)に該当する。238は土師器有台鉢の高台部分。239は須恵器坏蓋。240は須恵器坏蓋で内面に墨痕あり。転用硯である。239、240ともにⅥ₂期(10世紀前葉)に該当する。241は須恵器環状鈕の蓋で、金属器模倣製品であり、概ねⅥ期以降(10世紀以降)とみられる。胎土は精良。天井中心に小さく上につながる突出があり、宝珠の鈕がつく可能性もある。天井部内面に墨書があるが、判読不能。242は須恵器有台碗。Ⅵ₃期(10世紀中葉)とみられる。243は須恵器有台碗。底部は回転ヘラケズリ。244は須恵器厚底鉢で、外底面に直径約4mmの環状のものによる刺突があり、内底面は使用により摩耗している。245は須恵器貯蔵具用の焼台。246は土師器長胴甕口縁端部。247は土師器鉢と思われる。底面に糸切り痕跡がある。内面に有機物の焦げ状のものが付着。248は須恵器有台碗。底部は糸切り。内底面は焦げのようになっており、使用により摩耗し平滑になっている。高台内面にヘラ記号がある。249は須恵器有台碗。内底面は平滑、外底面には回転糸切り。高台内に墨痕あり。250は土師器長胴甕。口縁の受口が大きい。外面煤。251は土師器長胴甕。口縁下約2cmにロクロ回転の凹凸がみられる。252は土師器長胴甕。外面に煤。253は徳利のような須恵器瓶類。底部は回転ヘラ切り。底面に墨書があるが、判読できない。254は須恵器坏蓋で鈕がない。外面天井部の屈曲部に小さな段がある。外面に墨書があるが、判読不能。255は須恵器坏Hである。底部外面に厚く自然釉がかかっているが受部まで及んでいない。Ⅰ₂期(7世紀前半)に該当する。256は須恵器坏B。高台内に墨書「木」か。257は須恵器坏B。Ⅳ期(8世紀中葉～9世紀初頭)に該当する。258は須恵器坏B。底面に文字が墨書きされているが、判読できない。259は須恵器坏A。見込み部分に「益吉」が墨書されている。260は須恵器有台碗もしくは皿。高台内側に、高台貼り付け時についたと思われる、円周に連なった爪痕が見られる。内底面は使用による摩耗で平滑。Ⅵ₁期(9世紀後葉)とみられる。261は須恵器瓶類。口縁部端部を丸く収める。全面に自然釉がかかり、外面のそれが剥離しているので、調整等不明。262は須恵器鉢。口唇部は直で四角く作り、端部下16mmに11mm間隔で突帯が見られる。内面口縁下にカキメ。263は須恵器有台碗。底部は回転糸切り。内底面は平滑になっている。264は赤彩土師器碗もしくは皿。

底部は回転糸切り。265は須恵器坏蓋。Ⅳ期（8世紀中葉～9世紀初頭）に該当する。266は須恵器碗もしくは皿底部。底部は回転ヘラ切りが見られ、ヘラケズリが底部から体部にかけてみられる。内底面は平滑。267は土師器の小甕。底部は剥落している。全面に摩滅著しい。碗の可能性もある。268は内黒土師器碗で高台はつかない。外面にわずかに赤彩痕跡残す。調整は摩滅のため不明。Ⅵ₂₋₃期（10世紀前葉～中葉）に該当する。269は須恵器壺底部。底部は粘土巻き上げで、回転ヘラケズリを施す。内底面に厚く自然釉があり、外面にもそれが垂れた溜まりがある。Ⅰ₂期（7世紀前半）とみられる。270は中世の土師器皿で非ロクロ。外面には口縁部ナデによる稜がみられる。内面わずかに油煙痕あり。

271は須恵器盤。口唇部に自然釉。272は須恵器盤で口縁は外反気味。内面は使用により摩耗。271、272ともにⅣ～Ⅴ期（8世紀後半～9世紀中葉）か。273は須恵器坏A。274は須恵器坏A。ロクロによる凹凸が顕著。273、274はともにⅥ期（9世紀後葉～10世紀中葉）とみられる。275は須恵器杯B。276は坏B。高台内面を面取りしている。277は須恵器有台盤である。焼成甘く、黄灰色を呈する。278は須恵器蓋。端部は痕跡程度に小さく垂下する。無鈕の可能性もある。275、276、278はⅣ期（8世紀中葉～9世紀初頭）に該当する。279は須恵器坏B。Ⅳ₂～Ⅴ期（8世紀末～9世紀中頃）とみられる。280は須恵器坏蓋。高坏蓋の可能性もある。Ⅱ期もしくはⅢ期（7世紀末～8世紀前葉）とみられる。281は須恵器有台盤。Ⅲ～Ⅳ期（8世紀前葉～9世紀初頭）に該当する。282は須恵器坏B。283は須恵器有台碗。底面に静止糸切り痕。284は須恵器坏B。口縁端部がわずかに外反する。282、284はⅣ期（8世紀中葉～9世紀初頭）に該当する。285は須恵器坏B。筒状の体部。Ⅴ期（9世紀前葉～中葉）である。286は須恵器碗。粘土のこね方が悪いと2種の粘土が縞状に見える。高台の粘土は体部と違う粘土を使っており、黄灰色となっている。Ⅵ₁₋₂期（9世紀後葉～10世紀前葉）である。287は径の小さな高台がつく須恵器碗で、おそらく直線的な体部か。288は須恵器有台碗。289は須恵器坏B。高台内面がナデつけるために溝状にめぐる。Ⅲ期（8世紀前葉）に該当する。290は須恵器碗もしくは小型瓶類の高台部分。底面に回転糸切り痕。291は土師器碗もしくは皿で、底面が回転糸切り痕跡。292は土師器碗か。293は内黒土師器有台碗、石英が顕著である。外面は赤彩されている。294は内黒土師器碗。内面の摩滅が著しい。外面は赤彩されている。295は土師器有台碗。摩耗している。296は内黒土師器有台碗で摩滅著しい。外面は赤彩されている。297は土師器碗。底面は糸切り痕跡がかろうじて見える。298は土師器碗。底面は回転糸切り。299は内黒土師器有台碗。300は土師器有台碗。高台は外に張り気味。301は土師器有台碗。302は内黒土師器有台碗で内面は暗文様にみえる。303は黒色土師器碗で全面に黒色処理されている。高台内面にはカキメ様の条線が見られる。

304は須恵器有台碗。底面は回転糸切り痕、体部に回転ヘラケズリがある。高台内面に墨書があるが、判読できない。305は須恵器鉢だが、土師器のような作りをしている。体部外面は上下方向のハケメがあり、口縁端部は小さく緩く屈曲する。306は近江の緑釉の小片で碗の可能性が高い。胎土は須恵器質。10世紀以降とみられる。307は須恵器碗。底面は回転糸切りで、体部との境界を回転ヘラケズリで明確に作っている。308は土師器皿もしくは碗で底面に回転糸切り痕跡。309は土師器碗もしくは皿で底面回転糸切り痕がある。310は土師器皿で摩耗著しい。311は土師器碗もしくは皿。底部回転糸切り。内面は粘土合わせ部分で剥離。312は土師器皿、底面に回転糸切り痕跡。313は土師器皿、底面に回転糸切り痕跡。314は土師器碗。底部は回転糸切りで、柱状高台風の円盤状の底部を呈する。Ⅶ期（10世紀後葉～11世紀）。315は土師器鍋口縁か。内面にはカキメ様の深めの条線がある。316は土師器甕で、小甕か。317は土師器長胴甕。318は土師器長胴甕。摩耗している。319は土師器長胴甕で、全体的に摩滅が著しい。320は土師器長胴甕で外面に煤。321は土師器長胴甕。322は土師器長胴甕。外面頸部まで煤付着。316～322はⅥ期（9世紀後半～10世紀中葉）とみられる。323は須恵器瓶類の口縁。

口縁端部は上下に面を持つ。324は須恵器広口瓶口縁部。頸部に2cm間隔で沈線を巡らす。胎土に石英が目立つ。325は須恵器双耳瓶。底部は小さな段がある。326は須恵器小型瓶類底部で、底面に糸切り痕跡がある。体部外面に回転ヘラケズリ。厚い底部。器形からⅥ₃期（10世紀中葉）とおもわれる。327は須恵器瓶類底部。高台内側はきれいにナデが施され、製作痕跡は見られない。328は須恵器瓶類底部で明確に屈曲する肩部がある。直径と器高から平瓶の可能性が高い。329は須恵器瓶類で、小型長頸瓶と思われる。330は須恵器小型瓶類底部。底面は糸切り痕が見える。体部は回転ヘラケズリの後ナデ。Ⅵ₃期（10世紀中葉）に該当する。331は須恵器瓶類底部で、底面糸切り痕があることからⅥ期（9世紀後葉～10世紀中葉）と考えられる。内外面自然釉。332は土師器鉢。口縁端部は丸く小さく屈曲している。333は土師質土錘で、2.69 g。334は土師質土錘、1.6 gだが両端に使用時の欠損がある。335は須恵器焼台で焼成不良。（歌代）

2区 SE01（第74図）

201は須恵器坏A。底部外面に墨書「益吉」。202は須恵器坏A。焼成が甘い。203は須恵器坏A底部。底面に墨書だが判読不能。204は須恵器坏蓋。鈕がとれており、天井部に工具があたった跡がある。重ね焼き痕がみられる。Ⅵ₂期（10世紀前葉）に該当する。205は須恵器坏B。高台内面を硯として転用しているが、使用感はそこまで高くない。底部と体部の境が明瞭。Ⅳ₂～Ⅴ期（8世紀末～9世紀中頃）とみられる。206は須恵器盤。立ち上がりは緩い。208は土師器甕口縁小破片。非常にもろくなっている。Ⅰ期（6～7世紀）もしくは古墳時代前期～中期まで遡る可能性がある。本遺構出土遺物は、古い遺物も混じるが概ねⅥ₂期（10世紀前葉）の様相がみられる。（歌代）

2区 SK01（第66図）

89は壺口縁で、ゆがみがあり、もう少し口縁が小さく復元できるかもしれない。摩滅が顕著だが、内外面ハケメをかりうじて認めることができる。90は甕。摩滅が顕著で調整等不明。91は甕底部。外面はハケメ、内面は指による強いナデ。（伊藤）

2区 SK03（第74図）

200は須恵器坏蓋口縁端部の小片。（伊藤）

2区 SD03（第66図）

81は外面タタキ成形による台付甕と思われる。底部は外に踏ん張るような上げ底風になっており台状と思われ、指頭により整形されている。体部は外面にタタキがうっすらと認められ、ナデにより残されている。内面はヘラケズリが下から上方にほどこされ、頸部周囲に指オサエやハケメが残されている。外面に煤が付着し、体部下半を中心に被熱により剥落している部分がある。82は甕。口縁外面に粘土積み上げ痕を残し、不規則な段状となっているが、有段口縁とはあたらない。体部中位にハケ工具による刺突文がめぐる。83は甕。内外面全面にハケメが見られる。被熱著しく、器壁の剥落が見られる他、内面にコゲも付着する。84は甕。口縁端部の面には凹みを作る。体部に比べて長い口縁部となって、ややバランスが悪い。外面に煤付着。85は甕底部。あまり開かない体部で、幅広い底部底面には指頭圧痕。底部外面は横方向のハケメ、上位では斜め方向、内面には指によるナデが多用されている。外面煤付着し、内面も被熱により薄く剥落しているところもある。86は灰釉陶器碗。土層の混乱による混入品である。（伊藤）

2区 SD04（第66図）

87は広口壺。大型品である。頸部に刺突のある凸帯。口縁端部は幅広い面があり、ハケ工具で約5mm間隔に刺突した後、3条の沈線がこれを切るように施す。口唇部上面には口縁端部の刺突文と同じ工具でナナメ方向の刺突をめぐらす。88は球状土錘。孔径5mm、重さ41.5 g。（伊藤）

2区 SD07 (第74図)

209は須恵器高坏脚。裾部を欠損する。内面に降灰があり焼成時に逆さ置きであることがわかる。(伊藤)

2区 SD08 (第74図)

210は須恵器平瓶、胎土は精良で、砂粒少ない。Ⅰ₂期(7世紀前半)である。211は須恵器有蓋高坏蓋。鈕は平たくやや凹むボタン状。外面の稜は痕跡程度の沈線。天井部ヘラケズリはこの沈線近くまで来ており、細かな単位で回転ヘラケズリを施す。Ⅱ期(7世紀後半～8世紀初頭)。212は蓋であるが具体的にはどのような器形につくものか不明。213は須恵器坏H。ロクロ回転は反時計回り。210～213はⅠ期(6世紀～7世紀前半)に該当する。214は須恵器坏B。体部中央に沈線がある。高台内側に墨書あるが判読不能。215は須恵器坏B。高台内側に墨書あるが判読不能。216は須恵器坏Bで体部を意識的に打ち欠いている。高台内側に墨痕があり、転用碗の可能性はある。Ⅴ期(9世紀前葉～中葉)に該当する。217は須恵器坏B。底面には高台貼り付け前についた板目の圧痕が見える。能美産である。Ⅲ～Ⅳ期(8世紀前葉～9世紀初頭)とみられる。218は須恵器坏B。漆パレットに転用しており、内面前面に漆が付着するが、口縁部周辺が特に熱く漆の溜まりになっている。外面にも転々と漆が付着している。219は須恵器坏。220は須恵器坏A。Ⅳ期(8世紀後半～9世紀初頭)に該当する。221は須恵器坏A。口縁端部は内側に緩い面を持つ。底面に板目の圧痕が少しある。Ⅴ期(9世紀前葉～中葉)に該当する。222は須恵器坏A。Ⅴ期(9世紀前葉～中葉)である。223は須恵器坏A。丸底風の底部を呈する。内面に自然釉。Ⅳ₂～Ⅴ期(8世紀後半～9世紀前葉)に該当する。224は須恵器坏蓋。口縁端部の折り返しは消失し直線的。Ⅵ₂期(10世紀前葉)とみられる。225は須恵器坏蓋。天井部に自然釉目立つ。Ⅳ期(8世紀中葉～9世紀初頭)に該当する。226は須恵器坏B。内外面は使用により摩耗。Ⅴ期(9世紀前葉～中葉)である。227は須恵器盤。内側の底部と体部との境が明瞭になっている。Ⅳ～Ⅴ期(8世紀後半～9世紀中葉)か。228は須恵器大甕口縁部、2本組の沈線と間には縄文を二段で施す。229は須恵器焼台で、両面に墨と油が混ざったものの痕跡があり、内面にさらに墨書あるが、判読不能。230は土師器長胴甕。口縁端部は小さく外方に突出する。231は須恵器鉢で外面カキメ調整、把手は指オサエ成形で一部工具によりナデつけられている。232は土師器把手。全体に摩滅著しい。233は土師器把手で、内側の器壁を残す。ハケメ及び指オサエ成形。234は土師器把手で、内面黒色処理。(歌代)

2区 SD10 (第67図)

96は有段擬凹線甕。口縁はほぼ直立する。内外面摩滅著しいが、体部内面に砂粒の動きがあり、ヘラケズリされていることがわかる。口縁内面には指頭圧痕が約1cm強間隔で見られる。97は有段口縁甕。口縁部はやや内傾する。口縁内面の屈曲部分近くに指オサエが見える。98は有段口縁甕。肩部外面に板状工具による刺突文がある。内面は頸部付近がヘラケズリだが、以下は指頭による強いナデで一見ケズリのように見える。有段口縁の稜は鋭い。山陰系。99は有段口縁甕。わずかに外反気味の口縁である。全体的に摩滅が著しい。100は甕底部。摩滅が著しいが、砂粒の動きから、底面を含め全面にヘラケズリが施されていることがわかる。101は器台受部。口縁部は有段状でやや外反する。内外綿の摩滅が著しいが、わずかに外面ヘラミガキが認められる。102は高坏。杯部下半は浅い碗状を呈し、上半が大きく外方に開く。(伊藤)

2区 SD11 (第67図)

92は壺。弛緩した肩部。93は甕。「く」の字の口縁に上下に面を持つ幅広の端部があり、端面に擬凹線。内面はハケのち粗いヘラミガキ、外面はハケメで体部上半に刺突文。弥生中期末。94は甕底部で強い

熱を受けている。弥生中期末。95は壺底部、外面にはヘラケズリのところがある。内面では底部から体部にかかる部分でハケメを多用し、それ以下は指オサエ。(伊藤)

2区SD14(第68図)

103は有段口縁擬凹線壺。口縁端は小さく外反する。全体的に摩滅が激しい。104は有段口縁壺口縁で、口唇部が強く外反する。口縁部に擬凹線はない。105は有段擬凹線甕、口縁端部は外反し、粗い擬凹線。口縁内面の指頭圧痕はない。106は有段口縁甕だが、擬凹線の痕跡は不明瞭である。107は有段口縁甕、擬凹線はない。108は口縁部が短い有段状に立ち上がる甕。摩滅が著しいが、体部内面の砂が動いていることからヘラケズリしていることがわかる。109は有段口縁擬凹線甕。口縁は外傾気味で、内面も口縁端部を傾斜させている。指頭圧痕はない。110は有段口縁擬凹線甕で、口縁はほぼ直立する。111は有段口縁甕で外面に煤。口縁の擬凹線は不明確。112は有段口縁甕、口縁は外反し、また口唇部内面に指による浅い窪みがめぐる。113は有段口縁鉢。口縁に擬凹線がかすかに確認できる。口縁内外面および外面ヘラミガキだが、体部内面にヘラケズリが施される部分もある。114は鉢で、指オサエにより受口気味の口縁をつくる。外面に煤。115は壺底部。底面に種子圧痕が十数カ所、長円形と円形の2種がある。種子の同定はしていない。

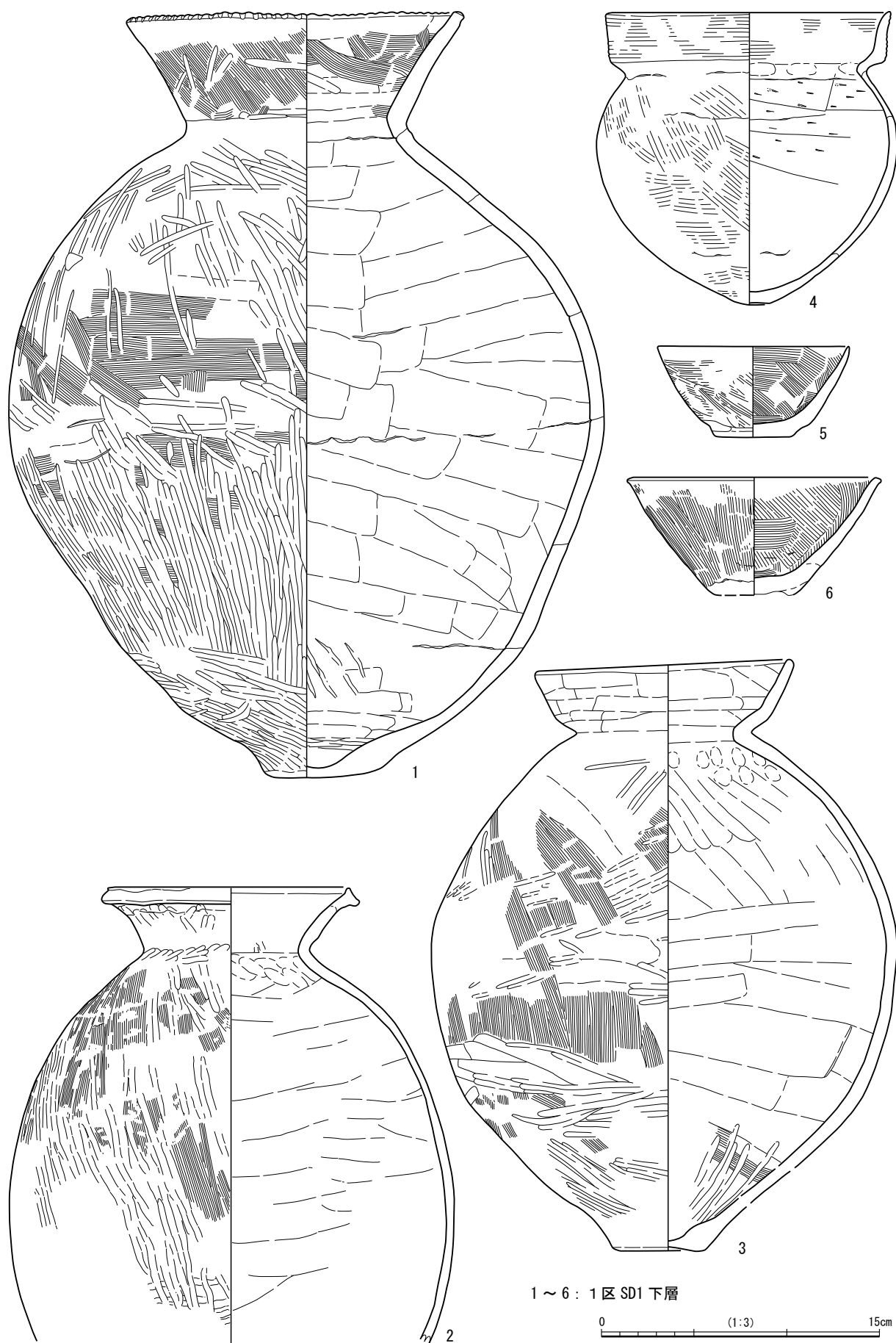
116は台杯鉢、口唇部内側に小さく面を持つ。脚部中心に黒斑。117は有段口縁台付鉢。外面は橙色の粘土が表面になるように、薄く塗っているようにみえる。118は装飾器台。垂下部分の湾曲が強い。無文。10カ所の涙滴形透しが上下交互に配されていたと推定される。119は装飾器台。垂下部は内向きで擬凹線がある。方向を違える涙滴形透かしを配する。おそらく透かし10カ所に復原できる。120は高坏。浅い湾状の坏部下半と、大きく外反する上半である。121は高坏。浅い椀状の坏下部におおきく開く上部、外反気味の口縁。122は高坏脚で、三方透かし、一見蓋のような器形。(伊藤)

2区包含層他(第78図)

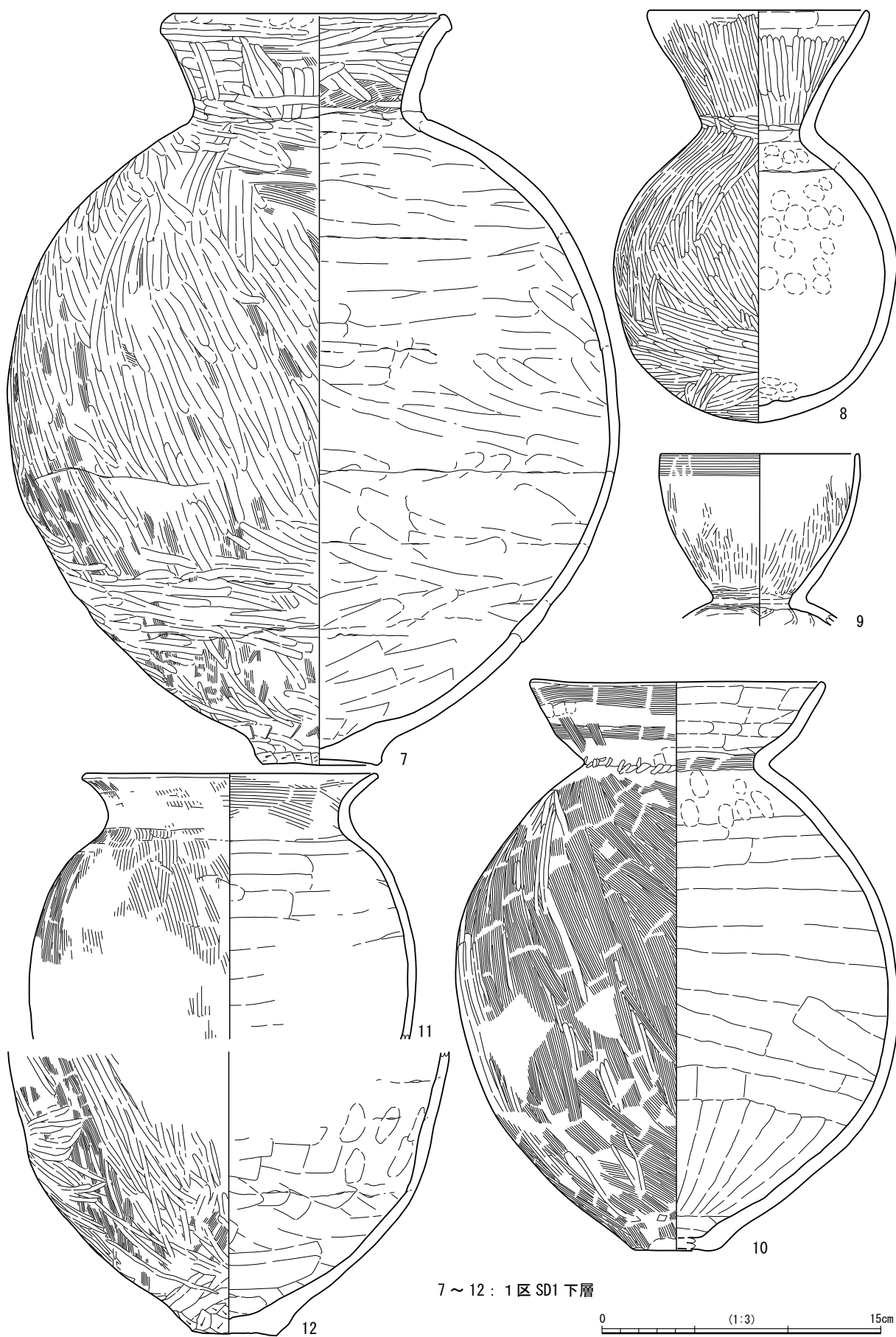
336は須恵器盤。底面に墨書「茂」か。337は須恵器盤底部。底部に墨書されているが、判読不能。338は須恵器坏A底部。底面に墨書があるが判読不能。339は土師器有台坏で須恵器の器形にとってもよく似ている。焼成が悪く、軟質。おおよそⅤ期(9世紀前葉～中葉)と推測される。340は赤彩土師器壺。底面には糸切り痕があり、底部から体部下半の外面に回転ヘラケズリで成形している。Ⅳ₁期(8世紀中葉)に該当する。341は須恵器厚底鉢。内面はよく使い込まれ平滑になっている。底部内面から体部にかけてカキメが施されているが、痕跡程度に観察できる。342は須恵器小型壺である。肩の張りは弱くなだらかである。底部はヘラ切り後の調整が加えられている。Ⅰ₂期(7世紀前半)に該当する。343は須恵質土錘で重さ16.5g。孔径は約5mmで、孔の両端内側に面取りされている。344は土師質土錘で、重さ12.4g。孔径6～7mmで、孔両端が使用により摩滅・欠損している。345は須恵器焼台。焼成具合により、上げ底となっている。底部以外に灰がかぶっている。346は須恵器有蓋高坏。長脚2段3方透かしで、上段は切込みのみ。坏部はかなり焼歪んでいる。透かし間及び下段透かし端部に2条の沈線。脚部内面に自然釉が厚くかかっており、焼成は逆位に置かれたものである。347は縄文土器。外面に凹線で沈線文と扇形文。縄文後期後半(井口式後半)。348は須恵器甕口縁。349は土師器皿。赤彩され、底部回転糸切り。摩耗している。350は土師器皿、摩滅著しい。(歌代)

令和2年度出土遺物(第113～114図)

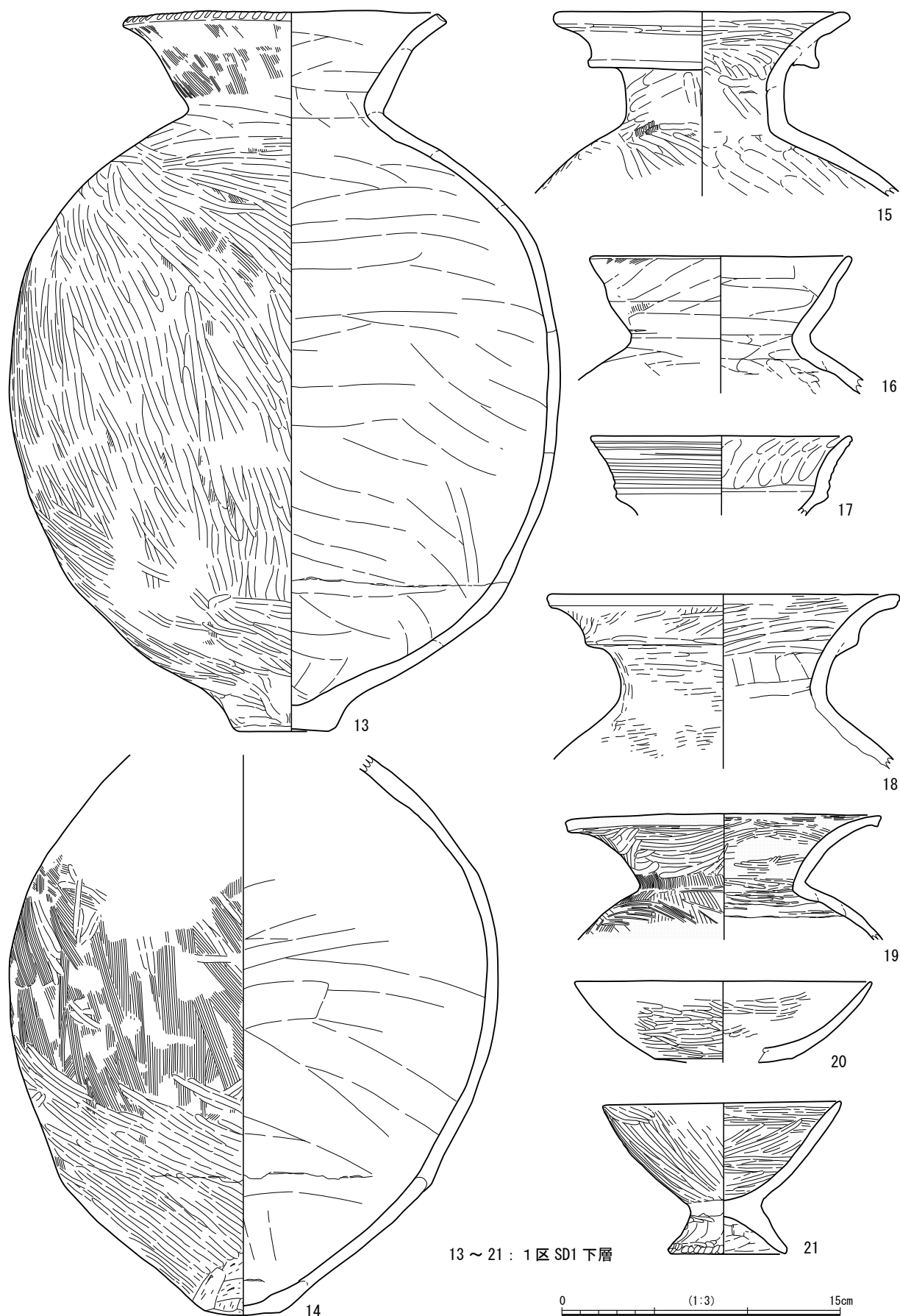
484～494、504は4区SK01出土。484は坏蓋で、硯に転用されており、内面に製作時の直線のヘラ記号がある。坏として使用後、硯に転用し、井戸(SK01)への廃棄に際し「泉」の墨書が記されたと考えられる。486底面にヘラ記号、487はⅢ期。488は底面に墨があるが文字判別が難しい。489は土師器鍋、内面には有機物の焦げ付き痕跡。490～493は甕。490は体部上半から頸部にかけてハケ



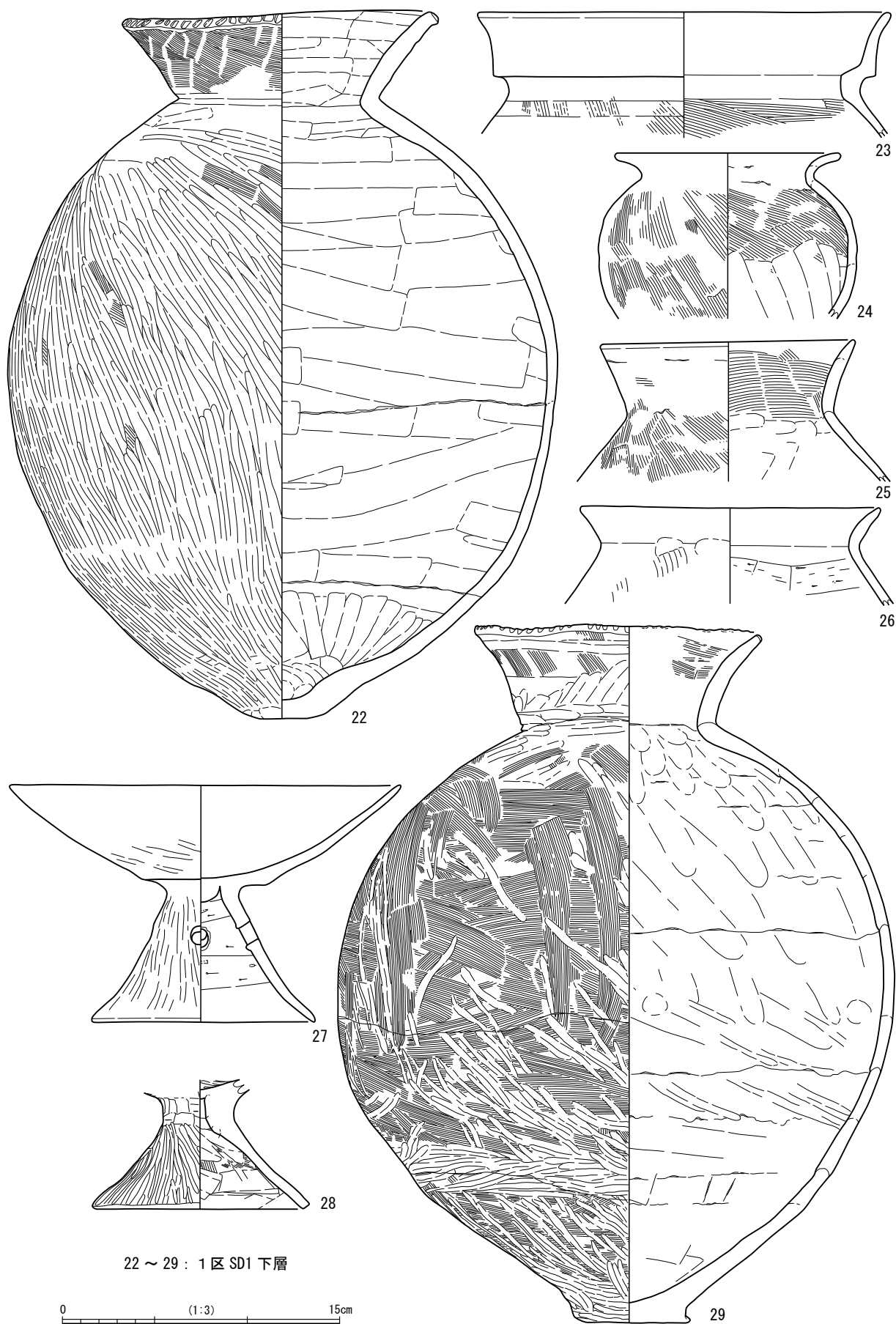
第57図 遺物実測図1 (S=1/3)



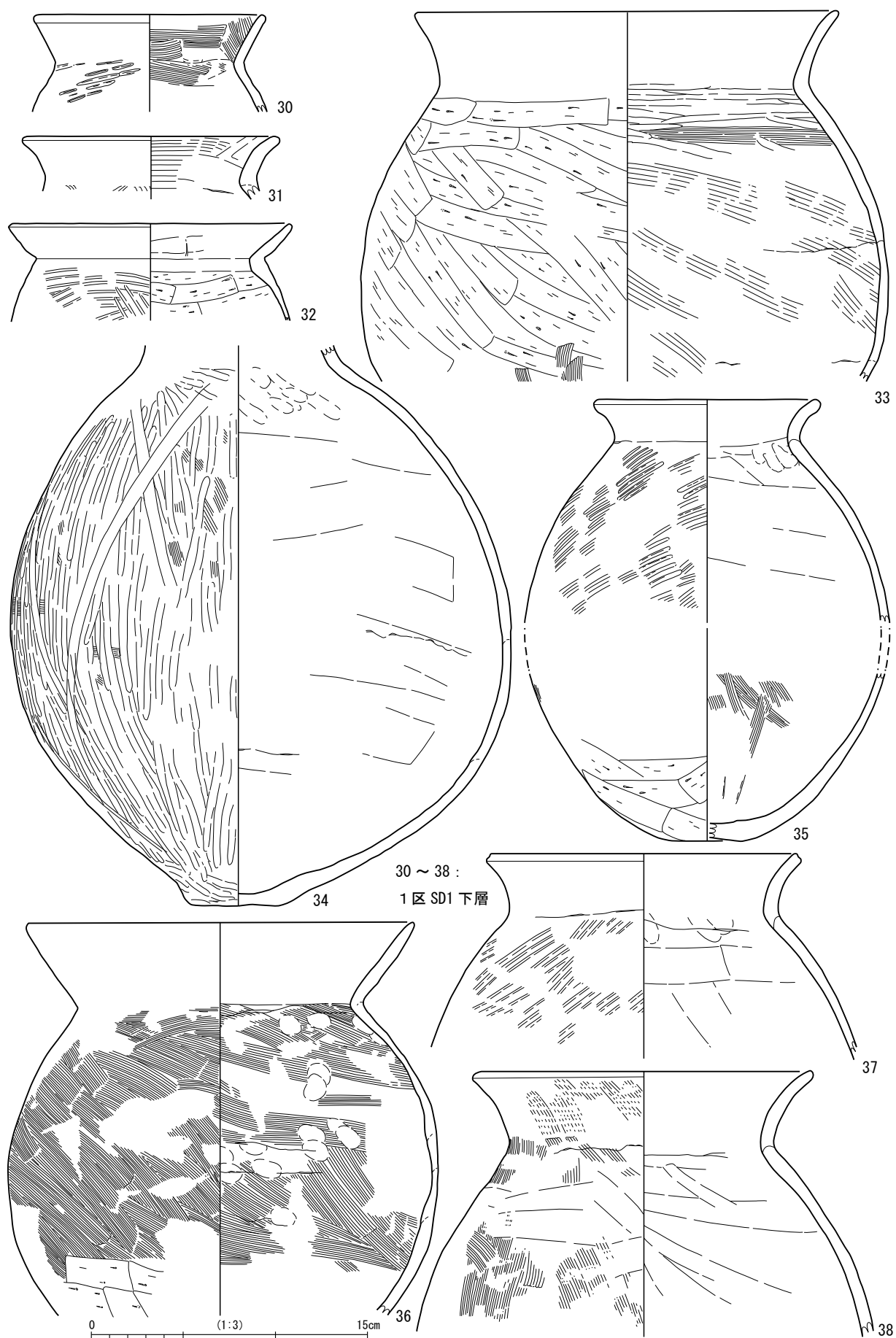
第58図 遺物実測図2 (S=1/3)



第59図 遺物実測図3 (S=1/3)



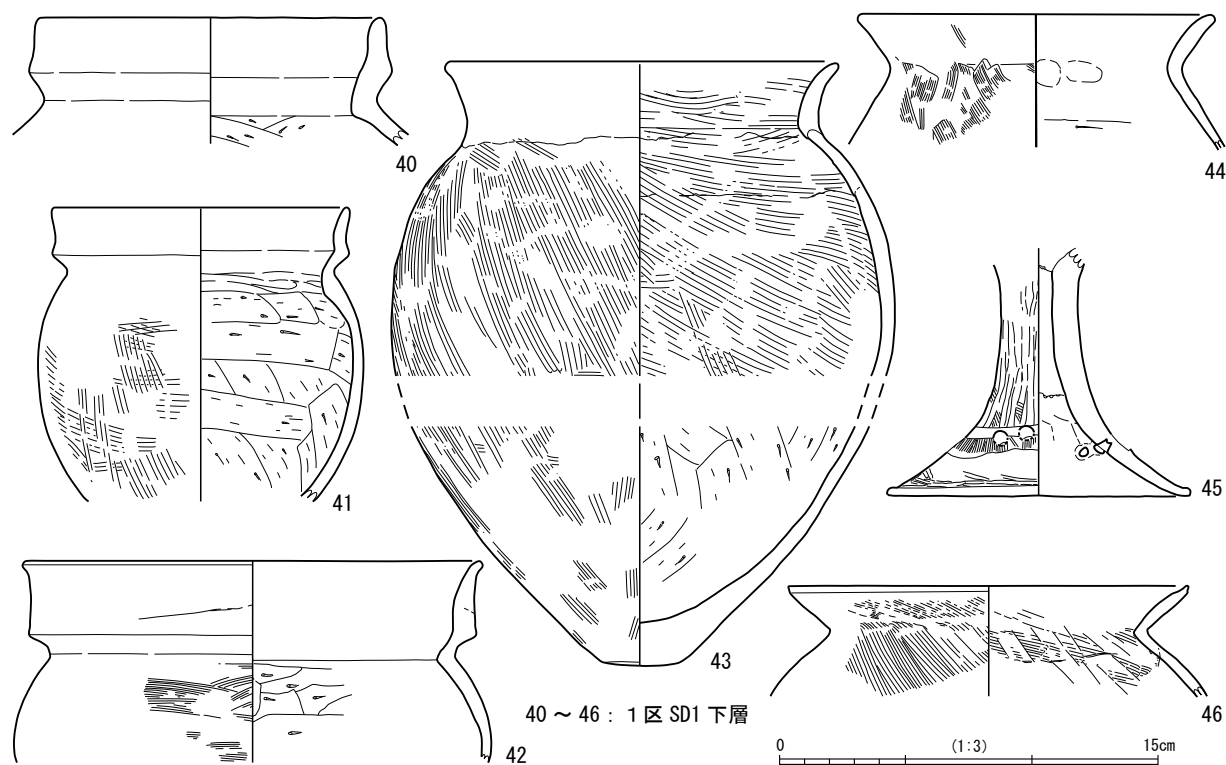
第60図 遺物実測図4 (S=1/3)



第61図 遺物実測図5 (S=1/3)

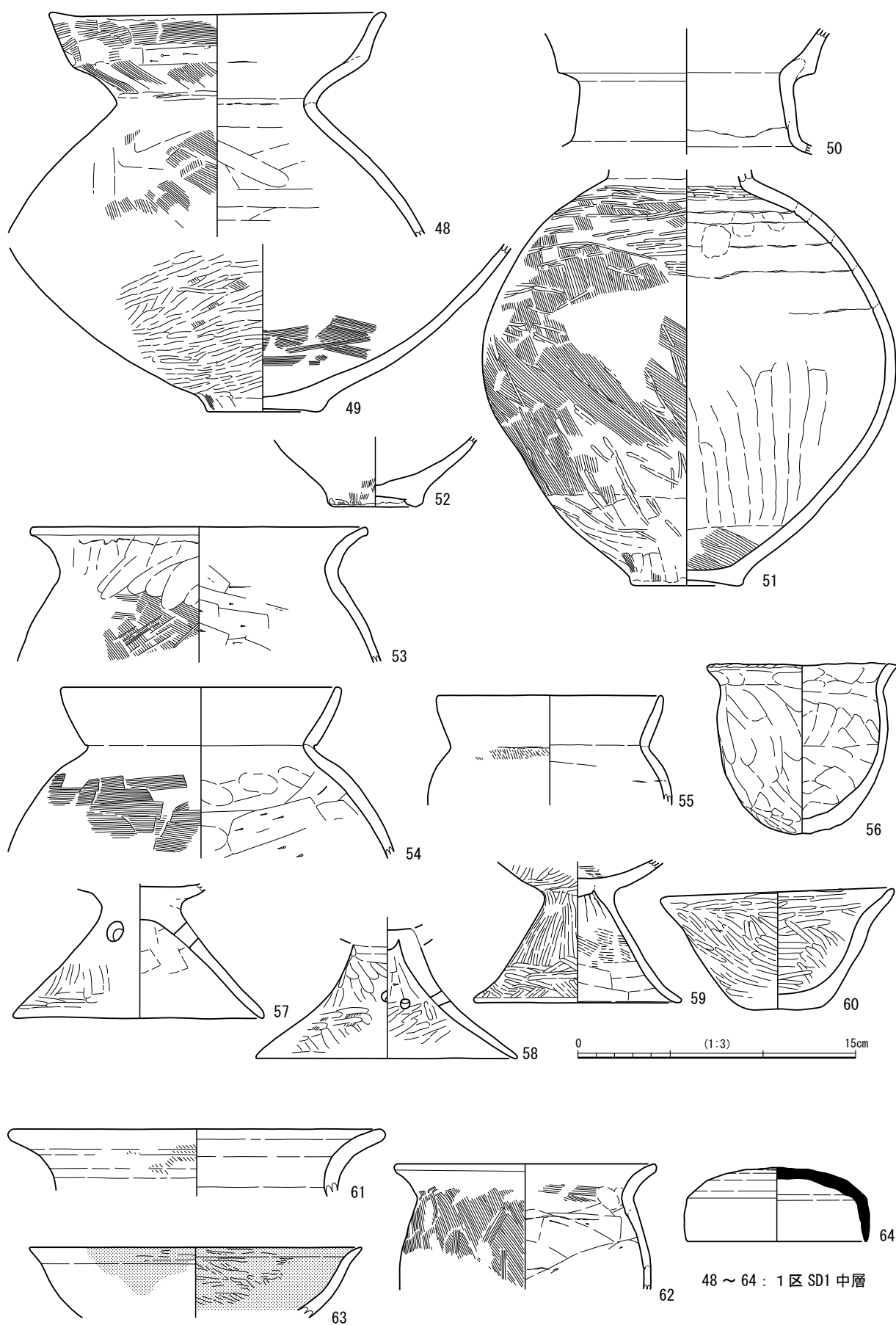


第 62 図 遺物実測図 6 (S=1/3)

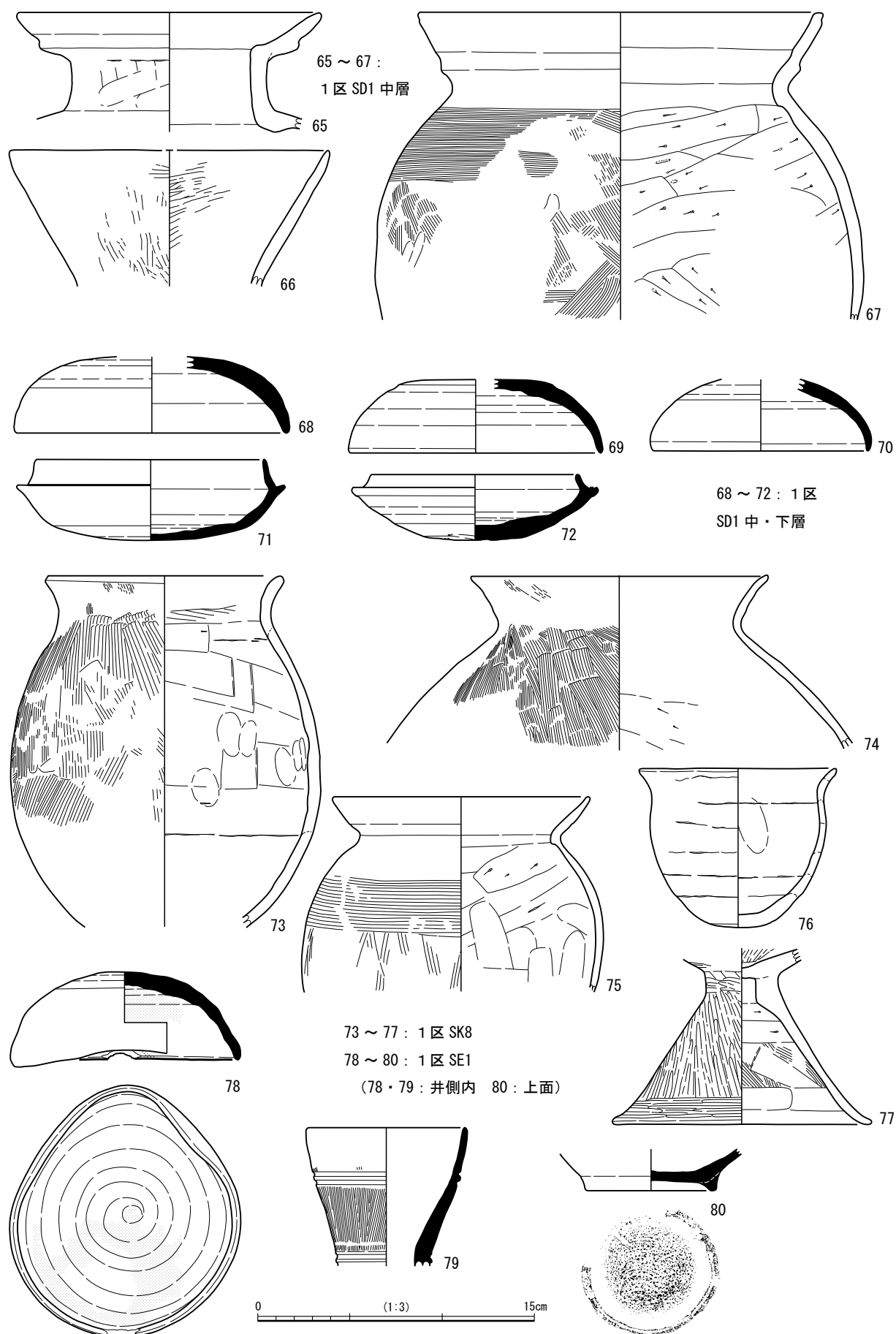


47 : 1区 SD1 中層

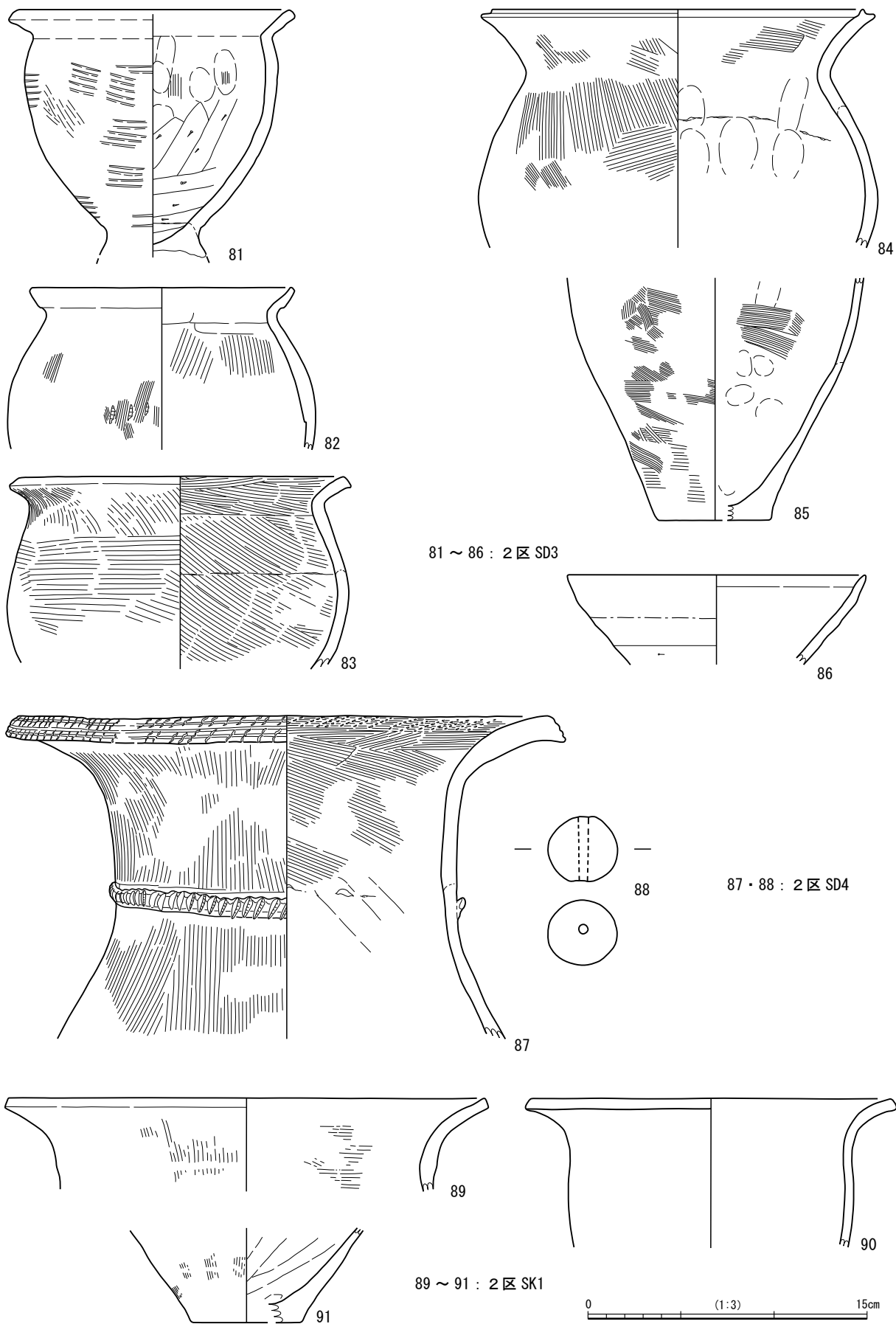
第63図 遺物実測図7 (S=1/3)



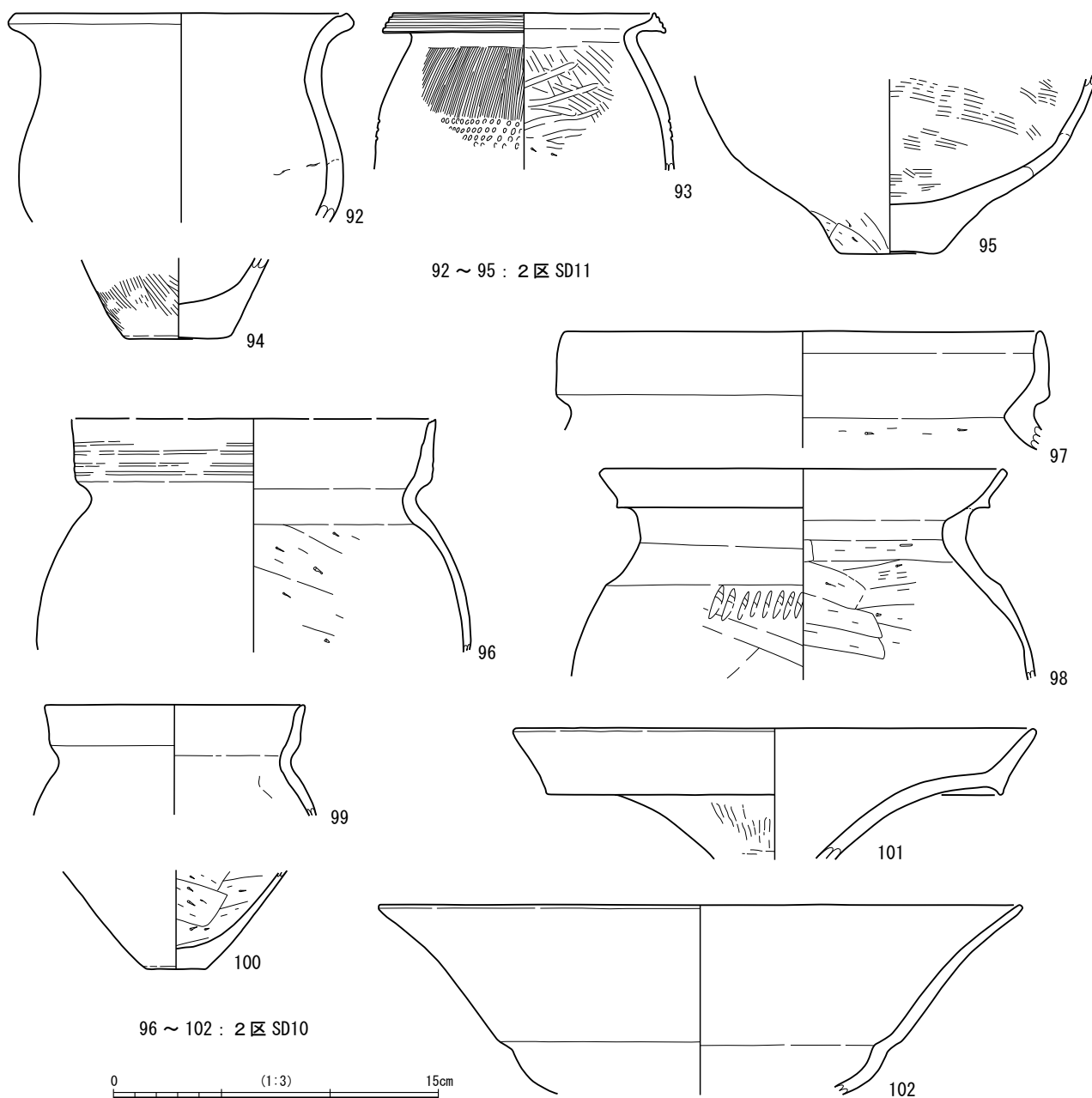
第64図 遺物実測図8 (S=1/3)



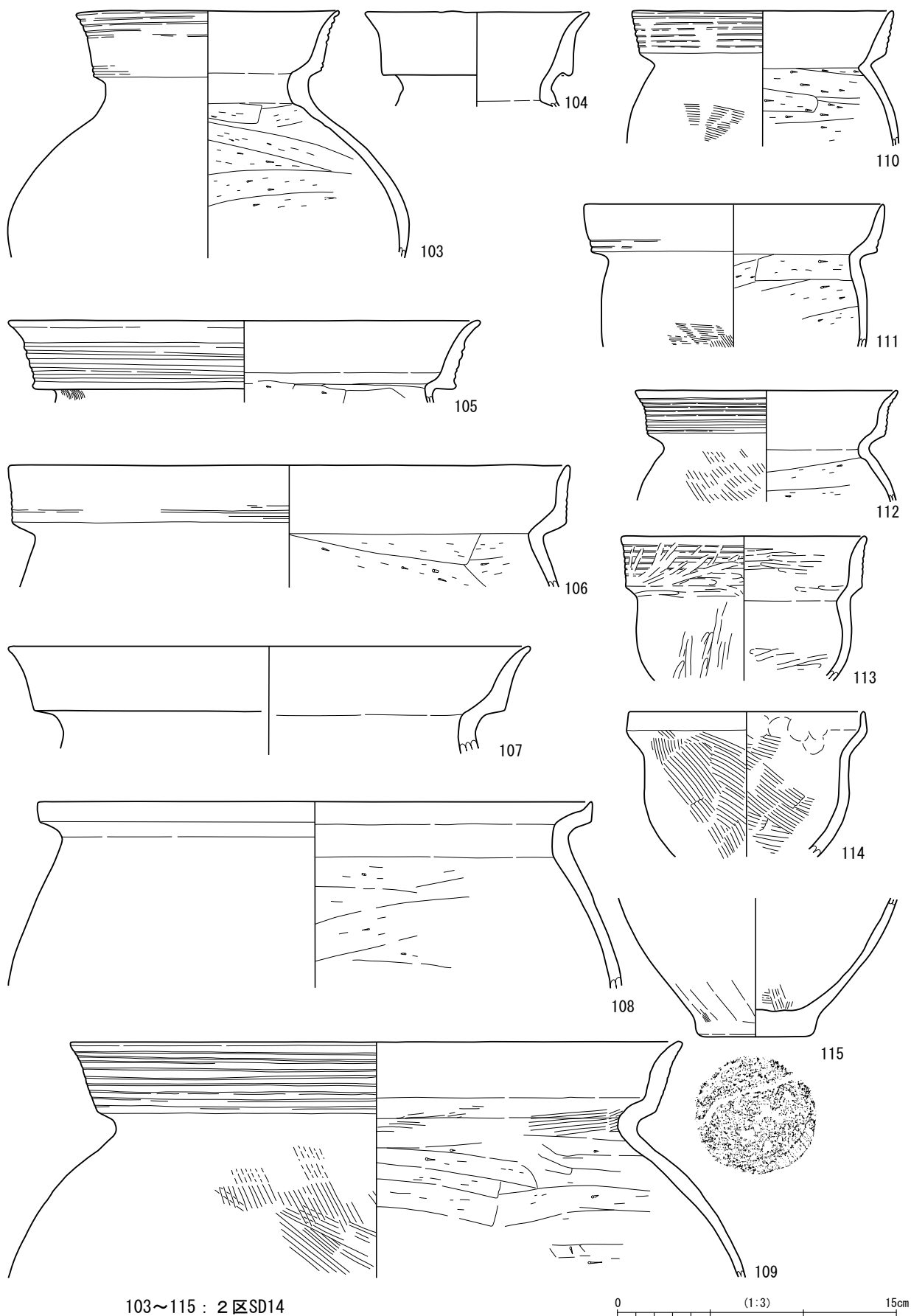
第65図 遺物実測図9 (S=1/3)



第66図 遺物実測図10 (S=1/3)

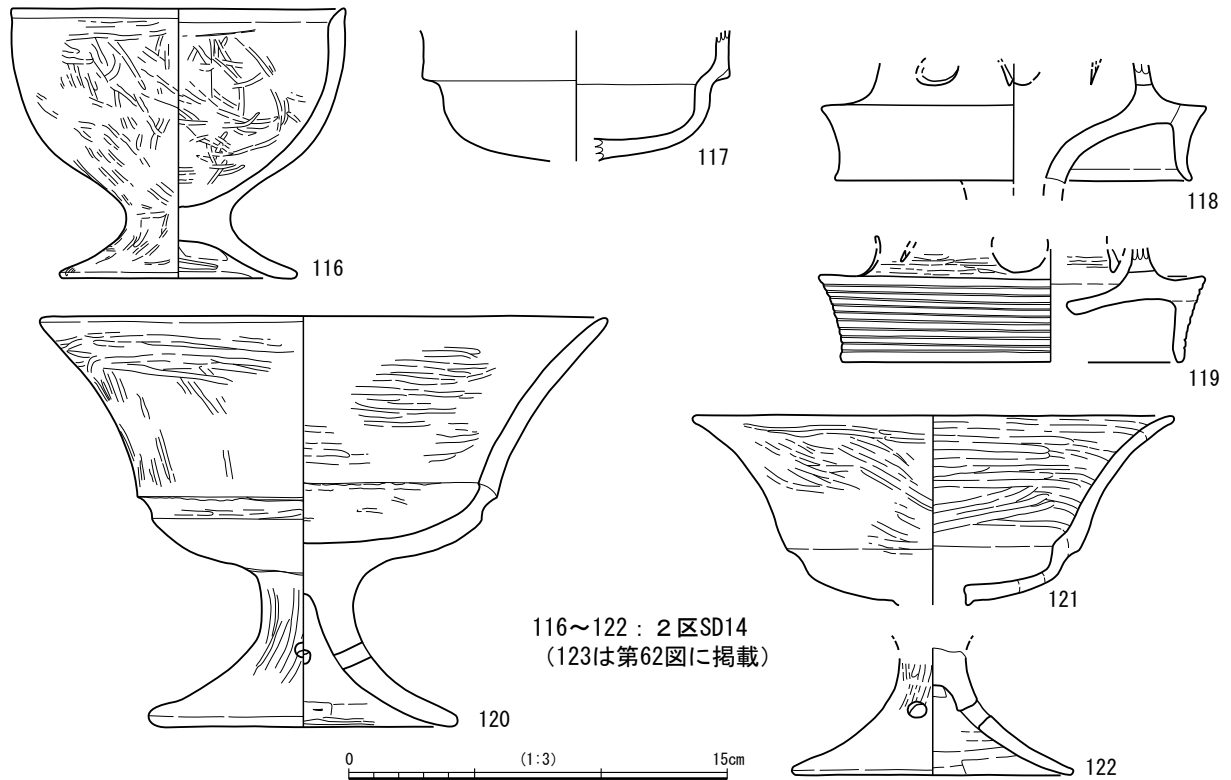


第67図 遺物実測図11 (S=1/3)

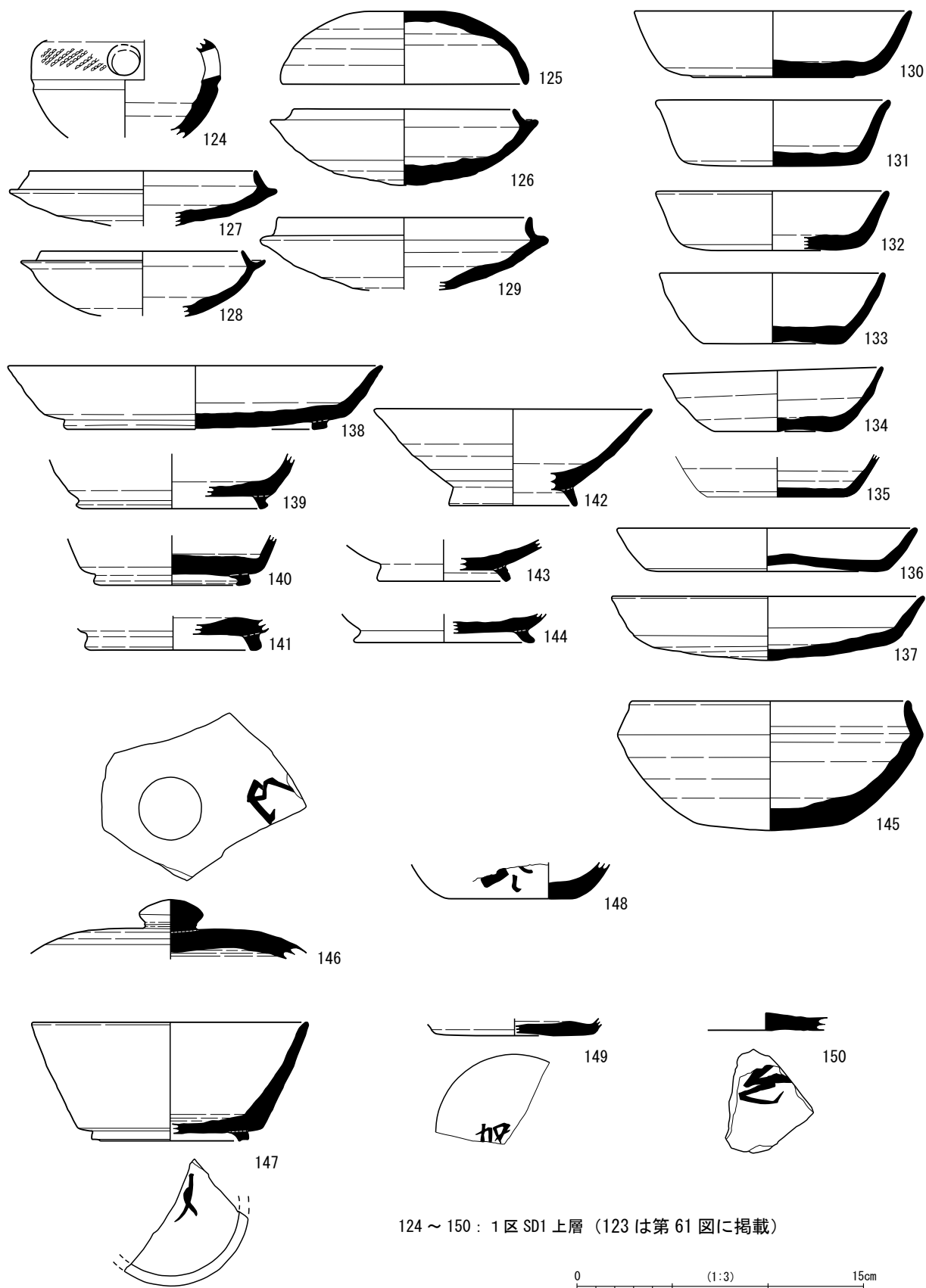


103~115 : 2区SD14

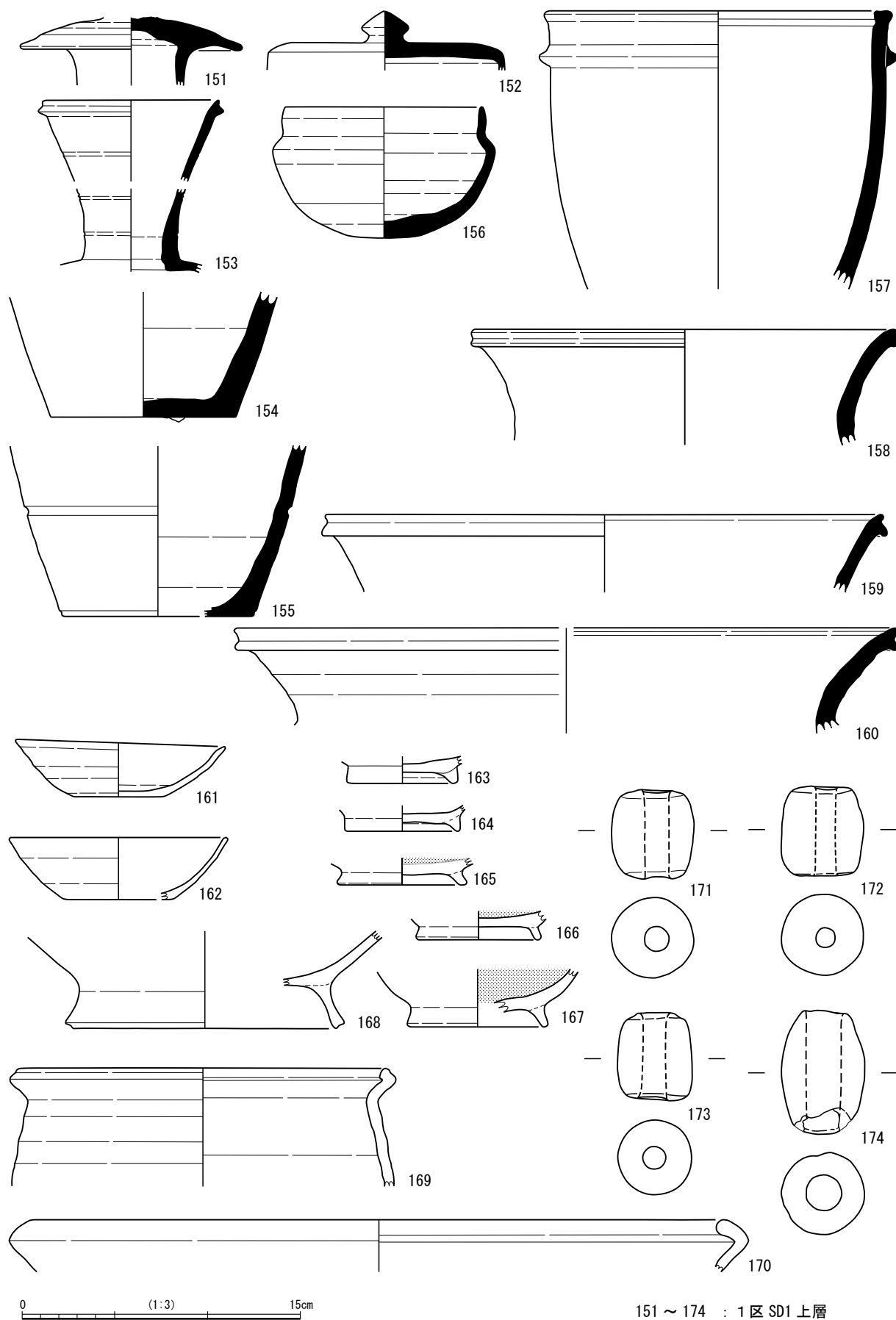
第68図 遺物実測図12 (S=1/3)



第69図 遺物実測図13 (S=1/3)

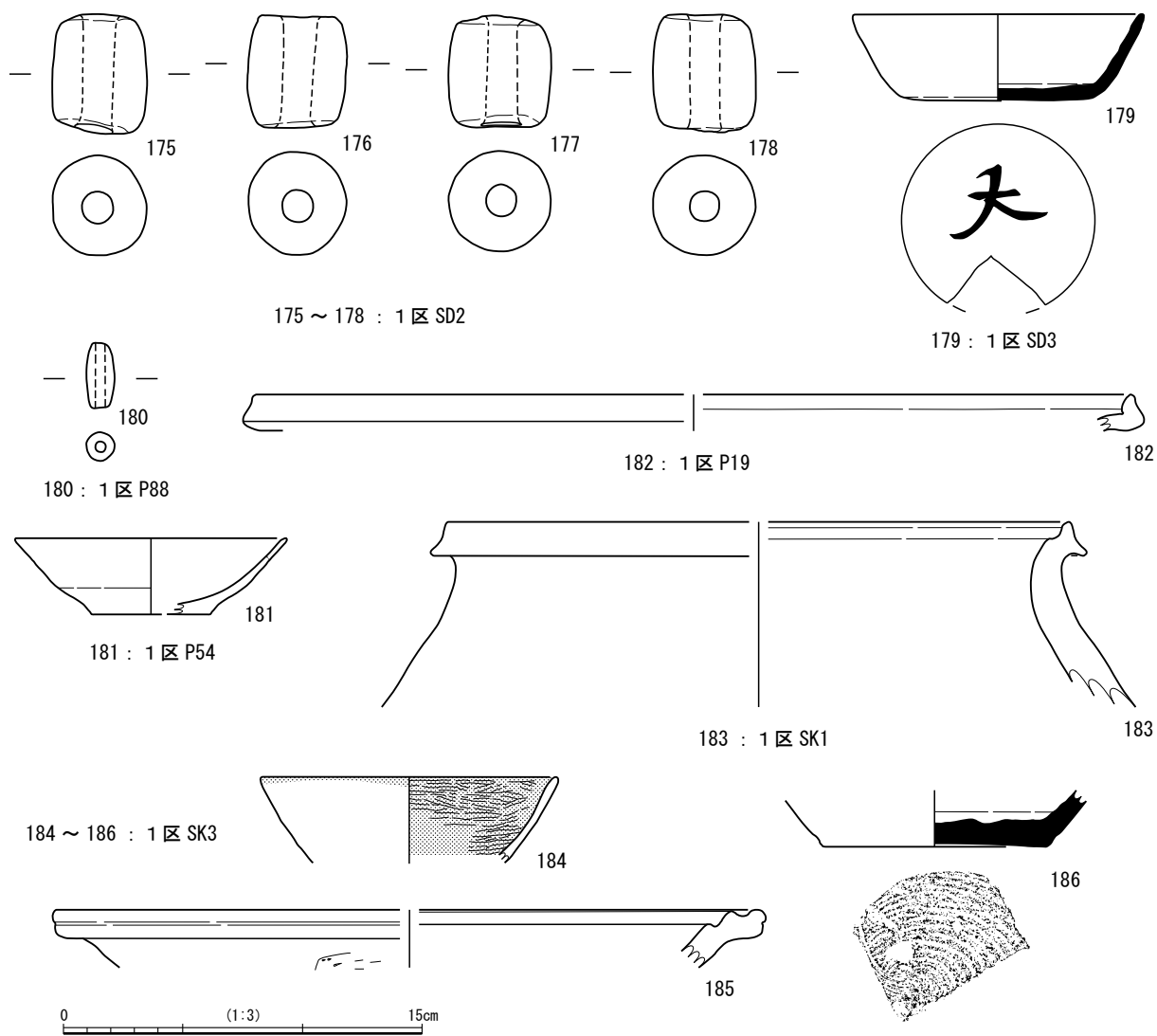


第70図 遺物実測図14 (S=1/3)

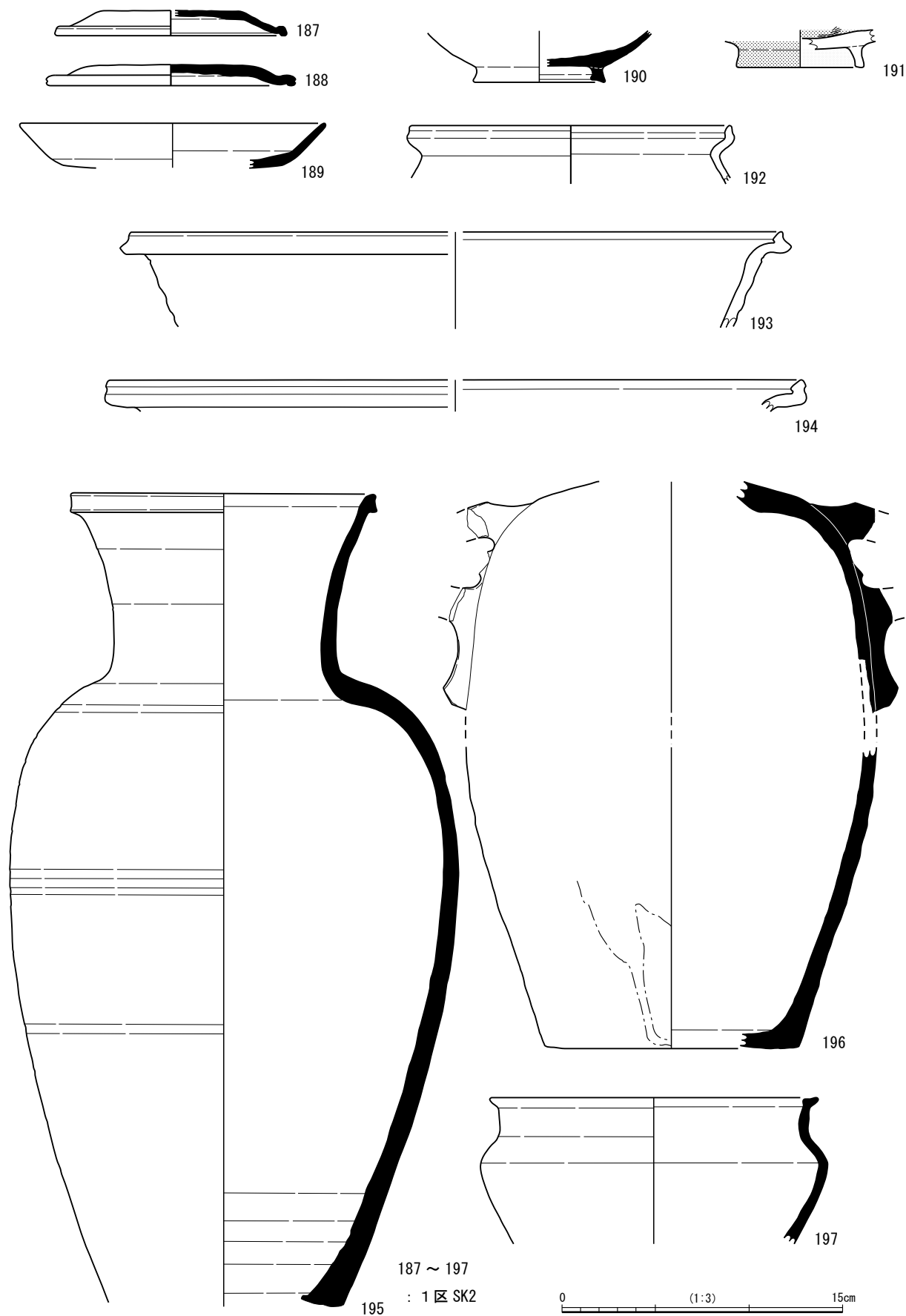


151 ~ 174 : 1区SD1上層

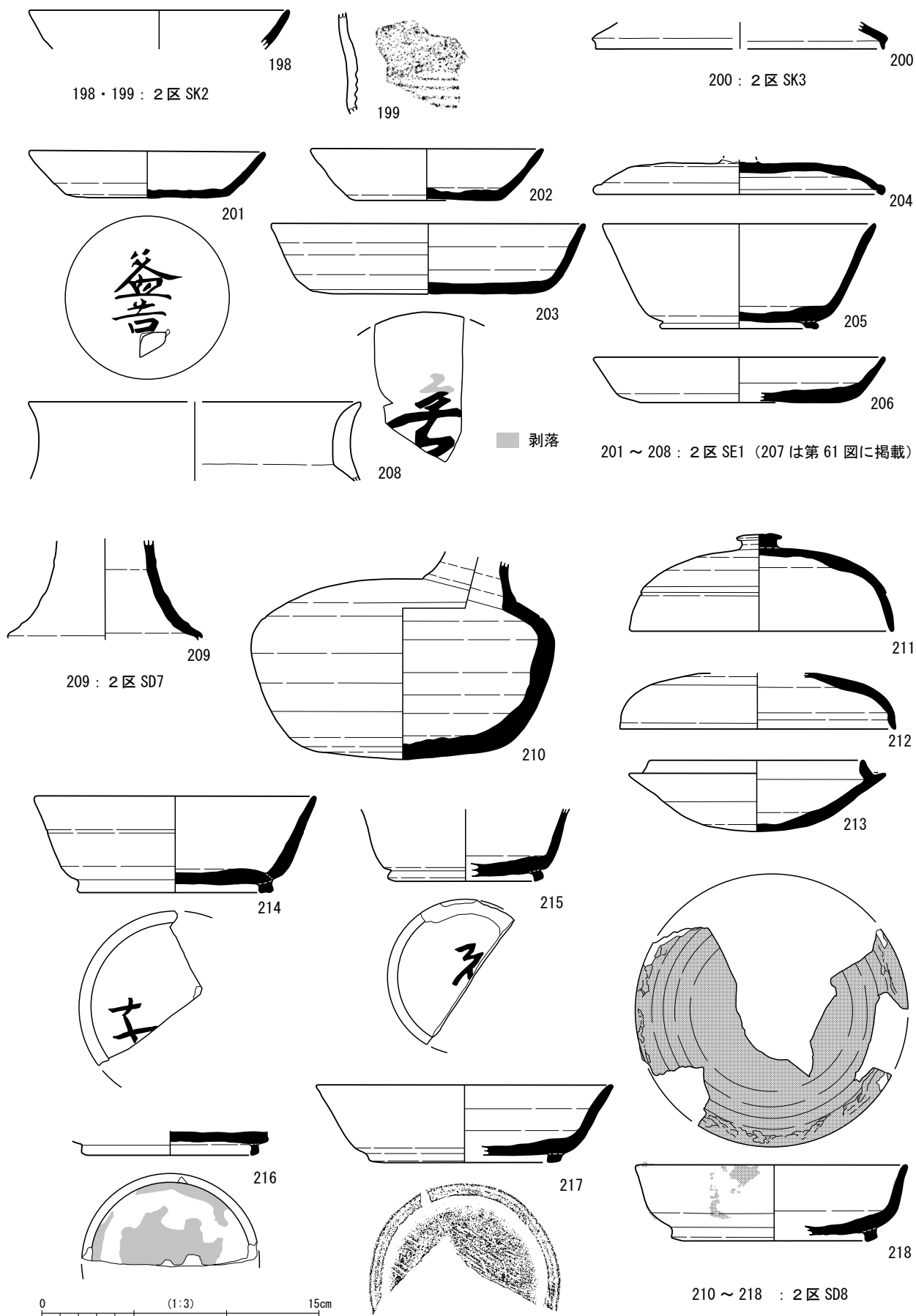
第71図 遺物実測図15 (S=1/3)



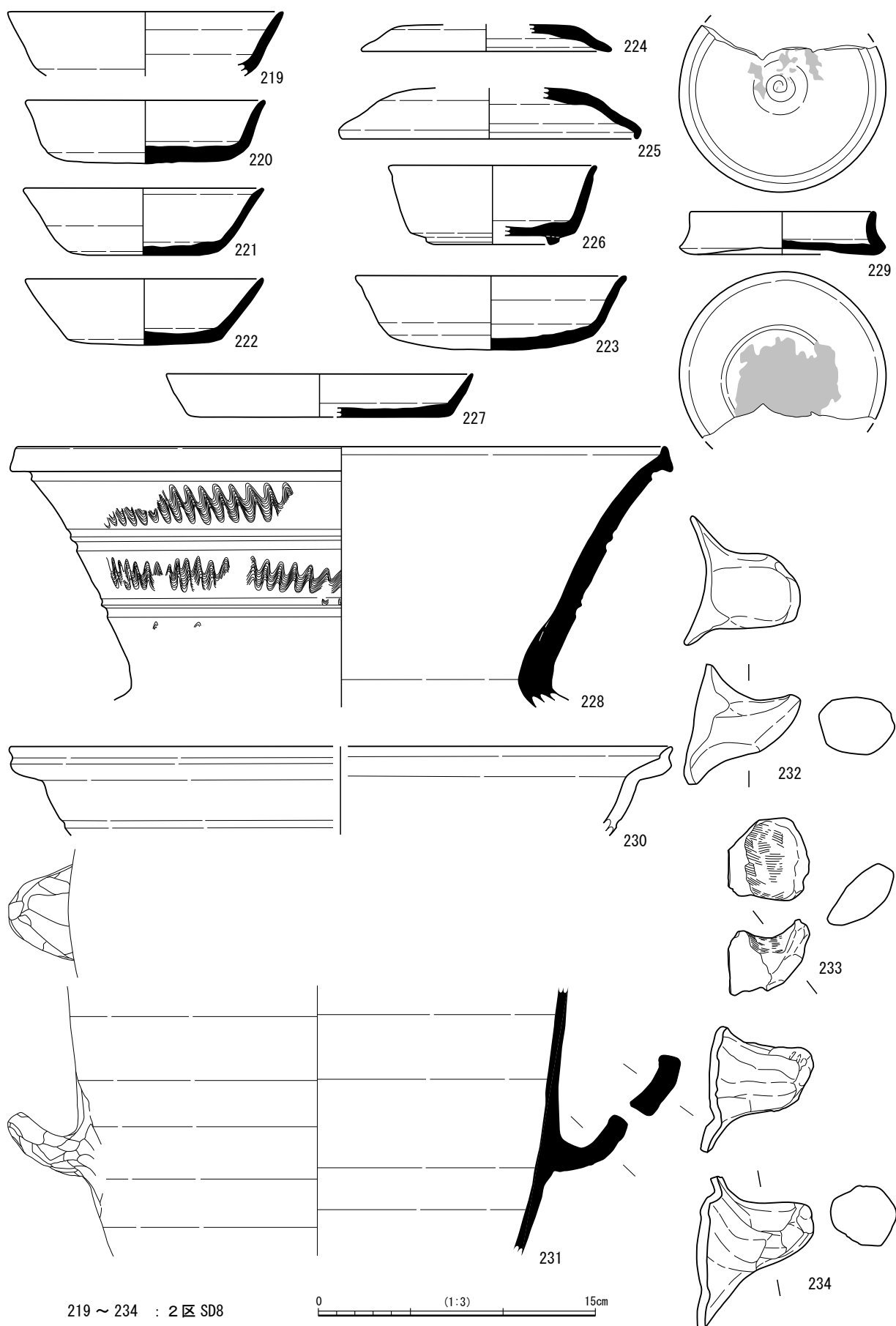
第72図 遺物実測図16 (S=1/3)



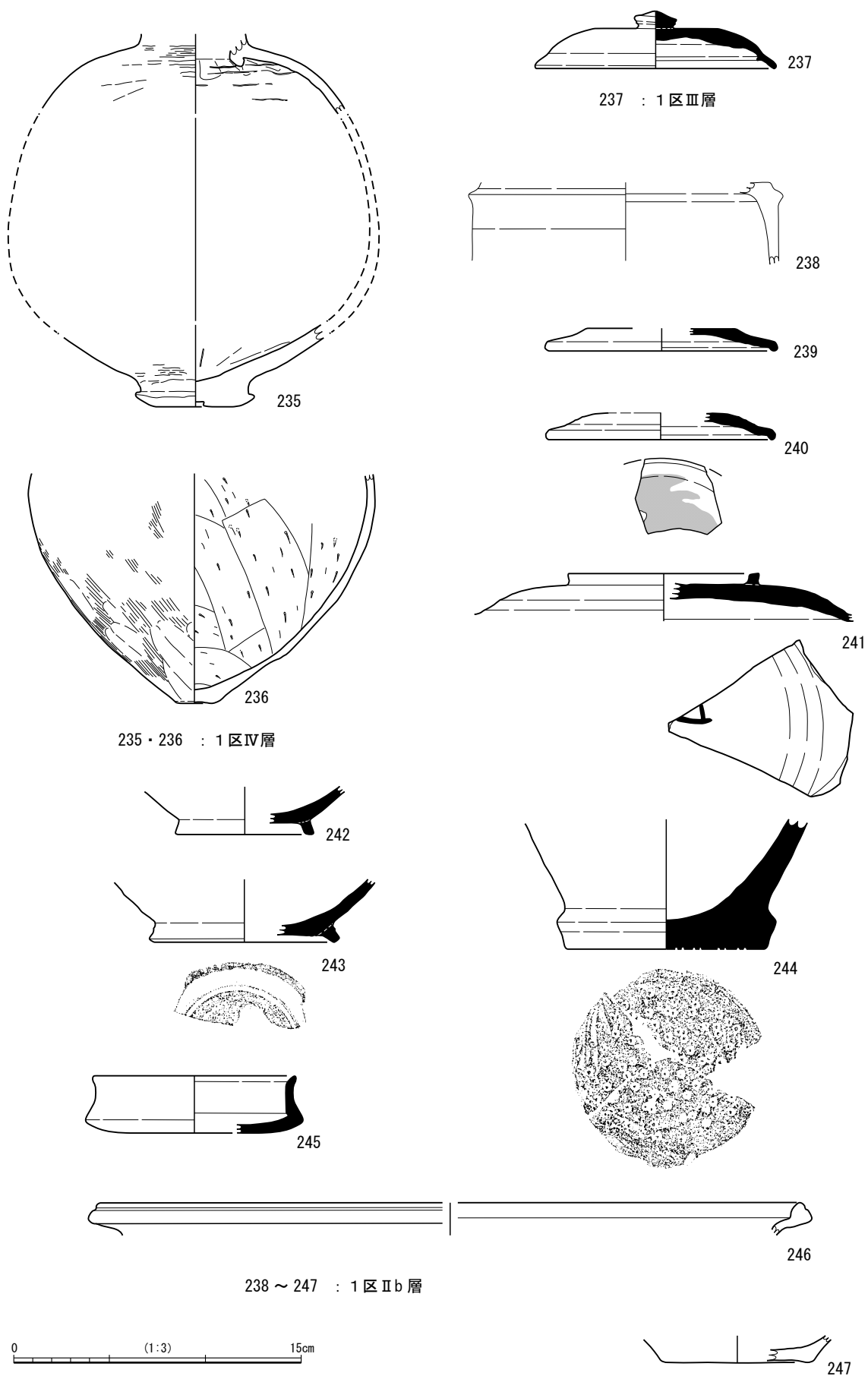
第73図 遺物実測図17 (S=1/3)



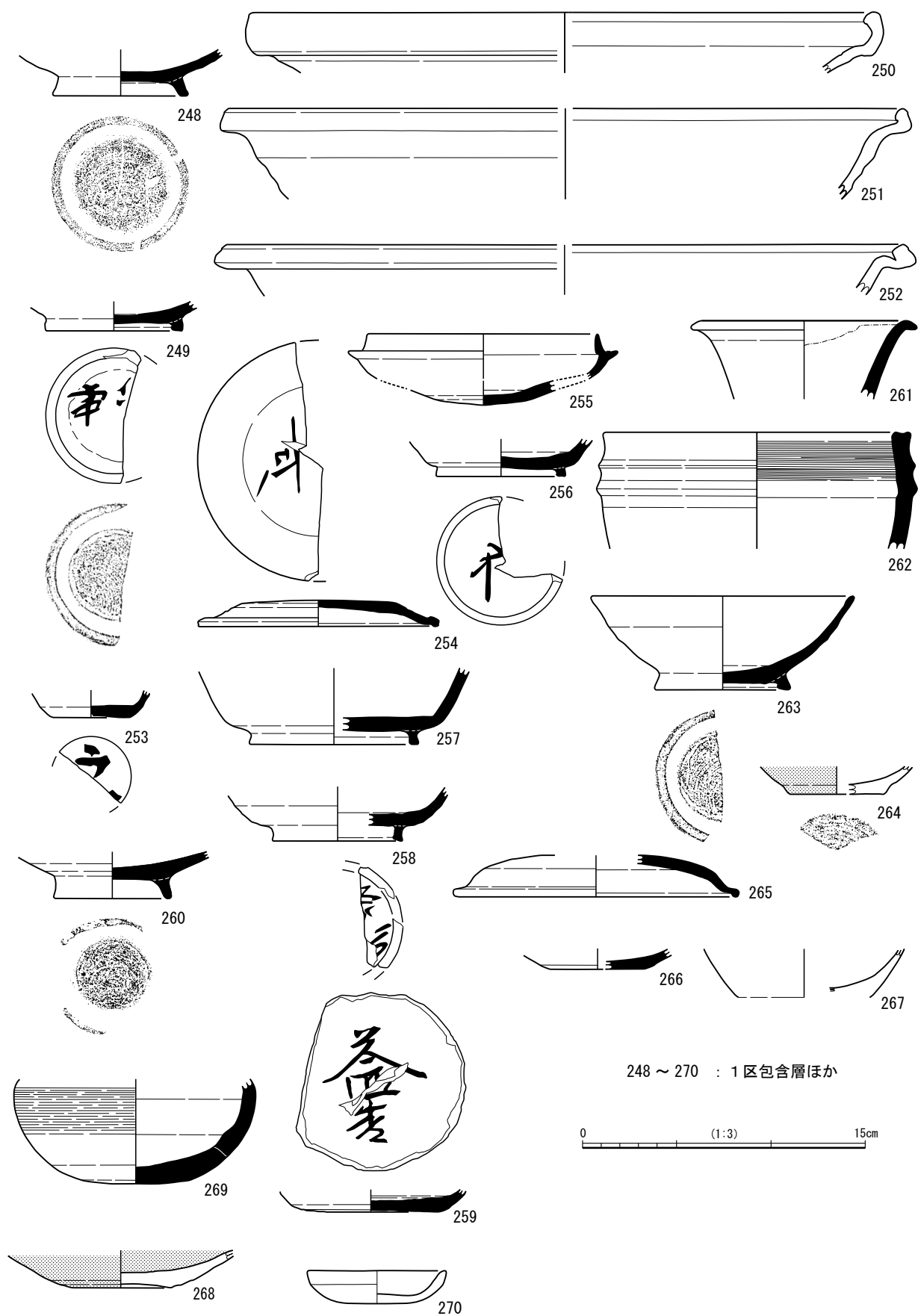
第74図 遺物実測図 18 (S=1/3)



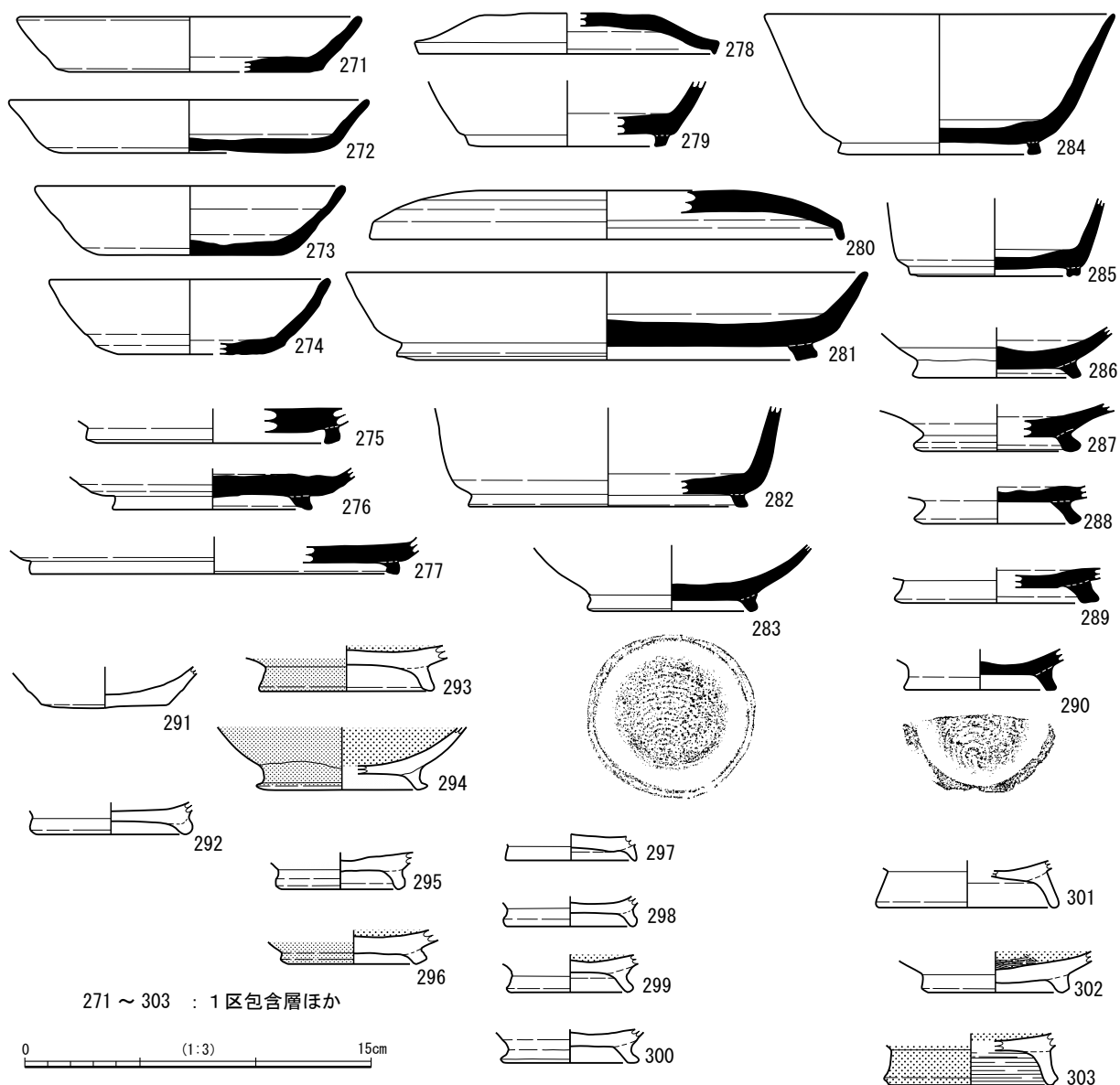
第75図 遺物実測図19 (S=1/3)



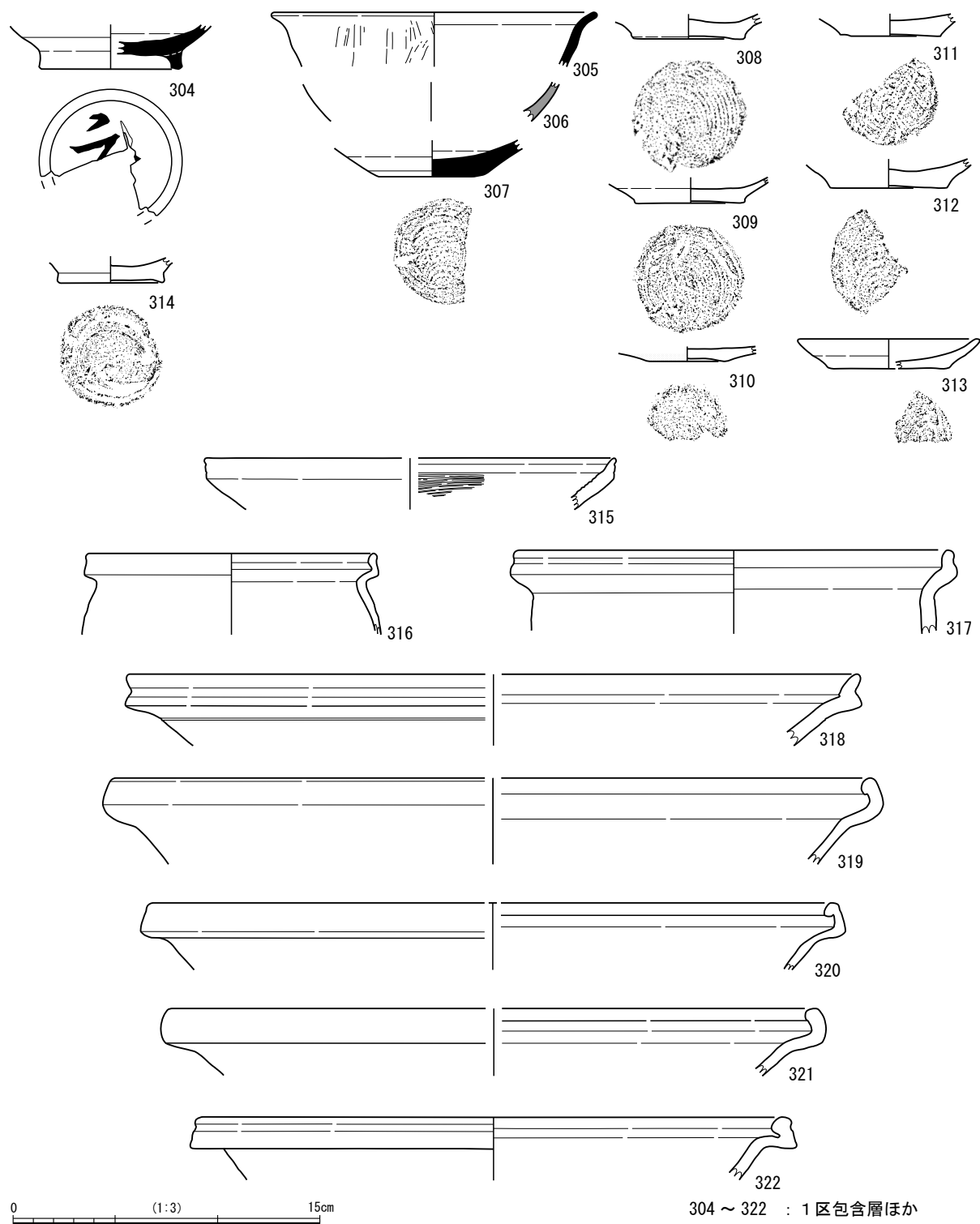
第76図 遺物実測図20 (S=1/3)



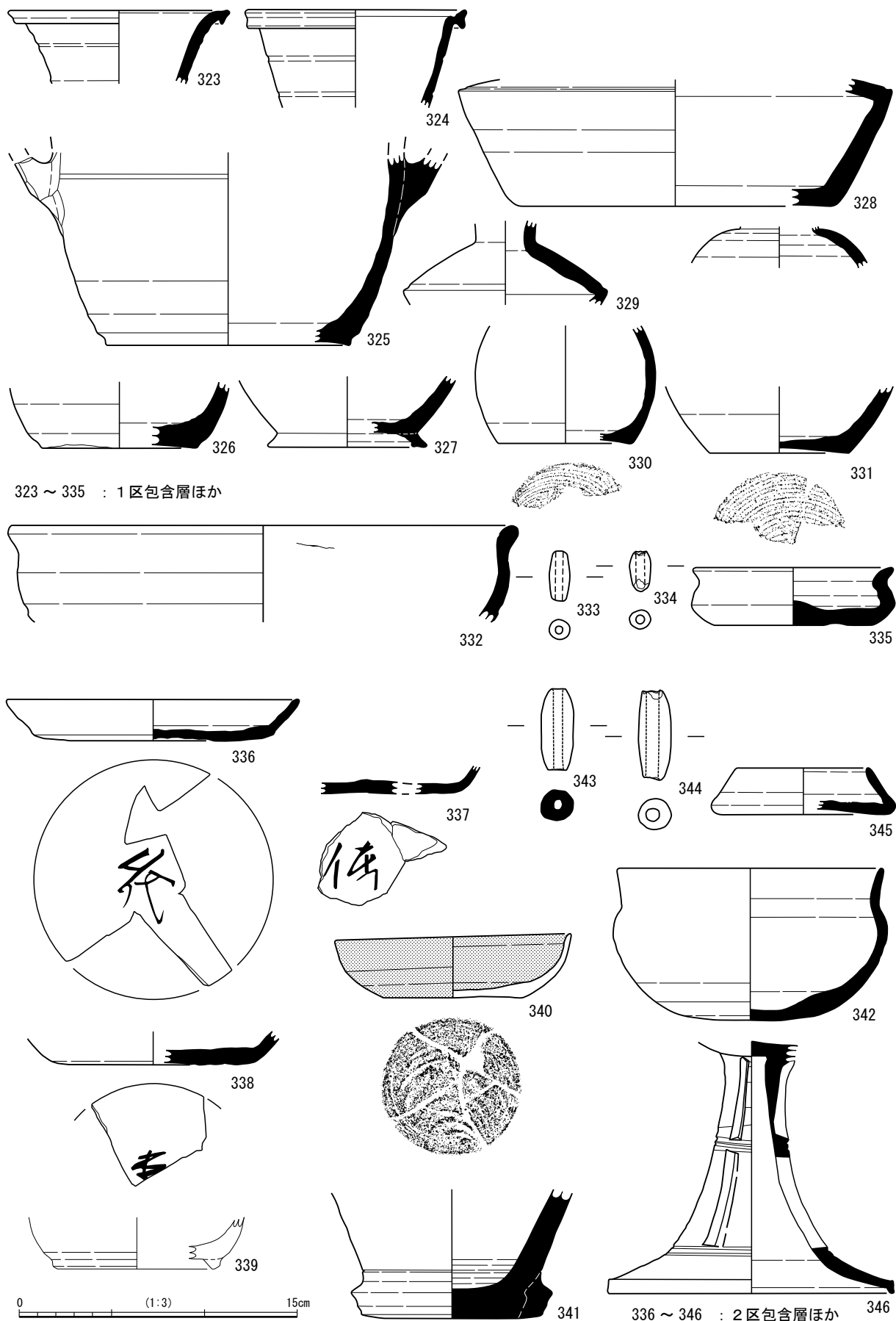
第77図 遺物実測図21 (S=1/3)



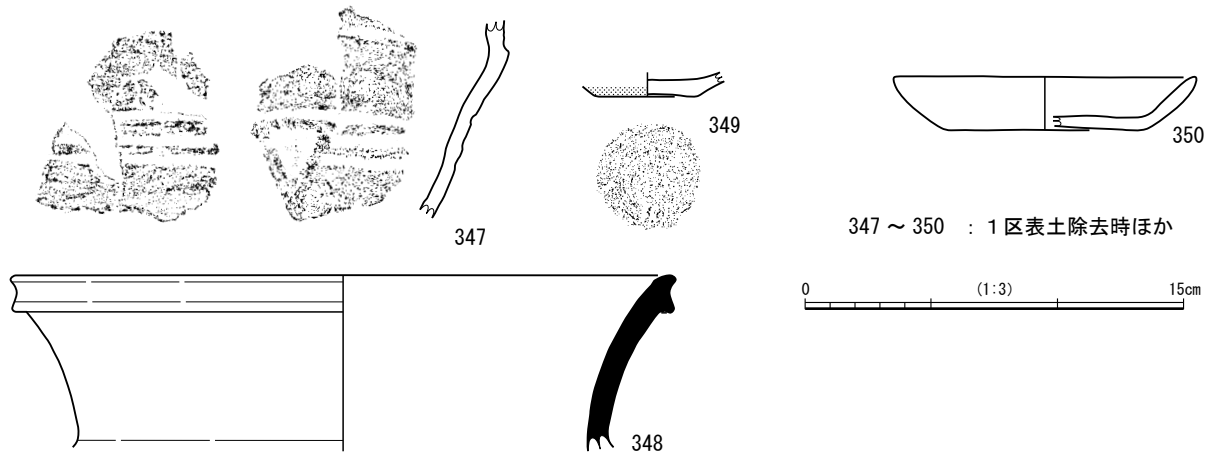
第78図 遺物実測図22 (S=1/3)



第79図 遺物実測図23 (S=1/3)



第80図 遺物実測図24 (S=1/3)



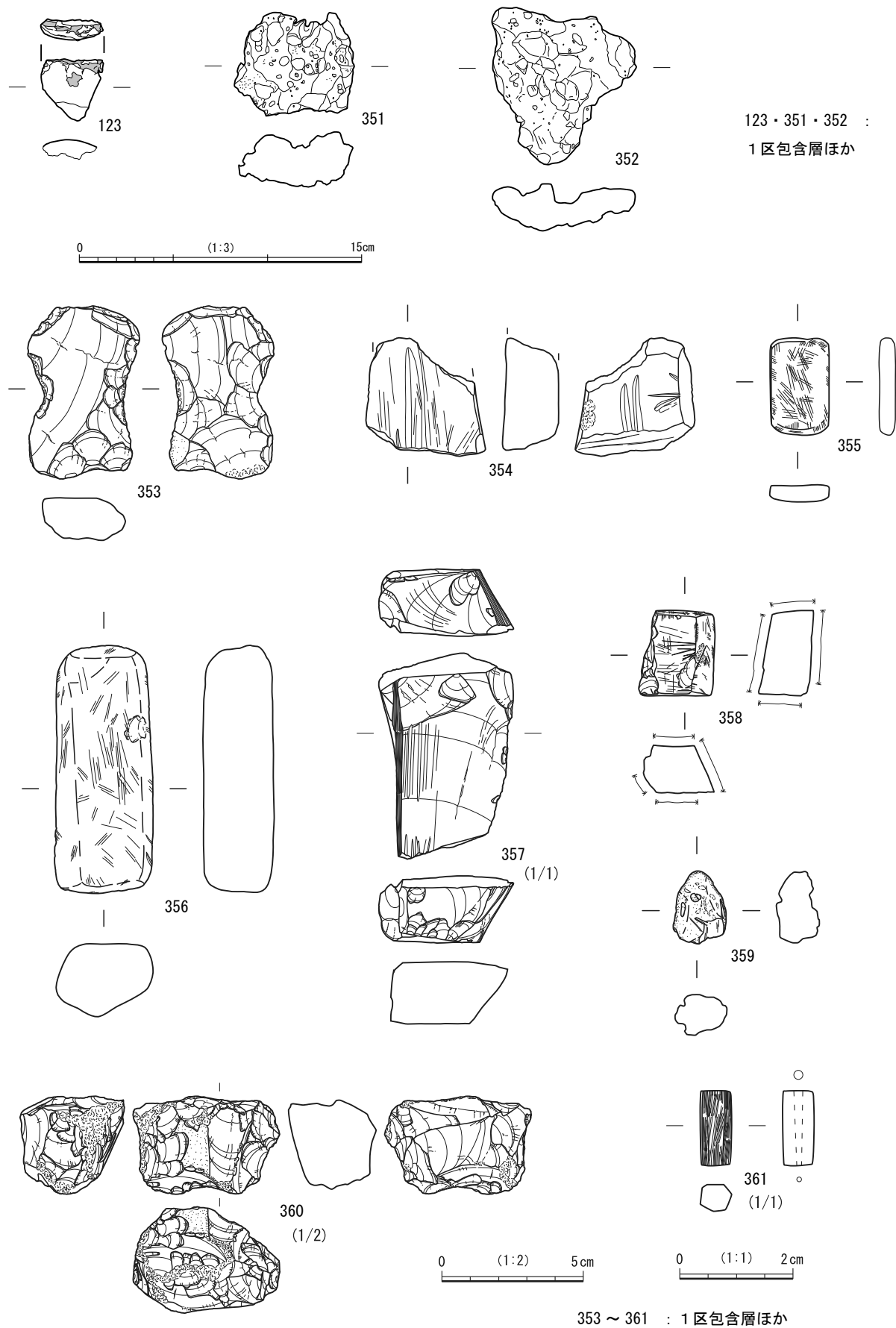
第81図 遺物実測図25 (S=1/3)

工具による刺突文が4段にわたってある。口縁は「く」の字、端部に明確な面がある。491内面に粘土輪積み痕跡、成形時により頸外面がやや凹む。493は490とよく似た口縁で、口縁内面端部が小さく突出する。底部は別個体の可能性あり。494は鉢で粘土輪積み痕跡あり。495～499は3区SD01出土。495は壺肩部でハケ工具による刺突文。496は甕口縁。口唇部に刻み目。497は水差形土器の把手部分で赤彩。煤が塗ってあるのか、黒褐色の鈍い光沢あり。499は壺底部で黒斑。500は有段口縁甕で擬凹線が痕跡程度に見える。(伊藤)

b 石器・土製品 (第82・115図)

123はフィゴの羽口に先端部分で、滓の付着部分のみが剥離したものである。351・352は椀形滓。353は砂岩製石錘である。両側面に打割により抉りが作られている。354は砂岩製砥石で、全面にわたって使われている。上下両面には筋状の窪みがあり、玉作関連遺物であろう。355は流紋岩製砥石である。薄い方形の板状を呈し、手持ちの仕上げ砥石である。356は流紋岩製の棒状の砥石。小口面は敲打具として使用している。357は碧玉の玉材で、施溝分割による直方体である。比重は2.52。図の左側面と90度方向を変えてに施溝分割が施されている。358は直方体を呈する流紋岩製砥石。仕上げ砥石。359は軽石製砥石で、かなり使い込まれ小さくなっている。360は碧玉材である。打割によって直方体としている。施溝痕跡はない。比重は2.53。361は碧玉製管玉未成品。孔が開けられた多角柱体である。重さ0.63g、比重2.41である。

505～509は令和2年度出土品。505は3区P9出土で、碧玉製管玉未成品。側面に剥離痕がある形割工程品。重さ0.95g、比重2.50。506・507は4区SD01出土の軽石製砥石。506はかなり使い込んでおり、小指大の大きさとなっている。507もよく使い込まれ、面が平坦になっている。508は砂岩製と思われる粗砥石である。上面の平坦部のみ研面として使用しており、おそらく置砥石であろう。509は4区SD01上層出土敲打石。側面に一部浅い窪みがある。手に持ちやすいようにする細工であろう。先端には幅3～4cmにわたって敲いた痕跡が残っている(伊藤)



第82図 遺物実測図26 (S=1/3・1/2・1/1)

c 木器 (第 83 ~ 112・115 ~ 116 図)

362 ~ 369 は 1 区 SE01 出土。362 は舟底板。先端を切断しているが、図の右側が L 状にきれいにカットし、それより左側は斧などによる切削痕が見られず折ったようで、斜めに破断している。側面は舟底を U 字状に仕上げ、直に立ち上がる舷側になる。その上面は井戸枠として利用するとき斜めにカットしており、わずかに残された上端はきれいに仕上げられている。これより上部に舷側板が乗るか痕跡がないのでわからない。図下端から約 80cm で内面の相対する位置に凹みがあり、板あるいは棒材が差し渡された痕跡である。この位置から舟底がせり上がるので、船首部分であろう。しかし舟幅が大きく狭まることはない。363 は舟底板。図下端は、内側から斧により切断されている。舟幅にそれほど変化がなく、舟底の形状も横断面平坦部が大きく、前後の傾斜も緩やかであるので、362 に連続する船尾に相当しよう。362 と同じように、井戸枠として利用するとき舷側部分を削り込んでいる。図下端から約 140cm の位置に幅 8cm の凹みが相対する位置にあり、その凹みがより上部にまで及んでいるので、隔壁等の板の組み込み痕跡であろう。そこから約 30cm 離れて 4 ~ 5cm の凹みがあり、角棒状の部材をさし渡した痕跡である。いずれも、丸太を半截して削り抜いたもので、準構造船の丸木船部分である。

364 は板。図下部の一側縁が斜めになっていることから、矢板の断片の可能性はある。図上部は直に切り取られている。365 は舟材か。一側縁が丸く仕上げられ、図下端から 40cm くらいに緩いカーブを持った凹みを作っている。ここから図下部の両面が破断しており、廃棄にあたって同じ厚さになるように割られたのであろう。おそらく最上部の舷側板の可能性が考えられる。367 は建築部材。368 は端部にほぞを作りだしてある板。両側面はきれいに削られ、小口を斜めに仕上げで小さなほぞを作り出す。組み合わせる部材であろう。369 は平らな角棒。建築にかかる部材と思われるが、両端が破損している。

370 ~ 469 は 1 区 SD01 出土。370 は方形の穴が作られた平板な棒。図上左端は斜めに面を取っている。方孔から 12cm の破断面との境に小さな釘穴がある。飾り板であろうか。371 は芯持材の丸棒で先端を尖らせている。もう一端は欠損している。372 は角棒。角棒の縁は面取りされている。両端は切り折られている。途中に挟りが見られるが、人為的なものではない。374 は一方端を尖らせた角棒である。もう一端には「L」状に挟りを入れて、何かにひっかけるあるいは別部材を組み合わせるものか。375 はミカン割状の分割材。樹皮はない。376 は建築部材、梁材であろう。丸太外側から幅約 16cm になるように切り取り、用いたものである。図下部には 5 × 8cm 程度の方孔があげられ、別部材が組み合わせる。図上端には方形の挟りが入れられ、そこに幅約 2cm の切込みがある。さらに方孔と挟りの一側縁中間に浅い挟りが作られている。両端の造作に比べ粗いことから、現場合わせ的な加工であろう。

378 は角棒。両小口が切断されている。379 は平らな板材。両小口は生きており、ほぼ中央に円穴があるものの、緊縛痕跡はない。380 は先端を尖らせた棒で、頭部を削り出している。角棒を丸く仕上げで、先端の切削も丸くなるように仕上げている。頭部は有頭棒様の形状である。381 は面取りを部分的にされた角棒。一方小口端が斧等で切断されている。一方端は側面に面取りされ、もう一方端は直に切り落とされている。382 は建築部材。側面中心に被熱したようで、炭化している。383 は角材。両小口とも斧のようなもので切り折られている。384 は頭を削り出した棒。もう一方端は腐食により形状不鮮明。頭部は両面から薄くなるように削り込まれ、左右側面をさらに削り込んで形を整えている。385 は角棒、一方端を尖らせている。部分的に被熱して炭化している。386 は角棒。図上端は側面を削ることによって尖らせているようだが、腐食が進み断定しがたい。387 は一方端に向

かって細くなる丸棒。両端とも欠損しているが、細い方は腐食頭による減失的で、太い方は大きな割れとなっている。388は細長い角棒。一方端を欠損する。面取りされていない。389は建築部材。図下端は被熱して炭化している。上端にL字状の繰り込みがあり、別材を架ける用途か。そこから15cm下に 4.0×3.0 cmの方孔があり、孔周囲の摩滅が顕著。390は断面略円形の杭。先端は多方面から削り込んで尖らせている。杭小口は鋸で切断したようなきれいな面となっているので、転用材であろうか。

391は建築部材。一側縁から1.5cm離れて 2.5×1.5 cmの方孔があり、軸方向の摩滅や破損が顕著。392は芯持ち丸太で柱材であろうか。表面が削り込まれている。一方端が被熱により炭化している。393は角棒で、先端杭状にカットされている。395は大型槽。全体的に腐食が進み、年輪が目立ち、ほとんど加工痕は見えない。396は角材の一面2カ所に挟り込みを設けた材。397は壁材か。図上端が斧で切断されて未調整。もう一方端は6.3cm前後の幅で段をつけており、部材の接合のため 3.3×2.5 cmの方孔に紐を通して緊結したと思われる。398は舟の舷側板を矢板に転用したもの。図下部右側の斜めのラインは若干アールをえがいているのに対し、左側は直線的である。前者が船首への接続部分、後者が矢板への加工部分である。図上部は鍵手のように加工され、 2.5×2.1 cmの方孔があり、紐で緊結する用途と思われる。図右側面に直径約2mmの小孔がある。399は角材を用いた杭。先端は一面のみ斜めに削り込んで尖らせている。基部は裏面に大きく破断している。400は丸太を半截したもの。外面は樹皮がないものの切り落とした枝の跡が残っており、未加工であることがわかる。内面には粗い加工が見られ、一方小口が尖り、もう一方小口が二股状に加工する。401は舟底板。内面は丸く削り込まれ、両端は斧で切断されている。図右側面は当初の形状を保っているが、左側面は破断している。切断に伴う再加工であろう。402は壁材であろうか。図上端面は鋸で切ったようなきれいな面となっているのに対し図下端面は斧の切断痕跡を明瞭に残す。両面には明瞭な加工痕を残す。403は床ないし壁材であろう。図下端は鋸で切ったようなきれいな面となっている。両面とも木目が明瞭に浮き上がっている。

404は断面台形で方形の穴を持つ部材。建築材に関わるものでであろうか。裏面は平坦に作られ、全ての面が生きていることから、組み合わせて用いるものと思われる。方形の穴は内側に向かって斜めに彫り込まれ、上で $17.8\text{cm} \times 11.8\text{cm}$ と部材に対しする穴の占める比率はとても大きい。405は両端に幅1.4mm、深さ4mmの溝が掘ってあり、板組み合わせの用途と思われるが、目釘等の痕跡はない。406は丸穴がつけられた板材。407は横断面かまぼこ状の棒である。一方小口は斜めに削られて面を持ち、もう一方端は欠損する。きれいに削り出されている。408は有頭棒。一方端を欠損する。丸棒から削り込んで頭を作っている。409は角材。一方小口が直にもう一方が斜めに切断されている。410は建築部材で梁材か。側面を削り込んで角をとるように仕上げられている。図下端は切断され、もう一方端は被熱により炭化している。411は槽。木目部分で割れている。器壁は薄く、口縁はやや外反気味。側面から底面はスムーズにつながるようなつくり。412は槽。木目のところで割れている。内底面と側面との境は明確に作られている。おそらく角形の槽であろう。413は角槽のコーナー部。木目部分で割れている。底部に脚がつくような高まりがあるが破断しているので明確できない。414は角材。建築部材の転用と思われ、図下端は斜めに切断されている。内側には、斜めに鋸様の刃の痕跡がある。415は丸棒。両端は意識してきれいな丸棒となっているが、中間部は粗く角張っている。416は枠の部材。図左端に 3×4 mmの小方孔が2個ある。417は端材か。小口面には切断の痕跡残す。

418は板。両小口は切断されている。建築材と思われる。419は板状の杭。側縁を削り込んで先端を尖らせている。420は建築部材、梁材か。断面円形に作られ、端部は削り込んで小さく痕跡程度の頭部を作り出している。421はウルシ材の角棒。面取りされた角棒材で1m超の長い棒である。ウル

シ樹液をとった痕跡はない。422 は建築部材か。一側縁が丸く仕上げられ、両小口は切断されている。423 はほぞ結合材の未成品か。ほぞは先端になるに従い幅広厚くなっており、一面のみさらに削り込まれてる。図の左が厚く右が薄くなるような横断面台形を呈し、右側縁がわずかに弧を描く。424 は建築部材。両側面と一方面に明瞭な加工痕を残し、 $0.6 \times 2\text{cm}$ の方孔が1カ所ある。そこから約65cm離れて幅1.8cm程度の孔と思われる抉りがある。425 は広楯。舟形隆起から刃部にかけて残っている。楯本体は下膨れの釣鐘形。舟形隆起周囲には削り込んだ工具の跡がたくさん残っているので、完成間近の未成品であろう。426 は二股ナスビ形膝柄楯。二股部分の内側は削り出されているが、外縁部はほぼ直になっており、未成品か。

427 は断面かまぼこ形の棒で、全面きれいに仕上げられている。両端も角をとるように仕上げられている。428 は両端を欠損した丸棒だが作りは粗く、角棒に近い。429 は角棒。両端とも斧等で切断されている。側面は面取りされている。430 は一方端が焼けて尖ったようになった角棒。被熱は2次的とおもわれる。431 は角棒。両小口とも斧などにより切断されている。側面は面取りされている。432 は横断面かまぼこ形の棒。図上端は斜めにカットされているが、下端は破断している。全体的にきれいに仕上げられている。433 は角材。一方端は斜めに切り落とされている。434 は角棒。途中で節があったことによりそれをよけるような湾曲を生かした棒。一方端のみ、斜めに削り込んでいる。435 は両小口を細くした角棒。細くした両端はほぞとして差し込み固定する用途であろう。436 は先端を尖らせた棒。横断面が円形に作られている。437 は矢板。先端が粗く削られている。438 は角棒だが、一方の小口の主に2面が焼けて炭化している。下から約10.0cmに $2.7\text{cm} \times 1.5\text{cm}$ の角穴が斜めに穿たれている。439 は二股の膝柄楯の刃部のみ。二股部分はスリット状の切れ込みで、内面は直に仕上げられ、外縁は漸次細くなるようになっている。刃部先端はやや先細くなった形状。440 はミカン割状の分割材で、背側は面を持つ。図の左面の右端にも幅2～3cmで面を持つ。441 はミカン割材。樹皮側は平坦に削り込まれている。442 は先端が矢板のように尖った板で、そこが多少焦げている。小さいが矢板であろう。443 は角材で、側面を全てきれいに仕上げている。角材の面取りされていない。一方小口が大きく破断している。

444 は舟の船首にとりつく舷側板。下端は斜めに削り込まれ、下部にくる舷側板との接合を図る。先端から30～40cm強の位置に粗い作りの方孔が二つあり、現場あわせで開けられたようなものである。445 は丸棒。基部は平らに作られもう一方端は尖っているようになっているが、意識的な造作と断定できない。先端の摩耗が顕著であるので、使用による可能性もある。446 は横断面略円形の杭。2面を浅く削り込んで先端を尖らせるが、傾斜が緩く、先端部に面を作る。447 は板材で、建築部材であろうか。上下端に幅8cm程度の窓が開けられているようだが、当初のものか不明。448 は建築部材。四角の柱のような材を貫通するように穴が3カ所開けられており、現状は軸方向で半裁されている。穴の削り込みは両側からされているが、一方は狭くもう一方は広いので、狭い方が表と理解できる。図の上端は斧で直に切断されているが、もう一方端は両面から削り込まれて折られている。449 は刳貫桶の蓋。口縁端部は丸く仕上げられ、内面で1.5cmほど垂下する。外面には口縁端から8.5cm入ったところで圏線が設けられ、一段彫り込むことを意図したと思われるが、現状は不明確である。内面は、それに対応するように屈曲している。大型の桶の蓋とすれば楕円形となるのが一般的だが、この資料では不明である。450 は網台。刻み目は中央とその途中に2つのみ遺存している。未製品か。451 は網枠。端部は蛇頭状に削り出し、15cm離れて $3.3 \times 1.3\text{cm}$ の方孔があり、枠を安定させる横木を差しわたすものであろう。全体に製作痕跡を残し、方孔内面にも鑿痕が明瞭に認められ、使用感はない。網を緊縛する紐孔周辺に紐ずれの痕跡はない。製作途中に破断したため廃棄されたものであろう。452

は四角に組み上げる枠材。図上部が破断している。最も外側に1.5～2.5×0.5cmの方孔が15cm間隔で開けられており、下から4つめの方孔の間隔がイレギュラーなのは修理によるものであろう。この孔には紐ずれ痕跡はない。さらにやや内側に計1.0cmの略円孔が方孔間にある。円孔内部には鑿による工具痕がある。そして板の軸方向の摩滅が顕著で、小さな欠損認められる。板下端には1.0×0.7cmの抉りと径5mmの錐で穿たれた穴がある。453はサクラ樹皮。木工用の緊結材。454は盤。図左上部と左下部に刃物痕があり、削られている。盤面は浅い皿状を呈し平坦である。図では湾曲しているが、誤り。455は槽。側面には粗い加工痕を残し、内面の繰り込みも不正形で、未製品である。おそらく製作放棄したものか。

456は台脚。底面に抉りを入れて二股とし、8cm上に3.0×1.2cmの方形穴があるこの中間に1.5cm強の凹みがあり、何かがあたった跡であろう。両側面にはそれぞれ対象となった位置ではないが目釘穴がある。以上から、方形の穴には棒がわたされ、途中にも固結のための棒がわたされ側面には薄板が目釘で固定されているものと考えられる。457は円形底板。円のカーブが円弧の側円とのカーブの角度に合わないことから、円形というよりも長円形と思われる。側面は斜めにカットされている。458は曲物底板。円周は多角形的で目釘穴が確認できる。459は曲物底板。側面に側板を結合する木釘1カ所が確認できる。460は板で、図の下面と右側面が生きており、上部は切断されている。ほぼ中間の2カ所に穴がある。一方面から石錐のような太い先端の工具による穿孔で、穴断面が漏斗状となっている。461は台の脚。下面には弧状の削り込みがあり、図の右端は切り取られているようだ。上面下8mm、左端から10.2cm。小さな木が目釘が打ち込まれている痕跡はないが、底面を固定する目的か。462は461と同じ台の脚。下面には弧状の削り込みがあり、図の左端は切り取られている。もう一方小口は斜めに削られ、部材の結合を予想される。上面近くに目釘が打ち込まれている。上面左端には鋸により切込みがある。463は芯持ち材を用いた柱。下面を平坦に仕上げている。柱下面近くから一方面上部にかけて黒く焦げており、被熱の跡である。464は両端に突起のある棒である。棒本体は、かまぼこ形で、両端に蛇頭状の突起、棒のほぼ中央に幅2.2cmの浅い溝が外面に彫られている。緊結材を誘導する溝であろう。一方端近くに溝が削り込まれているが、雑なつくりなので、補修等の用途であろう。465は両端を欠損した板材。466は角棒だが、図の下端が弧状に仕上げられている。それと反対面にL状の切込みがある。

467は曲物底板。ほぼ円形を呈するようで、側板結合の目釘は1カ所のみ確認できた。468は剣形木製品。剣身部先端は焦げている。柄部は楕円形に削られている。469は先端を尖らせた棒。横断面は楕円形を呈し、一方端に寄せて略円形になるように削り込んでいる。組み合わせる部材であろう。

470～473は2区SI01柱穴出土。470はP1の柱。芯の部分が腐って空洞になっている。471はP2の柱である。腐食著しい。472はP3の柱。ほかの柱に比べて非常に残りがよい。横断面が略方形。473はP6の柱。腐食激しい。474は2区P31の板塀の柱材。475は2区P38の柱。下面は粗く削られている。直方体の柱である。

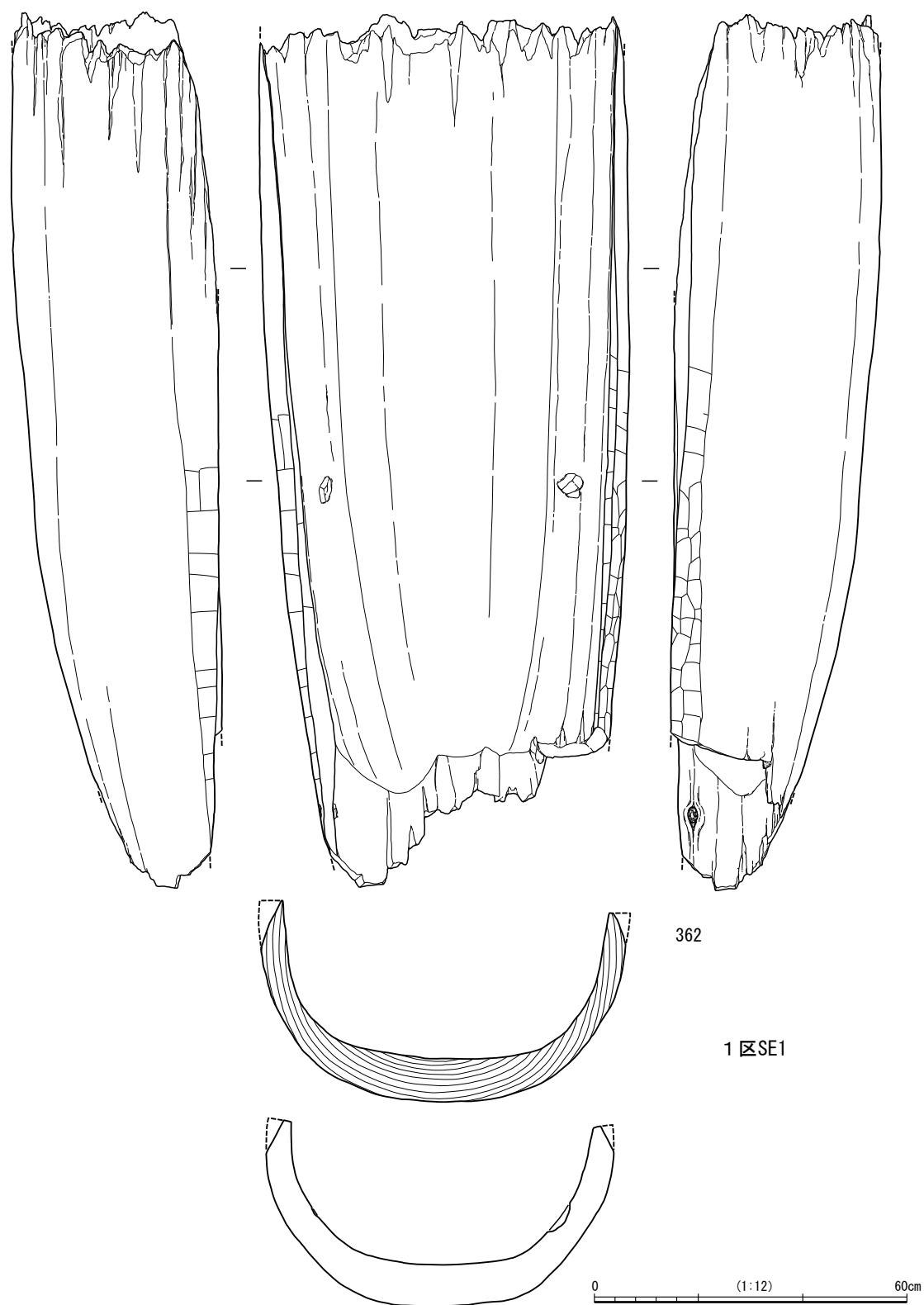
476～478は1区SK01出土。476は建築部材。先端を鉤状に削り込み、下端は斜めに切り折られている。両面は年輪部分で剥がれており、全体的に角張っているのも、未製品かもしれない。477は鎌柄の形代か。横断面楕円形の柄の状部には両側を削り込んで直径2mmの貫通穴が2カ所ある。鎌を固定する用途であろう。478は曲物底板。やや楕円形気味で、側面には側板結合の木釘がある。479は曲物底板。現状の部材周縁が腐朽により痩せているため明確にできないが、図の上部に目釘穴2カ所確認した。480は斎串ないしは人形か。厚みのある板材に両側から切り込みを入れる。下端には図の裏面から切り折りされている。墨書等の痕跡はない。

481～483は2区SE01出土。481は井戸枳縦板。先端が矢板状に削られ、現場合わせて作ったような作りである。482もSE01井戸枳縦板。矢板状の先端部分のみ先端は完全にとがらせるのではなく、両側から小さく削り込んで平らな面を作っている。483もSE01井戸枳縦板。両側縁を削り込んで先端を鋭く尖らせている。

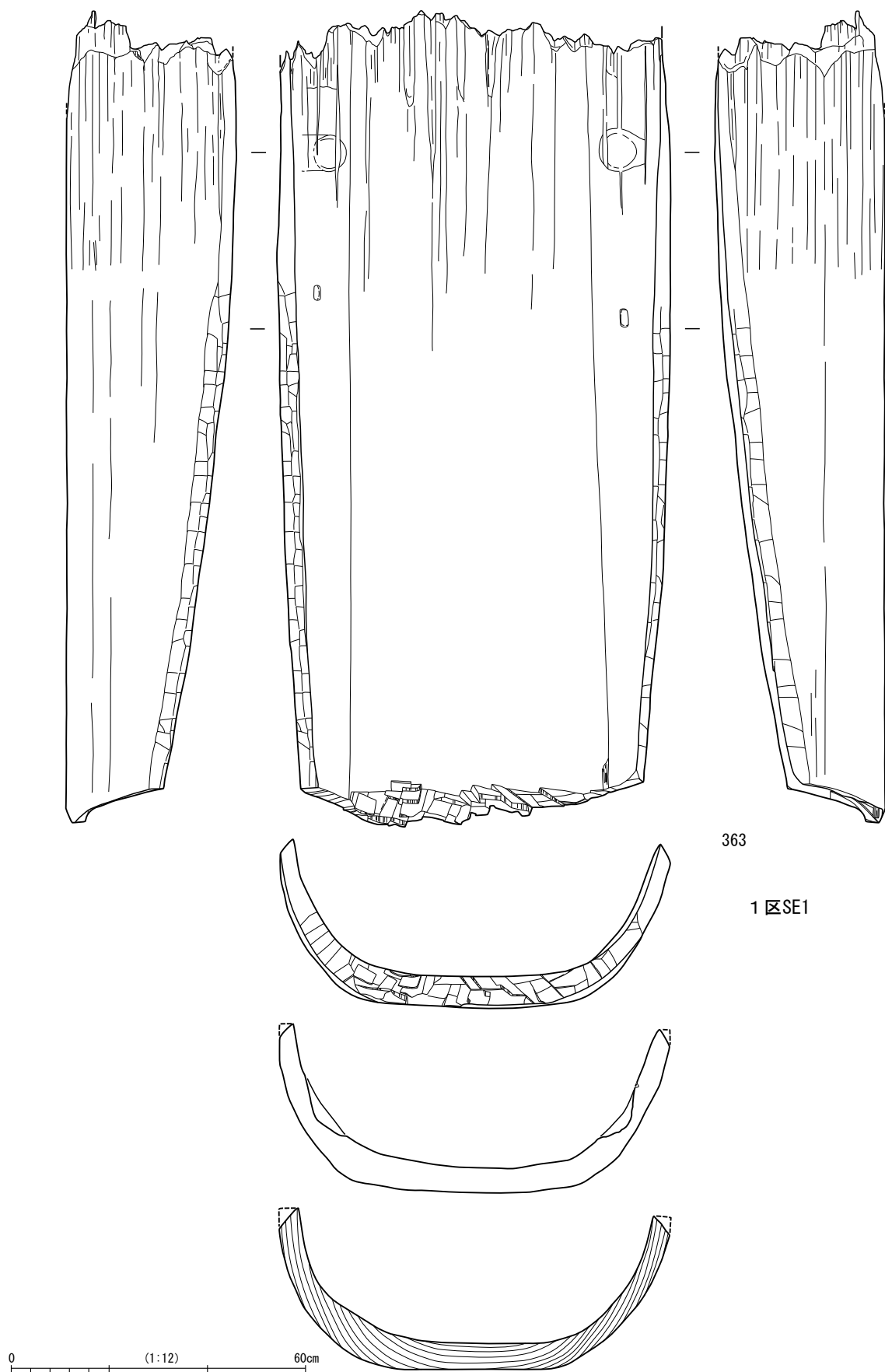
510～518は令和2年度調査の3区SK01出土品である。510・511は曲物底板。510はほぼ半分が遺存し、復原直径20.1cmの正円である。目釘穴5カ所あるが、そのうち図の上から4つ目では3カ所の穴があげられ、3つ目では2カ所の穴と凹みがある。いずれも補修の痕跡である。511は周縁の腐食が進み変色している。残っている部分から直径を求めると15.6cmとなるが、それで円を描くと遺存部分がはみ出すこととなるので、楕円形に復原できる。目釘穴1カ所のみ確認できた。512・513は端材。512の図の右側面は生きているか不明である。下端が斜めにカットされ、裏面には幅約1.5cmの凹みがある。513は厚い板材の両側を鋸で切ったときの端材で、図の下面は破断した状態である。514～518は井戸枳縦板材である。いずれも下端が利器により切断されており、外側から切断されている。(伊藤)

参考文献

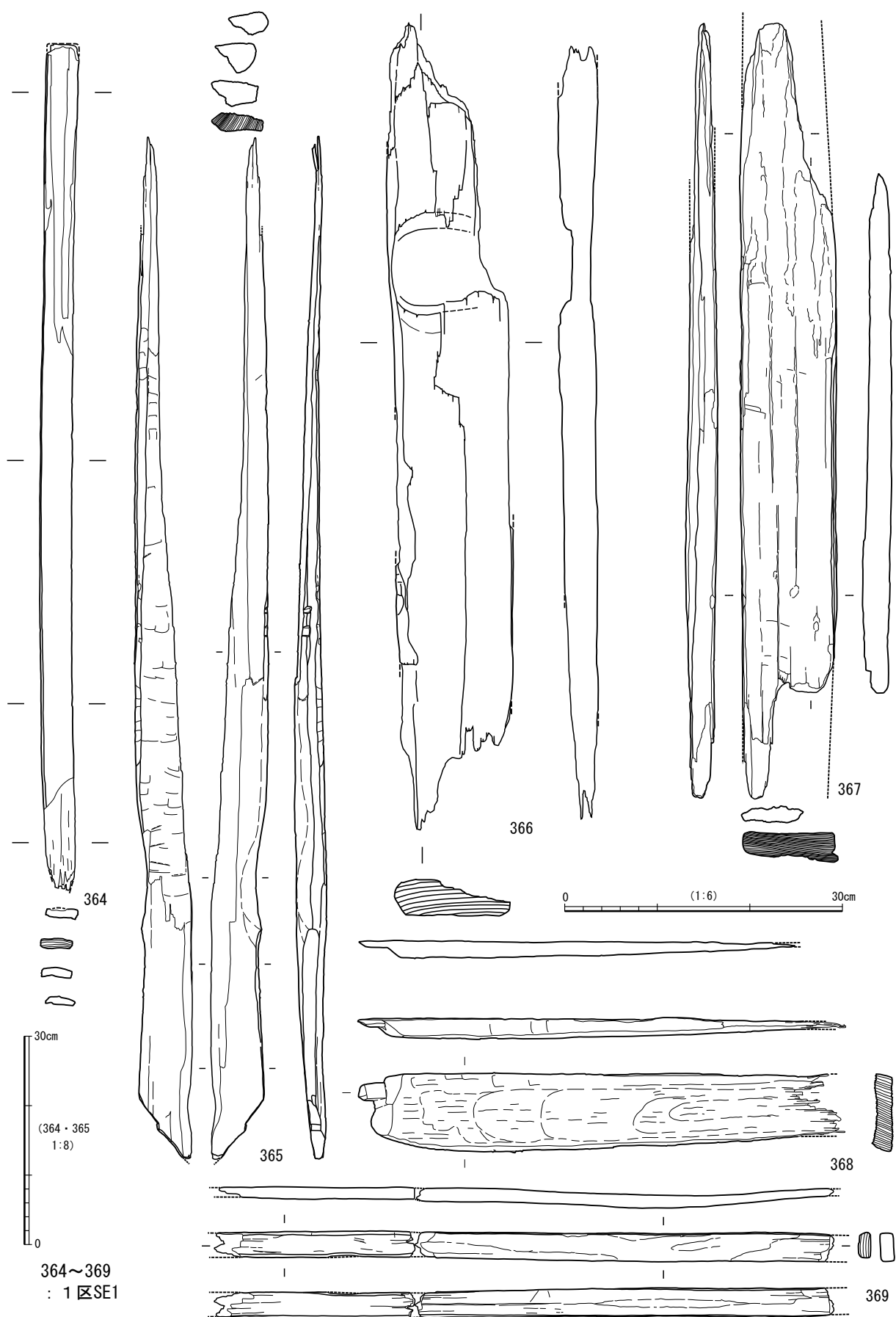
- 田嶋明人 1988「古代土器編年軸の設定」北陸古代土器研究会他編『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会
- 田嶋明人 2013「平安期土器の暦年代と横江荘遺跡の変遷」『加賀 横江荘遺跡』白山市教育委員会
- 楠 正勝ほか 1996『西念・南新保遺跡』Ⅳ 金沢市



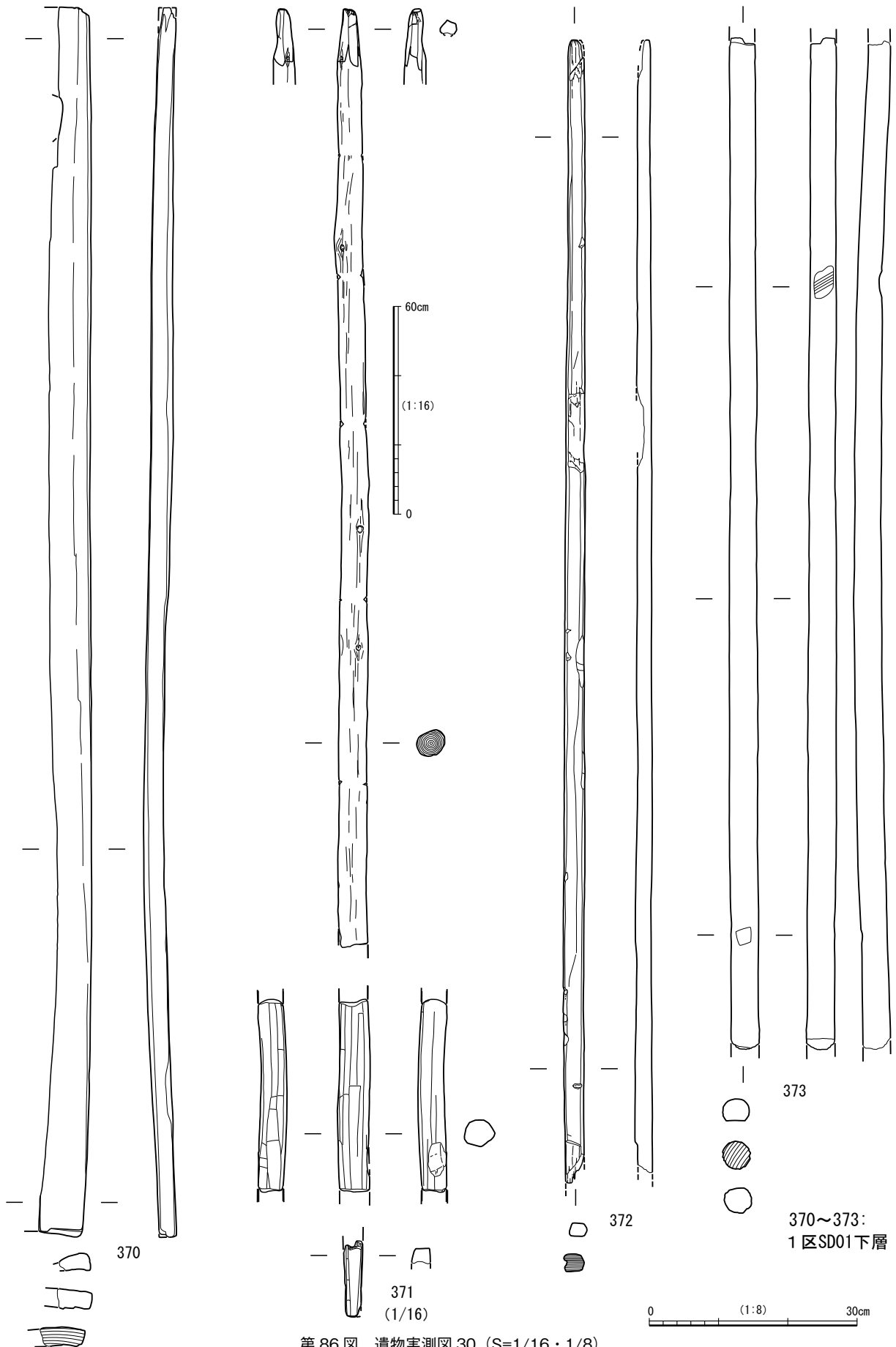
第83図 遺物実測図27 (S=1/12)

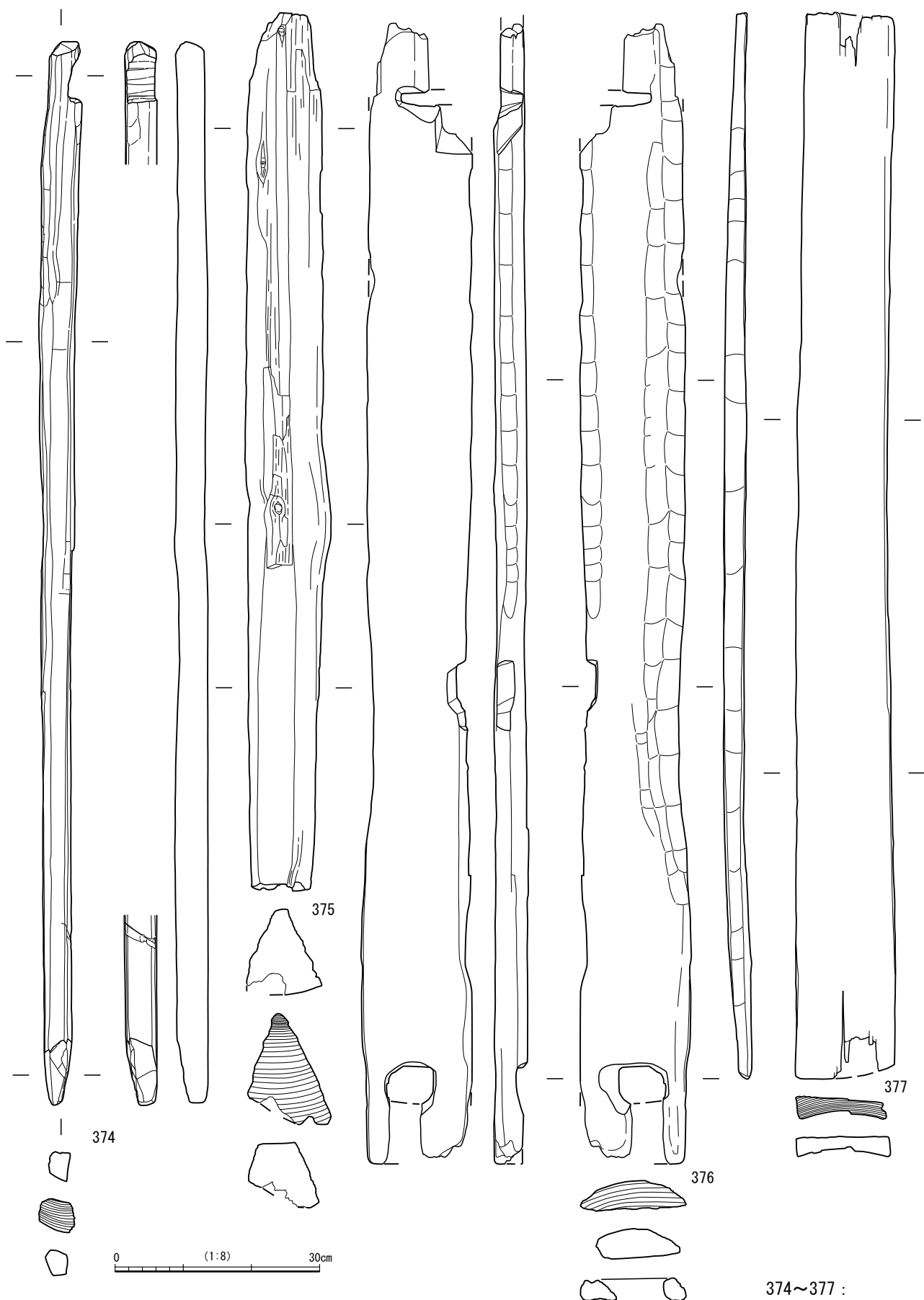


第84図 遺物実測図28 (S=1/12)



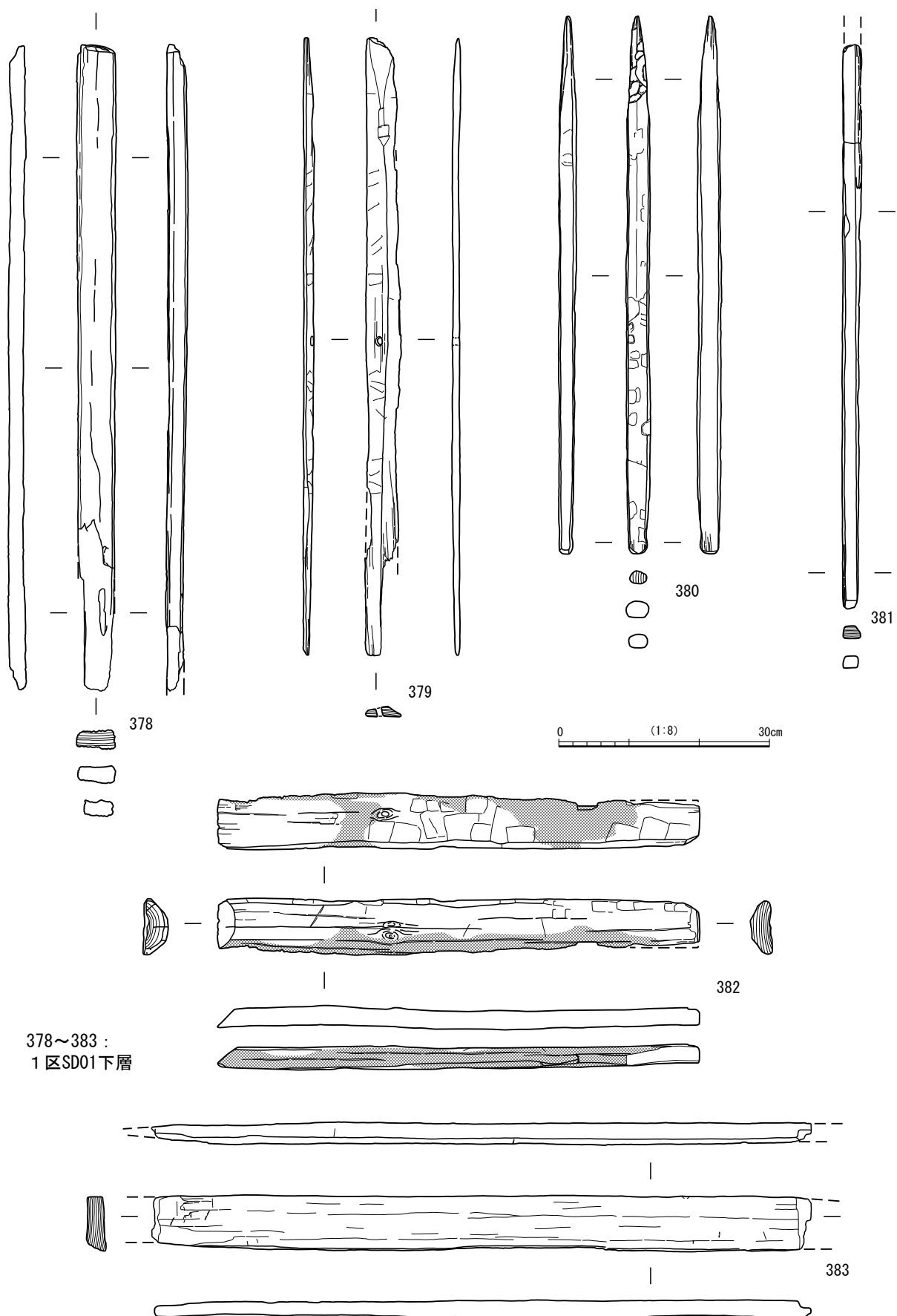
第85図 遺物実測図29 (S=1/8・1/6)



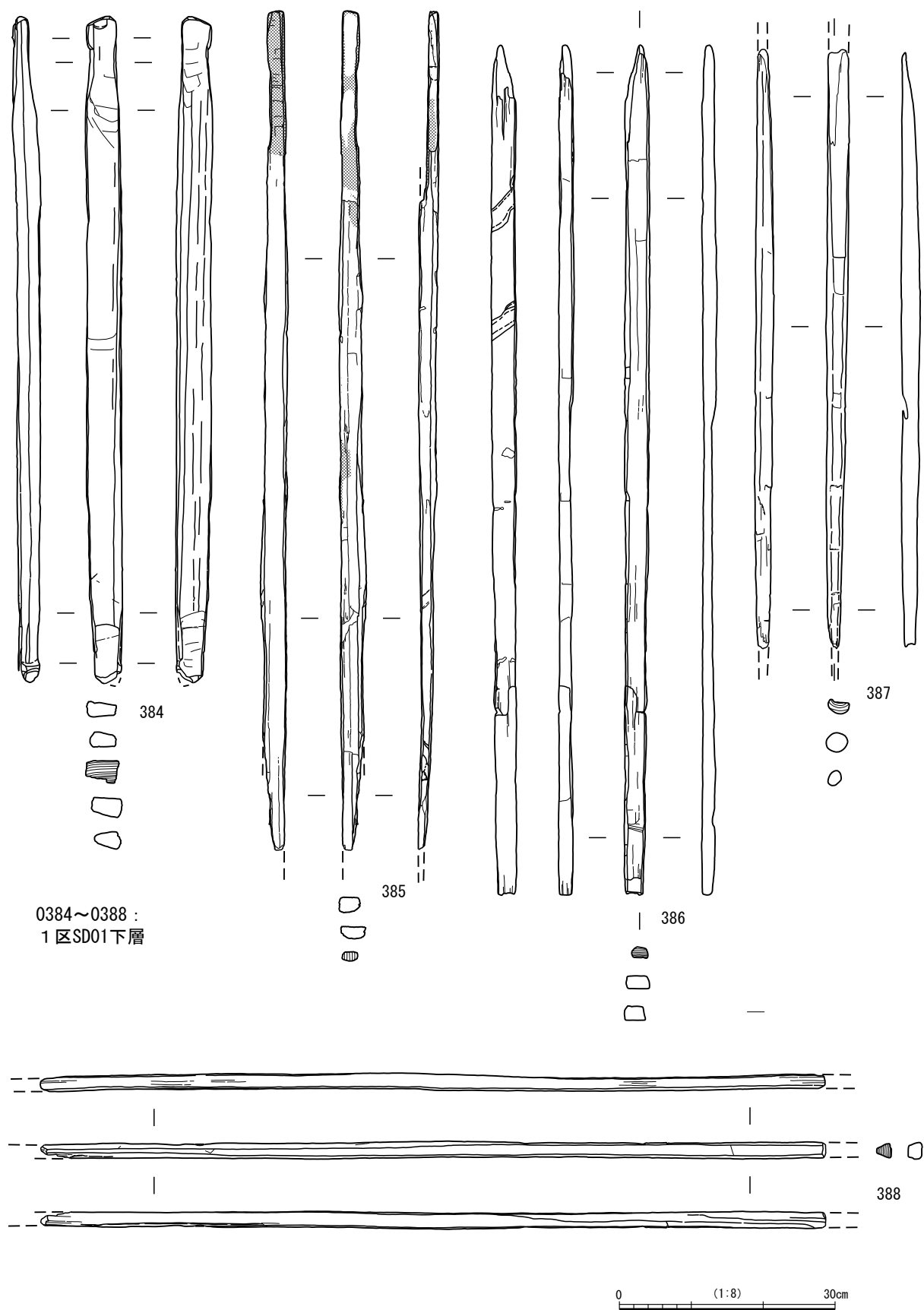


第87図 遺物実測図31 (S=1/8)

374~377 :
1区SD01下層



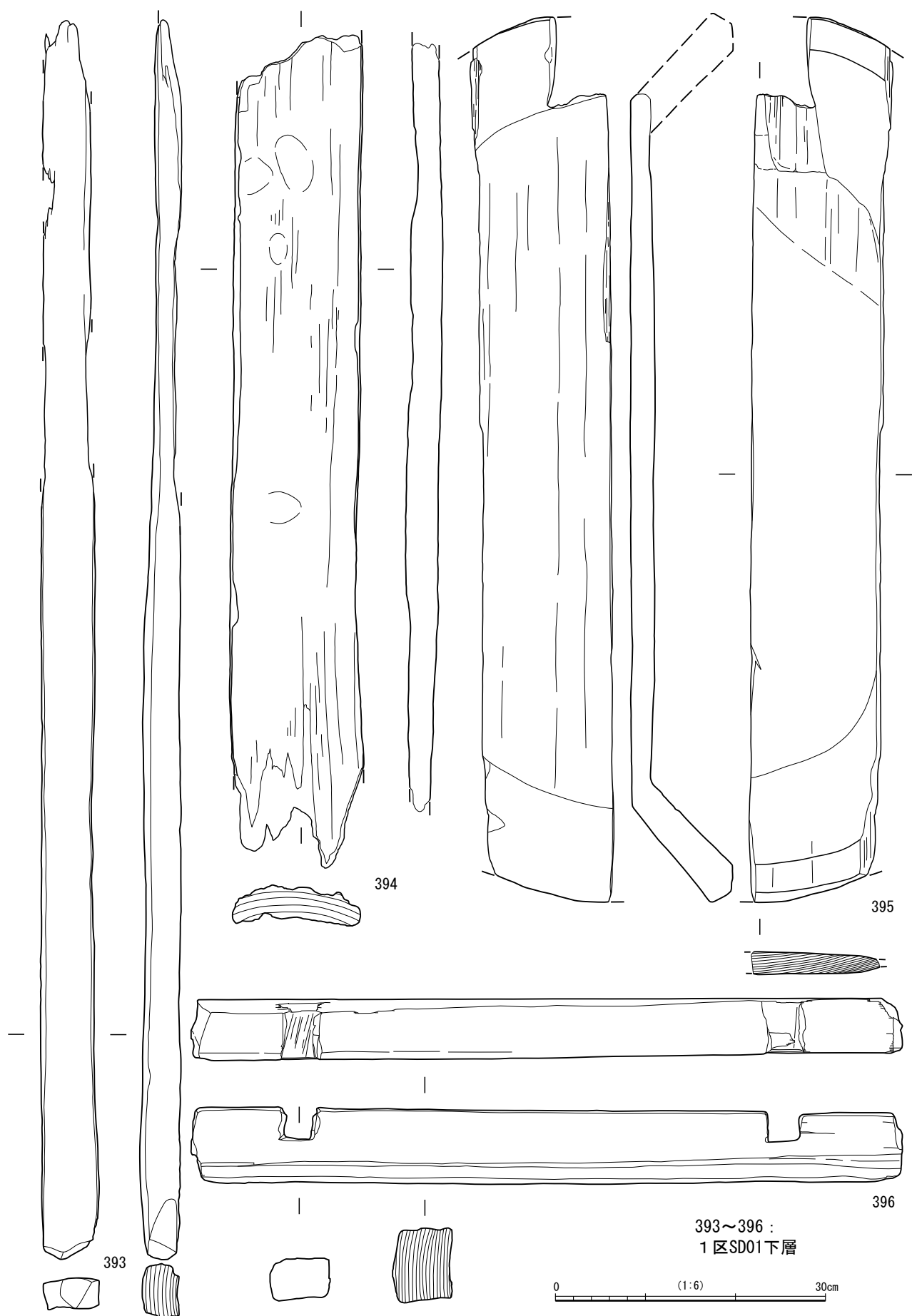
第88図 遺物実測図32 (S=1/8)



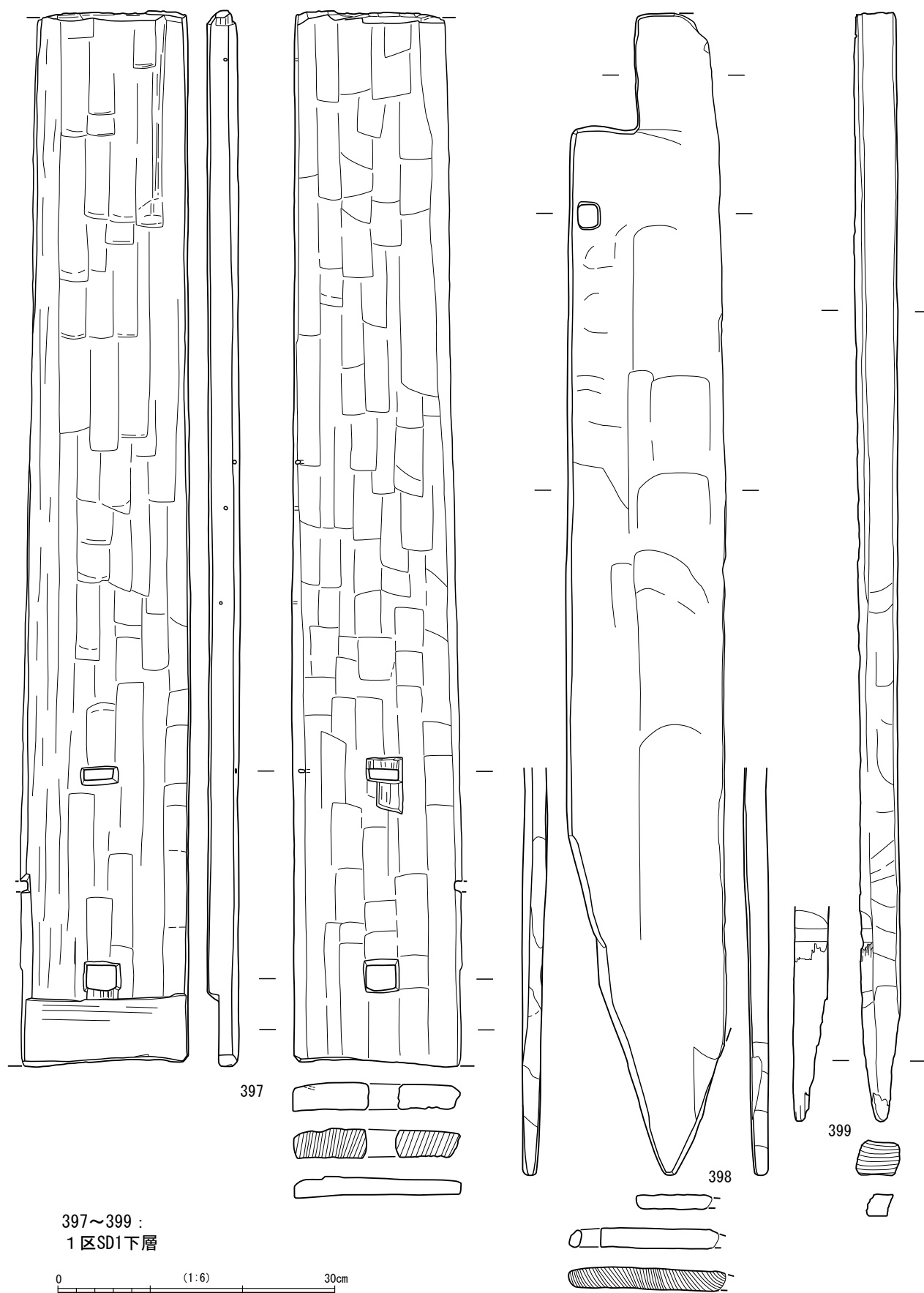
第89図 遺物実測図33 (S=1/8)



第90図 遺物実測図34 (S=1/6)



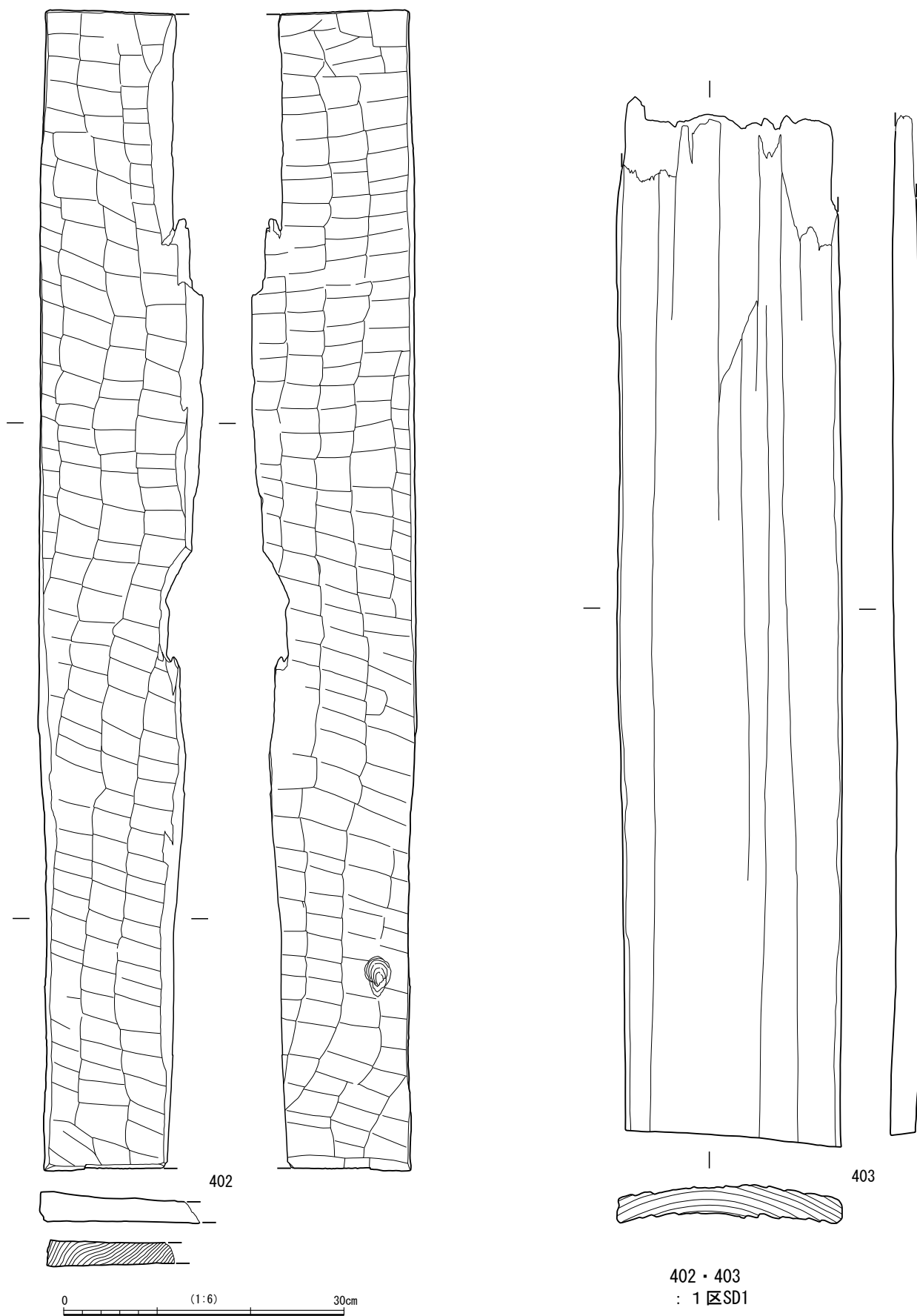
第91図 遺物実測図35 (S=1/6)



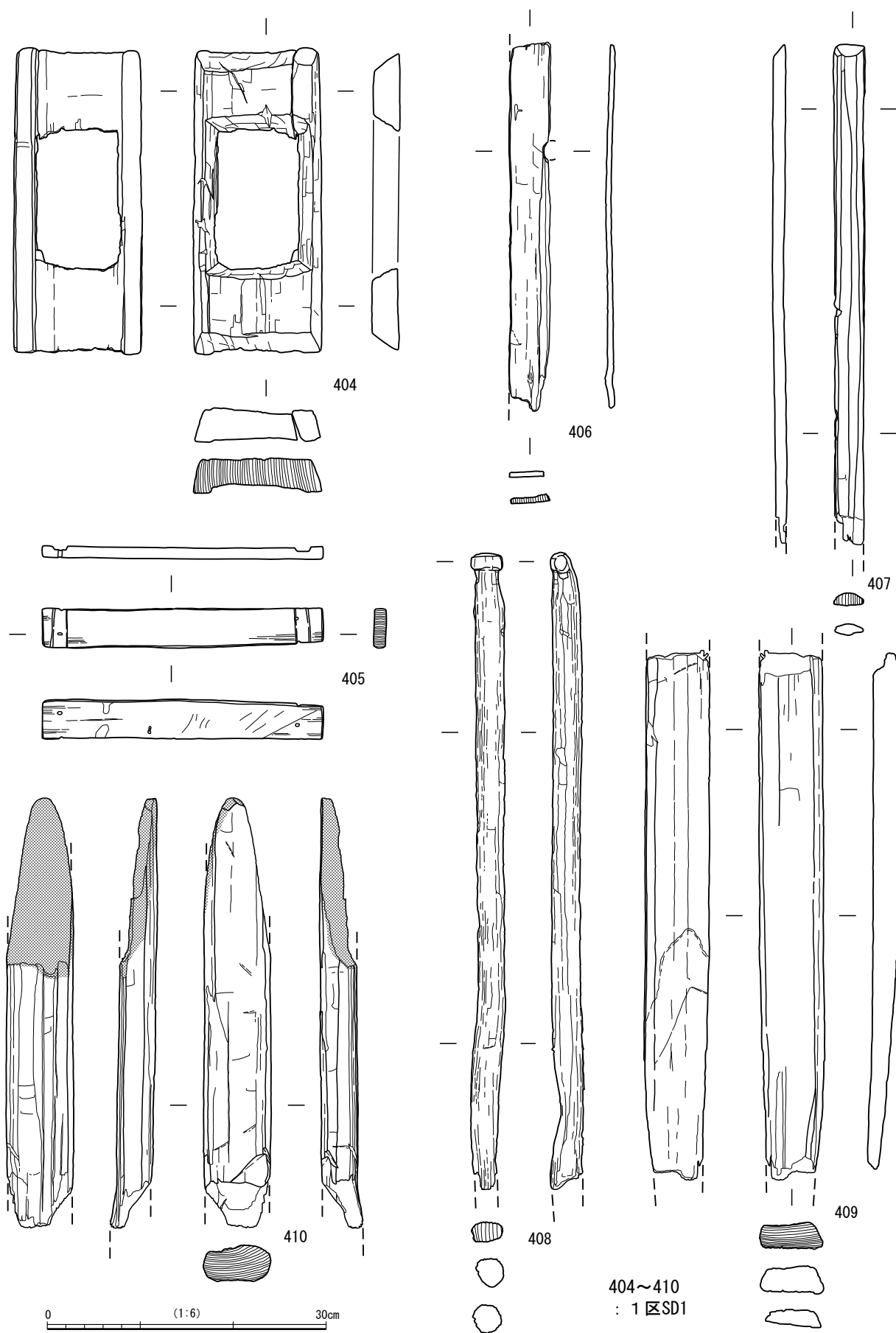
第92図 遺物実測図36 (S=1/6)



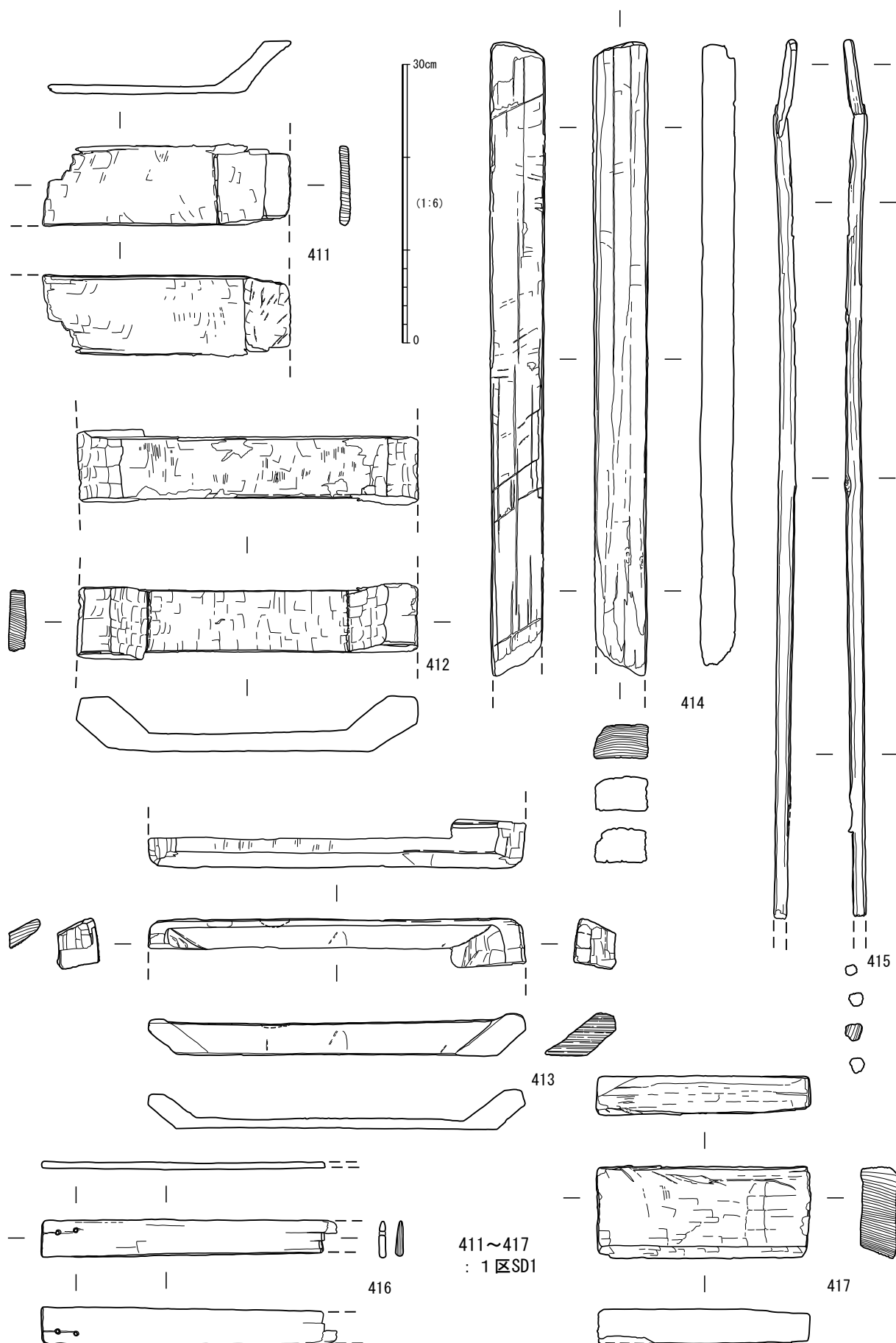
第93図 遺物実測図 37 (S=1/6)



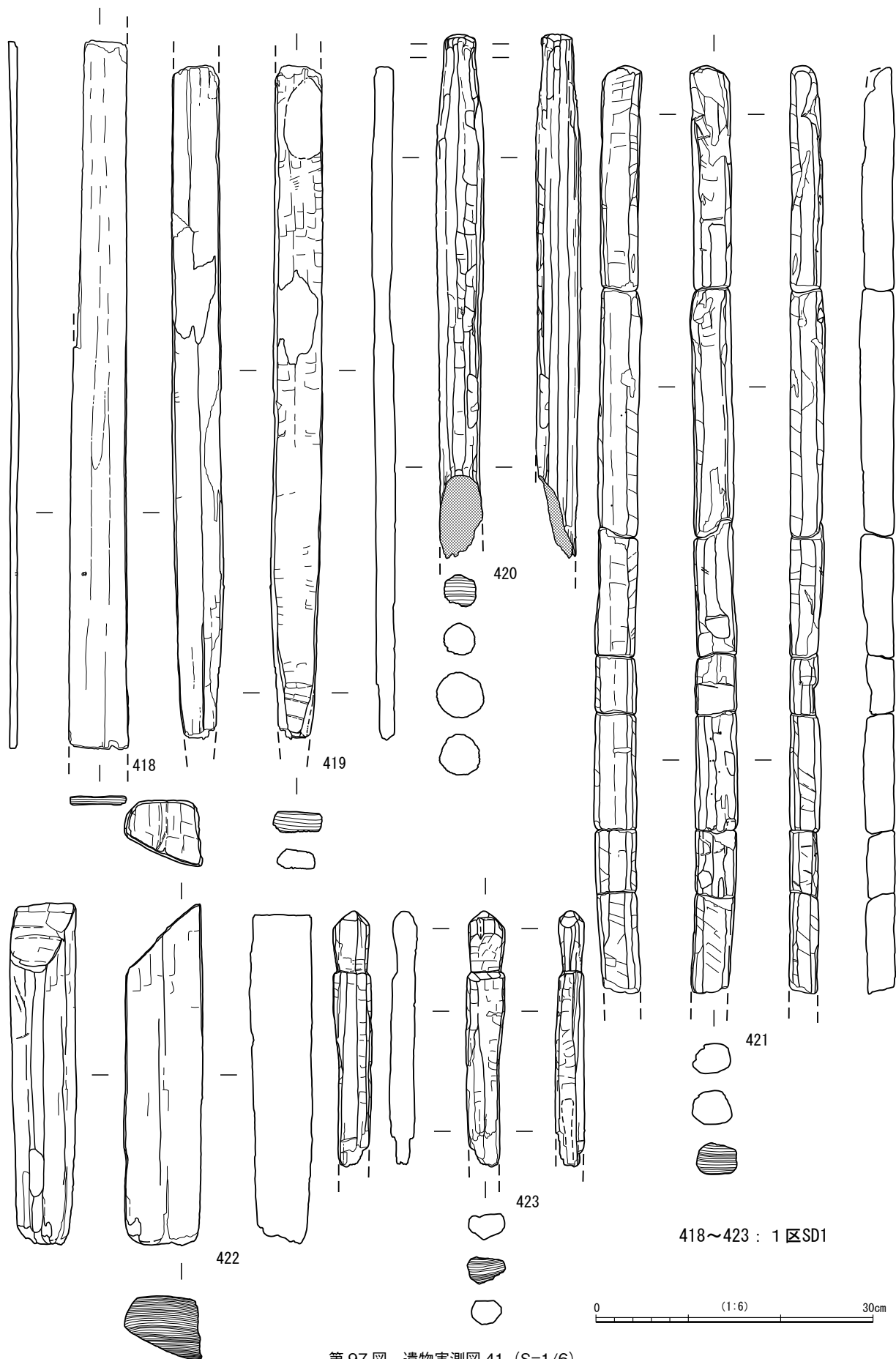
第94図 遺物実測図38 (S=1/6)



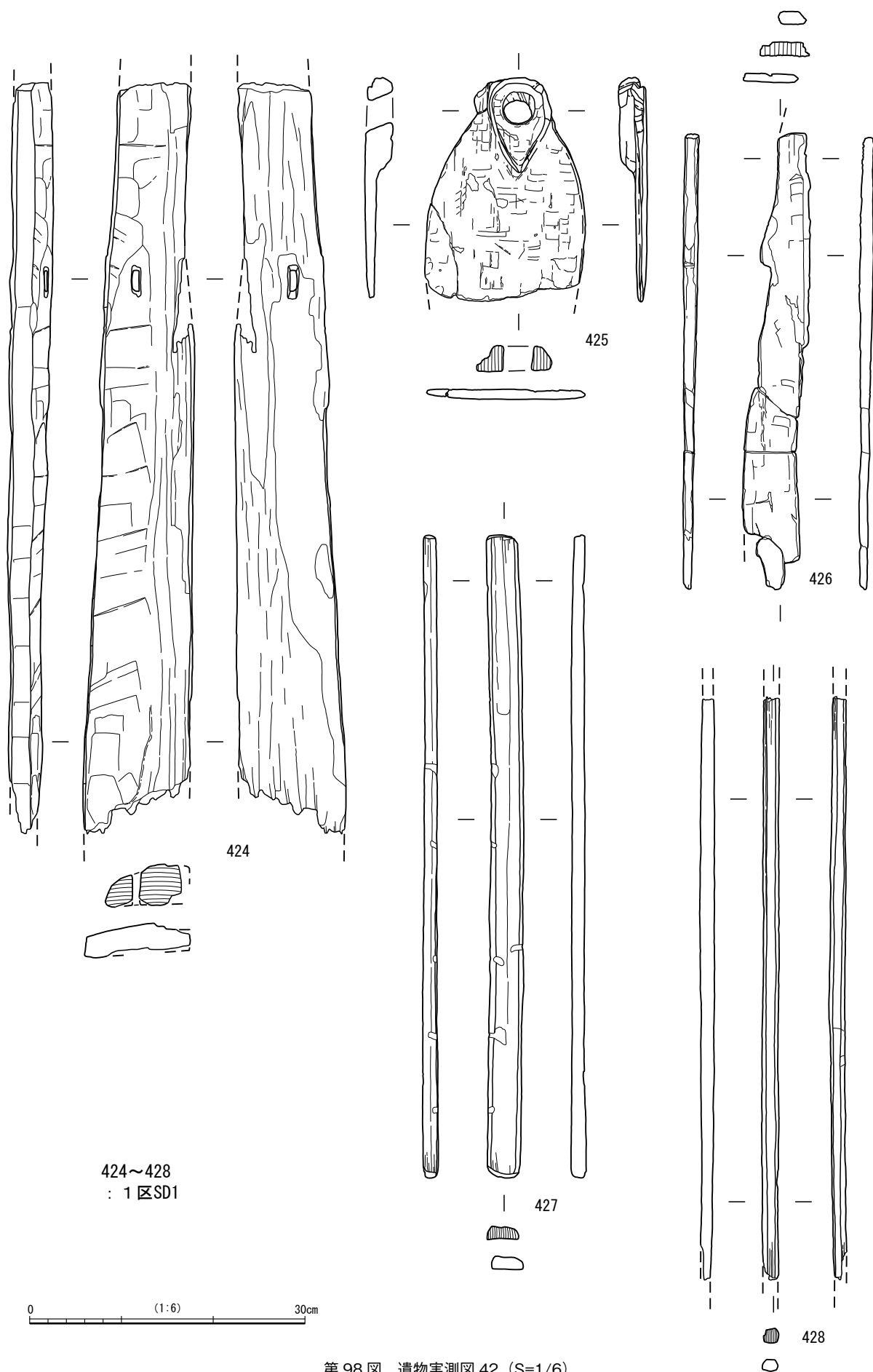
第95図 遺物実測図39 (S=1/6)



第96図 遺物実測図40 (S=1/6)

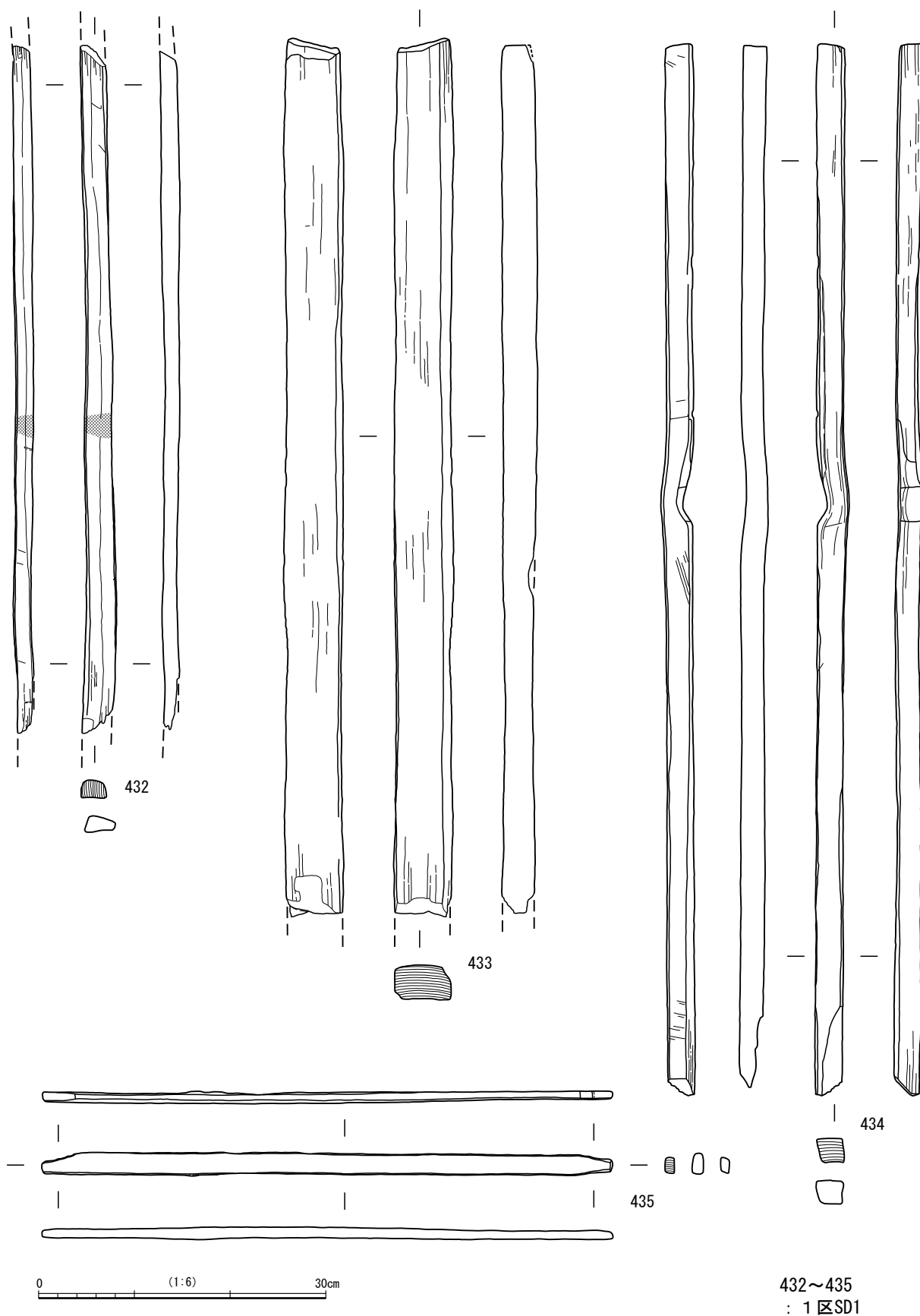


第97図 遺物実測図41 (S=1/6)

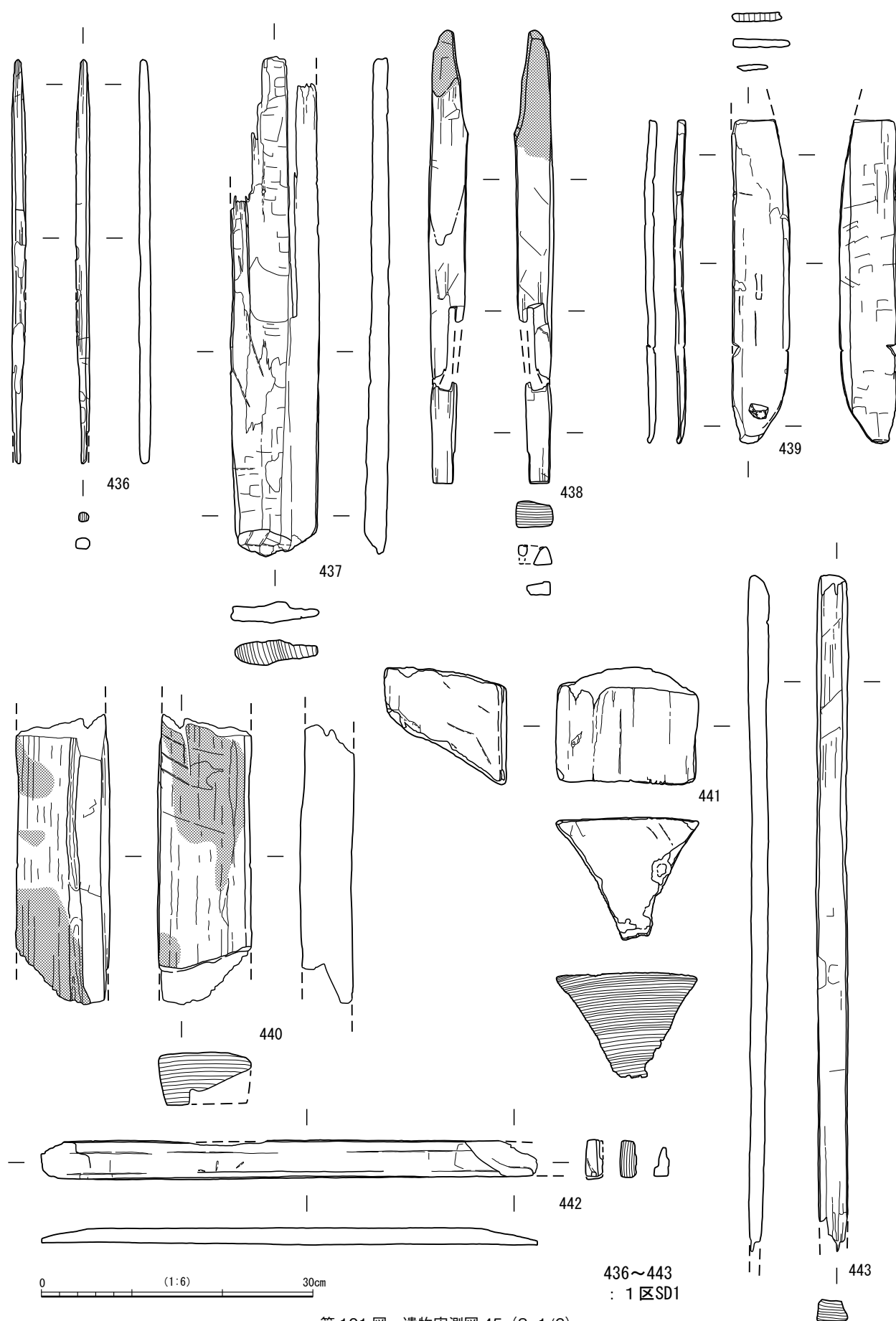




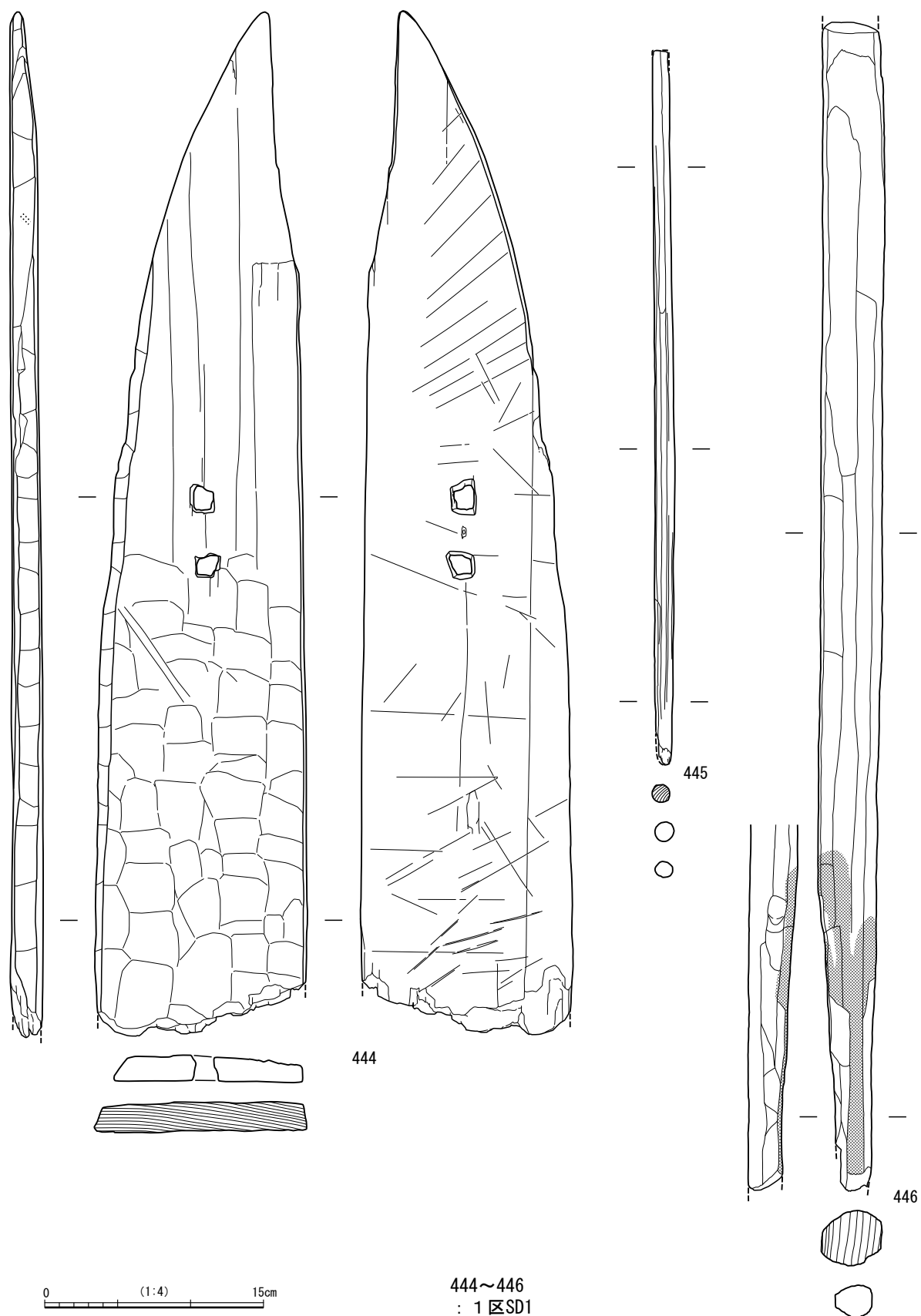
第99図 遺物実測図43 (S=1/6)



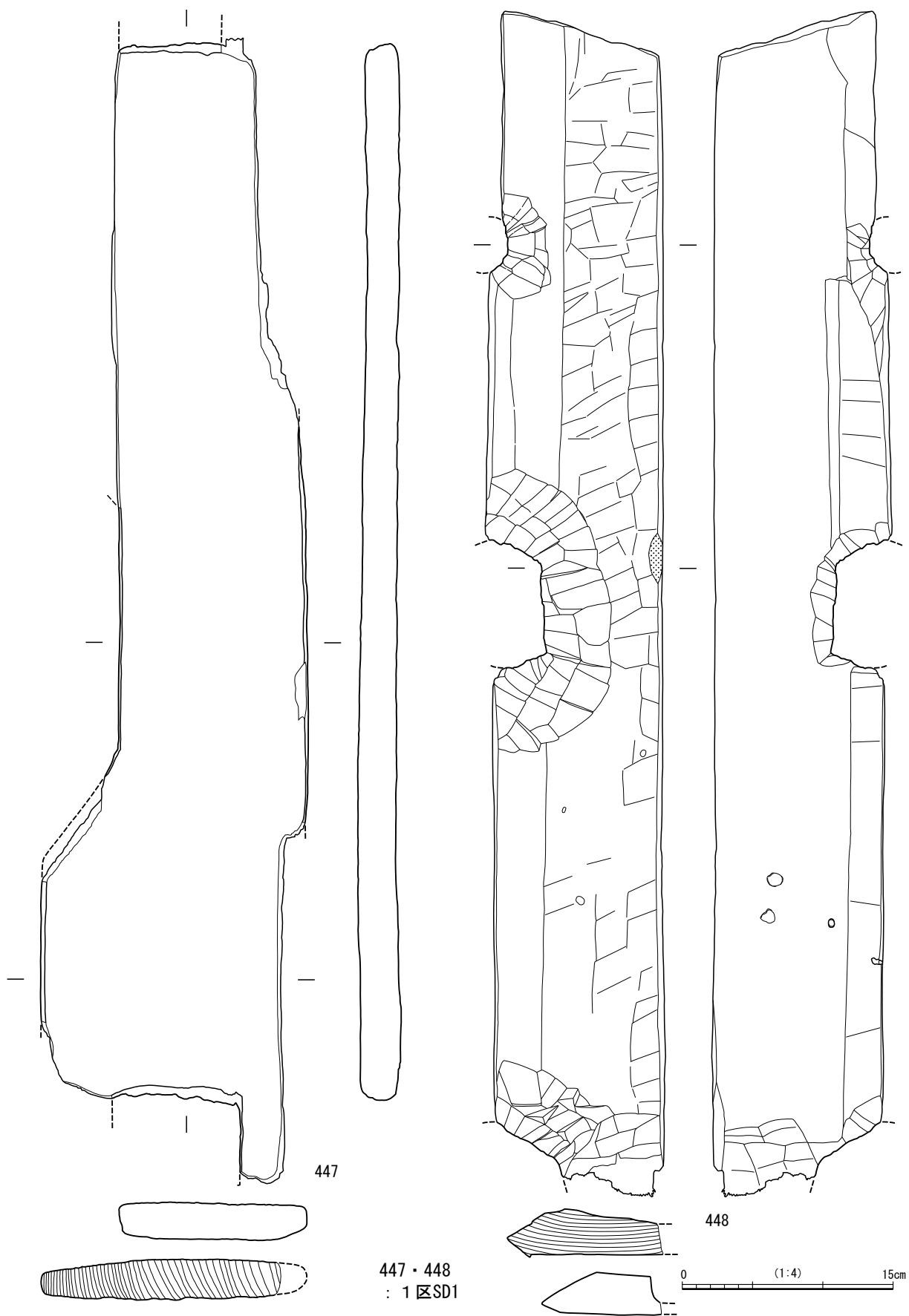
第100図 遺物実測図44 (S=1/6)



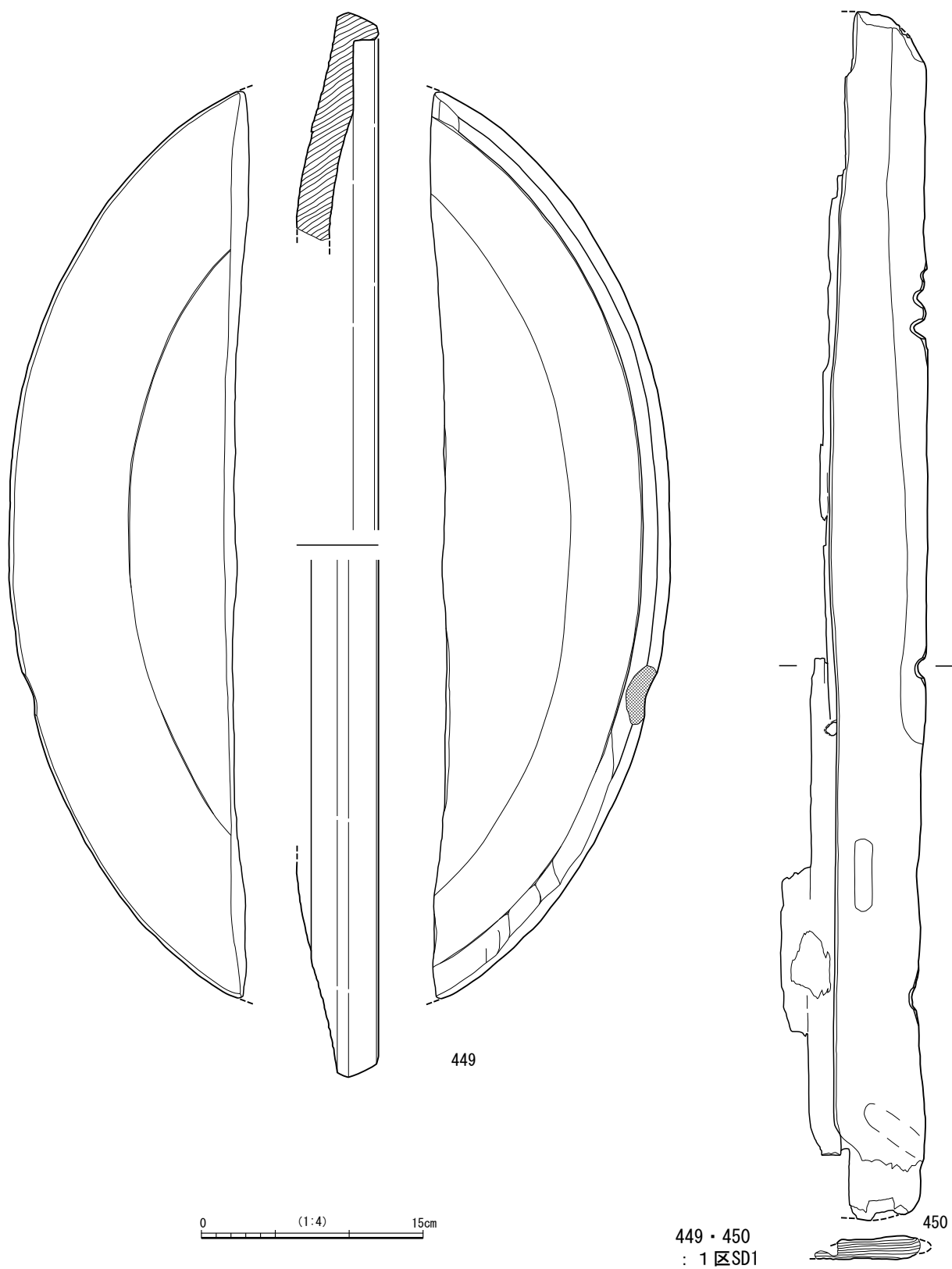
第101図 遺物実測図45 (S=1/6)



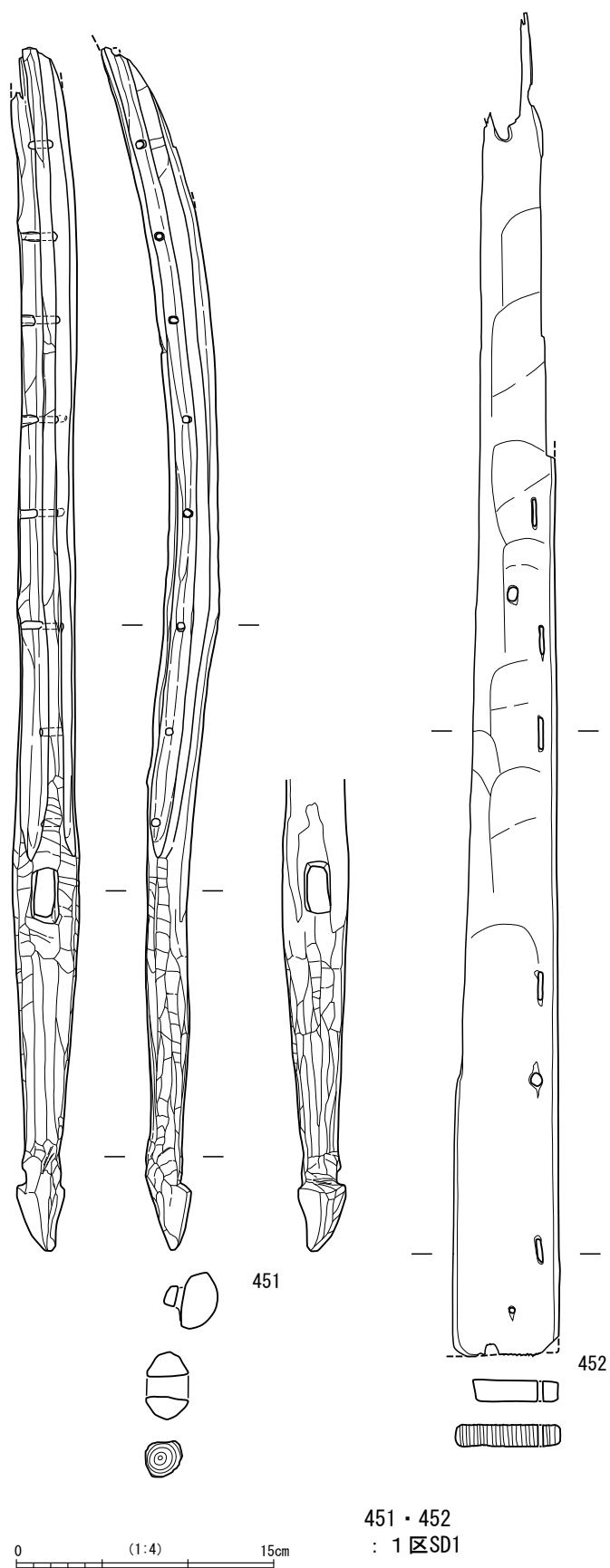
第102図 遺物実測図46 (S=1/4)



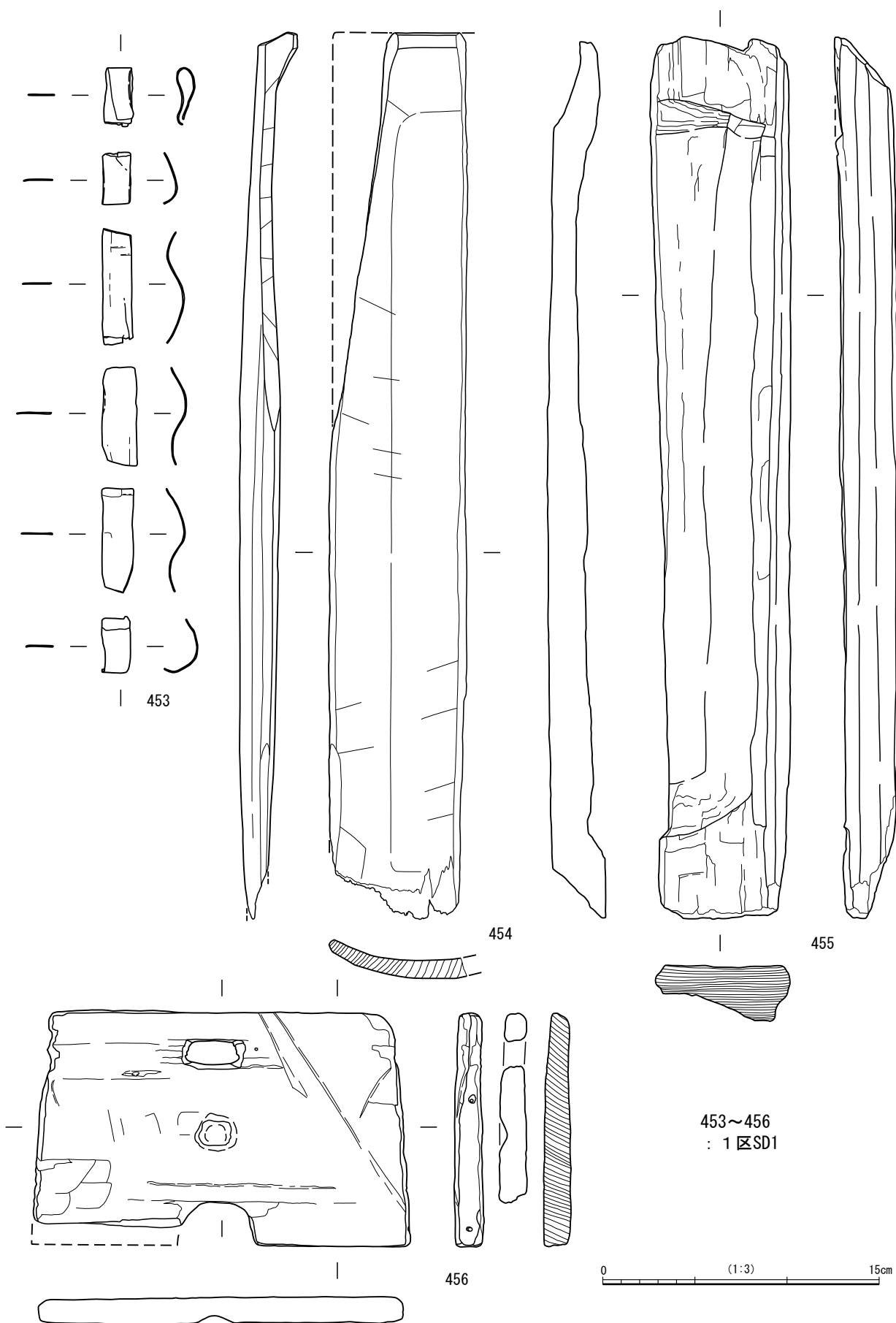
第103図 遺物実測図47 (S=1/4)



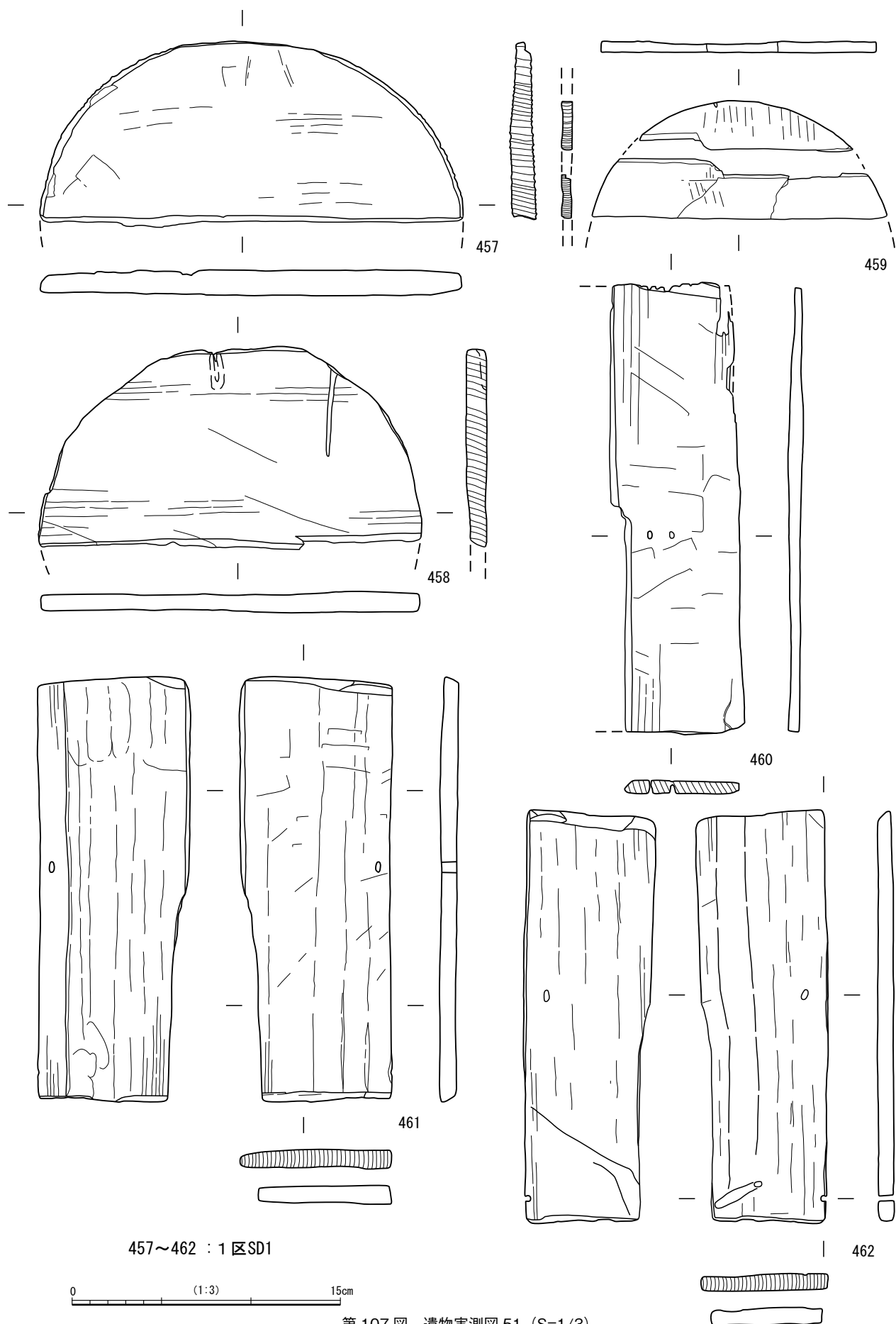
第104図 遺物実測図48 (S=1/4)



第105図 遺物実測図49 (S=1/4)



第106図 遺物実測図50 (S=1/3)





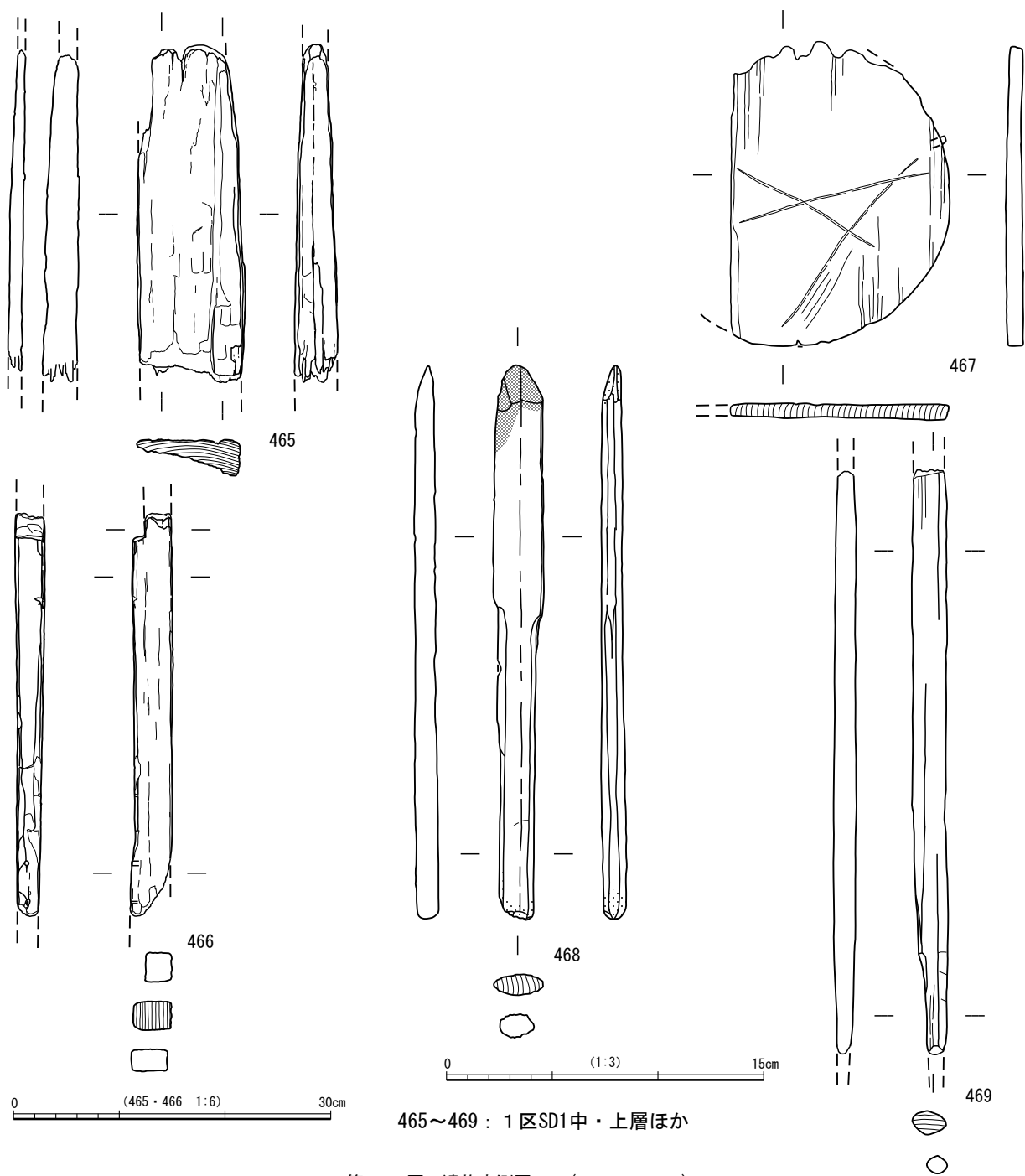
463

464

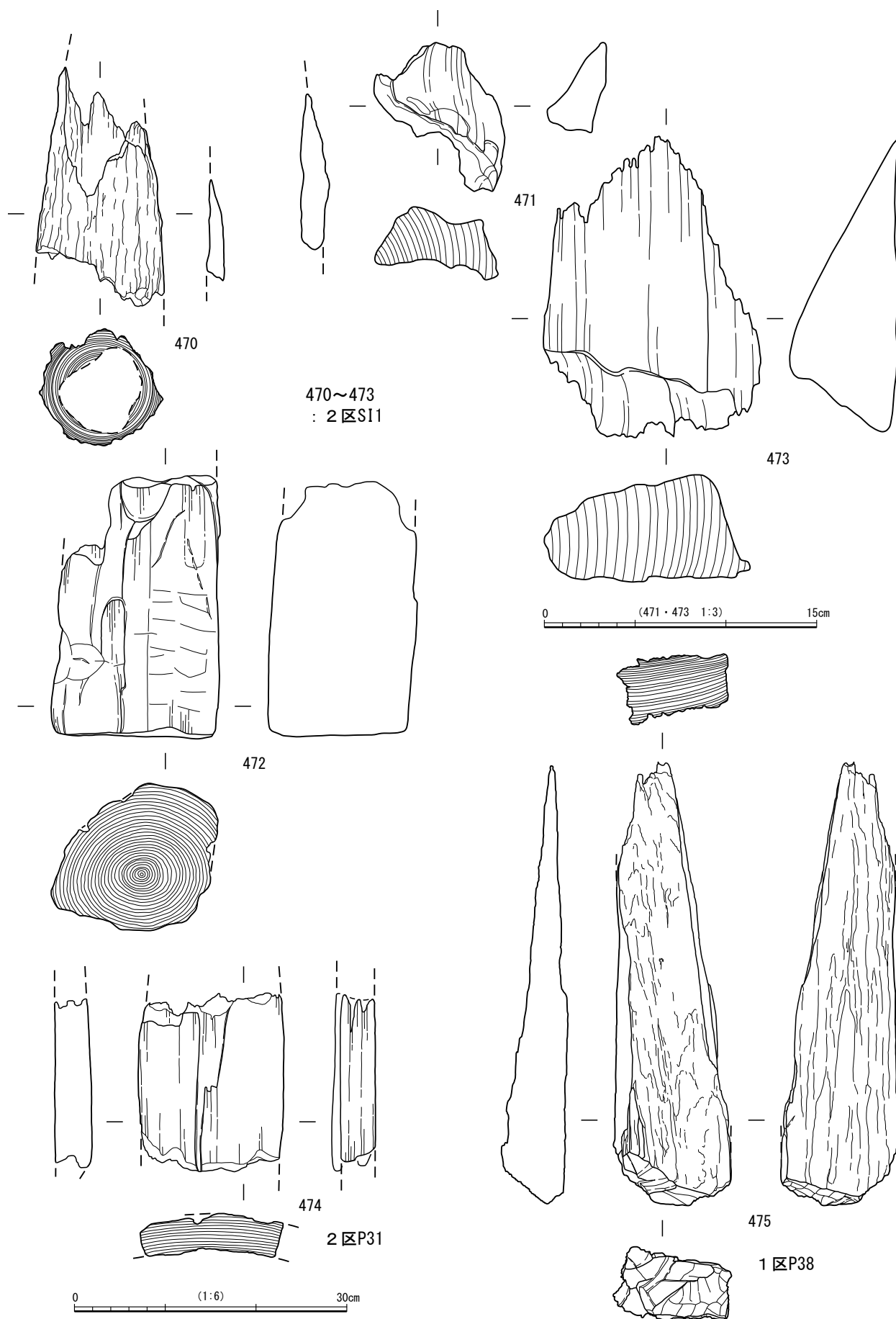
463・464：1区SD1

0 (1:3) 15cm

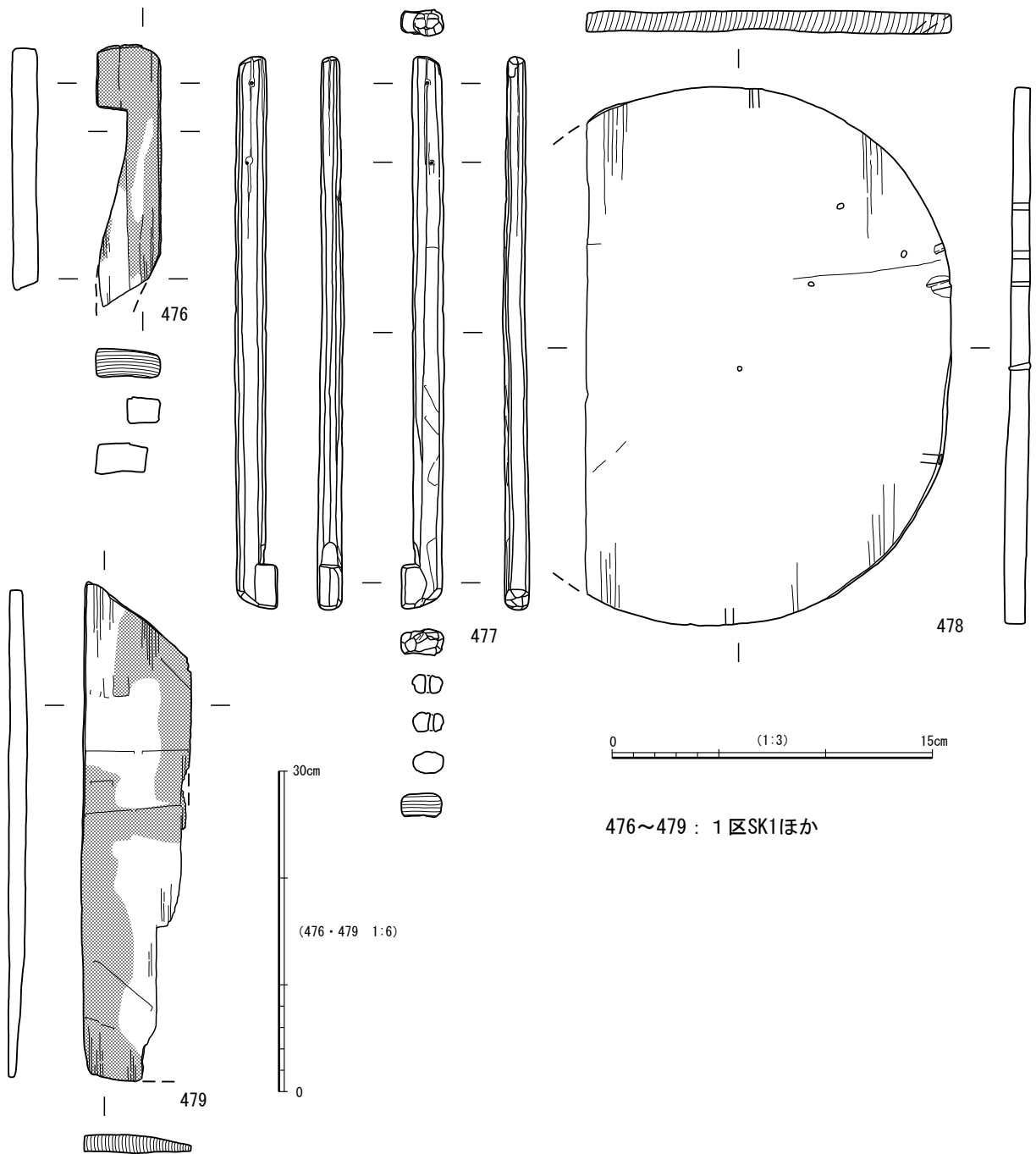
第108図 遺物実測図52 (S=1/3)



第109図 遺物実測図53 (S=1/6・1/3)

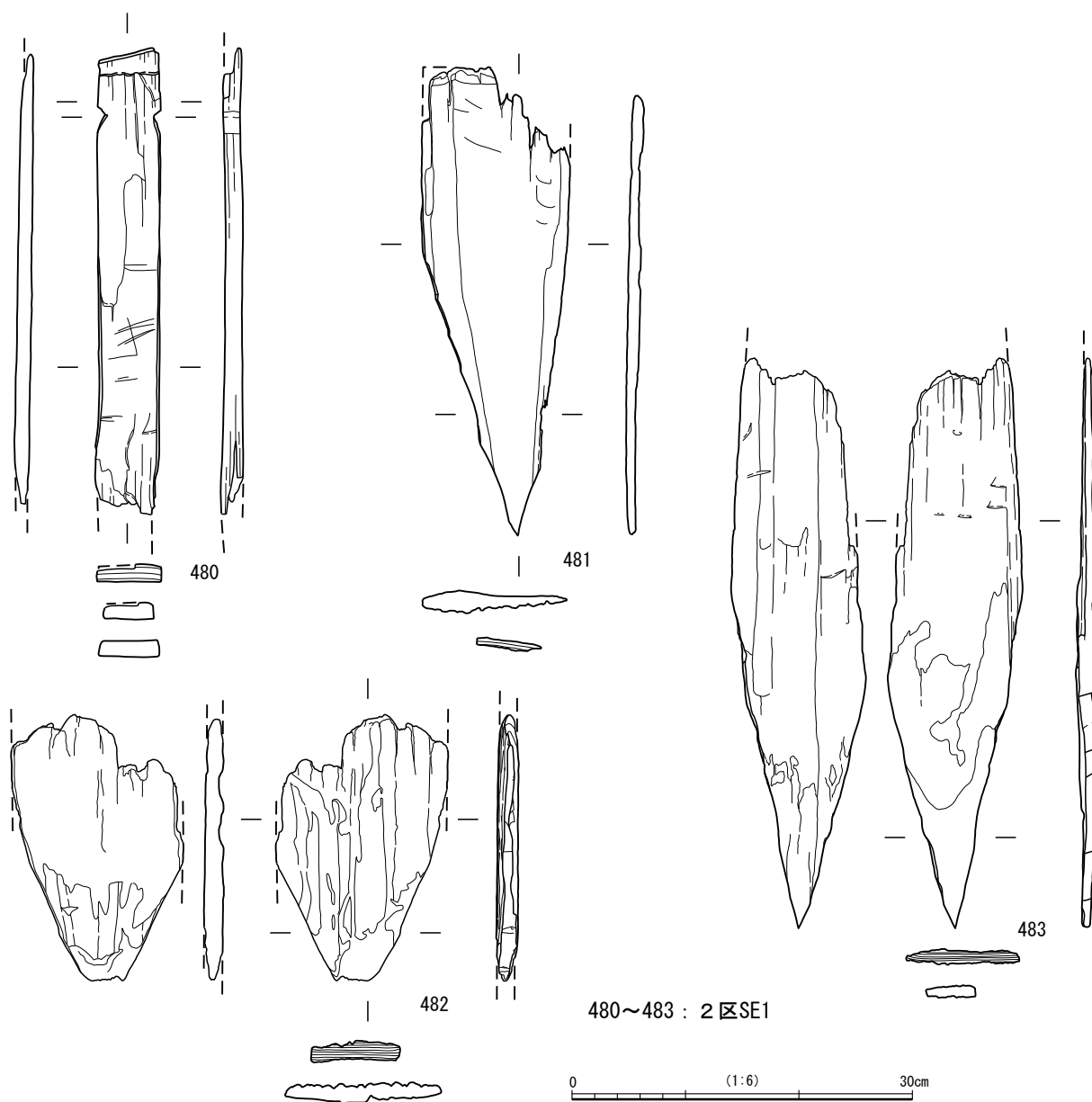


第110図 遺物実測図54 (S=1/6・1/3)

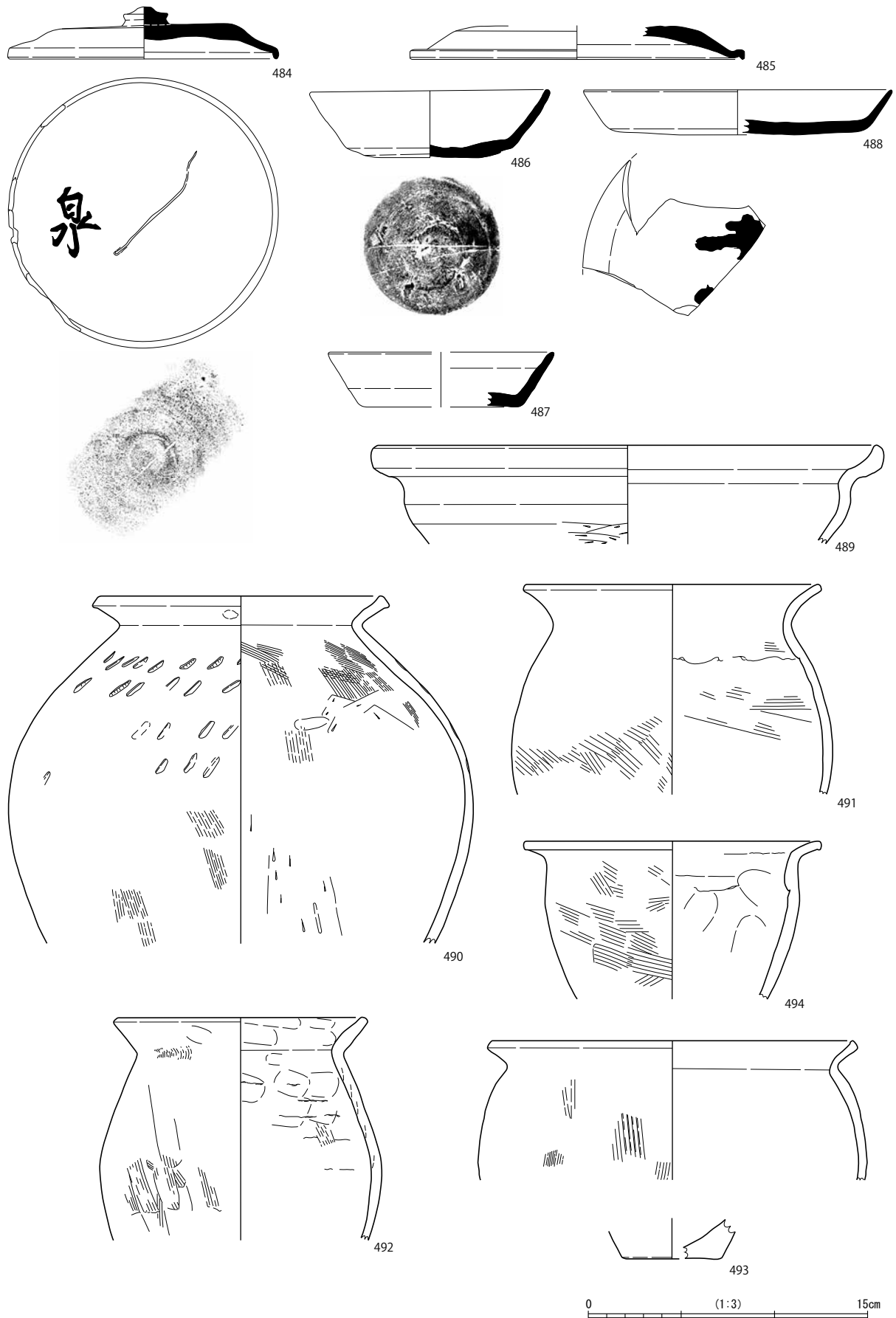


476~479 : 1区SK1ほか

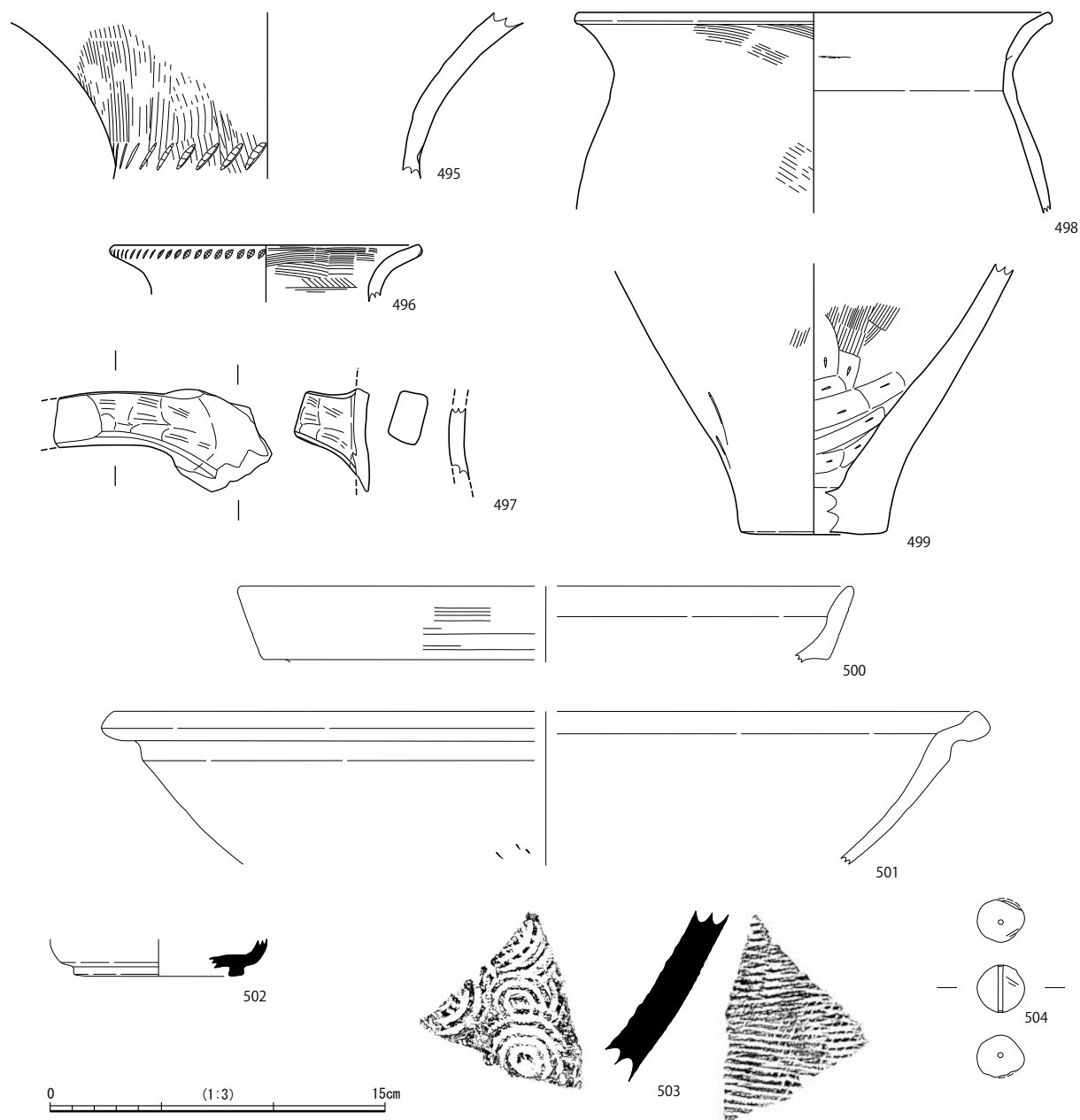
第111図 遺物実測図55 (S=1/6・1/3)



第112図 遺物実測図56 (S=1/6)

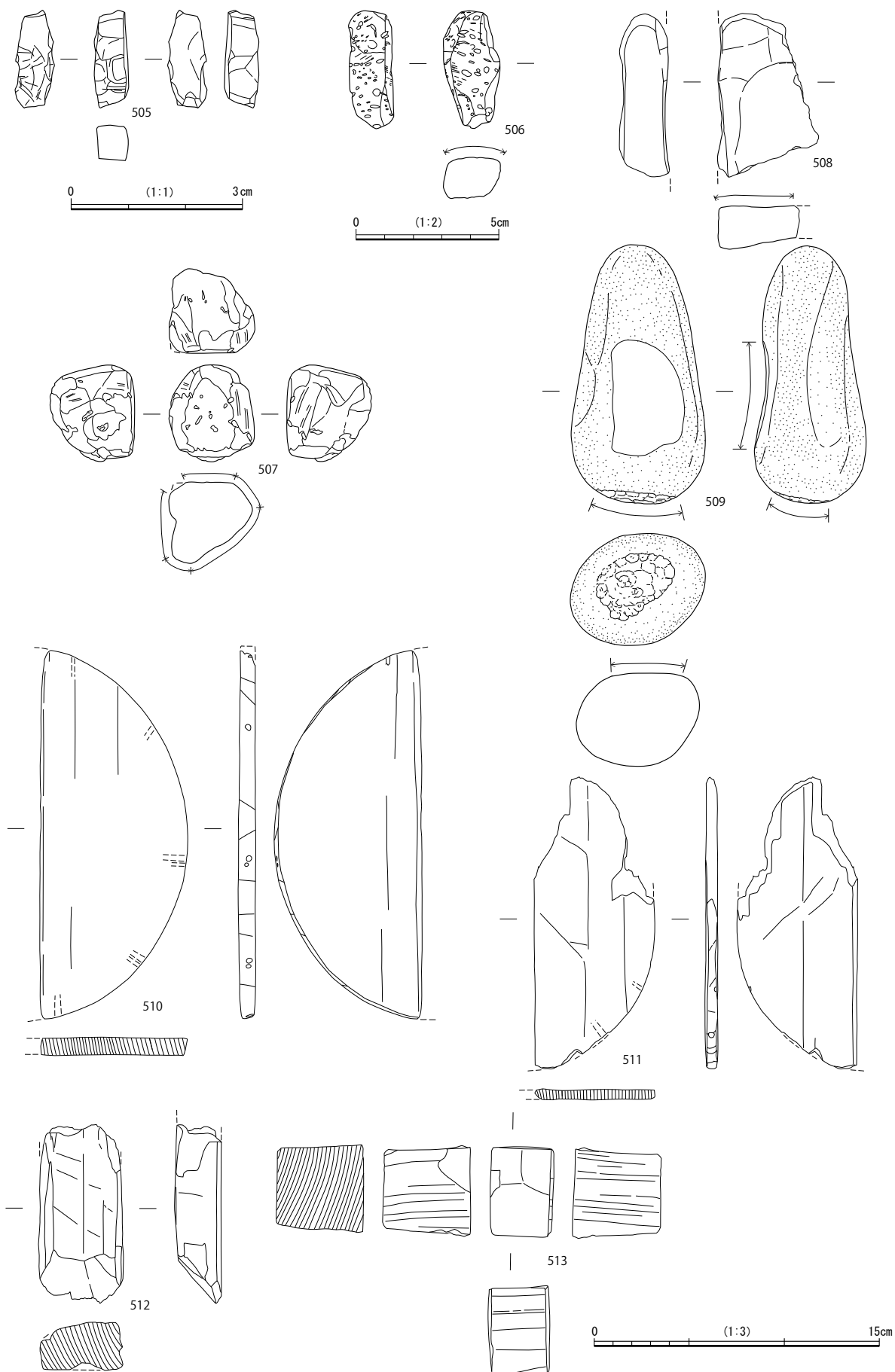


第113図 遺物実測図57(令和2年度調査1)(S=1/3)

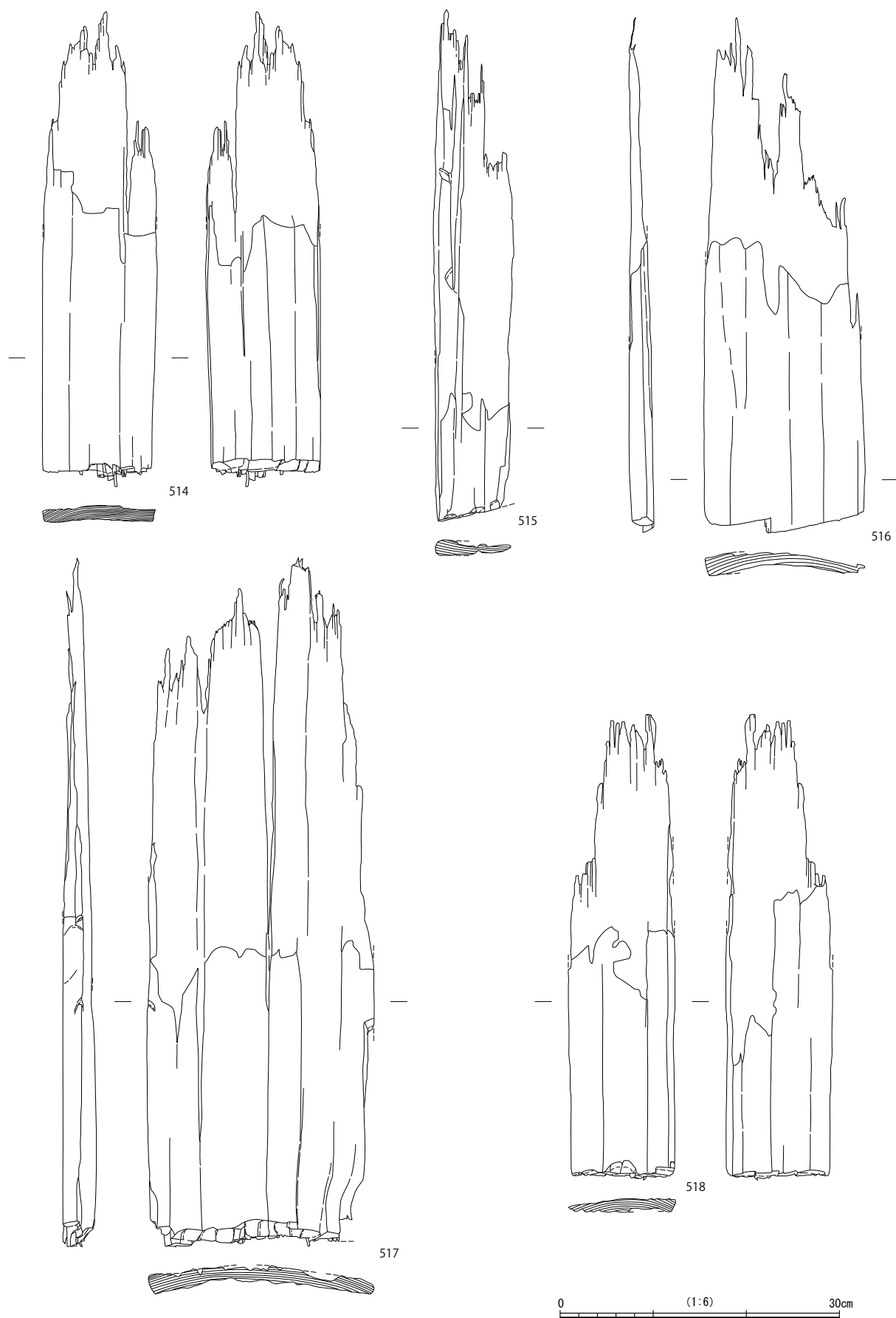


第114図 遺物実測図58(令和2年度調査2)(S=1/3)

第4節 出土遺物



第115図 遺物実測図59(令和2年度調査3)(S=1/1、1/2、1/3)



第 116 図 遺物実測図 60 (令和 2 年度調査 4) (S=1/6)

d 製鉄関連遺物

製鉄関連遺物は、全体で35点を確認し、9点（第116図）を実測し、観察表（第3表）を作成した。1区からの出土が多く、1区SD01（自然河道）とその上層の覆土（Ⅱ層）が殆どを占める。炉壁・炉内滓・流出滓・椀形滓が多く、古代後半以降の鉄鍋破片1点が出土した。2区では遺構検出時の出土で流出滓1点、椀形滓3点が出土した。

519は正面上部に弧状、裏面の1/3に炉壁が確認され、小さな木炭が付着している。正面上部の弧状の炉壁は羽口痕跡と思われ、羽口からの送風により斜め下側に成長した炉内滓であろう。正面・裏面には気泡痕跡が多く、角閃石のような銀色の鉱物（焼結粒子）が多く確認される。520は裏面に炉壁が薄く確認され、横断面が蒲鉾状なので羽口のカバーの可能性もあろうか。正面は黒褐色であるが、上側には赤褐色の付着物がやや多い。炉壁の中でガラス質の軽いものが2点（006・015）ある。015は黒色のガラス質で軽く、羽口の先端が解けた部分と思われ、粘土も少し付着している。一部に粘土が付着した006は炉壁と思われる。521は黒色であり、正面は気泡が大きいので凹凸が大きい、背面は気泡の凹凸は小さく、やや船底状である。焼結粒子を多く含む同じような黒色の鉄滓は第3表008・010があり、共に箱型炉の炉内滓と思われる。不正形で丸みを持つ鉄滓の中で、焼結粒子を含む011・025は炉内滓であろう。

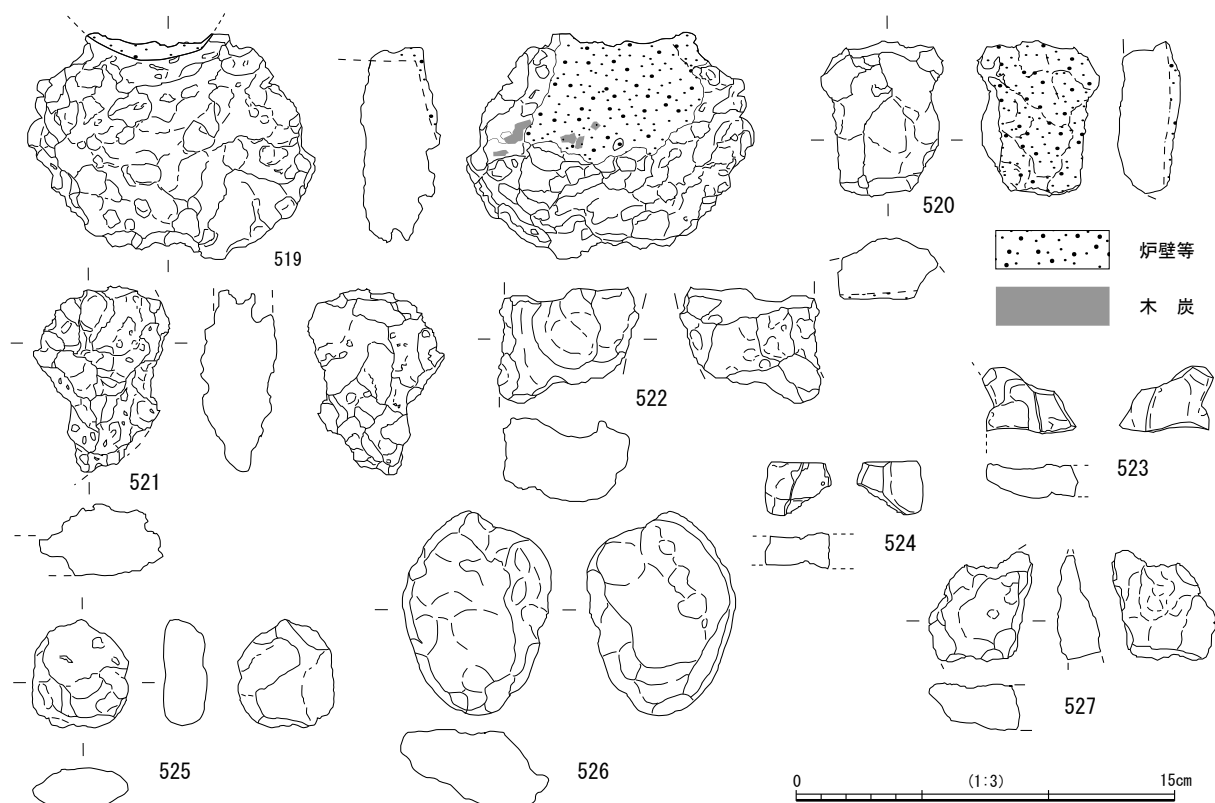
522は幅55mmで断面船底状の鉄滓である。正面の左右は平坦だが中央は大きく窪んでおり、背面は中小の窪みを多く持つ。箱型炉から鉄滓を出す排滓溝に固まった鉄滓と思われ、灰色で焼結粒子を多く含む。523・524は箱型炉から流出した鉄滓（炉外流出滓）が薄く固まったものであり、523の左側面以外は割れている。破断面は1～2mm程度は黒色であるが、内側は暗灰色で焼結粒子を少し含む。灰色で気泡の凹凸と焼結粒子を多く含む鉄滓は、炉底滓ないし炉外流出滓と思われ、005・009・013・014がある。525～527は椀形滓であり、525・527はやや硬く、526は粉っぽい。ほかに椀形滓は7点出土した。また028は鉄鍋破片と思われるが、鑄造品なので鉄本体は残っていない。

製鉄関連遺物は未洗浄の状態であり、522～524を見た時に集落で出土する椀形滓（鍛冶滓）とは違い、製鉄炉（箱型炉）に伴う鉄滓であることを認識した。当調査区から南～南東方向に約1km離れた地点に丘陵（第7図）があり、丘陵からSD01（旧動橋川）を流れてきたとは考えにくい。

箱型炉を操業するには、原料の砂鉄、燃料の木炭、炉壁用の粘土が多量に必要であり、この条件を満たすには平野部よりも丘陵部が便利である。もし、遺跡内で箱型炉を操業していたならば、もっと炉壁や鉄滓の出土が多いであろう。北陸地方では、箱型炉から9世紀中頃～10世紀には竪型炉が主体を占める（関1989）と言い、周辺の箱型炉は小松市林町1号製鉄炉（8世紀中頃の箱型炉、宮下ほか2003）があり、小松市木場B支群2号炉は箱型炉から竪型炉への過渡期の製鉄炉（9世紀後葉、望月2020）がある。よって当遺跡では8～9世紀前半頃の箱型炉を丘陵部に築き、砂鉄から作り出された鉄塊などを舟でSD01（旧動橋川）を利用して集落に運び込み、鉄塊を選別した際に炉壁・炉内滓などを廃棄した。そして不純物の多い鉄塊を精錬して鉄素材の純度を高め、鉄素材を鍛錬して鉄器に加工したのであろう。椀形滓はその2工程で出た精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓の一部であろう。

参考文献

- 関 清 1989 「北陸における鉄生産」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会
 宮下幸夫・望月精司ほか 2003 『林製鉄遺跡』小松市教育委員会
 望月精司 2020 「生産遺跡」『小松市史資料編17 考古』小松市



第117図 遺物実測図61(S=1/3)

第3表 製鉄関連遺物観察表

報告番号	仮番号	実測番号	調査区	グリッド	遺構	分類	長さ	幅	高さ	重量	備考
519	001	ヒ 001	1区	H 18SE	Ⅱ層	炉内滓	89	140	32	275.7	黒色、羽口・炉壁痕あり。炭小片付着
520	022	ヒ 005	1区	H18N	SD01 肩	炉壁	61	48	24	66.6	刃口？
521	003	ヒ 002	1区	I18NE	SD01	炉内滓	72	53	30	73.1	黒色、焼結粒子多
522	032	ヒ 007	2区	西(南側)	遺構検出	流出滓	50	55	33	111.1	灰色、焼結粒子多。断面船底
523	017	ヒ 004	1区	H15SW	Ⅱ層	流出滓	25	37	13	19.0	表面滑らか、焼結粒子少し入る
524	012	ヒ 009	1区	H 18SE	Ⅱ層	椀形滓	42	38	17	29.0	粉っぽい
525	016	ヒ 003	1区	H15	SK2-A区	流出滓	21	26	14	12.5	表面滑らか。焼結粒子少し
526	033	ヒ 008	2区	中(北側)	遺構検出	椀形滓	78	60	30	156.1	粉っぽい
527	024	ヒ 006	1区	H19SW	Ⅱ層	椀形滓	44	40	17	20.2	下面赤褐色
	026		1区	H18	P45	炉内滓	32	20	20	8.2	ガラス質、軽い
	027		1区	H18	P45	炉内滓	30	20	14	8.3	
	006		1区	H 18SE		炉壁？	62	52	26	66.2	白色砂粒面の付着
	029		1区	H 16SW	Ⅱ層	椀形滓	25	21	10	8.0	粉っぽい
	002		1区	H 18SE	Ⅱ層	椀形滓	61	41	20	53.1	粉っぽい。2片に割。楕円形
	011		1区	H 18SE	Ⅱ層	炉内滓	46	28	28	29.3	焼結粒子やや多
	013		1区	I18NE	Ⅱ層	流出滓	22	20	12	9.6	灰色。焼結粒子多い。断面船底
	014		1区	H18 S W	Ⅱ層	流出滓	29	22	15	14.3	灰色、焼結粒子多
	018		1区	H17SE	Ⅱ層	炉内滓	63	49	29	98.9	炭付着
	019		1区	H18SW	Ⅱ層	炉内滓	56	47	29	86.4	焼結粒子多
	020		1区	H18SW	Ⅱ層	炉内滓	49	40	26	48.5	焼結粒子少し入る
	021		1区	H18SW	Ⅱ層	炉内滓	31	30	18	21.2	
	025		1区	H18SW	Ⅱ層	炉内滓	45	30	25	35.0	焼結粒子少し入る
	028		1区	I 19 NW	Ⅱ層	鉄鍋か	37	26	6	5.0	すかさか。外面赤褐色
	030		1区	I 18 N E	Ⅱ層	炉内滓	35	30	20	13.4	
	004		1区	I18NE	SD01	椀形滓	42	30	31	26.4	鍛錬鍛冶・楕円形
	005		1区	I18NE	SD01	流出滓	32	26	19	19.8	灰色、焼結粒子多
	007		1区	H18SW	SD01	椀形滓	41	43	25	31.9	炉床一部付着
	008		1区	H18NW	SD01	炉内滓	53	43	29	70.4	黒色、焼結粒子多
	009		1区	H18NW	SD01	流出滓	48	40	32	78.4	灰色、焼結粒子多。断面船底
	010		1区	H18NW	SD01	炉内滓	45	24	26	37.8	黒色、焼結粒子多
	015		1区	H17NE	SD01	炉壁	25	30	18	13.0	ガラス化
	031		1区	I 18SE	SD01	炉内滓	44	40	24	48.1	
	023		1区	H18N	SD01 肩	椀形滓	29	24	15	8.4	粉っぽい
	034		2区	中(中央)	遺構検出	椀形滓	30	27	15	12.2	椀形
	035		2区	中(中央)	遺構検出	椀形滓	29	19	21	9.6	歪

第4表 土器等観察表 1

報告 番号	管理 番号	地区	グリッド	出土遺構等	細分区・層位・ 取り上げ番号等	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調(内)	色調(外)	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	備考
1	0004	1	H-17	SD1	下層、No.1、16、17	弥生	壺	18	5.9	41.4	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・赤色粒	良	板ナデ、ハケメ、ヘラミガキ	ハケメ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	
2	0017	1	H-17	SD1	下層、No.18	弥生	壺	13	—	(24.6)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・赤色粒	良	ヨコナデ、ナデ、板ナデ、指オサエ	ヨコナデ、ヘラミガキ、ハケメ、タダキ	
3	0005	1	H-17	SD1	下層No.3、12、15、17	弥生	壺	13.6	(4.9)	31.9	褐灰	鈍い黄橙	石英・長石・白色粒・赤色粒	良	ナデ、ハケメ、指ナデ、指オサエ	ナデ、タダキ、ハケメ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	
4	0011	1	I-18 SW	SD1	下層	弥生	甕	15.4	2	15.8	鈍い黄橙	浅黄橙	砂多、石英・長石・チャート・赤色粒	良	ヘラケズリ	ハケメ	外面煤、内面有機物集げ痕跡、有段口縁、擬凹線的
5	0024	1	H-17	SD1	下層、No.36	土師器	鉢	(10.3)	4.2	4.9	鈍い黄橙	灰黄褐	石英・長石・白色粒	良	ハケメ	ナデ、ハケメ、ヘラケズリ	
6	0040	1	H-17 SW	SD1	層、下層 ピート	弥生	鉢?	(13.0)	—	(6.35)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	ハケメ	ハケメ	丸底を成形
7	0006	1	H-17	SD1	下層、No.17	土師器	壺	14.8	6.2	40.5	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・赤色粒	良	ハケメ、ヘラミガキ、ナデ、指オサエ	ハケメ、ヘラミガキ、ヘラケズリ、指オサエ	
8	0018	1	H-17	SD1	下層、No.21、22	弥生	壺	(11.7)	—	22.2	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	ナデ、ヘラミガキ、指オサエ	ヘラミガキ	
9	0032	1	H-17	SD1	下層、No.47	土師器	壺	(10.5)	—	(9.3)	赤褐	赤褐	石英・長石	良	ヘラミガキ、ヨコナデ、絞リ痕	ヘラミガキ、ヨコナデ	口唇部4～5のヘラ描き沈線
10	0007	1	H-17	SD1	下層、No.5、6、17	弥生	有段口縁壺	15.1	4.5	30.8	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・赤色粒	良	板ナデ、ハケメ、指オサエ	ハケメ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	頸部工具痕
11	0029	1	H-17	SD1	下層、No.46	弥生	甕	15.5	—	(14.3)	鈍い黄橙	黒	石英・長石・赤色粒	良	ハケメ、指ナデ	ハケメ、ナデ	外面煤
12	0008	1	H-17	SD1	下層、No.17	弥生	壺	—	4.5	(15.3)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・赤色粒	良	ナデ、板ナデ、ハケメ、指オサエ	ハケメ、ヘラミガキ	
13	0012	1	H-17	SD1	下層、No.12、17	弥生	壺	16.6	5.2	38.8	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・赤色粒	良	ナデ	ハケメ、ナデ、ヘラミガキ	
14	0010	1	H-17	SD1	下層、No.6・17	弥生	壺	—	(3.9)	(30.3)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・赤色粒	良	板ナデ、ナデ	ハケメ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	
15	0020	1	H-17	SD1	下層、No.29、34、37	土師器	二重口縁壺	(15.3)	—	(9.9)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・白色粒	良	ヘラミガキ、指ナデ	ヨコナデ、ハケメ、ヘラミガキ	
16	0014	1	H-17	SD1	下層、No.13	弥生	有段口縁壺	(13.8)	—	(7.4)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・赤色粒	良	ナデ、指オサエ	ナデ、ハケメ	
17	0038	1	H-18 NW	SD1	下層砂	弥生	有段口縁壺	14	—	(4.3)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	長石、小礫	良	ヨコナデ、指オサエ	ナデ	擬凹線
18	0046	1	H-17 NW	SD1	下層、中層	土師器	二重口縁壺	(18.6)	—	(9.9)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	指ナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ	
19	0026	1	H-17	SD1	下層、No.40	弥生	壺	16.9	—	(6.8)	橙	橙	石英・長石	良	ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ	
20	0033	1	H-17	SD1	下層、No.47、ピート	土師器	高坏	(16.0)	—	(4.4)	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石・小礫	良	ヘラミガキ、ヘラケズリ	ヘラミガキ、ヘラケズリ	赤彩
21	0023	1	H-17	SD1	下層、No.35、37	土師器	鉢	12.9	脚径6.1	8.2	鈍い黄褐	灰黄褐	石英・長石・白色粒・黒色粒	良	ヘラミガキ、ナデ	ヘラミガキ、ナデ	
22	0015	1	H-17	SD1	下層、No.2、4、7、8、13、14、16、17	弥生	壺	16.4	3.2	38.2	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・赤色粒	良	指ナデ、板ナデ、指オサエ	ハケメ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	刻み
23	0036	1	H-18 NW	SD1	倒木根元 他	弥生	有段口縁甕	(22.0)	—	(6.8)	灰白	灰白	石英・長石	良	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ	外面煤
24	0031	1	I-18	SD1	下層、No.45	弥生	甕	(12.0)	—	(9.0)	鈍い橙	鈍い橙	石英・長石・赤色粒	良	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ	外面煤
25	0030	1	H-17	SD1	下層、中層、No.26、44	弥生	壺	13.7	—	(7.8)	褐灰	灰黄褐	石英・長石	良	ヨコナデ、ハケメ、指ナデ	ヨコナデ、ハケメ	
26	0062	1	H-17	SD1	下層、No.32、33	土師器	甕	(16.0)	—	(5.2)	鈍い黄橙	黒	石英・長石・チャート	良	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ハケメ	外面煤
27	0037	1	H-17 SW	SD1	下層、No.31、37	土師器	高坏	(21.0)	脚径12.0	12.8	浅黄橙	浅黄橙	長石・赤色粒	良	ヘラケズリ、ナデ	ヘラミガキ	脚4方透し
28	0043	1	H-17 SE	SD1	下層	弥生	高坏	—	(11.2)	(7.0)	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石	良	ハケメ	ヘラミガキ	外面と受部内面赤彩

第4表 土器等観察表 2

報告 番号	管理 番号	地区	グリッド	出土遺構等	細分区・層位・ 取り上げ番号等	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調(内)	色調(外)	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	備考
29	0016	1	H-17	SD1	下層、No.11、16、 17	弥生	壺	15.2	5.5	37.8	純い黄橙	純い黄橙	石英・長石・赤色粒	良	ハケメ、板ナデ、指ナ デ、ヘラミガキ	ハケメ、ナデ	刻み
30	0041	1	H-17 SW	SD1	下層粗砂	土師器	甕	(12.2)	—	(5.3)	黄灰	純い黄橙	石英・長石・小礫	良	ハケメ	ヨコナデ、タタキ	
31	0042	1	H-17 NE	SD1	下層粗砂	土師器	甕	(13.5)	—	(3.5)	純い黄橙	灰黄褐	石英・長石・小礫	良	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ	外面煤
32	0047	1	H-18 SW	SD1	下層	土師器	甕	15	—	(5.3)	純い黄橙	純い黄橙	石英・長石・黒色粒	良	板ナデ、ヘラケズリ	タタキ	
33	0022	1	H-17	SD1	下層、No.28、下層	土師器	甕	(22.9)	—	(22.1)	純い黄橙	純い黄橙	石英・長石	良	ヨコナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラケズリ、ハケメ	外面煤付着
34	0021	1	H-17	SD1	下層、No.33	土師器	壺	—	5	30.7	純い黄橙	純い黄橙	石英・長石・雲母	良	板ナデ	ハケメ、ヘラミガキ、ヘラケズ リ	外面煤、籠目痕
35	0039	1	H-18 NW	SD1	下層砂+粘	土師器	甕	11.8	(3.9)	(26.0)	純い黄橙	純い黄橙	石英・長石	良	板ナデ、ハケメ、ヨコ ナデ	ヨコナデ、タタキ、ヘラケズリ、 ハケメ	外面煤、内面下部にコゲ
36	0025	1	H-17	SD1	下層、No.39	土師器	甕	20.8	—	21.4	純い黄橙	純い黄橙	石英・長石・赤色粒	良	ヨコナデ、ハケメ、指 オサエ	ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ	外面煤、被熱で内外面剥 落
37	0027	1	H-17	SD1	下層、No.42	弥生	甕	(16.6)	—	(11.2)	純い黄橙	黒	石英・長石・チャート	不良	ヨコナデ、板ナデ	ヨコナデ、タタキ	外面煤
38	0028	1	H-17	SD1	下層、No.30、43、 44	弥生	壺	18.3	—	(16.5)	褐灰	純い黄橙	石英・長石・チャート	良	ヨコナデ、ナデ	ハケメ、ヨコナデ	
39	0092	1	H-17 SE	SD1	下層、中層、No.28、 33、37、38	弥生	壺	—	—	(19.1)	純い黄橙	純い黄橙	石英・長石・赤色粒	良	ハケメ、ナデ	ハケメ、ヘラミガキ	
40	0051	1	H-17 NW	SD1	下層	弥生	有段口 縁重	(13.6)	—	(5.1)	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石・赤色粒、 小礫	良	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	黒斑
41	0044	1	H-18 NW	SD1	下層	弥生	有段口 縁重	(11.6)	—	(11.6)	純い黄橙	純い黄橙	石英・長石・赤色粒	良	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ハケメ	外面煤
42	0045	1	H-18 NW	SD1	下層	弥生	有段口 縁重	(18.0)	—	(8.0)	灰白	純い橙	石英・長石・小礫	良	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ハケメ	外面煤
43	0019	1	H-17	SD1	下層、No.23・20	土師器	甕	15.4	3	(23.9)	純い黄橙	純い黄橙	石英・長石・小礫	良	ヨコナデ、ハケメ、ヘ ラケズリ、ナデ	ヨコナデ、ハケメ、ナデ	外面煤
44	0050	1	H-17	SD1	下層、No.1	土師器	甕	(13.9)	—	5.4	純い黄橙	純い橙	石英・長石	良	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ	外面煤
45	0049	1	H-17	SD1	下層粗砂、No.1	弥生	器台	—	脚径 (6.0)	(9.8)	純い橙	橙	石英・白色粒・黒色粒	良	ヨコナデ、ハケメ	ハケメ、ヘラミガキ	外面赤彩、2孔一対2方透
46	0048	1	H-18 NW	SD1	下層	土師器	甕	(15.8)	—	(4.4)	純い橙	純い橙	石英・長石・赤色粒	良	ヨコナデ、ハケメ、ナ デ	ヨコナデ、ハケメ、タタキ	
47	0091	1	H-17 SE	SD1	中層、No.13、14、 15	土師器	壺	15	—	(33.5)	純い黄橙	純い黄橙	石英・長石黒色粒	良	ナデ、ハケメ、ヘラケ ズリ	ヘラミガキ、ハケメ	山陰系
48	0098	1	H-17 SE	SD1	中層、No.1、3	土師器	壺	17.9	—	(12.1)	純い黄橙	純い黄橙	石英・長石・チャート・ 赤色粒	良	ナデ	ハケメ、ナデ、ヘラケズリ	有段口縁
49	0095	1	H-17 SE	SD1	中層	弥生	壺	—	6	(9.1)	黒	純い橙	石英・長石	良	ハケメ	ハケメ、ヘラミガキ、ナデ	内面黒色処理？
50	0096	1	H-17 SE	SD1	中層、No.19	弥生	有段口 縁重	—	—	(6.8)	オリーブ 黒	浅黄橙	石英・長石・赤色粒	不良	ハケメ、ナデ	摩滅	
51	0087	1	H-17 SE	SD1	中層、No.21	弥生	壺	—	6	(22.5)	純い黄橙	純い黄橙	石英・長石・赤色粒	良	指ナデ、ナデ、ハケメ、 指オサエ	ハケメ、ヘラミガキ、ヘラケズ リ	
52	0097	1	H-17 SE	SD1	中層、No.4	弥生	壺	—	5	(3.8)	純い黄橙	純い黄橙	石英・長石	良	摩滅	ハケメ、ナデ	
53	0089	1	H-17 SE	SD1	中層、No.28	土師器	甕	(18.0)	—	(7.4)	純い黄橙	純い黄橙	石英・長石	良	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケメ	口唇部に粘土紐痕跡
54	0090	1	H-17 SE	SD1	中層、No.21	土師器	甕	(14.7)	—	(9.3)	純い黄橙	純い黄橙	石英・長石	良	ヨコナデ、ナデ、ヘラ ケズリ	ヨコナデ、ハケメ	
55	0099	1	H-17 SE	SD1	中層、No.4	土師器	甕	(12.0)	—	(6.0)	純い黄橙	純い黄橙	石英・長石	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケメ	外面煤
56	0088	1	H-17 SE	SD1	中層、No.29	土師器	甕	10.2	丸底	9.3	純い褐	灰褐	石英・長石	良	ナデ	ナデ	外面煤
57	0094	1	H-17 SE	SD1	中層、No.6、9	土師器	高坏	—	脚 (13.4)	(7.3)	純い黄橙	純い黄橙	石英・長石・橙色粒	良	ヘラミガキ、ナデ	ヘラミガキ	3方透

第4表 土器等観察表 3

報告 番号	管理 番号	地区	グリッド	出土遺構等	細分区・層位・ 取り上げ番号等	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調(内)	色調(外)	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	備考
58	0093	1	H-17 SE	SD1	中層、No.11	土師器	高坏	—	脚 14.0	(7.0)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	ヘラミガキ、ヘラケズ リ	ハケメ後ヘラミガキ	3 方透
59	0086	1	H-17 SE	SD1	中層、No.27	土師器	高坏	—	11	(7.7)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	ヘラミガキ、ハケメ、 ナデ	ヘラミガキ	赤彩？
60	0146	1	H-17 SE	SD1	No.12、21、中層	土師器	鉢	(12.6)	4.5	6.6	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	ヘラミガキ	ヘラミガキ、ナデ	赤彩
61	0082	1	H-17 NW	SD1	中層	土師器	甕	(19.8)	—	(3.7)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	外面に煤
62	0081	1	H-17 NW	SD1	中層	土師器	甕	(14.0)	—	(6.8)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・赤色粒・ 黒色粒	良	ヨコナデ、ハケメ、ヘ ラケズリ	ヨコナデ、ハケメ	ハケ工具のあたり、外面 煤
63	0085	1	H-17 SE	SD1	中層	土師器	内黒？	(17.8)	—	(3.8)	黒	鈍い黄橙	石英・長石	良	ヘラミガキ	ヨコナデ	
64	0077	1	H-18 NW	SD1	中層	須恵器	坏 H 蓋	(9.7)	—	(4.0)	灰	灰	白色粒・石英	良	ヨコナデ	ヨコナデ、回転ヘラケズリ	
65	0084	1	G-16 NE	SD1	中層	土師器	甕	(16.3)	—	(6.5)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・金雲母	良	ナデ	ヨコナデ	内外面摩滅 有段口縁
66	0079	1	H-17	SD1	肩中層	弥生	直口壺	(17.2)	—	(7.4)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
67	0080	1	H-17 NW	SD1	中層、No.4、8、9、 21	土師器	有段口 縁甕	(21.8)	—	(16.7)	鈍い褐	鈍い褐	石英・長石	良	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ハケメ、ナデ	山陵系模倣、外面煤
68	0128	1	I-18 SE	SD1	中層	須恵器	坏蓋	(14.6)	—	(5.2)	鈍い橙	灰褐	白色粒・石英・長石	不良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラヘラケズ リ	還元不良
69	0140	1	H-18 NW	SD1	中層	須恵器	坏蓋	(13.6)	天井 6.0	4	灰	灰	長石・白色粒・黒色粒	良	ヨコナデ	ヨコナデ、回転ヘラ切り後ナデ	回転時計回り
70	0141	1	H-18 NW	SD1		須恵器	坏蓋	(11.6)	—	(3.9)	灰	灰	長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	
71	0065	1	H-18 SE	SD1		須恵器	坏身	(12.4)	—	4.4	灰	灰	長石・白色粒・黒色粒	良	ヨコナデ	ヨコナデ、回転ヘラケズリ	天井部厚く自然釉
72	0131	1	H-18 NE	SD1		須恵器	坏 H	(11.1)	—	3.6	灰白	灰白	長石	良	ヨコナデ	ヨコナデ、回転ヘラケズリ	
73	0103	1	H-16	SK8	上面、No.3	土師器	甕	(12.6)	—	(19.0)	褐灰	灰黄褐	石英・長石	良	ハケメ、板ナデ、指オ サエ	タタキ後、ハケメ	外面煤
74	0107	1	H-16	SK8	上面、No.2、6	土師器	甕	(16.0)	—	(9.4)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	ナデ	ハケメ、ヨコナデ	
75	0104	1	H-16	SK8	No.7、11	土師器	甕	13.9	—	(10.6)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ハケメ	外面煤
76	0106	1	H-16	SK8	上面、No.2	土師器	鉢	(10.5)	3	8.6	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石	良	ナデ	ナデ	
77	0105	1	H-16	SK8	No.8	土師器	高坏	—	14	(9.5)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・赤色粒	良	ヘラケズリ、ハケメ、 ヨコナデ	ヘラミガキ、ヨコナデ	
78	0002	1	I-18	SE1	井戸枠内最下層	須恵器	坏 H 蓋	12.2	2.3	5	黒褐	黒褐	白色粒	良	ヨコナデ	ヨコナデ、回転ヘラ切り	内面黒色付着物、焼成後 口縁部一部打欠き
79	0001	1	I-18	SE1	井戸枠内最下層	須恵器	提瓶	0.85	—	(7.5)	黄灰	黄灰	石英・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ハケメ	沈線
80	0003	1	I-18	SE1	上層、No.1	須恵器	埴	—	7.1	(2.3)	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系切り	内底面手ずれ
81	0278	2	L-30 NE	SD3	土器 4	弥生	台付甕	(14.6)	—	(13.3)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	ナデ、ハケメ、ヘラケ ズリ、指オサエ	ナデ、タタキ	上げ底風底部
82	0277	2	L-30 NE	SD3	土器 3	弥生	甕	(14.0)	—	(8.7)	灰黄褐	灰黄褐	石英・長石	良	ナデ、ハケメ、ヘラケ ズリ	ハケメ、ナデ	外面煤、列点文
83	0276	2	L-30 NE	SD3	土器 2	弥生	甕	17.5	—	(10.3)	鈍い橙	鈍い橙	石英・長石	良	ハケメ	ハケメ	外面煤
84	0275	2	L-30 NE	SD3	土器 1	弥生	甕	(20.0)	—	(12.8)	灰黄褐	灰黄褐	石英・長石・赤色粒	良	ハケメ、指オサエ	ハケメ、ヨコナデ	外面煤
85	0280	2	L-30 NE	SD3		弥生	甕	—	6	(13.0)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	ハケメ、ナデ、指オサ エ	ハケメ、ナデ	外面煤
86	0279	2	L-30 NE	SD3		陶器	？	(16.0)	—	(4.8)	(糊) 鈍い、 黄	鈍い黄橙	精微	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロヘラケズリ	外面口縁部から内面全体 に施釉
87	0281	2	J-25	SD4、排水 溝	空掘土器	弥生	壺	(28.5)	—	(17.4)	灰白	灰白	石英・長石・赤色粒	不良	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	内外面摩滅、刺突文、刻み、 沈線、突帯
88	0282	2	K-25	SD4	空掘土器		土鍾	長3.5 幅3.7	—	厚3.5	—	浅黄橙	石英・長石	良		ナデ	
89	0261	2	I-21	SK1		弥生	甕	(25.6)	—	(5.0)	灰白	灰白	石英・長石	不良	ハケメ	ハケメ	
90	0262	2	I-21	SK1		弥生	甕	(19.4)	—	(8.0)	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石	不良	摩滅	摩滅	

第4表 土器等観察表 4

報告 番号	管理 番号	地区	グリッド	出土遺構等	細分区・層位・ 取り上げ番号等	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	色調 (内)	色調 (外)	胎土	焼成	調整 (内)	調整 (外)	備考
91	0263	2	I-21	SK1		弥生	甕	—	(6.0)	黄灰	鈍い黄橙	石英・長石	不良	指ナデ	ハケメ、ナデ	
92	0324	2	I-21	SD11	写真土器 2	弥生	甕	(15.3)	—	灰白	灰白	石英・長石・赤色粒	良	摩滅	摩滅	粘土紐痕跡
93	0327	2	I-21	SD11	南半	弥生	甕	(12.0)	—	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	ヨコナデ、ハケミガキ	ヨコナデ、ハケメ	外面煤付着、刺突文
94	0326	2	I-21	SD11	写真土器 5	弥生	甕	—	4.9	褐灰	橙	石英・長石	良	摩滅	ハケメ	
95	0325	2	I-21	SD11	土器 4	弥生	壺	—	4.7	灰白	灰白	石英・長石・チャート	良	ハケメ	ハケズリ	
96	0318	2	I-21	SD10	南半	弥生	有段口 繻甕	—	—	浅黄橙	浅黄橙	砂多、石英・長石・ チャート	良	ハラケズリ、指頭圧痕	摩滅	摩滅、擬凹線
97	0323	2	J21・I21	SD10	南半	弥生	有段口 繻甕	(22.0)	—	灰白	灰白	石英・長石・赤色粒	良	ヨコナデ、ハラケズリ	摩滅	
98	0320	2	I-21	SD10	南半	弥生	甕	(18.4)	—	浅黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	ハラケズリ、ナデ	ナデ	刻み、
99	0321	2	J-21	SD10	北半	弥生	甕	(12.0)	—	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	摩滅	摩滅	
100	0322	2	I-21	SD10	北半	弥生	甕	—	2.8	鈍い橙	鈍い橙	石英・長石・赤色粒	良	ハラケズリ	ハラケズリ	摩滅
101	0317	2	I-21	SD10	土器 1	弥生	器台	(23.9)	—	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石・赤色粒	良	摩滅	ハラミガキ、ナデ	摩滅
102	0319	2	I-21	SD10	南半	弥生	高坏	(29.6)	—	鈍い橙	浅黄橙	石英・長石・赤色粒	良	摩滅	摩滅	
103	0328	2	I-23	SD14	写真土器 3	弥生	有段口 繻甕	14	—	鈍い黄橙	浅黄橙	石英・長石・赤色粒	不良	ハラケズリ		擬凹線
104	0336	2	I-23	SD14	南半下層	弥生	有段口 繻甕	(12.0)	—	鈍い橙	鈍い橙	長石、赤色粒	不良	摩滅	摩滅	
105	0308	2	I-23	SD14	南半下層	弥生	甕	(25.4)	—	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石	良	ヨコナデ、ハラハラケ ズリ	ヨコナデ	有段擬凹線
106	0301	2	J-23	SD14	北端	弥生	有段口 繻甕	(30.0)	—	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石・チャート・ 赤色粒	不良	ヨコナデ、ハラケズリ	ヨコナデ	
107	0295	2	J-23	SD14	北半	弥生	有段口 繻甕	(28.0)	—	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・チャート・ 赤色粒	良	ヨコナデ	ヨコナデ	
108	0329	2	I-23	SD14	写真土器 2	弥生	甕	(29.7)	—	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石・小礫・赤 色粒	不良	ハラケズリ	摩滅	
109	0337	2	I-23	SD14	南半下層	弥生	甕	32.8	—	灰白	灰白	石英・長石・赤色粒	良	ハケメ、ハラケズリ	ハケメ	有段擬凹線、外面煤
110	0283	2	I-23	SD14	南半下層	弥生	有段口 繻甕	(14.0)	—	鈍い橙	鈍い橙	石英・長石・赤色粒	良	ハラケズリ	ハケメ	擬凹線
111	0296	2	J-23	SD14	北半	弥生	有段口 繻甕	(15.9)	—	鈍い橙	浅黄橙	石英・長石・チャート	やや良	ハラケズリ	ハケメ	口縁部に擬凹線
112	0309	2	J-23	SD14	北端	弥生	甕	(14.0)	—	黒褐	黒褐	石英・長石・チャート	不良	ハラケズリ	ヨコナデ、ハケメ	擬凹線
113	0331	2	I-23	SD14	南半	弥生	鉢	(13.0)	—	明褐	明褐	石英・長石	良	ハラケズリ後ハラミガ キ	ハラミガキ	有段口縁、擬凹線
114	0338	2	I-23	SD14	南半下層	弥生	鉢	(12.6)	—	灰黄褐	灰黄褐	石英・長石	良	ハケメ、ヨコナデ、指 オサエ	ハケメ、ヨコナデ	外面に煤
115	0330	2	J-23	SD14	中央アゼ	弥生	壺	—	6.2	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石	良	ハケメ	ハケメ	黒班、底面種子圧痕
116	0291	2	I-23	SD14	南端砂層	弥生	台付鉢	(13.1)	10.7	橙	橙	石英・長石	良	ハラミガキ、ナデ	ハラミガキ	
117	0333	2	I-23	SD14	南半下層	弥生	台付鉢	—	—	浅黄橙	橙	石英・長石・赤色粒	不良	摩滅	摩滅	有段口縁、外面に橙色粘 土カ
118	0316	2	J-23	SD14		弥生	裝飾器 台	—	—	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石・赤色粒	良	摩滅	摩滅	透し孔推定 10
119	0332	2	I-23	SD14	南半下層	弥生	裝飾器 台	—	—	鈍い橙	鈍い橙	石英・長石・赤色粒	良	ハラハラミガキ、ヨコ ナデ、ハケメ	ハラミガキ	端面擬凹線、涙滴透 4 カ 所遺存
120	0284	2	J-23	SD14	南端下層、南半	弥生	高坏	(22.3)	16.3	鈍い褐	橙	石英・長石、赤色粒	やや良	ハラミガキ、ハラケズ リ	ハラミガキ	脚部 4 方透

第4表 土器等観察表 5

報告 番号	管理 番号	地区	グリッド	出土遺構等	細分区・層位・ 取り上げ番号等	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調(内)	色調(外)	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	備考
121	0334	2	I-23	SD14	南半下層	弥生	高坏	19	—	(7.5)	浅黄橙	鈍い橙	長石	良	ヘラヘラミガキ	ヘラヘラミガキ	黒班
122	0335	2	I-23	SD14	南半下層	弥生	高坏	—	11	(5.0)	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石・赤色粒	良	ナデ	ヘラミガキ	脚3方透
123	0250	1	H-17 SE	II層		土師質	フイゴ 羽口	長 (3.3)	幅 (3.3)	—	浅黄橙	灰白	砂少	良	—	ナデ	重: 8.3g
124	0068	1	H-18 SW	SD1、II層 直上		須恵器	甕	—	—	(5.1)	灰	暗灰黄	長石・白色粒・黒色粒	良	ヨコナデ	ヨコナデ	列点文、外面自然釉
125	0057	1	H-18	SD1、II層	肩上層、中層	須恵器	坏蓋	(12.8)	4.1	3.8	灰	灰	長石、白色粒	良	ヨコナデ	ヨコナデ、回転ヘラケズリ	
126	0073	1	H-18 SW	SD1	中層	須恵器	坏H	(11.5)	—	4	灰	灰	石英・長石	良	ヨコナデ	ヨコナデ、回転切り	
127	0075	1	H-18 NW	SD1	中層	須恵器	坏H	(11.8)	—	(2.9)	灰	灰	白色粒	良	ヨコナデ	ヨコナデ、回転ヘラケズリ	受部に自然釉
128	0076	1	H-18 NW	SD1	中層	須恵器	坏H	(10.5)	—	(3.4)	灰黄	灰	白色粒	良	ヨコナデ	ヨコナデ、回転ヘラ切り後ナ デ?	
129	0074	1	H-18 NW	SD1	中層	須恵器	坏H	(13.2)	—	(3.8)	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	良	ヨコナデ	ヨコナデ	
130	0070	1	H-18 SE	SD1		須恵器	坏A	(14.3)	(8.4)	3.5	灰	灰	石英・長石	良	ロクロナデ	底部回転ヘラ切り	
131	0034	1	H-18 NE	SD1	上層	須恵器	坏A	(12.1)	9.6	3.5	灰	灰	砂少、石英・白色粒	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り	
132	0133	1	H-18 NE	SD1、II層		須恵器	坏A	(12.0)	(9.4)	3.1	灰	灰	白色粒・石英・長石	良	ロクロナデ	ナデ	降灰
133	0132	1	H-18 NE	SD1		須恵器	坏A	(13.8)	7	3.7	灰	灰	白色粒・石英・長石	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り、ナ デ	
134	0083	1	H-17 NW	SD1	中層	須恵器	坏A	(11.4)	6.5	3.4	灰黄褐	灰	長石、白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り後ナ デ	
135	0244	1	H-15 SE	II b層(II 層)		須恵器	坏A	—	7.4	(2.1)	灰	灰	石英・長石、白色粒	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り後ナ デ	
136	0135	1	H-18 NE	SD1		須恵器	盤	(15.6)	(12.7)	2.3	灰	灰	白色粒・長石	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り、ナ デ	
137	0064	1	H-18 SE	SD1		須恵器	盤	16.2	—	3.35	灰白	灰白	石英・長石	不良	ロクロナデ	回転ヘラ切り	
138	0130	1	H-18 NE	SD1、II層		須恵器	盤	(19.4)	(13.7)	3.4	灰白	灰白	白色粒・石英・長石	良	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	
139	0123	1	I-18 SE	SD1		須恵器	坏B	—	(10.0)	(2.7)	灰白	灰白	長石・石英	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り	
140	0134	1	H-18 NE	SD1		須恵器	坏B	—	8.1	(2.6)	灰	灰	石英・長石	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り	
141	0066	1	H-18 SW	SD1		須恵器	坏B	—	(9.2)	(1.7)	灰白	灰白	長石・白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ		
142	0151	1	G-15 NW	II層(II層)		須恵器	碗	(14.4)	(6.6)	5.1	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	回転ヘラケズリ、 ロクロナデ	
143	0152	1	G-15 NW	II層(II層)		須恵器	碗	—	6.7	(2.2)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ		
144	0124	1	I-18 SE	SD1		須恵器	坏B	—	(9.4)	(1.5)	褐灰	褐灰	石英・長石	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り、 ロクロナデ	工具痕
145	0127	1	I-18 SE	SD1		須恵器	鉢	(14.5)	(7.7)	6.8	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	天井部外面に墨書判読不 能
146	0144	1	H-18 NW	SD1		須恵器	杯蓋	—	鉗径 3.3	(3.1)	灰白	灰	長石、石英	良	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	
147	0143	1	H-18 NW	SD1、P42		須恵器	坏B	(14.3)	(8.2)	(6.3)	灰白	灰白	長石・白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り	底外面に墨書判読不能
148	0126	1	I-18 SE	SD1		須恵器	坏A	—	(7.0)	(1.9)	灰白	灰白	石英・長石	良	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	底部外面墨書判読不能
149	0125	1	I-18 SW	SD1		須恵器	坏A	—	(8.2)	(0.9)	鈍い橙	鈍い橙	石英・長石・赤色粒	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り	底部墨書「加」か
150	0145	1	H-18 NW	SD1		須恵器	坏身	—	—	(0.9)	灰白	灰白	長石・白色粒	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り	底部外面に墨書判読不能
151	0129	1	I-17 NE	SD1		須恵器	壺蓋	—	—	(3.7)	灰白	灰白	砂少・白色粒	良	ロクロナデ	回転ヘラヘラケズ リ	自然釉
152	0069	1	H-18 SE	SD1	II層	須恵器	壺蓋	—	鉗径 2.5	(3.2)	灰	灰	長石	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	
153	0150	1	G-15 NW	II層(II層)		須恵器	瓶類	(9.4)	—	(9.2)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ		降灰、沈線
154	0139	1	H-18 NW	SD1		須恵器	瓶	—	(9.9)	(6.8)	灰	灰	長石・白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ		内外面自然釉 窯体付着
155	0060	1	H-18	SD1、II層	肩上層	須恵器	瓶	—	(10.2)	(9.2)	灰	灰	石英・長石	良	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	
156	0067	1	H-18 SW	SD1	中層	須恵器	壺	(10.6)	—	7.1	灰	灰	長石、白色粒・黒色粒	良	ヨコナデ	ヨコナデ、回転ヘラケズリ	
157	0063	1	H-18 SE	SD1、II層		須恵器	鉢	(18.3)	—	(20.1)	灰白	灰	白色粒・石英・長石	良	ロクロナデ		突帯

第4表 土器等観察表 6

報告 番号	管理 番号	地区	グリッド	出土遺構等	細分区・層位・ 取り上げ番号等	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調(内)	色調(外)	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	備考
158	0009	1	G-15 NW	Ⅱ層(Ⅲ層)		須恵器	広口瓶	(22.6)	—	(6.3)	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
159	0078	1	H-18 SE	SD1		須恵器	甕?	(30.0)	—	(4.2)	灰	オリーブ 黒	白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	自然釉
160	0142	1	H-18 NW	SD1、Ⅱ層		須恵器	甕	(35.6)	—	(5.7)	灰白	灰白	長石・白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	自然釉
161	0035	1	H-18	SD1	肩No.1	土師器	埴	11.2	4.9	3.1	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	摩滅	摩滅	
162	0061	1	H-18	SD1	肩上層	土師器	埴	(11.6)	(5.9)	(3.4)	鈍い橙	鈍い橙	石英・長石	良	摩滅	摩滅	
163	0058	1	H-18	SD1	肩No.1	土師器	埴	—	5.8	(1.5)	灰	灰	石英・長石	良	摩滅	摩滅	高台剥離部分に糸切り痕
164	0059	1	H-18	SD1	肩上層	土師器	埴	—	6	1.4	灰白	灰白	石英・長石	良	摩滅	摩滅	
165	0072	1	H-17 SE	SD1		土師器	内黒埴	—	(7.0)	(1.5)	黒褐	鈍い黄橙	長石・赤色粒	良	ヘラミガキ	ロクロナデ	
166	0153	1	G-15 NW	Ⅱ層(Ⅲ層)		土師器	内黒埴	—	(6.5)	(1.6)	褐灰	灰白	石英・長石	良	摩滅	摩滅	
167	0071	1	H-17 SE	SD1		土師器	内黒埴	—	(7.4)	(3.2)	暗灰褐色	鈍い黄橙	石英・長石	良	ナデ?	ナデ	黒色処理不十分、高台内 面煤
168	0137	1	H-18 NE	SD1		土師器	鉢	—	(14.2)	(5.3)	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石	良	摩滅	摩滅	
169	0138	1	H-18 NE	SD1		土師器	甕	(19.8)	—	(6.4)	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
170	0136	1	H-18 NE	SD1		土師器	長胴甕	(37.2)	—	(2.8)	黒褐	浅黄橙	石英・長石	良	摩滅	摩滅	
171	0147	1	G-15 NW	Ⅱ層(Ⅲ層)		土師質	土鍾	長4.8	幅4.4	厚4.3	—	浅黄橙	石英・白色粒・赤色粒	良	—	摩滅	重：91.8g
172	0149	1	G-15 NW	Ⅱ層(Ⅲ層)		土師質	土鍾	長4.3	幅4.4	厚4.4	—	浅黄橙	石英・長石・白色粒・赤色粒	良	—	摩滅	重：93.5g
173	0148	1	G-15 NW	Ⅱ層(Ⅲ層)		土師質	土鍾	長4.8	幅4.0	厚4.0	—	浅黄橙	石英・長石・赤色粒	良	—	摩滅	重：74.7g
174	0117	1	H-14・15	Ⅱ層(Ⅲ層)		土師質	土鍾	長6.7	幅4.5	厚4.4	—	浅黄橙	長石・石英・赤色粒	良	—	摩滅	重：97.4g
175	0052	1	G-15	SD2	No.1	土師質	土鍾	長5.0	幅3.9	厚4.2	—	浅黄橙	石英・長石・白色粒・赤色粒	良	—	ナデ	重：75.1g
176	0053	1	G-15	SD2	No.4	土師質	土鍾	長4.7	幅4.1	厚4.3	—	浅黄橙	石英・長石・白色粒・赤色粒	良	—	ナデ	重：83.5g
177	0054	1	G-15	SD2	No.2	土師質	土鍾	長4.7	幅4.3	厚4.2	—	浅黄橙	石英・長石・白色粒・赤色粒	良	—	ナデ	重：78.6g
178	0055	1	G-15	SD2	No.3	土師質	土鍾	長4.9	幅4.3	厚4.2	—	浅黄橙	石英・長石・白色粒・赤色粒	良	—	ナデ	重：90.5g
179	0056	1	G-14	SD3、P28		須恵器	坏A	(12.1)	8	3.6	黄灰	灰白	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り	底部外面墨書「文」か
180	0100	1	I-18	P88		土師質	土鍾	長2.8	幅1.2	厚1.2	橙	白色粒・赤色粒	不良	—	ナデ	ナデ	重：3g
181	0101	1	H-19	P54		土師器	?	(11.2)	(5.0)	3.2	灰白	灰白	石英・長石・赤色粒	良	摩滅	摩滅	
182	0102	1	H-15	P19		土師器	鍋	(36.7)	—	(1.5)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面にコゲ跡
183	0120	1	G-15	SK1		加賀焼	甕	(26.0)	—	(7.8)	褐	オリーブ 灰	砂少	良	ロクロナデ	ロクロナデ	降灰
184	0110	1	H-15	SK3		土師器	内黒?	(12.3)	—	(3.6)	黒	鈍い黄橙	石英・長石	良	ヘラミガキ	ロクロナデ	
185	0118	1	H-15	SK3		土師器	鍋	(37.1)	—	(2.4)	暗褐	鈍い黄橙	石英・長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ	内面灰化物
186	0109	1	H-15	SK3		須恵器	瓶	—	(9.4)	(2.4)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り	
187	0114	1	H-15	SK2	D区	須恵器	坏蓋	(12.2)	—	(1.4)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り、ナ デ	無紐?
188	0113	1	H-15	SK2	D区 他	須恵器	坏蓋	(13.2)	—	(1.1)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り、ナ デ	天井部内面墨痕、転用硯
189	0108	1	H-15	SK2		須恵器	盤	(16.2)	(11.6)	(2.4)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
190	0115	1	H-15	SK2	C区	須恵器	埴	—	7	(2.8)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り	
191	0122	1	H-15	SK2	B区	土師器	内黒埴	—	(6.8)	(2.0)	黒	鈍い黄橙	石英・長石	良	ヘラミガキ	ロクロナデ	外面赤彩
192	0119	1	H-15	SK2	A区	土師器	甕	(17.0)	—	(3.3)	鈍い橙	鈍い橙	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
193	0111	1	H-15	SK2	D区	土師器	長胴甕	(35.0)	—	(5.2)	灰白	灰白	石英・長石	良	摩滅	ロクロナデ	
194	0116	1	H-15	SK2	D区	土師器	長胴甕	(29.5)	—	(1.7)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・白色粒	良	ナデ	ナデ	外面煤

第4表 土器等観察表 7

報告 番号	管理 番号	地 区	グリッド	出土遺構等	細分区・層位・ 取り上げ番号等	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調(内)	色調(外)	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	備考
195	0112	1	H-15	SK2、II層	A区	須恵器	瓶	16.2	—	(43.6)	灰白	灰白	長石、石英、白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
196	0121	1	H-15	SK2	A区	須恵器	双耳瓶	—	(13.6)	(30.4)	褐灰	灰黄	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	自然釉
197	0251	1	H-15	SK2、II層		須恵器	鉢	(17.4)	—	(7.8)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
198	0264	2	J-22	SK2		須恵器	坏	(14.0)	—	(2.1)	灰	灰	石英・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
199	0265	2	J-22	SK2		土師器	長胴壺	—	—	(5.5)	灰白	灰白	石英・長石	良	摩滅	タタキ	
200	0266	2	I-21	SK3		須恵器	蓋	15.6	—	(1.5)	灰白	灰白	石英・白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
201	0268	2	J-23	SE1		須恵器	坏A	12.7	8.8	2.6	灰白	灰白	石英・長石・白色粒・ 黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	底部外面墨書「益吉」
202	0271	2	J-23	SE1		須恵器	坏A	(12.4)	7.6	2.8	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	
203	0269	2	J-23	SE1		須恵器	坏A	(16.9)	(13.0)	(3.8)	灰	灰	石英・白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	底部外面墨書
204	0270	2	J-23	SE1		須恵器	坏蓋	(15.5)	—	(1.9)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	
205	0267	2	J-23	SE1		須恵器	坏B	(14.6)	8.3	5.7	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	高台内面墨痕、転用硯
206	0274	2	J-23	SE1		須恵器	盤	(15.6)	(10.8)	2.5	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	
207	0273	2	J-23	SE1		須恵器	甕	(55.0)	—	(12.1)	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	良	ナデ		
208	0272	2	J-23	SE1	南側	土師器	甕	(18.0)	—	4.3	浅黄橙	褐灰	石英・長石	不良	摩滅		隆灰
209	0285	2	J-23	SD7	北半	須恵器	高坏	—	—	(5.4)	灰白	灰白	石英・白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	底面にヘラケズリや木目 様の圧痕
210	0300	2	J-23	SD8、遺構 検出	北半	須恵器	平瓶	—	9.4	(11.3)	灰白	灰白	長石・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	
211	0347	2	J-23	SD8・14、 遺構検出		須恵器	高坏蓋	(14.1)	紐径 2.4	5.3	灰	灰	石英・白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	
212	0289	2	I-23	SD8	1層	須恵器	蓋	(14.8)	—	3.1	明灰	明灰	長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	一部に焼き膨れ
213	0288	2	I-23	SD8	1層	須恵器	坏H	(11.6)	—	3.9	灰白	灰白	長石、石英	やや 良	ヨコナデ	ヨコナデ、回転ヘラケズリ	断面が橙色
214	0312	2	J-23	SD8・ SD14	北半 他	須恵器	坏B	(15.1)	(10.3)	5.3	灰白	灰白	石英・白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	底部外面墨書判読不能
215	0310	2	J-23	SD8	北半	須恵器	坏B	—	(8.4)	(3.0)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	底部外面墨書判読不能
216	0313	2	J-23	SD8・ SD14	北半 他	須恵器	坏B	—	(9.6)	(1.3)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	底部外面墨痕、転用硯 底部打欠き？
217	0306	2	J-23	SD8	北半	須恵器	坏B	(15.9)	10.3	4.2	灰白	灰白	石英・長石・白色粒・ 黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り、ナ デ	摩滅、高台貼付、工具痕
218	0339	2	J-23	SD8	北半 他	須恵器	坏B	14.5	11.1	4.1	褐灰・黒 褐	灰白	石英・白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	漆バレット、口縁内面に 厚い漆
219	0297	2	J-23	SD8	北半	須恵器	坏	(14.8)	—	(3.5)	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	隆灰
220	0302	2	J-23	SD8	北半	須恵器	坏A	(12.8)	9.8	3.4	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	
221	0348	2	J-23	SD8	北半	須恵器	坏A	(12.9)	8	3.6	灰白	灰白	石英・長石・白色粒・ 黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	板目板痕
222	0292	2	I-23	SD8	南半上層	須恵器	坏A	(12.8)	8.2	3.6	灰白	灰白	長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	
223	0304	2	J-23	SD8、遺構 検出	北半	須恵器	坏A	(14.5)	11	4	灰黄	灰	長石・白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	自然釉、
224	0314	2	J-23	SD8・ SD14		須恵器	坏蓋	(13.2)	—	(1.5)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
225	0305	2	J-23	SD8	北半	須恵器	坏蓋	(16.0)	—	(2.8)	灰白	灰オリ フ	石英・白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	自然釉
226	0315	2	J-23	SD8・ SD14	—	須恵器	坏B	(11.0)	(6.4)	5.3	灰白	灰	白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、回転ヘラ切 り	
227	0307	2	J-23	SD8	北半	須恵器	盤	(16.6)	(14.2)	2.4	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	

第4表 土器等観察表 8

報告 番号	管理 番号	地区	グリッド	出土遺構等	細分区・層位・ 取り上げ番号等	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調(内)	色調(外)	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	備考
228	0286	2	J-23	SD8、遺構 検出	中央アゼ	須恵器	甕	(33.0)	—	(14.1)	灰	灰	石英・長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ	2 段の波状文、沈線
229	0346	2	J-23	SD14	北半	須恵器	焼台	9.9	11.2	2.4	灰	灰	石英・長石・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	墨と油痕が面
230	0311	2	J-23	SD8	北半	土師器	長胴甕	(36.0)	—	(4.8)	灰白	灰白	石英・長石	良	摩滅	ロクロナデ	
231	0303	2	J-23	SD8	南半上層、北半	須恵器	鉢	—	—	(14.6)	灰白	灰白	長石	良	ロクロナデ	カキメ、把手：ヘラケズリ、指 オサエ	SD14 に混入
232	0299	2	J-23	SD8	北半	土師器	把手	長 6.5 幅 6.3	厚 3.1	純い橙	純い橙	純い橙	石英・長石・白色粒	不良	摩滅	摩滅	
233	0298	2	J-23	SD8	北半	土師器	把手	長 4.1 幅 4.4	厚 2.1	褐灰	橙	橙	石英・長石	良	ナデ、ハケメ	指オサエ、ハケメ	鍋？炭化物付着
234	0294	2	I-23	SD8	南半上層	土師器	把手	巾 6.3	厚 3.4	8.2	灰黄褐	純い橙	石英・長石	良	ナデ、指オサエ	ナデ、押さえ	
235	0258	1	H-16 NE	IV層		土師器	甕	—	6.2	(19.5)	純い黄橙	純い黄橙	石英・長石	良	楕ナデ	ナデ、ヘラミガキ	絞り痕
236	0259	1	G-16 NE	IV層直上、 SD01	中層	弥生	甕	—	2	(12.0)	純い黄橙	黒褐	石英・長石・チャート	良	ヘラケズリ、ナデ	ハケメ、ナデ	外面煤
237	0257	1	H-18 SE	III層直上 他		須恵器	坏 G 蓋	口径 2.2	摘径 3		灰	灰	長石・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	天井に降灰等と砂粒等、 焼き彫れ
238	0238	1	H-15 SE	II b 層		土師器	鉢	—	—	(3.8)	灰黄褐	灰白	石英・長石、赤色粒	不良	ヨコナデ	摩滅	
239	0247	1	H-16 NE	II b 層		須恵器	坏蓋	(11.8)	—	(1.7)	灰	灰	石英・長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	
240	0246	1	H-16 NW	II b 層		須恵器	坏蓋	(11.7)	—	(1.4)	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	転用硯
241	0242	1	H-15 SE	II b 層		須恵器	蓋	鈕 (10.0)	—	(2.5)	灰白	灰白	長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	天井部内面墨書判読不能、 環状鈕、宝珠鈕？
242	0241	1	H-15 SE	II b 層		須恵器	碗	—	(7.0)	(2.5)	灰	灰	石英・長石白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
243	0239	1	G16 NW	II b 層		須恵器	碗	—	(9.4)	(3.3)	灰	灰	石英、白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	
244	0243	1	H-15 SE	II b 層		須恵器	厚底鉢	—	(10.4)	(6.8)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、底面に管状工具に よる刺突	内底中央部刺突
245	0245	1	H-16 SW	II b 層		須恵器	焼台	(10.4)	—	3	灰	灰	石英・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
246	0240	1	G16 NW	II b 層		土師器	長胴甕	(36.7)	—	(1.7)	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	不良	摩滅	摩滅	
247	0248	1	H-18 SW	II b 層		土師器	鉢か	—	(8.0)	(1.4)	褐灰	純い橙	石英・長石・赤色粒	良	摩滅	静止糸切り	内面に焦げ
248	0154	1	H-15 NE	II層		須恵器	碗	—	7	(2.5)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り	外底面ヘラ「一」、内底面 手擦れ
249	0158	1	H-15 SW	II層		須恵器	碗	—	7.2	(1.6)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り	底部外面墨痕あり
250	0157	1	H-15 SW	II層		土師器	長胴甕	(32.8)	—	(3.2)	純い黄橙	褐灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	外面煤
251	0155	1	H-15 SW	II層		土師器	長胴甕	(36.0)	—	(4.8)	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	良	摩滅	摩滅	
252	0156	1	H-15 SW	II層		土師器	長胴甕	(36.0)	—	(2.7)	灰白	灰褐	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	外面煤
253	0164	1	H-17 NW	II層		須恵器	瓶	—	4.3	(1.5)	褐灰	褐灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	底部外面墨書判読不能
254	0159	1	H-15 SW	II層		須恵器	坏蓋	(12.7)	—	(1.9)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	天井部墨書判読不能
255	0160	1	H-18 NW	SD1、II層	中層	須恵器	坏 H	(12.2)	—	(3.8)	灰	灰	石英・長石、白色粒・ 黒色粒	良	ヨコナデ	ヨコナデ、回転ヘラケズリ	底部自然釉
256	0162	1	H-16 NW	II層		須恵器	坏 B	—	6.8	(2.0)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	底部外面墨書「木」か
257	0165	1	H-16 NW	II層		須恵器	坏 B	—	(8.8)	(4.1)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
258	0168	1	H-16 SW	II層		須恵器	坏 B	—	(6.9)	(2.9)	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	底部外面墨書、判読不能
259	0172	1	H-17 SE	II層		須恵器	坏 A	—	(7.4)	(1.2)	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	内面墨書「益吉」
260	0167	1	H-16 SW	II層		須恵器	碗か	—	6.1	(2.5)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	底部外面灰痕多数
261	0161	1	H-16 SW	II層		須恵器	鉢	(10.8)	—	(4.2)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	不明	ロクロナデ	自然釉、外面自然釉剥離
262	0163	1	H-16 NW	II層		須恵器	瓶	(16.0)	—	(6.2)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
263	0166	1	H-16 NW	II層		須恵器	碗	(13.8)	(7.2)	(5.0)	灰	灰	長石・石英・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り	
264	0173	1	H-17 SE	II層		土師器	碗か	—	(5.0)	(1.5)	灰白	橙	石英・長石	良	摩滅	ロクロナデ、回転糸切り	外面赤彩
265	0169	1	H-16 SW	II層		須恵器	坏蓋	(15.0)	—	(2.2)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	

第4表 土器等観察表 9

報告 番号	管理 番号	地 区	グリップド	出土遺構等	細分区・層位・ 取り上げ番号等	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調(内)	色調(外)	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	備考
266	0170	1	H-16 NW	Ⅱ層		須恵器	埴か	—	(5.0)	(1.1)	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	
267	0174	1	H-17 SE	Ⅱ層		土師器	小甕か	—	(7.0)	(3.1)	灰白	鈍い橙	石英・長石・赤色粒	良	摩滅		被熱?
268	0253	1	H-16 SW	Ⅱ層		土師器	内黒埴	—	5.4	(2.0)	黒	浅黄橙	石英・長石・橙色粒	不良	摩滅	ロクロナデ	外面赤彩
269	0171	1	H-17 SE	Ⅱ層		須恵器	壺	—	(5.9)	(5.6)	灰	灰	石英・長石・白色粒・ 黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ、回転ヘラ ケズリ	内外に自然釉
270	0252	1	H-16 SW	Ⅱ層		土師器	皿	(7.3)	—	(1.7)	鈍い橙	鈍い橙	石英・赤色粒	不良	ヨコナデ	摩滅	内面一部油煙痕
271	0226	1	I-18 SE	Ⅱ層		須恵器	盤	(14.2)	(11.6)	2.9	灰白	灰白	石英・長石・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	自然釉
272	0209	1	H-18 NE	Ⅱ層	Ⅱ層	須恵器	盤	(15.4)	12.4	2.3	灰白	灰白	石英・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	
273	0180	1	H-18 SW	Ⅱ層		須恵器	坏 A	(13.2)	8	3	灰	灰	石英・長石・海綿骨針・ 白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り、ナ デ	
274	0206	1	H-18 NE	Ⅱ層		須恵器	坏 A	(12.0)	(6.4)	4.2	灰白	灰白	白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	
275	0225	1	I-18 SE	Ⅱ層		須恵器	坏 B	—	(10.9)	(1.5)	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ、ナデ	ヘラ切り後ナデ	
276	0224	1	I-18 SE	Ⅱ層		須恵器	坏 B	—	(8.6)	1.8	灰白	灰白	白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	
277	0229	1	I-18 SW	Ⅱ層		須恵器	盤	—	(15.9)	(1.6)	灰白	灰白	石英・長石	不良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	焼成甘い
278	0228	1	I-18 SW	Ⅱ層		須恵器	坏蓋	(12.8)	—	(1.8)	灰	灰	石英・長石・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
279	0221	1	I-18 SE	Ⅱ層		須恵器	坏 B	—	(8.5)	(2.8)	灰白	灰白	石英・長石・白色粒・ 黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	自然釉
280	0189	1	H-18 SE	Ⅱ層		須恵器	坏蓋	(20.5)	—	(2.1)	灰	灰	石英・長石・白色粒・ 黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	
281	0220	1	I-18 SE	Ⅱ層		須恵器	盤	(22.5)	(18.2)	3.8	灰白	明オリ フ灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	
282	0182	1	H-18 SW	Ⅱ層		須恵器	坏 B	—	(12.0)	(4.4)	灰白	灰	長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	
283	0197	1	H-18 NW	Ⅱ層		須恵器	埴	—	7.3	(2.9)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、静止糸切り	
284	0223	1	I-18 SE	Ⅱ層		須恵器	坏 B	(15.0)	8.7	6.1	灰	暗灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	
285	0222	1	I-18 SE	Ⅱ層		須恵器	坏 B	—	7.3	(3.4)	灰白	明オリ フ灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	
286	0196	1	H-18 SE	Ⅱ層		須恵器	埴	—	7.3	(1.9)	灰褐	灰褐	石英・長石・白色粒	不良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	高台は違う粘土
287	0191	1	H-18 SE	Ⅱ層		須恵器	埴	—	(6.4)	(2.0)	灰	灰	長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
288	0227	1	I-18 SW	Ⅱ層		須恵器	埴	—	(6.4)	(1.6)	黄灰	灰	石英・長石・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	
289	0213	1	H-18 NE	Ⅱ層		須恵器	坏 B	—	(8.9)	(1.5)	灰白	灰白	石英・長石・白色粒・ 黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
290	0181	1	H-18 SW	Ⅱ層		須恵器	高台	—	(6.6)	(1.8)	灰	灰	石英・長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り	
291	0185	1	H-18 SW	Ⅱ層		土師器	埴か	—	5.4	(1.8)	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石・赤色粒	良	摩滅	回転糸切り	
292	0210	1	H-18 NE	Ⅱ層		土師器	埴か	—	(6.5)	(1.4)	灰白	灰白	石英・長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り?	
293	0193	1	H-18 SE	Ⅱ層		土師器	内黒埴	—	7.5	(2.0)	黒褐	浅黄橙	石英・長石	良	ロクロナデ?	摩滅	外面赤彩
294	0176	1	H-18 SW	Ⅱ層		土師器	内黒埴	—	(6.4)	2.7	灰白	灰白	石英・長石・小礫	良	摩滅	ロクロナデ	外面赤彩
295	0234	1	I-18 NE	Ⅱ層		土師器	埴	—	(5.5)	(1.6)	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石	不良	ロクロナデ	ロクロナデ	
296	0233	1	I-18 NE	Ⅱ層		土師器	内黒埴	—	6.3	(1.5)	黄灰	浅黄橙	石英・長石	不良	摩滅	ロクロナデ	外面赤彩
297	0217	1	H-18 NE	Ⅱ層		土師器	埴	—	(5.5)	(1.2)	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
298	0200	1	H-18 NW	Ⅱ層		土師器	埴	—	(5.6)	(1.3)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・赤色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切り後高台 貼付	
299	0215	1	H-18 NE	Ⅱ層		土師器	内黒埴	—	5.5	(1.6)	褐灰	鈍い橙	石英・長石・角閃石	良	ヘラミガキ	糸切り	
300	0230	1	I-18 SW	Ⅱ層		土師器	埴	—	(5.7)	(1.5)	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石	不良	摩滅	摩滅	
301	0214	1	H-18 NE	Ⅱ層	Ⅱ層	土師器	埴	—	(7.7)	(2.1)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	不良	ロクロナデ	ロクロナデ	
302	0184	1	H-18 SW	Ⅱ層		土師器	内黒埴	—	(6.4)	(1.8)	黒	鈍い黄橙	石英・長石	良	ヘラミガキ	ロクロナデ、ナデ	

第4表 土器等観察表 10

報告 番号	管理 番号	地区	グリッド	出土遺構等	細分区・層位・ 取り上げ番号等	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調(内)	色調(外)	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	備考
303	0249	1	H-18 NE	Ⅱ層		土師器	黒色埴	—	(7.0)	(2.2)	黒褐	黒褐	石英・長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
304	0202	1	H-18 NW	Ⅱ層		須恵器	埴	—	7	(2.2)	灰	灰	石英・長石・白色粒・ 黒色粒	良	ロクロナデ	回転糸切り	底面に墨書判読不能
305	0192	1	H-18 SE	Ⅱ層		須恵器	鉢	(15.6)	—	(2.7)	灰	灰	長石、白色粒	良	ロクロナデ	ハケメ?	隆灰
306	0254	1	H-19 SW	Ⅱ層		緑釉	碗か	—	—	(2.0)	オリーブ 灰	オリーブ 灰	白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	須恵器質
307	0212	1	H-18 NE	Ⅱ層		須恵器	碗	—	5.2	(2.5)	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	回転ヘラケズリ、 回転糸切り	
308	0194	1	H-18 SE	Ⅱ層		土師器	皿か	—	(1.2)	5.6	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石	良	摩滅	ロクロナデ	
309	0199	1	H-18 NW	Ⅱ層		土師器	碗か	—	5.4	(1.3)	浅黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・赤色粒	良	ロクロナデ	回転糸切り	
310	0187	1	H-18 SW	Ⅱ層		土師器	皿	—	3.8	(0.7)	灰白	浅黄橙	石英・長石・赤色粒	良	ロクロナデ	回転糸切り?	
311	0218	1	H-18 NE	Ⅱ層		土師器	碗か	—	4.9	(1.1)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	ロクロナデ	回転糸切り	
312	0195	1	H-18 SE	Ⅱ層		土師器	皿	(5.7)	(5.9)	(1.9)	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石	良	摩滅	ロクロナデ	
313	0186	1	H-18 SW	Ⅱ層		土師器	皿	(8.8)	(5.7)	(1.1)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	ロクロナデ	回転糸切り	
314	0216	1	H-18 NE	Ⅱ層		土師器	碗	—	5	(1.2)	鈍い黄褐	褐灰	石英・長石	良	ロクロナデ	回転糸切り	
315	0219	1	H-18 NE	Ⅱ層		土師器	鍋か	(20.0)	—	(2.4)	浅黄橙	灰白	石英・長石・赤色粒	良	ロクロナデ	カキメ、ロクロナデ	
316	0201	1	H-18 NW	Ⅱ層		土師器	長胴甕	(14.0)	—	(4.0)	鈍い橙	鈍い橙	石英・長石・赤色粒	良	ロクロナデ	摩滅	
317	0179	1	H-18 SW	Ⅱ層		土師器	長胴甕	(21.2)	—	(4.1)	鈍い橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	ロクロナデ	不明	外面煤
318	0178	1	H-18 SW	Ⅱ層		土師器	長胴甕	(35.6)	—	(3.5)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石	良	不明	不明	摩滅
319	0205	1	H-18 NE	Ⅱ層		土師器	長胴甕	(37.0)	—	(4.2)	灰	灰白	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
320	0231	1	I-18 NE	Ⅱ層		土師器	長胴甕	(33.0)	—	(3.3)	鈍い黄褐	鈍い黄褐	石英・長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ	外面煤
321	0232	1	I-18 NE	Ⅱ層		土師器	長胴甕	(31.5)	—	(3.3)	淡黄	淡黄	石英・長石	不良	摩滅	摩滅	
322	0177	1	H-18 SW	Ⅱ層		土師器	長胴甕	(28.3)	—	(3.1)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	石英・長石・赤色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	外面煤
323	0237	1	I-18 NE	Ⅱ層		須恵器	瓶	(11.7)	—	(3.9)	黄灰	黒	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	自然釉
324	0183	1	H-18 SW	Ⅱ層		須恵器	広口瓶	(10.7)	—	(5.3)	黄灰	灰白	石英・長石	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面自然釉
325	0190	1	H-18 SE	SD1、Ⅱ層		須恵器	双耳瓶	—	(13.0)	(10.4)	明青灰	青灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	回転ヘラケズリ 把手	
326	0208	1	H-18 NE	Ⅱ層		須恵器	小型瓶	—	(8.4)	(3.6)	灰白	黄灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、 糸切り	
327	0175	1	H-18 SW	Ⅱ層		須恵器	瓶	—	(8.5)	(3.8)	灰白	灰	石英・長石・白色粒・ 黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
328	0188	1	H-18 SE	Ⅱ層		須恵器	瓶	—	(17.1)	(6.8)	灰白	灰白	石英・長石・白色粒・ 黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	平瓶か
329	0203	1	H-18 NW	Ⅱ層 他		須恵器	瓶	—	—	(4.5)	灰白	灰白	石英・長石・白色粒・ 黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	自然釉
330	0211	1	H-18 NE	Ⅱ層		須恵器	小型瓶	—	(7.2)	(6.4)	灰	灰白	長石・白色粒	良	ロクロナデ	糸切り	
331	0207	1	H-19 NW	Ⅱ層		須恵器	瓶	—	(7.5)	—	灰白	灰白	石英・白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ	回転ヘラケズリ、 糸切り	自然釉
332	0204	1	H-18 NW	Ⅱ層		土師器	鉢	(27.0)	—	(5.2)	灰白	灰白	石英・長石・白色粒・ 黒色粒	良	ロクロナデ	摩滅	
333	0255	1	H-18 SE	Ⅱ層		土師質	土鉢	長 2.7 幅 1.1	厚 1.1	厚 1.1	灰白	灰白	長石・赤色粒	良	摩滅	摩滅	重：2.6g
334	0256	1	H-18 SE	Ⅱ層		土師質	土鉢	長 (2.2)	幅 1.1	厚 1.0	灰白	灰白	砂少、白色粒	良	ナデ	ナデ	重：(1.6g)
335	0198	1	H-18 NW	Ⅱ層		須恵器	焼台	(10.5)	(8.6)	3.1	灰白	灰白	石英・長石	不良	ロクロナデ	回転ヘラ切り	
336	0293	2	西	遺構検出、 SD14		須恵器	盤	(15.7)	13	2.3	灰	灰	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り	底面外面墨書「茂」か
337	0287	2	J-24 SW	遺構検出		須恵器	盤	—	—	(0.8)	灰白	灰白	石英・白色粒	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り	底面外面墨書判読不能
338	0290	2	中(北側)	遺構検出		須恵器	坏 A	—	(11.0)	(1.8)	灰白	灰白	石英・白色粒	良	ロクロナデ	回転ヘラ切り	底面外面墨書判読不能

第4表 土器等観察表 11

報告 番号	管理 番号	地区	グリッド	出土遺構等	細分区・層位・ 取り上げ番号等	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 (内)	色調 (外)	胎土	焼成	調整 (内)	調整 (外)	備考
339	0350	2	中	遺構検出	—	土師器	坏	—	(10.0)	(2.8)	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	不良	ロクロナデ	ロクロナデ	
340	0349	2	西 (北側)	排水溝	—	土師器	埴	(12.6)	7.4	3.5	明赤褐	明赤褐	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ 回転糸切り	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、 回転糸切り	内外面赤彩
341	0344	2	中 (中央)	遺構検出		須恵器	厚底鉢	—	(9.7)	(7.0)	灰白	灰	石英・長石・白色粒・ 黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	
342	0345	2	中 (中央)	遺構検出		須恵器	小型壺	(14.2)	—	8.2	灰白	灰白	石英・長石・白色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、 底部ヘラ切り	
343	0340	2	I-24	遺構検出	—	須恵器	土鍾	長4.5 幅1.7	厚1.1		灰白	灰白	石英・白色粒	良		ナデ	重：16.5g
344	0341	2	中	遺構検出		土師質	土鍾	長4.8 幅1.8	厚1.7		鈍い橙	鈍い橙	石英・長石・白色粒	良	摩滅	摩滅	重：12.8g
345	0343	2	中 (中央)	遺構検出		須恵器	焼台	(7.1)	(9.1)	2.5	灰	灰白	石英・長石、白色粒・ 黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	降灰
346	0342	2	J-23NE	遺構検出		須恵器	高坏	—	-15.3	(13.6)	オリーブ 灰	灰	石英・白色粒・黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ、沈線	2段3方透、上段切込み、 自然釉
347	0236	1	東	遺構検出		縄文	深鉢	—	—	(6.8)	灰黄褐	鈍い黄橙	石英・長石	不良		沈線、変形工字文か？	内面に焦げ痕、縄文後期 後半
348	0013	1	西	表土除去		須恵器	甕	(26.0)	—	(7.0)	灰	灰	石英・長石、黒色粒	良	ロクロナデ	ロクロナデ	自然釉
349	0235	1	I-18 NE	II層		土師器	皿	—	4	(1.0)	淡黄	淡黄	石英・長石	不良	摩滅	ロクロナデ、回転糸切り	赤彩
350	0260	1	中	表土除去		土師器	皿	(12.0)	2.1	(8.0)	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石	不良	摩滅	摩滅	
484	0501	3		SK01	No. 8	須恵器	坏蓋	14.3		2.8	灰	灰白	粗砂、細砂、礫微	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	内面に黒書「泉」、転用呪、 重焼痕
485	0519	3		SK01、攪 乱		須恵器	坏蓋	(17.8)		(1.8)	灰白	灰白	細砂多	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
486	0503	3		SK01	No. 18	須恵器	坏	12.7	8.9	3.6	灰白	灰白	細砂多	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ	底面にヘラ記号
487	0516	3		SK01	上層	須恵器	坏	(12.0)	(8.4)	(3.0)	灰	灰	細砂	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ	
488	0502	3		SK01	No. 3	須恵器	盤	(16.6)	(13.8)	2.4	灰白	灰白	粗砂、細砂	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ	底面に黒痕
489	0504	3		SK01	No. 18、下層	土師器	鍋	(27.0)		(5.3)	淡灰黄	淡灰黄	砂多	良	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	外面煤、内面焦げ
490	0506	4		SK01	No. 3	土師器	甕	(14.9)		(18.7)	灰白	灰白	長石、石英、赤色粒	良	ナデ、ハケメ、ヘラケ ズリ	ヨコナデ、ハケメ	底部外面煤付、4段の刺 突
491	0507	4		SK01	No. 4・6・10	土師器	甕	(15.6)		(11.3)	浅黄橙	灰黄褐	長石	やや 不良	ヘラケズリ	ハケメ	
492	0508	4		SK01	No. 9・13	土師器	甕	(13.0)		(12.0)	浅黄	灰黄	細砂少	良	ハケメ	ヘラケズリのようなハケメ	内面に粘土磁積上げ痕
493	0510	4		SK01	No. 9・11	土師器	甕	(19.4)	(5.0)		浅黄橙	浅黄橙	長石、チャート	やや 不良	摩滅	ハケメ	
494	0509	4		SK01	SD01 付近	土師器	鉢	(15.6)		(8.5)	鈍い黄橙	灰黄褐	長石、石英	不良	ナデ	ハケメ	
495	0514	4		SD01	北アゼ4層	弥生	壺			(7.4)	浅黄橙	浅黄橙	長石、石英	良	摩滅	ハケメ	頸部に刻み目
496	0512	4		SD01	下層	弥生	甕	(13.6)		(2.6)	浅黄橙	浅黄橙	石英・長石、赤色粒	良	ハケメ	ナデ	口唇部に刻み目、外面煤 付
497	0513	4		SD01	下層	弥生	壺把手				褐灰	灰白	長石、石英	良	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ、指オサエ	赤彩、煤塗布？黒光り
498	0518	4		SD01	側溝	弥生	甕	(21.2)		(9.0)	鈍い黄橙	鈍い黄橙	長石、石英	良	摩滅	ハケメ	
499	0511	4		SD01	6層	弥生	甕底部	(6.5)		(12.2)	灰白、黒	灰白、黒	石英・長石、0.5mm礫	良	ハケメ、ヘラケズリ	ヘラケズリ	黒斑
500	0515	4		P11		弥生	甕	(27.3)		(3.4)	灰白	灰白	石英・長石、0.5mm礫、 赤色粒	不良	摩滅	摩滅	
501	0505	3		P10、11		土師器	鍋	(39.8)		(6.9)	淡灰黄	灰黄褐	粗砂、細砂多	良	摩滅	摩滅、ヘラケズリ？、口縁折り 返し	P10は小片1のみ、外面 煤
502	0521	3		攪乱		須恵器	高台坏		(7.5)	(1.7)	灰	灰	粗砂、細砂	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
503	0520	3		攪乱		須恵器	甕				灰	黒灰	粗砂、細砂	良	同心円当具痕	タタキ痕	
504	0517	4		SK01	No. 1	土製品	土鍾			2.1	-	灰白	石英・長石	良	-	ナデ	

第5表 石器観察表

報告 番号	管理 番号	地区	グリッド	出土遺構等	層位等	種別	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	素材	備考
123	0250	1	H-17SE	—	Ⅱ層	土製品	フィゴ羽口	長 (3.3)	幅 (3.3)	—	—	—	精緻な胎土、浅黄橙色～灰白色
351	0360	1	H-18SW	—	Ⅱ層	-	鉄滓	8.4	6.6	2.5	104.7	—	
352	0361	1	I-18SW	SD1	-	-	鉄滓	5.6	6.3	2.9	105.7	—	全面降灰
353	0351	2	I-21	SD11	北半	石製品	不明	9.21	5.94	2.26	150.25	砂岩	
354	0352	2	中央	遺構検出		石製品	砥石	(6.30)	6.36	2.98	163.4	砂岩	
355	0353	2	中～南側	遺構検出		石製品	砥石	5.18	3.14	0.91	31.45	流紋岩	
356	0354	1	I-18SE	SD1		石製品	砥石	13.20	5.24	3.88	410.83	流紋岩	
357	0355	1	H-18NE	SD1		石製品	玉等原石	3.65	2.39	1.19	13.65	緑色凝灰岩	施溝分割
358	0356	1	I-19	P53		石製品	砥石	4.56	(4.05)	2.92	66.67	流紋岩	
359	0357	2	J-23NE	遺構検出		石製品	砥石	3.88	2.81	2.30	6.42	軽石	
360	0358	2	J-23NE	SD14	北半	石製品	玉未成品	3.48	5.20	3.70	74.9	緑色凝灰岩	石核
361	0359	1	H-17NW	SD1	中層	石製品	管玉未成品	1.33	0.59	0.47	0.64	緑色凝灰岩	研磨工程
505	0522	3	-	P09		石製品	管玉未成品	1.7	0.6	0.63	0.96	緑色凝灰岩	形割工程
506	0523	4	-	SD01	上層	石製品	砥石	4.15	2	1.6	2.33	軽石	
507	0525	4	-	SD01	上層	石製品	砥石	5.1	4.5	4.5	21.84	軽石	
508	0524	4	-	SD01	上層	石製品	砥石	13.7	7.1	5.9	750	-	
509	0526	4	-	SD01	上層	石製品	砥石	(8.6)	(5.3)	2.4	103.43	砂岩	

第6表 木製品観察表1

報告 番号	管理 番号	地区	グリッド	出土 遺構		器種	木取り	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
362	0481	1		SE01	西側井戸枠	舟底板	板目	スギ	71.4	(168.6)	8.6	
363	0482	1		SE01	東側井戸枠	舟底板	板目	スギ	80.6	167.0	34.8	
364	0386	1	I18	SE01	北側	矢板	板目	スギ	121.8	5.7	1.5	
365	0415	1	H18	SE01	南側	舟底板	柱目	スギ	(147.3)	7.4	4.3	
366	0367	1	I18	SE01	井戸枠内、No 3	板材	板目	スギ	87.2	13.7	4.3	
367	0404	1	I18	SE01	井戸枠内、No 2	建築部材	板目	スギ	(82.7)	10.3	3.2	ほぞ穴
368	0399	1	H18	SE01	北側	板	柱目	スギ	(60.0)	8.0	2.1	
369	0465	1	I18	SE01	井戸枠内下層	角棒	板目	スギ	(66.4)	3.1	1.4	
370	0371	1	I18	SD01	下層、No 63	梁桁	分割材	スギ	6.5	177.0	3.0	
371	0385	1	H17	SD01	下層、No 20	柱	芯持ち丸材	ハンノキ垂属	(249.4)	33.0	29.0	
372	0372	1	I18	SD01	下層、No 12	角棒	削り出し	スギ	(165.0)	3.1	2.6	
373	0374	1	H18	SD01	下層、No 35	垂木	分割材	スギ	145.9	4.1	4.0	
374	0383	1	H17	SD01	下層	梁、垂木	分割材	スギ	159.9	5.6	4.9	杭に転用
375	0388	1	H17	SD01	下層、No 49	分割材	分割材	スギ	128.8	12.7	16.2	
376	0391	1	I18H18	SD01	下層、No 9	梁	板目	スギ	16.3	167.2	5.2	
377	0392	1	H18	SD01	下層、No 28	板材	板目	スギ	156.8	14.5	3.0	
378	0405	1	I18	SD01	下層	板	板目	スギ	(91.6)	5.3	2.5	
379	0425	1	H17	SD01	下層、No 8	板	板目	スギ	88.0	5.0	1.2	有孔
380	0426	1	H17	SD01	下層	有頭尖り棒	削出	スギ	76.8	3.3	2.4	
381	0427	1	H17	SD01	下層	角棒	芯除角材	スギ	(79.6)	2.7	1.8	
382	0423	1	H17	SD01	下層	梁桁	板目	スギ	68.9	8.1	2.7	
383	0424	1	H18	SD01	下層	板	板目	スギ	(94.0)	7.9	2.5	
384	0416	1	H17	SD01	下層、粗砂	有頭棒	芯除角材	スギ	(69.3)	3.6	2.3	
385	0414	1	H18	SD01	下層	角棒	芯除角材	スギ	(116.6)	3.5	2.2	
386	0429	1	H18	SD01	下層	角材	芯除角材	スギ	118.5	3.4	2.0	先端尖り
387	0430	1	H17	SD01	下層、No 40	丸棒	削出	スギ	(83.5)	3.0	2.7	
388	0428	1	H17	SD01	下層	角棒	芯除角材	スギ	(109.5)	2.3	2.3	
389	0362	1	H17	SD01	下層、No 6	建築部材	板目	スギ	(70.3)	14.6	2.0	
390	0364	1	H18	SD01	下層、No 62	杭	分割材	スギ	80.1	4.4	3.8	
391	0376	1	H17	SD01	下層、No 26	壁板?	板目	スギ	90.0	13.8	1.6	
392	0369	1	H17	SD01	下層、No 50	柱	芯持ち丸材	モミ属	(74.5)		14.5	
393	0373	1	H18	SD01	下層、No 29	梁桁	板目	スギ	137.8	6.5	4.5	
394	0377	1	H17	SD01	下層、No 25	板材	板目	スギ	92.5	15.0	3.5	
395	0378	1	H17	SD01	下層、No 4	槽	板目	スギ	(16.1)	(98.3)	11.5	
396	0375	1	H17	SD01	下層、No 1		分割材	スギ	79.0	8.6	6.8	
397	0387	1	H17H18	SD01	下層、No 57	壁材	柱目	スギ	(18.5)	114.4	3.1	
398	0389	1	I18H18	SD01	下層、No 11	舟材	柱目	スギ	125.9	17.5	2.2	矢板に転用
399	0384	1	H18	SD01	下層、No 31	杭 (角材)	分割材	スギ	125.1	4.9	4.0	
400	0390	1	H17	SD01	下層、No 54	分割材	分割材	スギ	127.8	14.7	10.2	
401	0393	1	H17	SD01	下層、No 41	分割材	分割材	スギ	128.2	19.3	4.0	
402	0394	1	H17	SD01	下層、No 56	木製品	板目	スギ	124.1	(18.6)	3.3	
403	0395	1	H17	SD01	下層、No 45	板材	板目	スギ	112.3	24.3	3.5	
404	0397	1	H17	SD01	下層、No 7	柱	柱目	スギ	32.8	13.8	3.6	ほぞ穴あり
405	0407	1	H17	SD01	下層、No 27	箱	柱目	スギ	30.3	4.3	1.2	木釘あり
406	0398	1	—	SD01	下層、No 17	板	板目	スギ	(39.6)	4.3	0.7	孔
407	0401	1	H17	SD01	下層	丸棒	削出	スギ	(54.0)	3.4	1.3	
408	0410	1	H17	SD01	下層	有頭棒	削出	スギ	(68.5)	3.0	4.0	
409	0408	1	I18	SD01	下層	板	板目	スギ	(56.7)	6.8	2.8	
410	0413	1	—	SD01	下層、No 32	梁桁	板目	スギ	(46.7)	7.2	3.9	
411	0406	1	H17	SD01	下層、No 3	槽	柱目	スギ	(26.4)	(8.5)	3.1	
412	0409	1	H18	SD01	下層、No 58	槽	柱目	スギ	36.7	(7.7)	5.4	
413	0475	1	H17	SD01	下層	槽	柱目	スギ	40.6	(5.4)	4.7	
414	0412	1	H17	SD01	下層	角材	芯除角材	スギ	(68.1)	5.6	3.6	
415	0411	1	H17	SD01	下層	丸棒	削出	スギ	(93.7)	1.9	1.8	
416	0419	1	H17	SD01	下層、No 5	箱	板目	スギ	(31.8)	3.9	0.8	組み合わせ

第4節 出土遺物

第6表 木製品観察表2

報告 番号	管理 番号	地区	グリッド	出土 遺構		器種	木取り	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
417	0421	1	H17	SD01	下層、No.13	板	柱目	スギ	23.0	9.9	3.9	
418	0420	1	H17	SD01	下層、No.53	板	板目	スギ	(76.7)	6.1	0.9	
419	0417	1	H18	SD01	下層	杭	板目	スギ	(72.8)	5.4	2.2	
420	0431	1	H18	SD01	下層	梁桁	削出	スギ	(56.6)	5.3	4.8	
421	0439	1	H17	SD01	下層	梁桁	芯除角材	ウルシ	(104.0)	4.5	3.4	
422	0422	1	H17	SD01	下層、No.14	部材	芯除角材	スギ	37.0	6.8	6.7	
423	0418	1	H17	SD01	下層、No.2	把手	削出	スギ	(27.4)	4.2	2.8	
424	0432	1	H18	SD01	下層	梁桁	板目	スギ	(81.9)	11.8	4.5	ほぞ穴あり
425	0434	1	H18	SD01	下層、No.55	平鋸	柱目	コナラ属クヌギ節	(24.4)	17.6	3.0	
426	0435	1	H17	SD01	下層、No.33	二又膝柄鋸	柱目	イチイガシ	(49.3)	6.0	1.5	
427	0450	1	H18	SD01	下層	角棒	柱目	スギ	70.1	3.6	1.6	
428	0449	1	H17	SD01	下層	角棒	芯除角材	スギ	(63.7)	1.9	1.7	
429	0440	1	H18	SD01	下層、No.60	角棒	芯除角材	スギ	(117.9)	4.0	2.5	
430	0441	1	H17	SD01	下層、No.43	角棒	芯除角材	スギ	(117.3)	3.4	1.9	
431	0442	1	H17	SD01	下層、No.15	角棒	芯除角材	スギ	(112.3)	4.0	2.3	
432	0443	1	H18	SD01	下層	丸棒	削出	スギ	(71.8)	3.2	2.0	
433	0445	1	H17	SD01	下層、No.16	角材	芯除角材	スギ	(88.9)	6.2	3.6	
434	0444	1	H18	SD01	下層、No.38	角棒	芯除角材	スギ	109.9	3.0	2.6	
435	0452	1	H17	SD01	下層	尖り棒	芯除角材	スギ	59.8	2.4	1.2	
436	0455	1	H17	SD01	下層	尖り棒	削出	スギ	(44.7)	1.6	1.3	
437	0456	1	H17	SD01	下層、ビート下	板	柱目	スギ	(54.5)	9.8	2.6	
438	0459	1	H17	SD01	下層	角棒	芯除角材	スギ	49.5	4.6	2.9	
439	0464	1	H17	SD01	下層	二又鋸	柱目	イチイガシ	(35.7)	6.3	0.9	
440	0463	1	H17	SD01	下層	分割材	板目	スギ	(32.2)	10.1	5.7	
441	0457	1	H17	SD01	下層		ミカン割状	スギ	(15.6)	(13.4)	10.7	
442	0453	1	H17	SD01	下層	板	板目	スギ	(53.8)	4.8	1.8	
443	0483	1	H18	SD01	下層	角棒	芯除角材	スギ	(79.4)	3.5	2.3	
444	0363	1	H17	SD01	下層、No.47	舷側板	板目	スギ	111.3	6.3	4.9	
445	0382	1	H17	SD01	下層、No.22	尖り棒	削り出し丸棒	スギ	73.5	2.1	2.0	
446	0365	1		SD01	下層、No.44	杭	分割材	スギ	87.2	13.7	4.3	梁桁材転用?
447	0368	1	H18	SD01	下層、No.61	板材?	柱目	スギ	81.5	19.1	2.9	
448	0396	1	H18	SD01	下層、No.65	木製品	板目	スギ	84.3	12.8	3.2	
449	0380	1	H17	SD01	下層、No.23	蓋	板目	スギ	(16.3)	(61.3)	3.0	
450	0381	1	H17	SD01	下層、No.19	網台	板目	スギ	81.8	10.0	1.6	
451	0370	1	H17	SD01	下層、No.34	網枠	芯持丸木	イヌガヤ	(70.2)	(3.3)	(3.9)	
452	0379	1	H18	SD01	下層	枠材	柱目	スギ	78.4	5.3	1.3	
453	0460	1	H17	SD01	下層	樹皮	—	樹皮	(6.3)	1.9	0.1	
454	0366	1	H17SW	SD01	下層	槽	板目	スギ	(7.5)	(48.1)	1.9	
455	0467	1	H17	SD01	下層	槽	板目	スギ	47.9	(7.4)	2.8	
456	0437	1	H17	SD01	下層	箱	柱目	スギ	20.5	12.6	1.4	
457	0402	1	H17	SD01	下層	底板	柱目	スギ	23.6	(10.1)	1.4	
458	0473	1	H18	SD01	下層 (砂+ビート)	曲物底板	柱目	スギ	21.4	(11.1)	1.1	
459	0438	1	H18	SD01	下層 倒木横	曲物 底板	柱目	スギ	(15.4)	(6.7)	0.6	
460	0458	1	H17	SD01	下層	蓋板	柱目	スギ	25.2	(7.3)	0.8	孔2あり
461	0461	1	H17	SD01	下層	台・脚	柱目	スギ	23.7	8.5	1.1	
462	0462	1	H17	SD01	下層	台・脚	柱目	スギ	22.5	7.3	1.0	
463	0446	1	H17	SD01	下層 ビート下	柱	芯持材	スギ	(25.2)	10.1	9.1	ほぞ穴あり
464	0471	1	H17	SD01	下層	結合部材	芯除角材	スギ	46.2	2.6	1.7	
465	0403	1	G17	SD01 肩	上層	板	板目	スギ	(31.9)	10.2	3.4	
466	0400	1	G17	SD01 肩	上層	建築部材?	柱目	スギ	(37.7)	3.6	3.5	
467	0466	1	H17	SD01	中層	曲物底板	柱目	スギ	14.6	(10.3)	0.6	
468	0433	1	G17	SD01 肩	上層	剣形	柱目	スギ	26.1	2.4	1.0	形代
469	0474	1	H17	SD01	中層	尖り棒	分割材	スギ	(27.4)	1.7	1.2	
470	0480	2	K25	SI01-P1		柱根	芯持材	コナラ属コナラ節	(26.3)	14.1	3.0	
471	0478	2	J25	SI01-P2		柱根	分割材	コナラ属コナラ節	(7.3)	(6.0)	4.0	
472	0479	2	J25	SI01-P3		柱根	芯持材	アサダ	(29.4)	18.4	16.4	
473	0477	2	J25	SI01-P6		柱	分割材	スギ	(16.0)	(11.8)	5.7	
474	0448	2	J24	P31		板塀	板目	スギ	(19.0)	16.0	4.1	
475	0469	1	H15	P38		柱	芯除角材	スギ	(48.6)	14.9	7.0	
476	0476	1	G15	SK01		梁桁	板目	スギ	(24.8)	5.7	2.6	
477	0468	1	G15	SK01	No.2	鎌柄形代	板目	ヒノキ	25.8	1.9	1.2	
478	0472	1	G15	SK01	No.1	曲物底板	柱目	スギ	25.1	(17.0)	1.0	
479	0470	1	-	中トレンチ	下	底板か	柱目	スギ	45.9	9.8	1.7	
480	0436	2	L30	遺構検出		人形か斎串	板目	スギ	(20.6)	2.8	0.8	
481	0447	2	J23	SE01	井戸側外底北側 (東面)	矢板	板目	スギ	41.5	13.1	1.8	
482	0451	2	J23	SE01	井戸側 (外底) 北側 (北西)	堅板	板目	スギ	(23.4)	14.0	1.7	
483	0454	2	J23	SE01	井戸枠内底 北側 (西面)	堅板	板目	スギ	(48.9)	11.1	1.6	
510	0532	3		SK01	No.16	曲物底板	柱目	スギ	(19.4)	(7.8)	1.0	
511	0533	3		SK01	No.14	曲物底板	柱目	スギ	(15.4)	(7.4)	0.7	
512	0535	3		SK01	No.11	角棒材	芯除角材	スギ	(9.4)	4.5	2.5	
513	0534	3		SK01	No.15	四角材	芯除角材	スギ	4.8	3.3	4.6	
514	0527	3		SK01	No.19	縦板	板目	スギ	50.9	12.4	1.8	
515	0529	3		SK01	No.13	縦板	板目	スギ	55.0	8.7	1.9	原位置遊離
516	0531	3		SK01	No.24	縦板	板目	スギ	56.3	17.4	2.7	原位置遊離
517	0528	3		SK01	No.20・21	縦板	板目	スギ	73.9	24.4	3.6	
518	0530	3		SK01	No.25	縦板	板目	スギ	49.9	11.5	1.6	井戸枠補修前

第4章 自然科学的分析

第1節 出土木製品の樹種同定

はじめに

梶井衛生センター遺跡は、動橋川右岸の沖積地に位置し、弥生時代から古代の集落跡である。本報告では、出土した木製品について、用材選択を明らかにするための樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、弥生・古墳時代や古代・中世の木製品 131 点である。

2. 分析方法

実測図と比較しながら資料の木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の3断面について徒手切片を直接採取した。なお、肉眼でスギの可能性が高い針葉樹で、木口面の切片採取が加工面に影響を与えると判断された場合には、柾目と板目の2面のみの切片採取とした。採取した切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとした。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定した。

なお、木材組織の名称等は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にした。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にした。

3. 結果

樹種同定結果を第7表に示す。木製品は、針葉樹3分類群（ヒノキ、スギ、イヌガヤ）と広葉樹5分類群（コナラ属クヌギ節、コナラ属コナラ節、イチイガシ、アサダ、ウルシ）に同定された。なお、453は樹皮であった。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・スギ *Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don ヒノキ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

第1節 出土木製品の樹種同定

第7表 樹種同定結果1

報告 番号	管理 番号	地 区	グリッド	出土遺構	出土層位置・取り上げ番号	時代	器種	木取り	樹種
362	0481	1区		SE01	西側板	古代・中世	舟底板	板目	スギ
363	0482	1区		SE01	東側板	古代・中世	舟底板	板目	スギ
364	0386	1区	I18	SE01	北側	平安	矢板	板目	スギ
365	0415	1区	H18	SE01	南側	古代・中世	舟底板	桎目	スギ
366	0367	1区	I18	SE01	井戸枠内、No.3	不明	板材	板目	スギ
367	0404	1区	I18	SE01	井戸枠内、No.2	弥生・古墳	建築部材（ホゾ穴あり）	板目	スギ
368	0399	1区	H18	SE01	北側	古代・中世	板	桎目	スギ
369	0465	1区	I18	SE01	井戸枠内下層	弥生・古墳	角棒	板目	スギ
370	0371	1区	I18	SD01	下層、No.63	弥生～古墳	梁桁	分割材	スギ
371	0385	1区	H17	SD01	下層、No.20	弥生～古墳	柱	芯持ち丸材	ハンノキ垂属
372	0372	1区	I18	SD01	下層、No.12	弥生～古墳	角棒	削り出し	スギ
373	0374	1区	H18	SD01	下層、No.35	弥生～古墳	垂木	分割材	スギ
374	0383	1区	H17	SD01	下層	弥生～古墳	梁、垂木（杭に転用）	分割材	スギ
375	0388	1区	H17	SD01	下層、No.49	弥生～古墳	分割材	分割材	スギ
376	0391	1区	H・I18	SD01	下層、No.9	弥生～古墳	梁	板目	スギ
377	0392	1区	H18	SD01	下層、No.28	弥生～古墳	板材	板目	スギ
378	0405	1区	I18	SD01	下層	弥生・古墳	板	板目	スギ
379	0425	1区	H17	SD01	下層、No.8	弥生・古墳	板（有孔）	板目	スギ
380	0426	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	有頭尖り棒	削出	スギ
381	0427	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	角棒	芯除角材	スギ
382	0423	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	梁桁	板目	スギ
383	0424	1区	H18	SD01	下層	弥生・古墳	板	板目	スギ
384	0416	1区	H17	SD01	下層、粗砂	弥生・古墳	有頭棒	芯除角材	スギ
385	0414	1区	H18	SD01	下層	弥生・古墳	角棒	芯除角材	スギ
386	0429	1区	H18	SD01	下層	弥生・古墳	角材（先端尖り）	芯除角材	スギ
387	0430	1区	H17	SD01	下層、No.40	弥生・古墳	丸棒	削出	スギ
388	0428	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	角棒	芯除角材	スギ
389	0362	1区	H17	SD01	下層、No.6	弥生～古墳	建築部材	板目	スギ
390	0364	1区	H18	SD01	下層、No.62	弥生～古墳	杭	分割材	スギ
391	0376	1区	H17	SD01	下層、No.26	弥生～古墳	壁板？	板目	スギ
392	0369	1区	H17	SD01	下層、No.50	弥生～古墳	柱	芯持ち丸材	モミ属
393	0373	1区	H18	SD01	下層、No.29	弥生～古墳	梁桁	板目	スギ
394	0377	1区	H17	SD01	下層、No.25	弥生～古墳	板材	板目	スギ
395	0378	1区	H17	SD01	下層、No.4	弥生～古墳	槽	板目	スギ
396	0375	1区	H17	SD01	下層、No.1	弥生～古墳	欠込み	分割材	スギ
397	0387	1区	H17・18	SD01	下層、No.57	弥生～古墳	壁材	桎目	スギ
398	0389	1区	H・I18	SD01	下層、No.11	弥生～古墳	舟材（矢板に転用）	桎目	スギ
399	0384	1区	H18	SD01	下層、No.31	弥生～古墳	杭（角材）	分割材	スギ
400	0390	1区	H17	SD01	下層、No.54	弥生～古墳	分割材	分割材	スギ
401	0393	1区	H17	SD01	下層、No.41	弥生～古墳	分割材	分割材	スギ
402	0394	1区	H17	SD01	下層、No.56	弥生～古墳	木製品	板目	スギ
403	0395	1区	H17	SD01	下層、No.45	弥生～古墳	板材	板目	スギ
404	0397	1区	H17	SD01	下層、No.7	弥生・古墳	柱（ホゾ穴あり）	桎目	スギ
405	0407	1区	H17	SD01	下層、No.27	弥生・古墳	箱（木釘あり）	桎目	スギ
406	0398	1区	—	SD01	下層、No.17	弥生・古墳	板（孔）	板目	スギ
407	0401	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	丸棒	削出	スギ
408	0410	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	有頭棒	削出	スギ
409	0408	1区	I18	SD01	下層	弥生・古墳	板	板目	スギ
410	0413	1区	—	SD01	下層、No.32	弥生・古墳	梁桁	板目	スギ
411	0406	1区	H17	SD01	下層、No.3	弥生・古墳	槽	桎目	スギ

樹種同定結果2

報告 番号	管理 番号	地 区	グリッド	出土遺構	出土層位置・取り上げ番号	時代	器種	木取り	樹種
412	0409	1区	H18	SD01	下層、No.58	弥生・古墳	槽	柱目	スギ
413	0475	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	槽	柱目	スギ
414	0412	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	角材	芯除角材	スギ
415	0411	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	丸棒	削出	スギ
416	0419	1区	H17	SD01	下層、No.5	弥生・古墳	組み合わせ箱	板目	スギ
417	0421	1区	H17	SD01	下層、No.13	弥生・古墳	板	柱目	スギ
418	0420	1区	H17	SD01	下層、No.53	弥生・古墳	板	板目	スギ
419	0417	1区	H18	SD01	下層	弥生・古墳	杭	板目	スギ
420	0431	1区	H18	SD01	下層	弥生・古墳	梁桁（有頭）	削出	スギ
421	0439	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	梁桁	芯除角材	ウルシ
422	0422	1区	H17	SD01	下層、No.14	弥生・古墳	部材	芯除角材	スギ
423	0418	1区	H17	SD01	下層、No.2	弥生・古墳	把手	削出	スギ
424	0432	1区	H18	SD01	下層	弥生・古墳	梁桁（ホゾ穴あり）	板目	スギ
425	0434	1区	H18	SD01	下層、No.55	弥生・古墳	平鋸（直柄）	柱目	コナラ属クヌギ節
426	0435	1区	H17	SD01	下層、No.33	弥生・古墳	二又鋸（曲柄）	柱目	イチイガシ
427	0450	1区	H18	SD01	下層	弥生・古墳	角棒	柱目	スギ
428	0449	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	角棒	芯除角材	スギ
429	0440	1区	H18	SD01	下層、No.60	弥生・古墳	角棒	芯除角材	スギ
430	0441	1区	H17	SD01	下層、No.43	弥生・古墳	角棒	芯除角材	スギ
431	0442	1区	H17	SD01	下層、No.15	弥生・古墳	角棒	芯除角材	スギ
432	0443	1区	H18	SD01	下層	弥生・古墳	丸棒	削出	スギ
433	0445	1区	H17	SD01	下層、No.16	弥生・古墳	角材	芯除角材	スギ
434	0444	1区	H18	SD01	下層、No.38	弥生・古墳	角棒	芯除角材	スギ
435	0452	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	尖り棒	芯除角材	スギ
436	0455	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	尖り棒	削出	スギ
437	0456	1区	H17	SD01	下層、ピート下	弥生・古墳	板	柱目	スギ
438	0459	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	角棒（建築部材）	芯除角材	スギ
439	0464	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	二又鋸（曲柄）	柱目	イチイガシ
440	0463	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	分割材	板目	スギ
441	0457	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	残材	ミカン割状	スギ
442	0453	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	板	板目	スギ
443	0483	1区	H18	SD01	下層	弥生・古墳	角棒	芯除角材	スギ
444	0363	1区	H17	SD01	下層、No.47	弥生～古墳	舷側板	板目	スギ
445	0382	1区	H17	SD01	下層、No.22	弥生～古墳	尖り棒	削り出し丸棒	スギ
446	0365	1区		SD01	下層、No.44	弥生～古墳	杭（梁桁材転用?）	分割材	スギ
447	0368	1区	H18	SD01	下層、No.61	弥生～古墳	板材?	柱目	スギ
448	0396	1区	H18	SD01	下層、No.65	弥生～古墳	木製品	板目	スギ
449	0380	1区	H17	SD01	下層、No.23	弥生～古墳	蓋	板目	スギ
450	0381	1区	H17	SD01	下層、No.19	弥生～古墳	網台	板目	スギ
451	0370	1区	H17	SD01	下層、No.34	弥生・古墳	網枠	芯持丸木	イヌガヤ
452	0379	1区	H18	SD01	下層	弥生～古墳	枠材	柱目	スギ
453	0460	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	樹皮（とじかわ）	—	樹皮
454	0366	1区	H17	SD01	下層	弥生～古墳	槽	板目	スギ
455	0467	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	槽	板目	スギ
456	0437	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	箱	柱目	スギ
457	0402	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	底板	柱目	スギ
458	0473	1区	H18	SD01	下層（砂+ピート）	弥生・古墳	曲物底板	柱目	スギ
459	0438	1区	H18	SD01	下層倒木横	弥生・古墳	曲物 底板	柱目	スギ
460	0458	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	蓋板（孔2つあり）	柱目	スギ

樹種同定結果3

報告 番号	管理 番号	地 区	グリッド	出土遺構	出土層位置・取り上げ番号	時代	器種	木取り	樹種
461	0461	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	台	柱目	スギ
462	0462	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	台	柱目	スギ
463	0446	1区	H17	SD01	下層ビート下	弥生・古墳	柱（ホゾ穴あり）	芯持材	スギ
464	0471	1区	H17	SD01	下層	弥生・古墳	結合部材	芯除角材	スギ
465	0403	1区	G17	SD01 肩	上層	弥生・古墳	板	板目	スギ
466	0400	1区	G17	SD01 肩	上層	弥生・古墳	建築部材か？	柱目	スギ
467	0466	1区	H17	SD01	中層	弥生・古墳	曲物底板	柱目	スギ
468	0433	1区	G17	SD01 肩	上層	弥生・古墳	形代 剣形	柱目	スギ
469	0474	1区	H17	SD01	中層	弥生・古墳	尖り棒	分割材	スギ
470	0480	2区	K25	SI01-P1		弥生・古墳	柱根	芯持材	コナラ属コナラ節
471	0478	2区	J25	SI01-P2		弥生・古墳	柱根	分割材	コナラ属コナラ節
472	0479	2区	J25	SI01-P3		弥生・古墳	柱根	芯持材	アサダ
473	0477	2区	J25	SI01-P6		古代・中世	柱	分割材	スギ
474	0448	2区	J24	P31		古代・中世	板塀	板目	スギ
475	0469	1区	H15	P38		弥生・古墳	柱	芯除角材	スギ
476	0476	1区	G15	SK01		古代・中世	梁桁	板目	スギ
477	0468	1区	G15	SK01	No. 2	古代・中世	鎌柄形代	板目	ヒノキ
478	0472	1区	G15	SK01	No. 1	古代・中世	曲物底板	柱目	スギ
479	0470	1区	—	中トレンチ	下	古代・中世	底板か	柱目	スギ
480	0436	2区	L30	遺構検出		古代・中世	人形か竈串	板目	スギ
481	0447	2区	J23	SE01	井戸側外底北側（東面）	弥生・古墳	矢板	板目	スギ
482	0451	2区	J23	SE01	井戸側（外底）北側（北西）	古代・中世	堅板	板目	スギ
483	0454	2区	J23	SE01	井戸枠内底北側（西面）	古代・中世	堅板	板目	スギ
510	0532	3区		SK01	No. 16	古代	曲物底板	柱目	スギ
511	0533	3区		SK01	No. 14	古代	曲物底板	柱目	スギ
512	0535	3区		SK01	No. 11	古代	板	芯除角材	スギ
513	0534	3区		SK01	No. 15	古代	角材	芯除角材	スギ
514	0527	3区		SK01	No. 19	弥生	板	板目	スギ
515	0529	3区		SK01	No. 13	弥生か	板	板目	スギ
516	0531	3区		SK01	No. 24	弥生	板	板目	スギ
517	0528	3区		SK01	No. 20・21	弥生	板	板目	スギ
518	0530	3区		SK01	No. 25	弥生	板	板目	スギ

・イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K. Koch イチイ科イヌガヤ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。樹脂細胞は早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Cerris* ブナ科

環孔材。大型の道管が配列する孔圏部は1列、孔圏外で急激に道管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科

環孔材。大型の道管が配列する孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に道管径を減じたのち、多数が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・イチイガシ *Quercus gilva* (Blume) Oerst ブナ科コナラ属

放射孔材。道管は単独で放射方向に配列する。道管の接線径は、最大で $230\mu\text{m}$ となる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科アサダ属

散孔材。道管は単独または2～4個が放射方向に複合して散財し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。道管の内壁にはらせん肥厚が認められる。放ソシキハ同性、1～3細胞幅、1～30細胞高。

・ウルシ *Toxicodendron vernicifluum* (Stokes) F.A.Barkley ウルシ科ウルシ属

環孔材。やや大型の道管が配列する孔圏部は3～4列、孔圏外への移行は緩やかで、孔圏外の小道管は単独または2～4個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は異性、1～4細胞幅、1～20細胞高。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型。放射組織は単列で、細胞高が高い(20以上)ものが散見される。

・ハンノキ属ハンノキ亜属 (*Alnus* subgen. *Alnus*) カバノキ科

散孔材で、道管は単独または2～4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと集合放射組織とがある。

4. 考察

97点の木製品には合計8種類が認められた。各種類の材質等についてみると、針葉樹のヒノキは山地・丘陵地の尾根筋を中心に生育する常緑高木であり、木材は割裂性と耐水性が高い。スギは沖積地を中心に生育する常緑高木であり、木材は割裂性と耐水性が比較的高い。イヌガヤは、河畔の林床等に生育する常緑低木～小高木である。北陸地方では、変種であるハイイヌガヤが広く分布している。木材は重硬・緻密で強度、耐水性、靱性が高い。広葉樹のイチイガシは、暖温帯性常緑広葉樹林の主要な構成種となる常緑高木、クヌギ節とコナラ節は二次林等に生育する落葉高木である。木材はいずれも重硬で強度が高い。アサダは河畔等に生育する落葉高木であり、木材は重硬・緻密で強度が高い。ウルシは栽培される落葉小高木～高木であり、木材は軽軟な部類に入る。

本遺跡では、131点の木製品について用材選択の考察を行う。なお、451は、二度の樹種同定を実施し、異なる結果が得られているが、本稿ではイヌガヤを用いる。木製品の時代別、器種別の種類構成を第8表に示す。木製品131点のうち、弥生・古墳時代(弥生及び弥生かを含む)の資料が112点を占めており、他に古代・中世(古代を含む)が19点ある。

弥生・古墳時代の木製品は、伊東・山田(2012)の木器分類を参考にすると、紡織具、農耕土木具、漁労具、運搬具、容器、建築材等(建築部材、施設材・器具材、土木材を含む)、祭祀具、その他(用途不明品を含む)がある。資料の中心は建築材等であり、他に容器も比較的多いが、生産道具の類は少ない。112点の資料のうち、101点がスギに同定されている。紡織具(網台)、運搬具(舷側板)、祭祀具(形代 剣形)、その他・用途不明品(板・棒類など)の全て、容器(槽、曲物、箱など)の大部分、建築材等(梁桁、壁材、板材など)の多くがスギであり、分割加工を施す板材や角材を中心にスギが多用されたことが推定される。伊東・山田(2012)のデータベースによれば、スギ材の多用傾向は、県内の弥生時代～古墳時代の多くの遺跡で確認されており、今回の結果も整合的である。

第8表 種類別樹種一覧表

分類群\時代・器種	弥生・古墳								古代・中世					合計
	紡織	農耕	漁労	運搬	容器	建築	祭祀	その他	運搬	容器	建築	祭祀	その他	
針葉樹														
モミ属						1								1
ヒノキ												1		1
スギ	1			1	15	47	1	36	3	4	9	1	1	119
イヌガヤ			1											1
広葉樹														
クヌギ節		1												1
コナラ節						2								2
アカガシ亜属		2												2
ハンノキ亜属						1								1
アサダ						1								1
ウルシ						1								1
その他														
樹皮					1									1
合 計	1	3	1	1	16	53	1	36	3	4	9	2	1	131

スギ以外の樹種が確認された器種についてみると、農耕土木具、漁労具、容器の綴じ皮、建築材等の梁桁と柱材がある。農耕土木具は、鋏3点である。平鋏（直柄）がコナラ節、二又鋏（曲柄）の2点がいずれもイチイガシ（アカガシ亜属）に同定された。いずれも柁目取りで、木取りと硬い木材が利用される点は同様であるが、着柄方式によって樹種が異なる結果が得られた。伊東・山田（2012）のデータベースによれば、石川県内における弥生時代～古墳時代の鋏は、直柄式と曲柄式のいずれにもアカガシ亜属とコナラ亜属（クヌギ節、コナラ節）が確認されており、この結果を見る限りでは着柄方式による用材選択の違いは認められない。今回の結果についても、偶然の可能性があり、着柄方式による用材選択の違いを示すのかは慎重に検討する必要がある。なお、イチイガシは、関東地方における調査では、沿海地を中心に農耕土木具に多く利用される傾向があることが指摘されている（能城ほか2012）。なお、石川県内では、八日市地方遺跡の弥生時代中期とされる部材にイチイガシ、鋏鋤や斧柄等にイチイガシの可能性のあるアカガシ亜属が確認された例がある（能城ほか2016）。

漁労具の網枠は、小径の芯持丸木を加工して製作されており、イヌガヤに同定された。網枠にはホゾ穴が認められることから、全体を円形に曲げて一方の端部をホゾ穴に差し込んだと考えられ、靱性や耐水性の高いイヌガヤは適材といえる。伊東・山田（2012）のデータベースによれば、県内の弥生時代～古墳時代の網枠は、一本U字型、一本Y字型、組合せ型の3タイプがある。これらの網枠には、イヌガヤ、モミ属、スギ、クロマツ（マツ属複雑管束亜属）、ヤナギ属、トネリコ属が確認されている。各タイプとも複数種類が認められ、タイプによる用材選択の違いは明瞭ではない。イヌガヤは全てのタイプに利用が認められており、今回の結果も整合的である。

容器の綴じ皮は、樹皮である。組織的に種類を同定することは難しいが、外観的な特徴や民俗事例（成田,1996; 名久井2011）を考慮すれば、サクラ属の樹皮と考えられる。サクラ属の樹皮は強靱であり、綴じ皮のほか、八日市地方遺跡で出土した弥生時代中期の柄付き鉄製匏の柄に巻きつけた補強材等にも利用されたことが知られている（中屋ほか2019）。また、八日市地方遺跡では、サクラ属の樹皮を紐状に加工する各工程を示す遺物が出土している（浦2014）。

建築材等の梁・桁は、大部分がスギであるが、ウルシが1点のみ認められた。ウルシは樹液を利用するための栽培種であることから、周辺におけるウルシ栽培と、樹液採取後の木材を活用したことが推定される。また、柱材は、スギの他にモミ属、コナラ節、ハンノキ亜属、アサダが認められた。強度の高い広葉樹材が多い一方で、強度や保存性の低いモミ属も認められる。建築材の中でも柱材については、芯持材を中心にスギ以外の樹種が利用されたことが推定される。

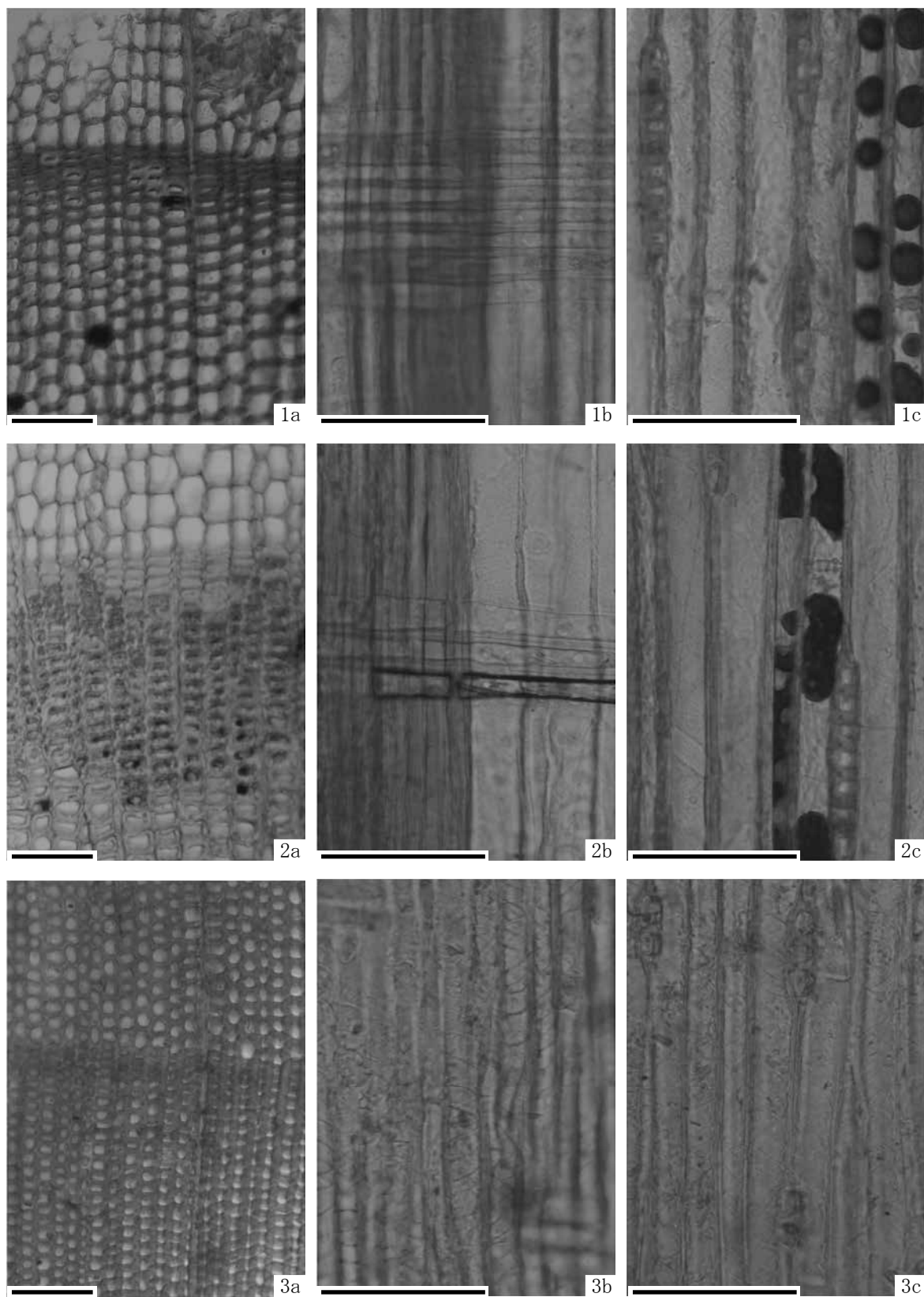
古代・中世の資料は、運搬具（舟底板）、容器（曲物底板、底板か）、建築材等（柱、梁桁、堅板、板塀、

板材、矢板)、祭祀具(人形か齋串、鎌柄形代)がある。祭祀具の鎌柄形代1点を除く18点がスギであり、分割加工を施す器種を中心にスギ材の多用傾向が認められる。古代・中世におけるスギ材の多用も既存の報告例と整合的である。このうち、管理番号534は、切断痕や形状から、木材加工時の端材と考えられる。端材(木屑)は、遺跡内での木工活動を考える上で重要な資料である(浦2020)。本資料についても、遺跡内でスギ材を加工したことを示す資料として注目される。

鎌柄形代に認められたヒノキは、伊東・山田(2012)のデータベースで祭祀具に絞って検索すると、荒木田遺跡(小松市)の古墳末期～平安初期とされる齋串や刀形、畝田西遺跡群や畝田東遺跡群(金沢市)の古墳末期～平安あるいは平安初期とされる齋串や形代、藤江B遺跡(金沢市)の古墳末期～平安初期とされる鳥形等に確認された例がある。また、器種を問わずにヒノキの出土例をみると、能登半島から加賀市まで地域に関わらず出土例があり、利用量は少ないものの、スギと共に利用されていたことが推定される。

引用・参考文献

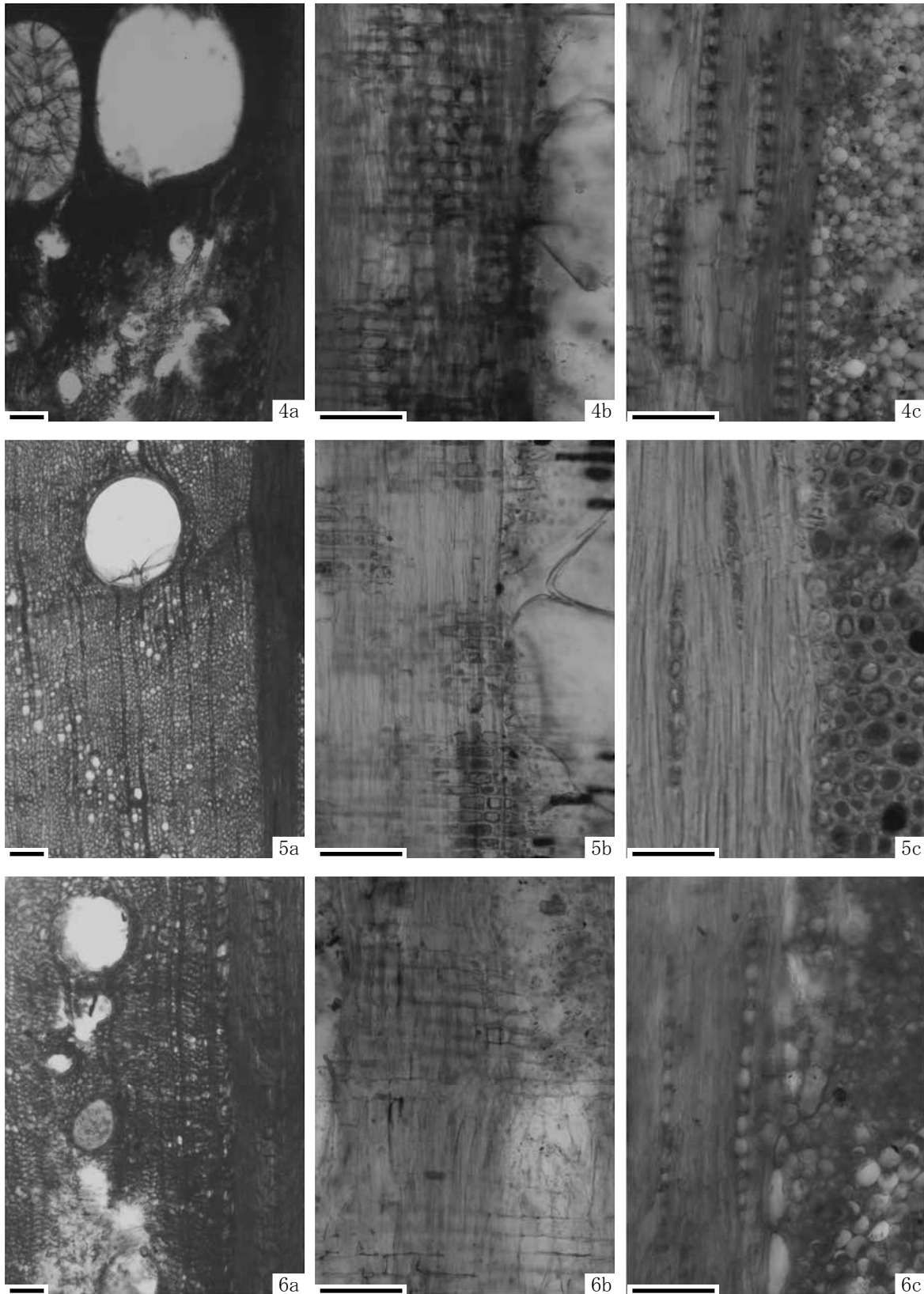
- 伊東隆夫 1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 81 - 181 頁
- 同 1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所 66 - 176 頁
- 同 1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 83 - 201 頁
- 同 1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 30 - 166 頁
- 同 1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 47 - 216 頁
- 伊東隆夫・山田昌久(編) 2012『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社
- 浦 蓉子 2014『樹皮製品』『八日市地方遺跡』Ⅱ 石川県小松市教育委員会 253 - 264 頁
- 同 2020『木屑を考える 古代の木工活動を検討するための一試論』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 熊谷葉月 2021「梶井衛生センター遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』44号(公財)石川県埋蔵文化財センター 13 頁
- 島地 謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社
- 中屋克彦・林 大智・加藤江莉・中谷光里 2019『小松市 八日市地方遺跡』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
- 名久井文明 2011『樹皮の文化史』吉川弘文館
- 成田壽一郎 1996『曲物・籬物』理工学社
- 能城修一・佐々木由香・鈴木三男・村上由美子 2012「弥生時代から古墳時代の関東地方におけるイチイガシの木材資源利用」『植生史研究』21 日本植生史学会 29 - 40 頁
- 能城修一・佐々木由香・村上由美子 2016「八日市地方遺跡から出土した木製品類の樹種」『八日市地方遺跡Ⅱ第5部土器・土製品、第6部 自然科学編、第7部 補遺編』石川県小松市教育委員会 217 - 242 頁
- 林 昭三 1991『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006『針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修) 海青社
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998『広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修) 海青社



1. ヒノキ(管理番号468)
 2. スギ(管理番号481)
 3. イヌガヤ(管理番号370)
- a: 木口, b: 板目, c: 板目

各写真のスケールは0.1mm

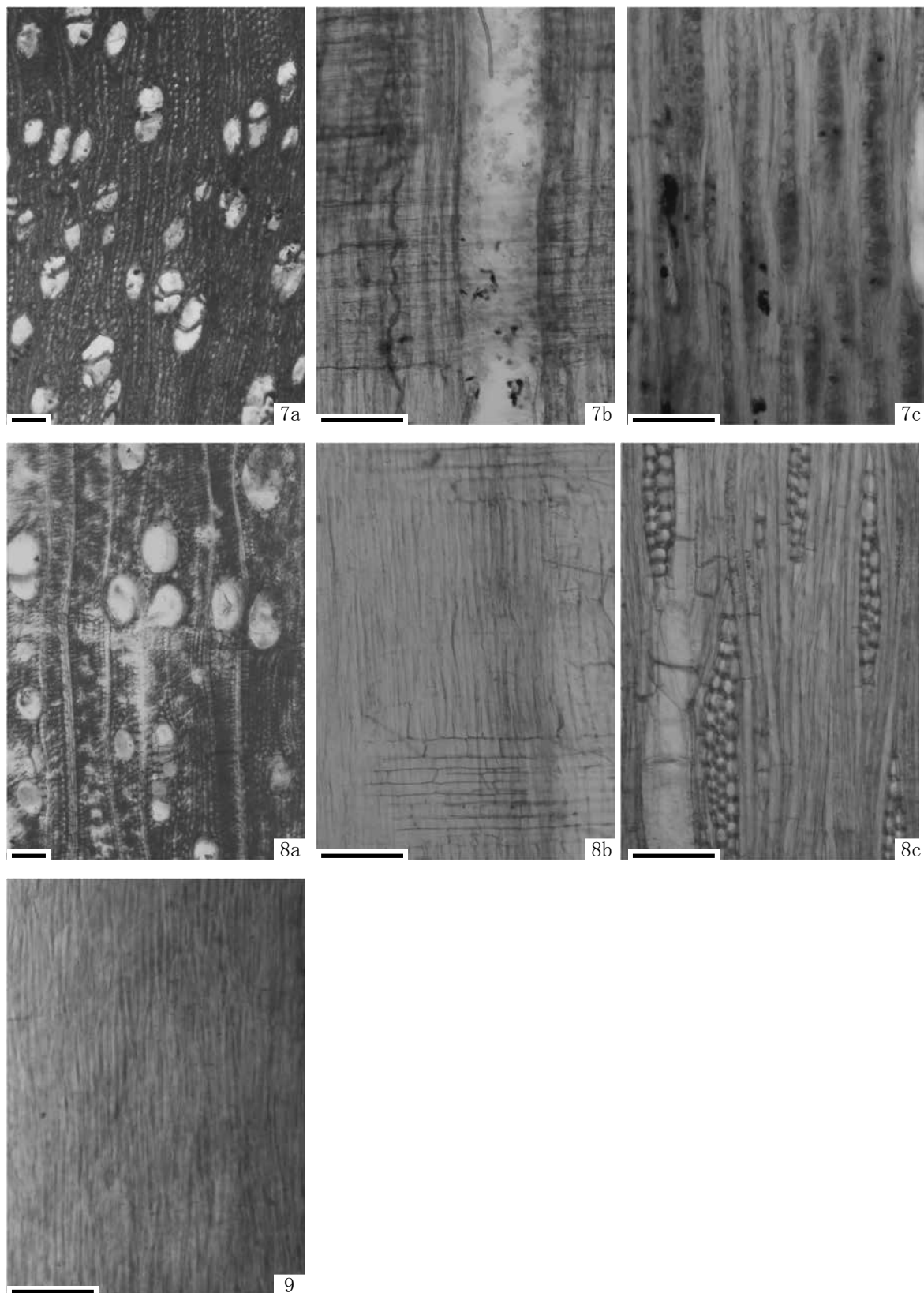
第118図 木材(1)



4. コナラ属クヌギ節(管理番号434)
 5. コナラ属コナラ節(管理番号480)
 6. イチイガシ(管理番号435)
 a: 木口, b: 柾目, c: 板目

各写真のスケールは0.1mm

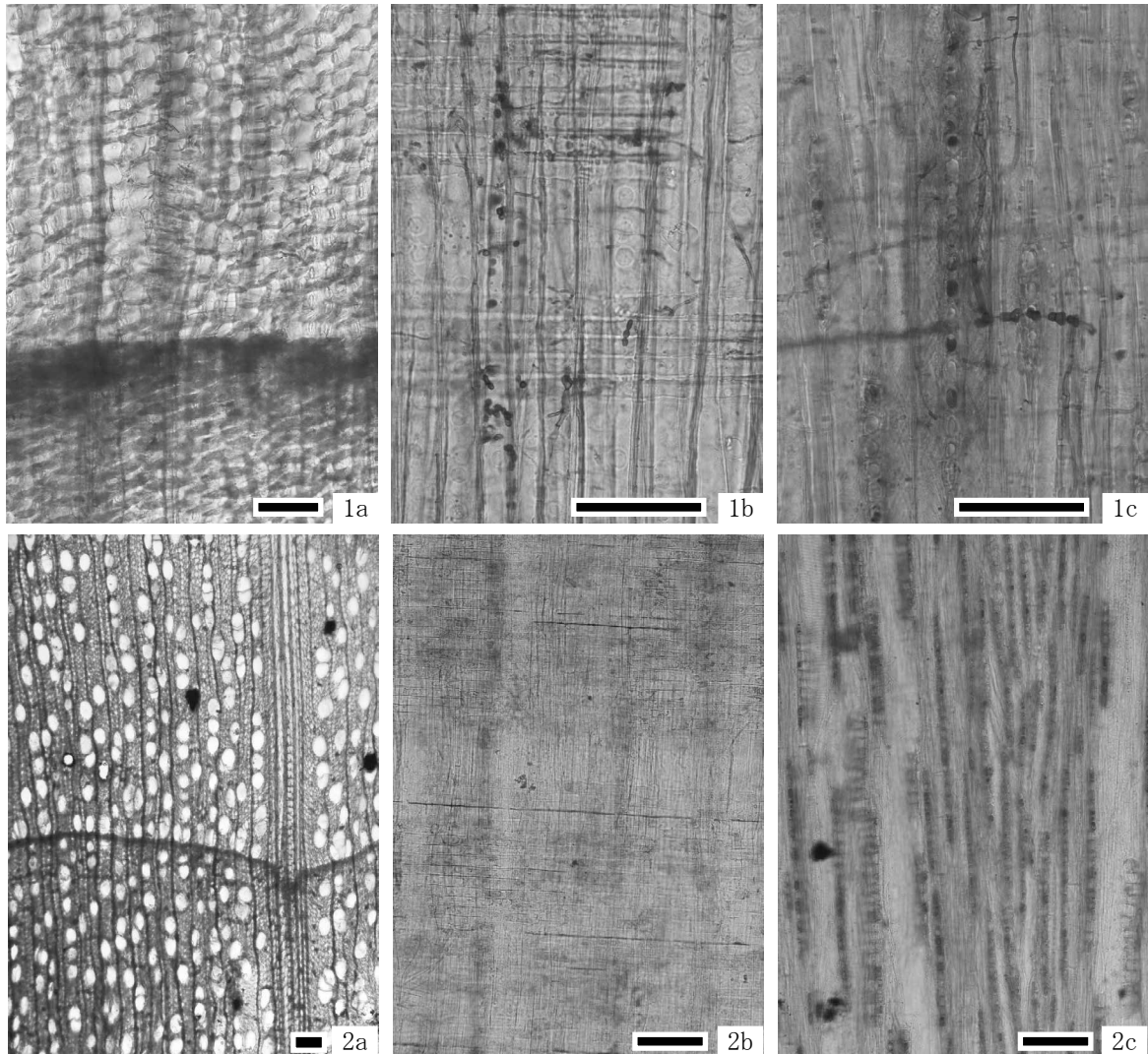
第119図 木材(2)



7. アサダ(管理番号479) a: 木口, b: 柾目, c: 板目
 8. ウルシ(管理番号439) a: 木口, b: 柾目, c: 板目
 9. 樹皮(管理番号460) 接線断面

各写真のスケールは0.1mm

第120図 木材(3)



1. モミ属(1区 H17 SD01 下層 No. 50;8)
2. ハンノキ亜属(1区 H17 SD01 下層 No. 23;24)

a:木口 b:柁目 c:板目
スケールは100 μ m

第121図 木材(4)

第2節 微細物分析・花粉分析・植物珪酸体分析

はじめに

梶井衛生センター遺跡は石川県加賀市梶井町に所在し、動橋川右岸に位置する。本遺跡は弥生時代中期から古代に断続的に続く遺跡であり、遺構は弥生時代中期の平地式建物、溝、土坑、弥生時代後期の流路跡、古代の掘立柱建物、井戸、溝などが確認されている。

本分析調査では、土壌試料を対象に古植生や植物資源利用などに関する情報を得るため微細物分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

1. 試料

土壌試料の詳細は第9表に示す。

第9表 土壌試料一覧

分析種別	試料番号	地区	グリッド	遺構名	層名・採取区分	採取日	
微細物	ビ1	1	H17	SD01	下層No.17の下	161226	弥生後期・炭化草木茎が何なのかを知りたい
微細物	ビ2	1	H15	P22	炭化物サンプル	161202	古墳～古代か・炭化草木茎が何なのかを知りたい
花粉	粉1	2	K29NE	深掘りトレ	黒色粘土層	161202	縄文後期?・基盤層下方のブラックバンド層
花粉	粉2	1	H17	SD01	下層No.8	170116	流路・弥生後期
花粉	粉3	1	H17	SD01	中層No.2	170116	流路・古墳時代か
花粉	粉4	1	H17	SD01	上層No.1	170116	流路・古代か
花粉	粉5	1	I18	SE01	底直上	170116	井戸・古墳後期か
植物珪酸体	PO1	2	K29NE	深掘りトレ	黒色粘土層	161202	縄文後期?・基盤層下方のブラックバンド層
植物珪酸体	PO2	2	L30	SD03	3層	161202	溝・弥生中期後半
植物珪酸体	PO3	2	L30	SD03	2層	161202	溝・弥生中期後半
植物珪酸体	PO4	2	K27	SD01	2層	161202	建物外周溝・弥生中期か
植物珪酸体	PO5	1	H17	SD01	下層No.8	170116	流路・弥生後期

2. 分析方法

(1) 微細物分析

試料は炭化材（草本質）主体のため、粒径4mmの篩を通して、篩内に残った炭化材の一部を樹種同定対象とする。次に、篩を通り抜けた炭化物・土壌主体試料を水洗対象とし、常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料（炭化物主体）と水に沈んだ試料（砂礫主体）を粒径4mm、2mm、1mm、0.5mmの篩に通す。水洗篩別後の試料を大きな粒径から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体や、主に径2mm以上の炭化材などの遺物を抽出する。試料番号ビ1から多産するイネの籾の破片は、基部の果実序柄（小穂軸）が残るものと主に1mm以上を抽出し、1～0.5mmはイネ炭化籾片主体とする。

種実遺体の同定は、現生標本や石川（1994）、中山ほか（2010）、鈴木ほか（2018）等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示し、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。炭

化種実以外は、常温乾燥後の重量を一覧表に併記する。分析後は、抽出物と残渣を容器に入れて保管し、種実遺体は約70%のエタノール溶液で液浸保存する。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）、三好ほか（2011）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め（100単位にする）、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

3. 結果

(1) 微細物分析

結果を第10表に示す。2試料15.4gを洗い出した結果、被子植物4分類群（草本のイネ科（イヌビエ属?）、アワ?、イネ、ミズ属）588個の種実遺体の他、イネ炭化粉片主体0.65g、木材0.11g、炭化材（4～2mm）1.01g、炭化材主体0.65g、昆虫1個0.01g未満、砂礫・土粒主体0.59gが検出された。以下、試料別状況を記す。

1区 H17 SD01 下層No.17の下（ビ1）では、試料11.9gより栽培種のイネの炭化粉・玄米2個、炭化玄米5個、炭化粉（基部）359個、炭化粉111個、粉（基部）24個、粉76個と、栽培の可能性のあるイネ科（イヌビエ属?）の炭化果実2個、アワ?の炭化果実2個、その他の湿生植物のミズ属果実1個の、計582個の種実遺体が同定された。種実以外は、炭化材（4～2mm）0.98g、炭化材主体0.41g、昆虫1個0.01g未満、砂礫・土粒主体0.25gが検出された。

1区 H15 P22 炭化物サンプル（ビ2）では、試料3.5gよりイネの炭化玄米5個、炭化粉（基部）1個の、計6個の種実遺体が同定された。種実以外は、炭化材（4～2mm）0.03g、炭化材主体0.24g、砂礫・

土粒主体 0.34g が検出された。

第10表 微細物分析結果

分類群	部位・状態/粒径	地区	1区		1区		備考
		グリッド・遺構名	H17 SD01		H15 P22		
		層名・採取区分	下層No.17の下		炭化物サンプル		
		試料番号	ピ1		ピ2		
			(個)	(g)	(個)	(g)	
草本種実							
イネ科 (イヌビエ属?)	炭化果実	完形	2	—	—	—	状態極不良 背面
アワ?	炭化果実	完形	1	—	—	—	
		破片	1	—	—	—	
イネ	炭化粃・玄米	完形	1	—	—	—	未熟,一部欠損
		破片	1	—	—	—	
	炭化玄米	完形	1	—	—	—	
		破片	4	—	5	—	
	炭化粃 (基部)	破片	359	—	1	—	主に1mm以上
	炭化粃	破片	111	—	—	—	
	粃 (基部)	破片	24	—	—	—	
ミズ属	果実	破片	76	—	—	—	主に1mm以上
		完形	1	—	—	—	
合計			582	—	6	—	
分析残渣							
イネ炭化粃片主体	1-0.5mm		—	0.65	—	—	炭化材含む
木材	>2mm		—	0.11	—	—	
炭化材	4-2mm		—	0.98	—	0.03	
炭化材主体	2-1mm		—	0.38	—	0.08	
	1-0.5mm		—	0.03	—	0.16	
昆虫			1	<0.01	—	—	
砂礫・土粒主体			—	0.25	—	0.34	
分析量			—	11.9	—	3.5	乾量 (g)

1) 試料は炭化材 (草本質) 主体のため、粒径 4mm の篩を通り抜けた炭化物・土壌主体試料を水洗対象分析量とする。

(2) 花粉分析

結果を第 11 表、第 122 図に示す。各試料からは花粉化石が比較的豊富に産出し、保存状態もやや良好～やや悪い程度である。

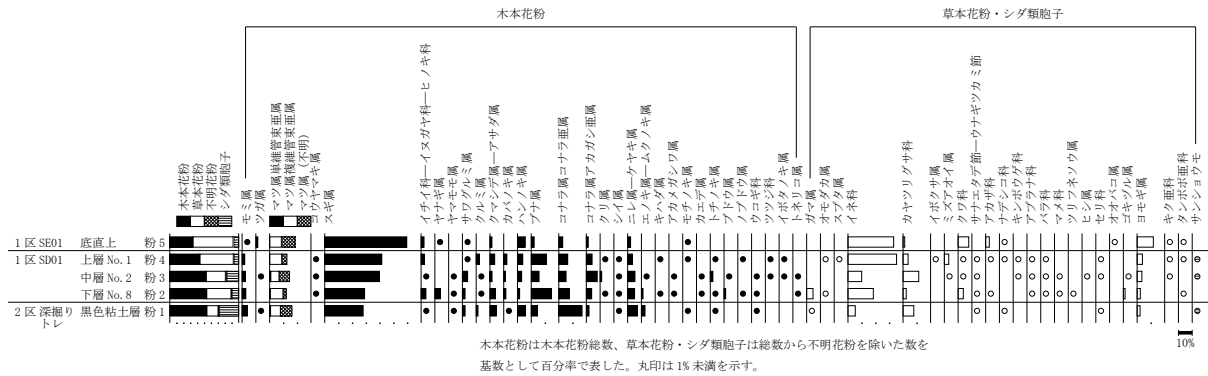
2 区 K29NE 深掘トレンチ 黒色粘土層 (粉 1) は、木本花粉の割合が高い。木本花粉ではスギ属が最も多く産出し、マツ属、コナラ属コナラ亜属も多く認められる。その他ではクマシデ属—アサダ属、ハンノキ属、ブナ属などを伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科が多く、ヨモギ属などを伴う。また、ガマ属、サンショウモなどの水湿地生植物も確認された。

1 区 H17 SD01 の下層 No.8 ～上層 No.1 (粉 2 ～粉 4) をみると、木本花粉ではスギ属が最も多く産出し、マツ属、ブナ属、コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ属なども多く認められる。層位的に見ると、上層 No.1 に向かってスギ属が増加する傾向がある。その他ではヤナギ属、サワグルミ属、クマシデ属—アサダ属などを伴う。草本花粉はイネ科、カヤツリグサ科が多産し、特に上層 No.1 でイネ科が多産する。多産するイネ科には、栽培種であるイネ属に形態が類似する個体 (以下、イネ属型とする) も認められた。その他では、ガマ属、ミズアオイ属、クワ科、ヨモギ属などを伴う。水湿地生植物では、ガマ属、ミズアオイ属以外にも、オモダカ属、スブタ属、イボクサ属、ヒシ属、ゴキヅル属、サンショウモなども確認された。

1 区 I18 SE01 底直上 (粉 5) では、草本花粉の割合が高い。草本花粉ではイネ科が多産し、クワ科、アカザ科、ヨモギ属などを伴う。木本花粉ではスギ属が最も多く産出し、マツ属、ハンノキ属コナラ亜属などを伴う。

第11表 花粉分析結果

種 類	2 区	1 区			I18 SE01 底直上 粉 5
	K29NE 深掘トレ 黒色粘土層 粉 1	H17 SD02 下層 No.8 粉 2	中層 No.2 粉 3	上層 No.1 粉 4	
木本花粉					
モミ属	6	7	6	5	1
ツガ属	1	—	1	—	2
マツ属単維管束亜属	1	1	2	—	—
マツ属複維管束亜属	11	24	16	23	12
マツ属（不明）	13	6	20	10	14
コウヤマキ属	—	2	1	1	—
スギ属	43	75	105	109	84
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	1	9	2	6	3
ヤナギ属	—	10	—	—	1
ヤマモモ属	1	1	2	—	—
サウグルミ属	3	5	10	2	1
クルミ属	2	1	1	6	—
クマシデ属—アサダ属	7	10	4	9	2
カバノキ属	1	4	3	6	—
ハンノキ属	9	4	8	10	8
ブナ属	7	38	15	29	3
コナラ属コナラ亜属	26	20	14	17	4
コナラ属アカガシ亜属	3	10	21	11	2
クリ属	—	2	3	1	—
シイ属	1	1	1	1	—
ニレ属—ケヤキ属	11	13	14	9	3
エノキ属—ムクノキ属	4	3	2	—	—
キハダ属	—	1	—	1	—
アカメガシワ属	—	1	1	—	—
ウルシ属	—	—	1	—	—
モチノキ属	1	—	—	1	1
カエデ属	—	2	1	—	—
トチノキ属	1	2	5	2	—
ブドウ属	—	3	2	—	—
ノブドウ属	—	1	—	1	—
ウコギ科	1	2	1	—	—
ツツジ科	—	—	1	1	—
イボタノキ属	—	—	1	1	—
トネリコ属	—	1	1	—	—
クサギ属	—	—	—	1	—
草本花粉					
ガマ属	1	22	—	—	—
オモダカ属	—	1	—	2	—
スプタ属	—	—	—	1	—
イネ科	15	88	49	211	138
カヤツリグサ科	22	11	56	22	5
イボクサ属	—	—	—	1	—
ミズアオイ属	—	—	2	19	—
ユリ科	—	1	—	—	—
クワ科	—	18	1	2	32
イブキトラノオ節	—	—	—	1	1
サナエタデ節—ウナギツカミ節	1	2	1	2	—
アカザ科	—	1	—	1	11
ナデシコ科	1	—	—	1	3
キンボウゲ科	—	—	2	1	—
アブラナ科	—	1	3	1	—
バラ科	—	1	1	1	—
マメ科	—	3	1	—	—
カタバミ属	—	—	1	—	—
ツリフネソウ属	—	4	—	—	—
キカシグサ属	—	—	—	1	—
ヒシ属	—	—	1	—	—
セリ科	1	—	1	1	—
オオバコ属	—	—	—	—	2
ゴキヅル属	—	6	1	—	—
ヨモギ属	6	11	17	23	49
キク亜科	—	—	3	1	3
タンポポ亜科	—	1	—	1	1
不明花粉					
不明花粉	5	6	10	5	4
シダ類孢子					
ヒカゲノカズラ属	—	1	—	—	—
ゼンマイ属	1	1	—	1	2
イノモトソウ属	—	1	—	1	—
サンショウモ	1	—	1	1	—
他のシダ類孢子	79	45	86	39	28
合 計					
木本花粉	154	259	265	263	141
草本花粉	47	171	140	293	245
不明花粉	5	6	10	5	4
シダ類孢子	81	48	87	42	30
合計（不明を除く）	282	478	492	598	416



第122図 花粉化石群集

(3) 植物珪酸体分析

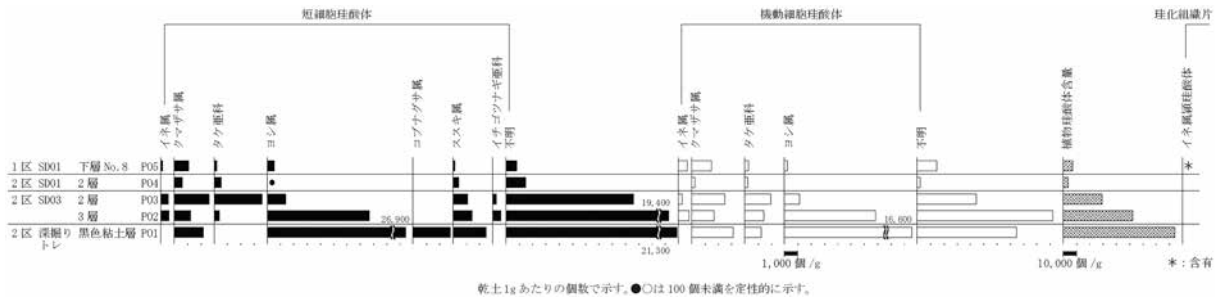
結果を第12表、第121図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

2区 K29NE 深掘りトレンチ 黒色粘土層（PO1）では、ヨシ属の産出が目立ち、クマザサ属を含むタケ亜科やコブナグサ属、ススキ属などが認められる。

2区 L30 SD03 の3層（PO2）と2層（PO3）では、栽培植物であるイネ属が産出し、葉部の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られる。その含量は少なく、3層の短細胞珪酸体が600個/g、機動細胞珪酸体が300個/gである。この他の分類群として、クマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、コブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが見られる。その産状は3層と2層で異なり、3層ではヨシ属、2層ではクマザサ属を含むタケ亜科の産出がそれぞれ目立つ。

第12表 植物珪酸体含量					
分 類 群	K29NE	2区		K27	(個/g)
	深掘トレ	L30		SD01	1区
	黒色粘土層	SD03			H17
	PO1	3層	2層	2層	SD01
		PO2	PO3	PO4	下層No.8
					PO5
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ属	—	600	600	—	100
クマザサ属	2,200	1,300	2,600	600	1,100
タケ亜科	—	400	3,600	500	200
ヨシ属	26,900	7,700	1,400	<100	500
コブナグサ属	2,800	—	—	—	—
ススキ属	2,500	1,500	1,100	500	100
イチゴツナギ亜科	—	600	300	—	—
不明	21,300	19,400	9,600	1,500	800
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ属	—	800	300	—	700
クマザサ属	3,100	1,700	2,500	200	1,500
タケ亜科	1,300	1,500	1,900	200	300
ヨシ属	16,600	6,900	1,100	—	200
不明	7,500	10,200	4,500	200	1,500
合 計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	55,700	31,500	19,200	3,200	2,900
イネ科葉身機動細胞珪酸体	28,500	21,100	10,300	700	4,100
植物珪酸体含量	84,200	52,600	29,500	3,900	7,000
珪化組織片					
イネ属類珪酸体	—	—	—	—	*
イネ科起源（その他）					
棒状珪酸体	**	**	**	*	*
長細胞起源	*	*	*	—	*
毛細胞起源	*	*	*	—	*

1) 含量は、10の位で丸めている（100単位にする）。
2) 合計は各分類群の丸めない数字を合計した後で丸めている。
3) <100：100個/g未満。
4) —：未検出、*：含有、**：多い。



第123図 植物珪酸体含量

1区 H17 SD01 下層No.8 (PO5) では、イネ属が僅かに産出する。その含量は、短細胞珪酸体が100個/g、機動細胞珪酸体が700個/gである。また稲粃殻（穎）に形成される穎珪酸体も検出される。この他の分類群では、クマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やススキ属なども見られる。

4. 考察

(1) 微細物分析から見た植物資源利用

1区 H17 で検出された弥生時代後期の流路とされる SD01 下層No.17 の下（ビ1）より採取された炭化材（草本質）主体試料を洗い出した結果、栽培種のイネの炭化粃が多量、炭化米、炭化していない粃、栽培の可能性のあるイネ科（イヌビエ属?）、アワ?の炭化種実、草本のミズ属の種実、昆虫が検出された。

種実で最も多く確認されたイネは、当時利用された植物質食糧と示唆される。また、炭化粃片を主体とすることから、脱粃（だっぶ；粃殻を取り去る）後の食糧残滓に由来する可能性があり、火を受けたと推測される。その他、イネ科（イヌビエ属?）は、雑穀類のヒエの可能性と、流路周辺の水湿地に生育していた野生種（イヌビエ類）に由来する可能性がある。雑穀類のアワ?とともに粃が残ることから、脱粃前に火を受けた可能性がある。

栽培種と栽培の可能性を除いた分類群は、ミズ属は、湿った場所に生育する1年草または多年草である。流路周辺の水湿地に生育していたと考えられる。多量のイネを供伴することから、水田雑草に由来する可能性もある。

1区 H15 の古墳～古代とされる P22 炭化物サンプル（ビ2）からも、栽培種のイネの炭化粃と炭化米が確認された。上述の SD01 の産状と比べると少ないものの、当時の利用が示唆される。

(2) 森林植生

広域の森林植生を反映する木本類について検討する。縄文時代後期?とされる2区 K29NE 深掘りトレンチ壁面に見られた基盤層下方の黒色土層（黒色粘土層：粉1）について見ると、針葉樹のスギ属が最も多く、同じく針葉樹のマツ属、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属なども多く認められ、クマシデ属—アサダ属、ハンノキ属、ブナ属、ニレ属—ケヤキ属などを伴う。スギ属は、水分の豊富な山腹斜面や沢筋、扇状地の湧水部などに林分を形成する。マツ属は、亜属まで同定できたものの多くがマツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、極端な陽樹でもあることから、他の広葉樹の生育に不適な立地や、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。コナラ亜属は、ブナ属などとともに冷温帯性落葉広葉樹林の主要構成要素である。ハンノキ属、ニレ属—ケヤキ属は河畔や低湿地などの適湿地に林分を形成する種類であり、サワグルミ属、クルミ属、クマシデ属—アサダ属、エノキ属—ムクノキ属、トチノキ属なども同様である。このことから、当時の調査区周辺では、遺跡が立地する動橋川をはじめとする周辺

河川沿いにハンノキ属やニレ属—ケヤキ属、コナラ亜属、クマシデ属—アサダ属、トチノキ属などが分布し、丘陵などを開析する沢沿いなどにはスギ属、サワグルミ属、クルミ属、クマシデ属—アサダ属が分布したと推測される。また、低地部や丘陵縁辺などにはマツ属などの二次林や常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属なども存在し、東方～南方に分布する丘陵や山地部にはブナ属、コナラ亜属を主体とする落葉広葉樹林が広がっていたと思われる。

1区 H17の弥生時代後期～古代の可能性のある流路跡 SD01の下層 No.8～上層 No.1（粉2～粉4）をみると、先述した深掘りトレンチの黒色粘土層と同様にスギ属が最も多く産出し、マツ属、ブナ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ属なども多く認められる。このことから、基本的には周辺植生に大きな変化はなかったと考えられる。ただし層位的に見ると、下層 No.8から上層 No.1に向かってスギ属が増加する傾向がある。既存の調査事例によると、約4,000～2,000年前にかけて急激にスギ属が増加し、特に日本海沿岸地域の低地においてスギの埋没林が多く認められている（高原,1998）。約1,800～1,300年前頃とされる富山県魚津市の埋没林の花粉分析結果からもスギ属が多産する傾向が認められている（魚津埋没林博物館,1992）。このことから、スギ属は、遺跡周辺の丘陵斜面や沢沿い、低湿地等に広く分布していたと推測される。先述の樹種同定結果もスギが主体であり、周辺で入手しやすい状況であったことを裏付ける結果と言える。

1区 I18の古墳時代後期の可能性のある井戸 SE01底直上（粉5）では、スギ属が多産し、マツ属、ハンノキ属コナラ亜属などを伴う。後背の丘陵や山地部に分布すると推測されるブナ属やコナラ亜属などの割合が低くなることを踏まえると、より近傍の植生に由来する花粉が多く取り込まれていることが想定される。これは、前述のSD01が流路跡の堆積物であるのに対し、SE01が井戸跡であることから、堆積物の取り込まれ方の違いを反映していると考えられ、周辺植生は同様であったと推測される。

（3）草本植生

縄文時代後期？とされる2区 K29NE 深掘りトレンチ 黒色粘土層（粉1、PO1）をみると、花粉化石ではイネ科、カヤツリグサ科が多く、ヨモギ属などを伴うほか、水湿地生草本のガマ属、水生シダ類のサンショウモなども確認された。イネ科、カヤツリグサ、ヨモギ属などは、いずれも開けた明るい場所に生育する「人里植物」を多く含む分類群であり、わずかに認められるサナエタデ節—ウナギツカミ節、ナデシコ科なども同様である。植物珪酸体では湿潤な場所に生育するヨシ属の産出が目立ち、湿生植物のコブナグサ属も見られた。その他ではブナ林などの林床や林縁部に生育するクマザサ属や乾いた草地に生育する種類の多いススキ属なども認められる。ヨシ属の多産を考慮すると、黒色粘土層は、ヨシ属やガマ属などが生育する湿地のような場所で形成された可能性が考えられる。また、周辺の林縁や乾いた草地などには、クマザサ属やススキ属などのイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが草本群落を形成していたと考えられる。

2区 L30の弥生時代中期後半とされる溝 SD03の3層（PO2）や2層（PO3）からはイネ属の植物珪酸体が産出したことから、稲作が行われていたと考えられる。ただし、その含量は少ないことから溝の近辺での稲作は考えにくく、溝の上流や遺跡周辺で行われていたことを反映していると考えられる。他に検出された分類群から、クマザサ属、ヨシ属、コブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などのイネ科が生育していたと考えられる。なお、その産状は3層と2層で異なる。3層ではヨシ属の産出が目立ち、湿地のような状態にあった可能性がある。2層ではクマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、林地が近かった可能性がある。

2区 K27の弥生時代中期の可能性が指摘される建物外周溝 SD01の2層（PO4）では検出される植

物珪酸体の分類群や含量が少なかった。この要因の1つとして、堆積速度が早く植物珪酸体が土層中に取り込まれ難かったことが考えられる。なお、検出された分類群から、少なくともクマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、ススキ属などのイネ科の生育が窺える。

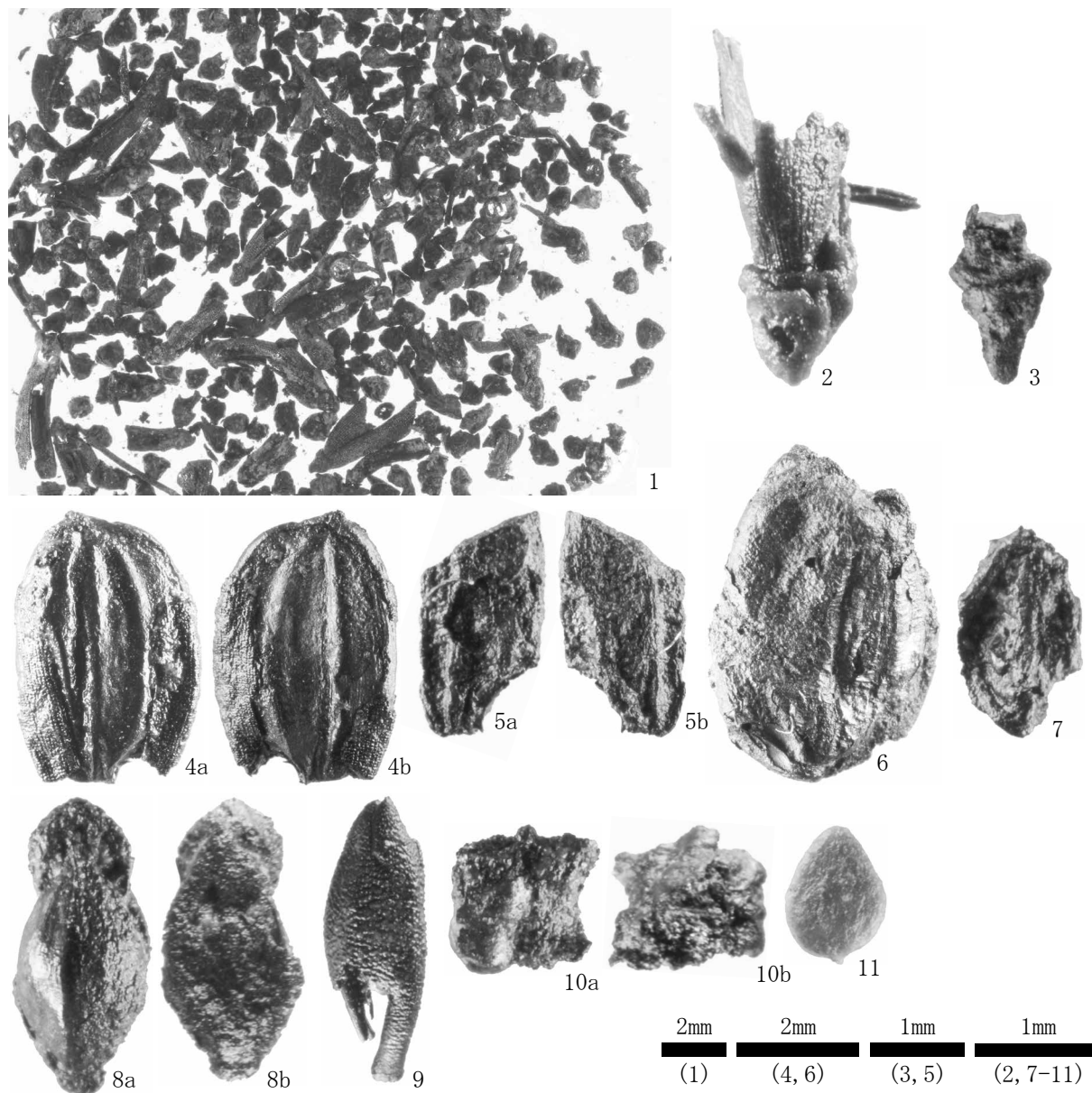
1区 H17 弥生時代後期とされる流路 SD01 の下層 No.8 (粉2、PO5) では、植物珪酸体でイネ属が産出したことから、流路が埋積する頃には稲作が行われていたと考えられる。ただし、含量が少ないことから流路の近辺での稲作は考えにくく、上流や周辺で稲作が行われていたことを反映していると考えられる。穎珪酸体も検出されたことから、稲粃殻(穎)の混入も窺える。その他ではクマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属などのイネ科、カヤツリグサ科、クワ科、ヨモギ属などの花粉化石、植物珪酸体が確認されたことから、これらが周囲の草地や林縁に生育していたと想定される。

これらの草本類は、中層 No.2 (粉3)、上層 No.1 (粉4) でも認められることから、これらの層準においても同様の草本植生が周辺に分布していたことが考えられる。また、上層 No.1 では草本類の割合が高くなることから、古代頃の遺跡周辺では草本類の生育する開けた空間が増加した可能性がある。上層 No.1 で多産するイネ科花粉には、栽培種の可能性のあるイネ属型も含まれることから、開けた空間の増加は稲作地の拡大に由来した可能性も考えられる。なお、下層 No.8 から上層 No.1 にかけて水湿地生草本のガマ属、オモダカ属、スブタ属、ヨシ属、ミズアオイ属、イボクサ属、ヒシ属、ゴキヅル属、水生シダ類のサンショウモなどが確認された。これらは、流路 SD01 内や集水域の水湿地などに生育していた可能性がある。

1区 I18 の古墳時代後期の可能性がある井戸 SE01 底直上(粉5)でも、SD01 の上層 No.1 と同様に草本類の割合が高く、イネ科が多産する。イネ属型も含まれることから、本遺跡周辺で稲作が行われていたと考えられる。また、井戸周辺にはカヤツリグサ科、クワ科、アカザ科、ヨモギ属などが生育する草地などが広がっていたと推測される。

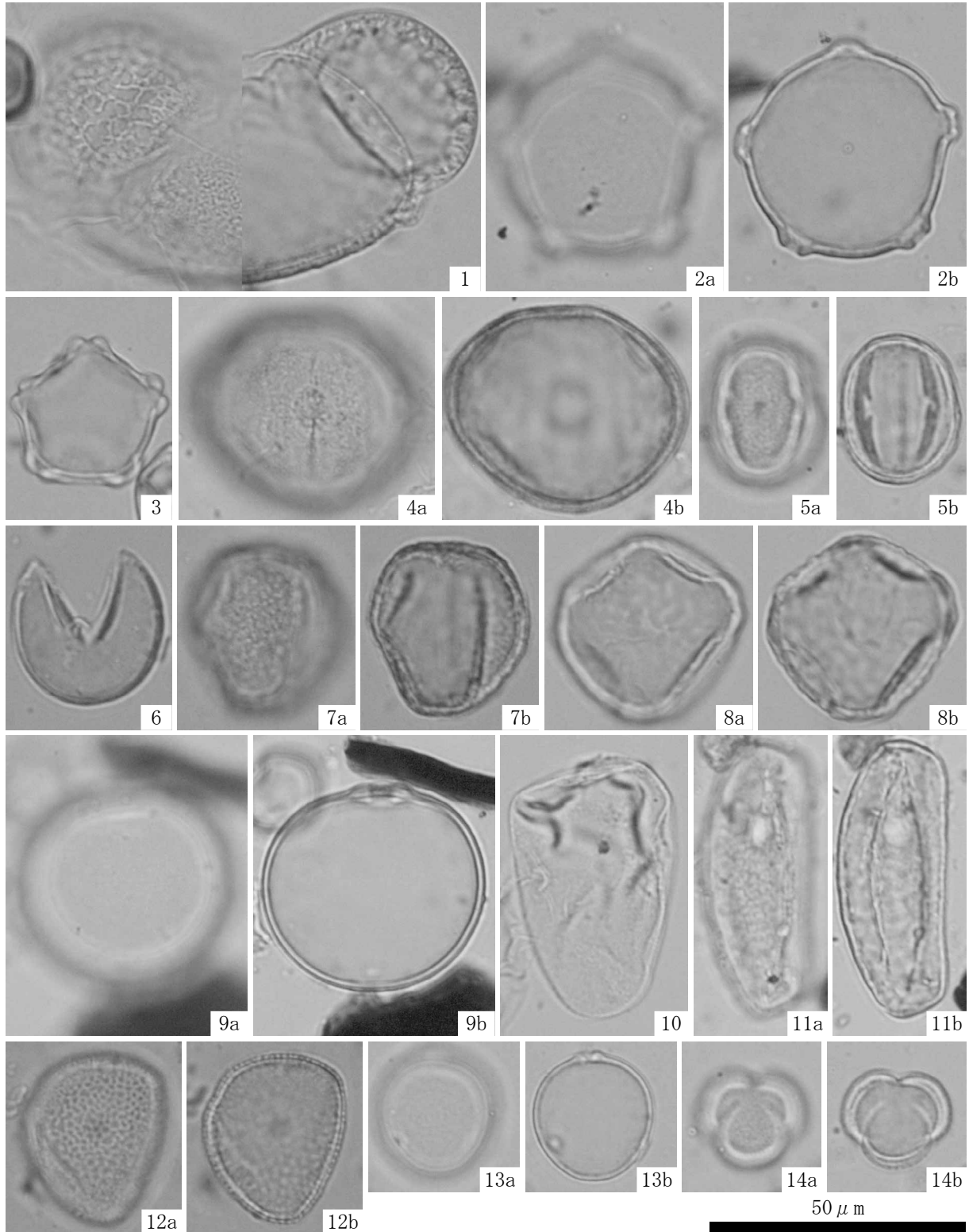
引用文献

- 藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑.アクアコーラル企画,155p.
- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 近藤鍊三,2010,プラント・オパール図譜.北海道大学出版会,387p.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子,2011,日本産花粉図鑑.北海道大学出版会,824p.
- 中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑(2010年改訂版).東北大学出版会,678p.
- 島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2018,草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる734種 増補改訂－.ネイチャーウォッチングガイドブック,誠文堂新光社,303p.
- 高原 光,1998,スギ林の変遷.安田喜憲・三好教夫(編著),図説 日本列島植生史,朝倉書店,207-223.
- 魚津埋没林博物館,1992,埋没林のはなし－埋没林研究の歴史を中心として－.魚津市教育委員会,81p.



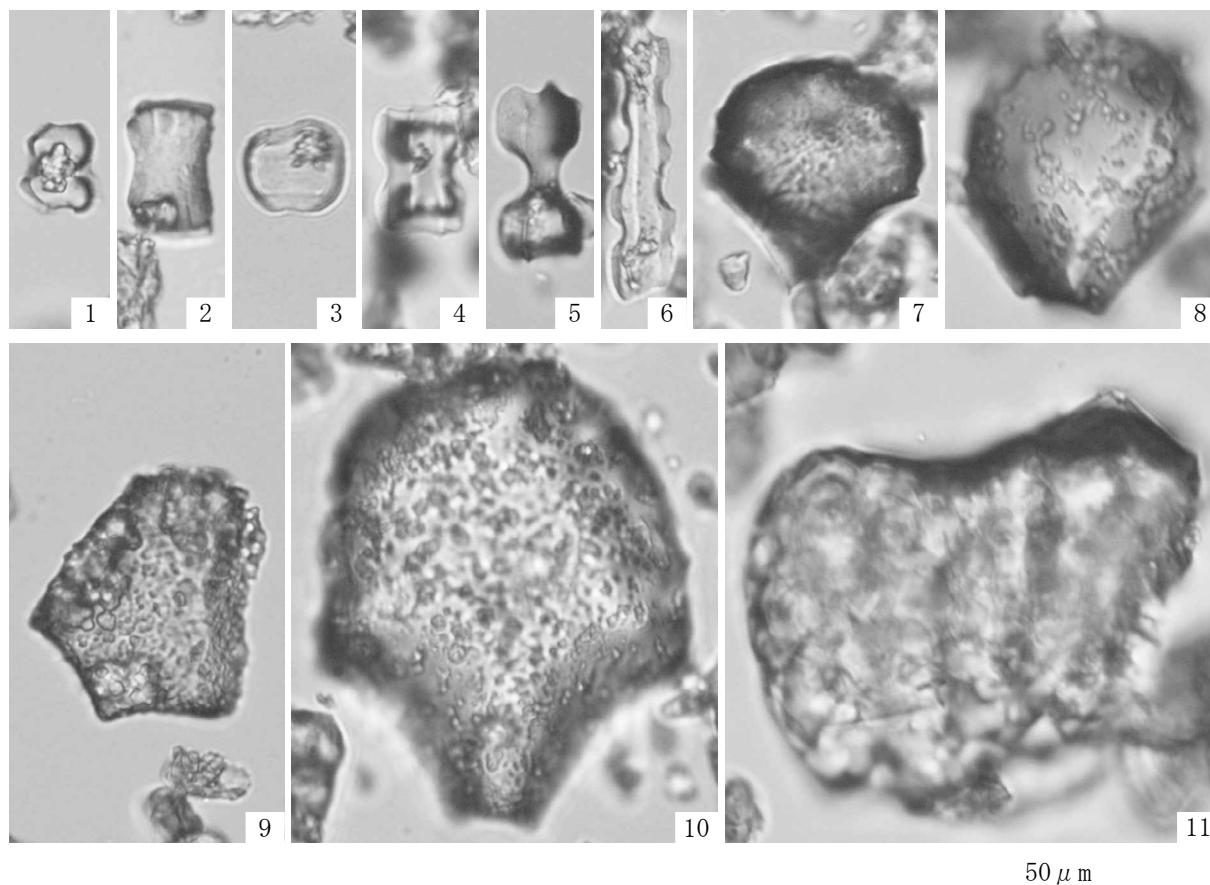
1. イネ 籾(基部)(1区 H17 SD01 下層No.17の下;ビ1)
2. イネ 籾(基部)(1区 H17 SD01 下層No.17の下;ビ1)
3. イネ 炭化籾(基部)(1区 H15 P22 炭化物サンプル;ビ2)
4. イネ 炭化籾・玄米(1区 H17 SD01 下層No.17の下;ビ1)
5. イネ 炭化玄米(1区 H17 SD01 下層No.17の下;ビ1)
6. イネ 炭化玄米(1区 H17 SD01 下層No.17の下;ビ1)
7. イネ 炭化玄米(基部)(1区 H15 P22 炭化物サンプル;ビ2)
8. イネ科(イヌビエ属?) 炭化果実(1区 H17 SD01 下層No.17の下;ビ1)
9. アワ? 炭化果実(1区 H17 SD01 下層No.17の下;ビ1)
10. アワ? 炭化果実(1区 H17 SD01 下層No.17の下;ビ1)
11. ミズ属 果実(1区 H17 SD01 下層No.17の下;ビ1)

第 124 図 種実遺体 (1)



- | | |
|---------------------------------------|---------------------------------------|
| 1. マツ属(2区 K29NE 深掘トレ 黒色粘土層;粉1) | 2. クマシデ属—アサダ属(1区 H17 SD01 下層No. 8;粉2) |
| 3. ハンノキ属(2区 K29NE 深掘トレ 黒色粘土層;粉1) | 4. ブナ属(1区 H17 SD01 下層No. 8;粉2) |
| 5. コナラ属アカガシ亜属(1区 H17 SD01 下層No. 8;粉2) | 6. スギ属(2区 K29NE 深掘トレ 黒色粘土層;粉1) |
| 7. コナラ属コナラ亜属(2区 K29NE 深掘トレ 黒色粘土層;粉1) | 8. ニレ属—ケヤキ属(2区 K29NE 深掘トレ 黒色粘土層;粉1) |
| 9. イネ科(1区 H17 SD01 上層No. 1;粉4) | 10. カヤツリグサ科(2区 K29NE 深掘トレ 黒色粘土層;粉1) |
| 11. ミズアオイ属(1区 H17 SD01 上層No. 1;粉4) | 12. ガマ属(1区 H17 SD01 下層No. 8;粉2) |
| 13. クワ科(1区 H17 SD01 下層No. 8;粉2) | 14. ヨモギ属(1区 H17 SD01 下層No. 8;粉2) |

第 125 図 種実遺体 (2)



1. イネ属短細胞珪酸体(2区 L30 SD03 3層;P02)
2. クマザサ属短細胞珪酸体(1区 H17 SD01 下層No.8;P05)
3. ヨシ属短細胞珪酸体(2区 K29NE 深掘トレ 黒色粘土層;P01)
4. コブナグサ属短細胞珪酸体(2区 K29NE 深掘トレ 黒色粘土層;P01)
5. ススキ属短細胞珪酸体(2区 K27 SD01 2層;P04)
6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(2区 L30 SD03 3層;P02)
7. イネ属機動細胞珪酸体(2区 L30 SD03 3層;P02)
8. イネ属機動細胞珪酸体(2区 L30 SD03 2層;P03)
9. クマザサ属機動細胞珪酸体(2区 L30 SD03 2層;P03)
10. ヨシ属機動細胞珪酸体(2区 K29NE 深掘トレ 黒色粘土層;P01)
11. イネ属穎珪酸体(1区 H17 SD01 下層No.8;P05)

第 126 図 種実遺体 (3)

第5章 総括

第1節 遺跡について

梶井衛生センター遺跡はかなり早くからの周知の遺跡であった。今回初めての発掘調査となり、その実態を垣間みることとなった。ここでは、周辺の状況も含めて、幾つか挙げておきたい。

遺跡主要部、1区SD01以西の基盤層下には黒色粘土の薄層が認められた。これは、自然科学分析で知られたようにヨシ属のプラントオパールを含むもので、縄文時代後期～晩期段階での地表面であろう。同様の黒色粘土の薄層は小松市一針C遺跡、同漆町遺跡などでも認められるところである。山野井徹氏が示した⁽¹⁾ 縄文時代の野焼きが当地では低平地においても広汎に行われていたことを示唆するものと理解される。黒色粘土の薄層は弥生時代中期頃までとみられる遺跡基盤層の堆積により圧密化作用を受けている点も諸例と通じる。

2区で検出された弥生時代中期後葉のSI01は外周溝が伴うもので、柱穴が4基長方形に配される。支柱穴が長辺の中央付近にそれぞれ検出され、「松菊里型」ピットとも考え得るものである。弥生時代中期にはその他には2区東端にSD03が認められた程度であったことから、比較的短期間の居住であったものとみられる。

弥生時代後期後半～古墳時代初頭には当地は居住域となる。今回検出された遺構は溝が中心であり、建物を抽出しえなかった。但し1区東部の南辺には周溝状遺構⁽²⁾とみられる細溝がかかっており、南方約1kmの松山D遺跡例（C2区SD05出土須恵器は後世の混入と考える）⁽³⁾などとも合わせ、当該遺構の北陸における分布域南東限付近の様相を呈する。古墳時代初頭には居住を直接示す遺構は調査区からは認められなくなるが、川縁に壺形土器がまとまって発見されている。発掘調査においても通常はほとんど目にする機会のない顕著な出土状況であり、後節で取り上げてその意味について考えておきたい。

古墳時代後期～古代前半期にかけては須恵器が認められる。歪みの著しいものや焼き台を含んでおり、南方1.5km付近の丘陵で操業中であった松山窯跡・分校窯跡などからの持ち込みが考えられる。

古代後半期には2区で検出された掘立柱建物と井戸からなる集落関係遺構がある。掘立柱建物は2間四方の正方形プランの総柱建物であった。比較的狭い範囲に5棟程度が同位置での建て替えを窺わせる状況で検出されている。これらの建物について倉庫と考えるには、柱通りが良くなく柱穴の規模が貧弱な点で難がある。倉庫群や倉庫院と呼ぶほどの企画性も認めがたい。井戸との併存が想定される程のものであり、建物の機能については居住用の可能性を考える方が適切かもしれない。今後の課題としたい。

これらの西縁を画する河川跡は、弥生後期段階以降の遺物を含んだもので、層位的に把握できる。流路形成期に近い最下層段階に後述の壺集積がある。以後居住域近くの低地や水場的に扱われつつ、中世頃にかけて埋没していったものとみられる。1区SD01については埋没途上に再開析を受けることはなかったものと考えられるが、1区西半についてはかなり後世に至るまでの間再三再四、河道化を被っていたものとみられ、動橋川の氾濫原との位置付けができよう。かつて当遺跡の所在地として認識されていたのは1区の西方、県道小松山中線の西側の地点であったが、今回の調査の結果、遺構の残存は県道の東方に限られそうなことが明らかになった。（浜崎）

第2節 遺構・遺物に関する補遺

発掘調査担当者と本書編集者の間には調査成果に関する認識の違いがある。要点のみを記したい。当遺跡では大きく4時期に人間活動がある。

弥生時代中期末葉 2区 SI01 および2区 SD03 と SD11、SK01 がある。散漫な遺構分布で、遺物量は少ない。住居が点在する散村的景観と考えられる。この要因として、動橋川の氾濫原に位置するために、居住可能な場所が限られていたのではないかと推測する。

弥生時代終末期から古墳時代初頭 1区 SD01 の下層からまとまった量の土器と木器が出土した。遺物取り上げ時の層認識と断面図の土層注記による認識に齟齬があると感じた。下層とされた土器群が遺構平面図上では中層とされており、前節における調査者の認識とも齟齬が生じている。おそらく、下層における遺物の相対的な上下の位置関係を示すものと認識すればよいと判断した。

下層出土土器には有段口縁甕が非常に少なく、擬凹線のあるものにいたっては非常に少ない。外来系土器はほとんどない。下層の遺物群はおおむね、月影から白江期にかかるころである。器種では壺が目立つ一方、高坏や器台といった祭式にかかる土器や日常生活に重要な甕が少ないということが特徴である。多数出土した木製品では、建築部材が目立つ一方で生産用具である農工具類に関する遺物が少ないのも特徴的である。SD14 からは装飾器台や高坏、台付鉢など祭式にかかる土器があり、居住域における生活物資の廃棄ではなく、儀礼執行に伴う遺物と考えられる。

多数の遺物を出土しながら当該時期の住居は調査範囲で確認できず、SD01 東から南東の地形的に安定する場所に住居が存在すると推定したい。弥生時代中期末の状況からすれば、散村的な在り方も可能性として考えられる。そして、南約1kmの丘陵上には初期前方後円墳である全長37mの分校カン山1号墳など主要な古墳群が存在する。これらの古墳群の造営母体とする集落の一つとして本遺跡が存在したことであろう。

7世紀前後 1区 SE01 では船の舳先と艫の各先端を切断し船縁を合わせるように組み合わせ井戸杵とした。この種の井戸杵は弥生時代終末期の加賀市猫橋遺跡⁽⁴⁾や後期の弓波遺跡⁽⁵⁾などにもあり、この地域に多いようである。柴山潟などの内水面を通航する一般的な道具であったゆえに、古代以前の井戸杵に容易に転用されたのであり、逆の見方をすれば井戸杵に使える巨木を新たに切り出すほど豊富な資源状況になかったとも考えられる。SE01 底から焼き歪みの激しい須恵器(78)が出土し、近在須恵器窯の廃棄品と思われる。動橋川を約1.5km遡れば分校窯跡があるが、実見の限りにおいてその出土品とは違う⁽⁶⁾。さらに約500m遡る那谷金比羅山窯跡群の製品も考えられる。いずれにしても、那谷川から動橋川に進み本遺跡に至る物流のルートが想定できる。すなわち、柴山潟を直接の媒体とした小松市額見遺跡における渡来系の人々もかかわった小松南部丘陵における窯業あるいは製鉄生産の開発と那谷金比羅山窯跡群の主体が異なることが予見される。さらに、法皇山横穴墓群とのつながりにも注意しなければならない。

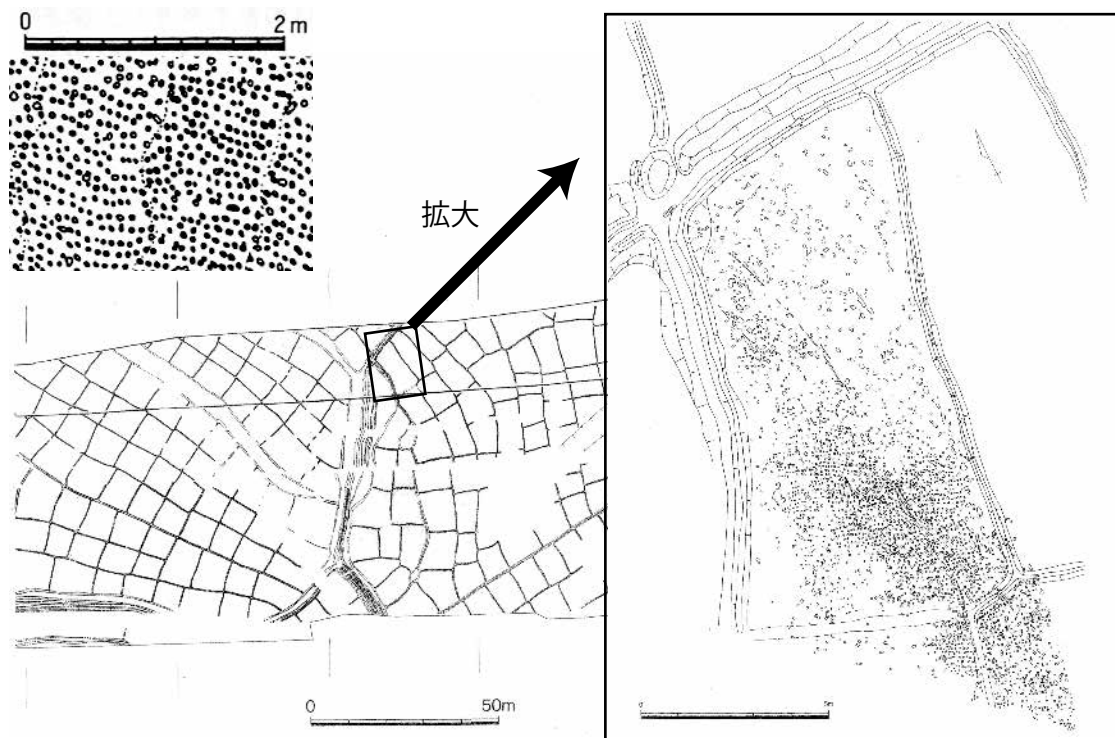
1区 SE01 はSD01 東岸際に位置し、1区 SB01 と互いに関連する遺構と考える。さらにSB01 と約30mの空地をもって倉庫とする総柱建物群と一体的施設と考える。その北側の一部には区画施設が存在し、周囲と隔離された存在である。おそらく、物資の流通にかかわる場所であり、SD01 で船を使った集積・移動に関わる施設であろう。当然その管理は、在地豪族が関わったと考えられる。額見町遺跡が中央政府主導のもとに開発を担う集団⁽⁷⁾であるのに対し、本遺跡は在地豪族であった。それゆえ、開発事業の継続において額見町遺跡に比べて難があったのであろう。

奈良時代・平安時代前期 建物などの検出はなく、3区 SK01 や2区 SE01 とともにSD07・08が明

確にされる程度である。1区の自然流路であるSD01の最終堆積土にあたる上層には、10世紀ごろまでの遺物が出土し、平安時代には完全に埋没した。建物の可能性のあるものとして、1区SD03と1区SD02・04との一体性を認識したい。これの西側の続きが明確でないが、8世紀末の奈良時代から平安時代にかかる頃の方形を呈する壁立建物の可能性を考えたい。当該時期の他の建物は、調査地近くに存在すると考えるが、今回の調査でそれを推測する手掛かりを得られていない。(伊藤)

第3節 壺形土器大量出土の意味

1区SD01下層で検出された壺形土器の出土状況を振り返りそれが示すところについて検討を加えておく。集中部の土器片を取り除いたところ、ヨシとみられる中空の炭化茎が一面に現れた。一見して野焼き直後の状況と推察されるもので、集中部の外には炭化茎の集中は認められなかったところからこれらの土器群が遺棄された季節は今の暦にすれば3月末頃のことではないかと考えられた。検出地点は河道の最下部から少し西方に上ったところにあり、平常は高水敷的な環境、植生的にはヨシが優占する状況にあったとみられる⁽⁸⁾。乾期には野焼き可能であったのだろう。野焼き後、降水や増水、動植物による攪乱を経て埋没したことにより、大概の範囲では炭化茎が形状を留めなかったところが、土器片で覆われた範囲のみに炭化茎が遺存したものであろう。壺形土器はすべて完形で体部が接するほどに寄せられ正置されていたとみられる。当地点は水が得易く、風当りを避けられ、野焼き残渣である炭化茎による遠熱効果も期待できるという、イネの芽出しにとって絶好の環境にあったといえる。苗取得の前後どちらであったかは調査所見からは判断し難いものの、炭化顕が多数検出されておりここが芽出し場であったとする直感を否定すべき要素は特には見当たらないように思われる。



第127図 百間川原尾島遺跡検出稲株痕跡分布図および稲株痕跡（註10を改変）

河道東岸 10 mばかりの地点には「周溝状遺構」があった。筆者は弥生時代後期の「周溝状遺構」について「稲の産屋」と考えたことがある⁽⁹⁾。当該拙論に対して賛否を明らかにした他研究者の論評に接していないため、独自の世界観に陥ってしまう危うさはあるが、筆者としては「稲の産屋」と芽出しの場所とがセットで検出された極希少例と評価できる可能性があると思う。ここでは弥生時代の稲作技術体系にどのように本例が位置付けられるのか、述べておきたい。

以下弥生時代後期の稲の作付け実態を示す最良例と筆者が考える岡山市百間川原尾島遺跡⁽¹⁰⁾の「稲株痕跡」について筆者なりの解釈を提示しつつ、さらに考えられるところについて記していく。

通説的理解に拠れば、弥生時代後期には田植え（移植）による栽培が行われていたと考えられる。「百間川例」の一部でみられる同心扇形の「稲株痕跡」（第 127 図）から想定されるものである。ただし、種子を直播した場合にもこれと同様な痕跡が生成されうるから、田植え（苗の移植）の証拠とは即断できない。百間川遺跡の「稲株痕跡」について一個体（複数個体ではなく）を定植（直播ではなく）したものが洪水流によって抜けた穴と筆者は考えるが、それは以下の理由による。

A 百間川の「稲株痕跡」には「作土の中央盛り上がり」があること⁽¹¹⁾。

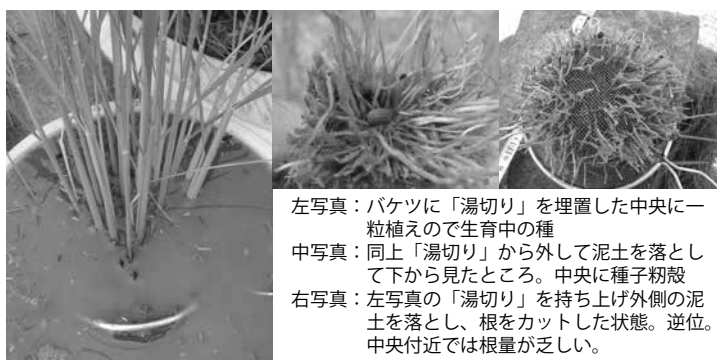
B 佐藤洋一郎氏が長野県川田条理遺跡の稲株で検出した⁽¹²⁾ような種子の外皮（籾殻）が検出されないこと

A は根量の多寡による現象と考えられる。イネの発根は一般に稈の最下部周囲、籾殻の直上で起きるから、



第 128 図 「稲株痕跡」の「作土の中央盛り上がり」（註 11 より）

根が下方向に延びようとしても稈直下へは向い難く放射状になる。加えて必ずモミを避けることになるから、籾殻が遮蔽物となり多くの場合横たわる籾殻の陰になる下方部分に楕円錐形の根分布の希薄域ができることになる。「作土の中央盛り上がり」はほとんど全ての「稲株痕跡」に認められるから、これらが一粒播きもしくは一株（個体）



左写真：バケツに「湯切り」を埋置した中央に一粒植えで生育中の種
中写真：同上「湯切り」から外して泥土を落として下から見たところ。中央に種子籾殻
右写真：左写真の「湯切り」を持ち上げ外側の泥土を落とし、根をカットした状態。逆位。中央付近では根量が乏しい。

第 129 図 稲の根系分布

植えであったことを示すと考えられる。複数個体が株を形成していたのであれば、各個体の根域が干渉しあって A のような状況は発生し難いであろう。

籾殻が非常に腐朽し難い土壌改良資材であることを考えれば百間川遺跡の「稲株痕跡」がイネ体の置換痕跡と考える立場からは B は非常に考え難いことである。川田条理遺跡の「稲株跡」はイネそのものの遺体であるが、百間川遺跡の「稲株痕跡」は植物体自体の痕跡ではない疑いがあると思われる。

慣行栽培例によれば、登熟したイネの株元にはかなりの頻度で種子外皮（籾殻）が残っていることが観察できるし、筆者の容器栽培の場合、土中にあるものも含めれば種子籾殻の残存率は 100% と言っ

ても過言ではない。なお発芽した籾殻には胚に接した部分に発芽孔が認められる。(発芽孔は茎の生長と共に大きく広げられ、茎に引きずられるように孔周囲の組織が外側へ引っ張られた「バリ」を残す。今回の炭化籾では観察不足であったが、籾殻に残る発芽孔の精査により当該種子が発芽したかや生長の度合いを推察できるものとする) 籾殻が全く遺存しない百間川例については極端な浅蒔・浅植と考えるか、稲体そのものが田面から抜けて何処かへ流されたと考えるかする他無いと思う。前者のように浅蒔・浅植だったとすると播下直後に種子の移動や苗の活着不良が生じがちなため、第128図のような整美な同心扇状にはならないと思慮されるので、筆者は後者と考える。稲が流されるなどということが実際あったであろうかという疑問が浮かぶのは現代に生きる者にとって当然かもしれないが、近い過去の洪水の際に流失した稲が写真に残されている⁽¹³⁾。百間川例は洪水痕跡であるから水田の稲も流された(少なくとも洪水流の影響を受けた)と考えるのが自然であろう。



第130図 昭和9年の手取川大水害の様子(註13から引用)

ここで「稲株痕跡」の分布図(第127図)を見ると田筆の境界に殆んど影響されずに急流が通り過ぎた跡に見えることがわかる。洪水流自体は「稲株痕跡」が検出されない範囲にも及んでいたはずであり、稲は「稲株痕跡」の検出範囲を超えて一面に生育中であつたと考える方が無理が無い。にもかかわらず「稲株痕跡」には検出された範囲と検出されなかった範囲があるということであろう。この状況は説明を要するところと考えるが、筆者は流れの強かった部分の稲が流失したのとする。「稲株痕跡」は検出域と不検出域の境界が明瞭で、自然界でありがちな中間的なもの或いは漸移的なものが報告されていないことも、「稲株痕跡」が稲が流された際に生じた泥の絡んだ細根も含めた根の持ち上がりに際して生じた凹みが洪水堆積物で埋没したものであることの傍証となろう。検出された「稲株痕跡」の「作土の中央盛り上がり」も上述したように流失した稲株の一個体根域の粗密により説明を得られる。

一個体で生育中であつた稲がどのように播下されたかについては、直播(バラマキや極端な浅播きではない)とすれば、覆土なり播き穴を塞ぐなどの作業が必要となろう。同じ作業者が播種に引き続き覆土などをする場合、「土いじり」をすることになるが、その際必然的に利き手の指先を湿らせてしまうことになる。種子をバラの穀粒溜から選り出そうとすれば「濡れ手にアワ」状態となり、一箇所の播種数を一粒に保ち続けることは実際上は不可能に近い。また仮にそれができたとしても未発芽籾の状態ではどの籾が良株に生長するかという作付け上重要な判別が非常に困難なことになると思われる。一方、苗で行えば直播作業に付随するこれらの困難は解消される。以上から百間川例が示すのは一本苗が移植された姿と考えられる。

苗は苗代(育苗床)で作るとというのが近現代日本の定番作法である。筆者が10年来細々続けている稲の容器栽培では苗代や育苗箱は設けず、単に水浸のみで芽出しから本葉3葉程度に育ったものを定植する。筆者は栽培初年には脱粒したもので行っていたが、品種が増えていくと管理上枝梗毎、後

には穂毎水浸するようになり現在に至っている。作付け量が多くなれば、株ごとあるいは株を纏めた稲束ごと水浸することになったであろう。脱穀したバラ粃を使わなくなったのは筆者の場合、種子が混じり合って生長時に「ナズの品種」が生じるのを防ぐためであるが、弥生人にしても品種管理は重要な課題であったろうから混交防止策として株ごと水浸することは大いにあり得たと考える。効率の点では脱穀粃を用いた苗代育苗の方がおそらく有利なのであろうが、苗代育苗では生育の良い株に由来する種子が集中して選ばれることになるだろう。例えば良好な形質を持ちながらも偶々本作で稔りの芳しくなかった個体・品種が淘汰されがちになると思う。筆者は良苗を選んで容器に植えるし、弥生人にしてもより良い収穫を願って各株穂中の良苗のみを定植したものと思う。これは選抜育種の実践である。偶々かもしれない少数の良収穫株に限って採種するよりも、なるべく多くの個体から種子を選択することの方が遺伝資源の多様性を継承する営みとして理に適っている。弥生人がそこまで意図したか不明だが、結果として列島内での稲作が何百回もの存亡の危機を乗り越えて現在まで続いてきている背景には、イネ遺伝資源の多様性を担保する育種・耕種上の何らかの良慣習があったと考えられるのではないか。その一つとして定植の際、なるべく多くの株から苗を選び出すという行為、(具体的には株ごと水浸して育苗すること)があったと推定しても良いと思うのである。

芽出しが首の窄まった壺形土器の体内で進められることもまた弥生人の稲に対する感性にマッチしたものであったのであろう。粃を付けたままの穂を水浸するためには根付きのままで稲を越冬保管しておくことが簡便である。そのためには高床倉庫とは別種の保管施設が必要であったろうし、「周溝状遺構」が今回至近で検出されたことの意味も問い直されるべきであろう。

本例の検討は単なる一遺跡の総括の範囲を逸脱するほどの重大な問題を孕んでいる可能性がある。

(浜崎)

註

- (1) 山野井徹 2015『日本の土』築地書館
- (2) 浜崎悟司 2014「弥生時代後期の「周溝状遺構」～稲の屋外積みについて～」『石川県埋蔵文化財情報』第32号 (公財) 石川県埋蔵文化財センター
- (3) 石川県教育委員会・(公財) 石川県埋蔵文化財センター 2013『加賀市松山D遺跡』
- (4) 石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2002『加賀市猫橋遺跡』
- (5) 立原秀明・安中哲徳 2017「弓波遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第38号 (公財) 石川県埋蔵文化財センター
- (6) 分校窯跡群の土器は主に3号窯跡が多数保管されている。焼成不良品が多く、生焼け製品や瓦質のような焼き上がり品が目立つ。胎土は粉っぽく、全体的に軟質である。本遺跡出土品にある焼歪みがあるような高い焼成温度を示す個体は若干あるものの、胎土の質感はやはり粉っぽい。杯蓋頂部に木目を残すものもある。以上の観察により、梶井衛生センター遺跡出土のTK209型式の須恵器は分校窯跡群の製品でないと判断した。
- (7) 望月精司 2007「北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落」『日本考古学』第23号 日本考古学協会
- (8) 浜崎悟司 2017「低地遺跡の小穴ーヨシ風揺れ痕跡説の提唱ー」『石川県埋蔵文化財情報』第37号 (公財) 石川県埋蔵文化財センター
- (9) 註2に同じ
- (10) 岡山県教育委員会他編 1984『百間川原尾島遺跡』2
岡山県古代吉備文化財センター編 2013『百間川原尾島遺跡』8
- (11) 柳瀬昭彦 1991「田植えはいつごろ始まったか」(日本考古学協会編『シンポジウム日本における稲作農耕の起源と展開』学生社
- (12) 佐藤洋一郎 2002『稲の日本史』 角川書店
- (13) 川北町水害誌編纂委員会編『手取川大水害復興五十年誌』1984年



1 区中～西部全景



1 区～2 区近景 (南から)



2区西半



調査区上空から東北東方向を望む



1 区 全景（西から）



1 区 全景（東から）



1 区 SB01



1 区 SB01 P48



1 区 SB01 P111



1 区 SB01



1 区 SB01 P50



1 区 SB01 P97 南から



1 区 SB01 P105 南から



1 区 東ビット群 (北から)



1 区 P77 西から



1 区 P63 南から



1 区 P82 南から



1 区 P93 西から



1 区 P87 東から



1 区 P106 南から



1 区 SE01



1区 SE01 井戸側板



1区 SE01 側板1枚取り外し



1 区 SE01 上層



1 区 SE01 梓内断面



1 区 SK01



1 区 SK02



1 区 SK02 D1 断面



1 区 SK02 D2 断面



1 区 SK03 断面



1 区 SK04 断面



1 区 SK05 断面



1 区 SK08



1 区 SK02・03 完掘 (西から)



1 区 確認坑



1 区 P38



1 区 P42



1 区 河川上面



1 区 西部



1 区 西部



1 区 中部遺構検出状況



1 区 中部



1 区 中部



1 区 SD01 上空から



1 区 SD01 完掘状況



1 区 SD01 最下層



1 区 SD01 最下層



1 区 SD01 最下層



1 区 SD01 土層断面



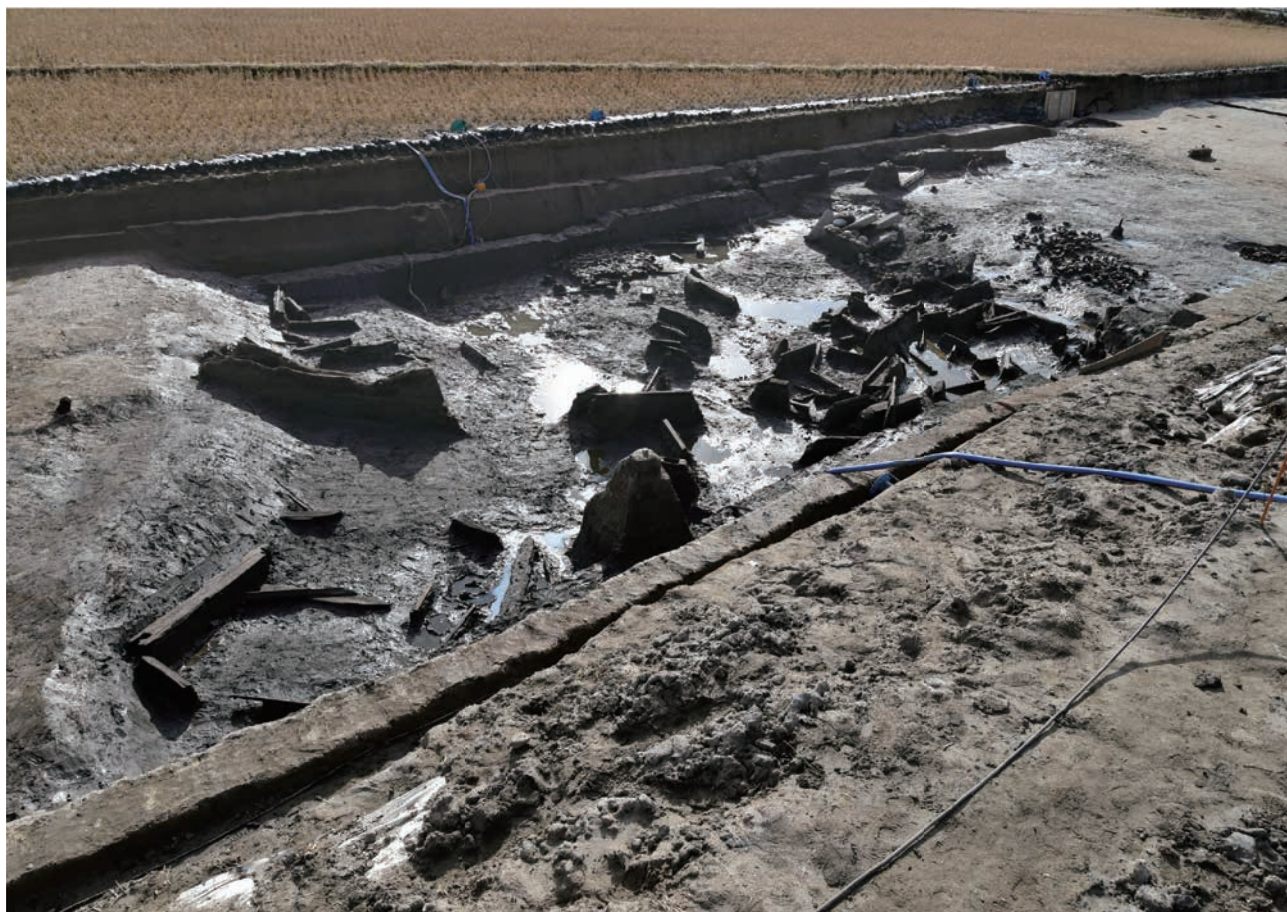
1 区 SD01 遺物等出土状況



1 区 SD01 遺物等出土状況



1 区 SD01 遺物出土状況



1 区 SD01 遺物出土状況



1 区 SD01 遺物出土状況



1 区 SD01 遺物出土状況



1 区 SD01 遺物出土状況



1 区 SD01 遺物出土状況



1 区 SD01 遺物出土状況



1 区 SD01 遺物出土状況



1 区 SD01 遺物出土状況



1 区 SD01 遺物出土状況



1 区 SD01 遺物出土状況



1 区 SD01 遺物出土状況



1 区 SD01 遺物出土状況



1 区 SD01 遺物出土状況



1 区 SD01 遺物出土状況



1 区 SD01 大型壺出土状況



1 区 SD01 東肩部遺物出土状況



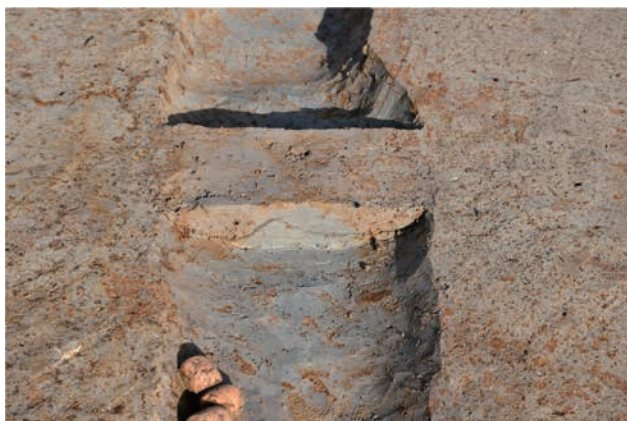
1 区 SD01 東肩部遺物出土状況



1 区 SD01 西肩部状況



1 区 SD01 西肩部状況



1 区 SD02a



1 区 SD03



1 区 SD04



1 区 SD05



2区 西部完掘状況



2区 西部完掘状況



2区 西部ビット群



2区 西部ビット群



2 区 SI01



2 区 SI01 柱組



2 区 SI01 P1 土層断面



2 区 SI01 P2 土層断面



2 区 SI01 P3 土層断面



2 区 SI01 P5 土層断面



2 区 SI01 P6 土層断面



2 区 SI01 の SD05 土層断面



2 区 SI01 の SD4 遺物出土状況



2 区 掘立柱建物



2 区 SB02



2 区 SB03



2 区 SB04



2 区 SB05



2 区 SB02 P24



2 区 SB03 P19



2 区 SB03 P20



2 区 SB03 P21



2区 SB03 P22



2区 SB04 P8



2区 SB04 P12



2区 SB04 P13



2区 SB05 P4



2区 SB05 P5



2区 SB05 P3



2区 P69



2 区 SE01 完掘状況



2 区 SE01 土層断面



2 区 SE01



2 区 SE01 井戸底の状況



2 区 SK01 土層断面



2 区 SK01 土層断面



2 区 SK02 土層断面



2 区 SK03 土層断面



2区 SD03 完掘状況



2区 SD03 土層断面



2区 SD03



2区 P01



2区 P02



2区 SD10・11



2区 SD10・11 土層断面



2区 SD10 土層断面



2区 SD11 土層断面



2区 SD11 遺物出土状況



2区 SD07



2区 SD08・14 土層断面



2区 SD08 遺物出土状況



2区 SD14 遺物出土状況



2区 SD08 遺物出土状況



3区 近景(北から)



4区 近景(南から)



3区 全景



3区 SK01 と SA01



3区 SA01 P1



3区 SA01 P2



3区 SA01 P3



3区 SK01 土層断面図



3区 SK01 遺物出土状況



3区 SK01 遺物出土状況



3区 SK01 井戸枠出土状況



3区 SK01 完掘状況



4区 全景



4区 全景



4 区 SD01



4 区 SD01 土層断面



4 区 SD01 遺物出土状況



4 区 SD01 遺物出土状況



4 区 SK01 完掘状況



4 区 SK01 土層断面



調査区遠景 (分校チャカヤマ古墳群から)

放大



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15

1区 SD01 出土土器



1区 SD01 出土土器



1区 SD01 出土土器



1 区 SD01 出土土器



1区 SD01 出土土器





1区 SD01、SE01 出土土器



2区 SD03、SD04、SD11、SK01 出土土器



2区 SD11、SD10、SD14 出土土器



2区 SD14 出土土器



2区 SD14、1区 SD01 出土土器



1 区 SD01 出土土器



1 区 SD01 出土土器



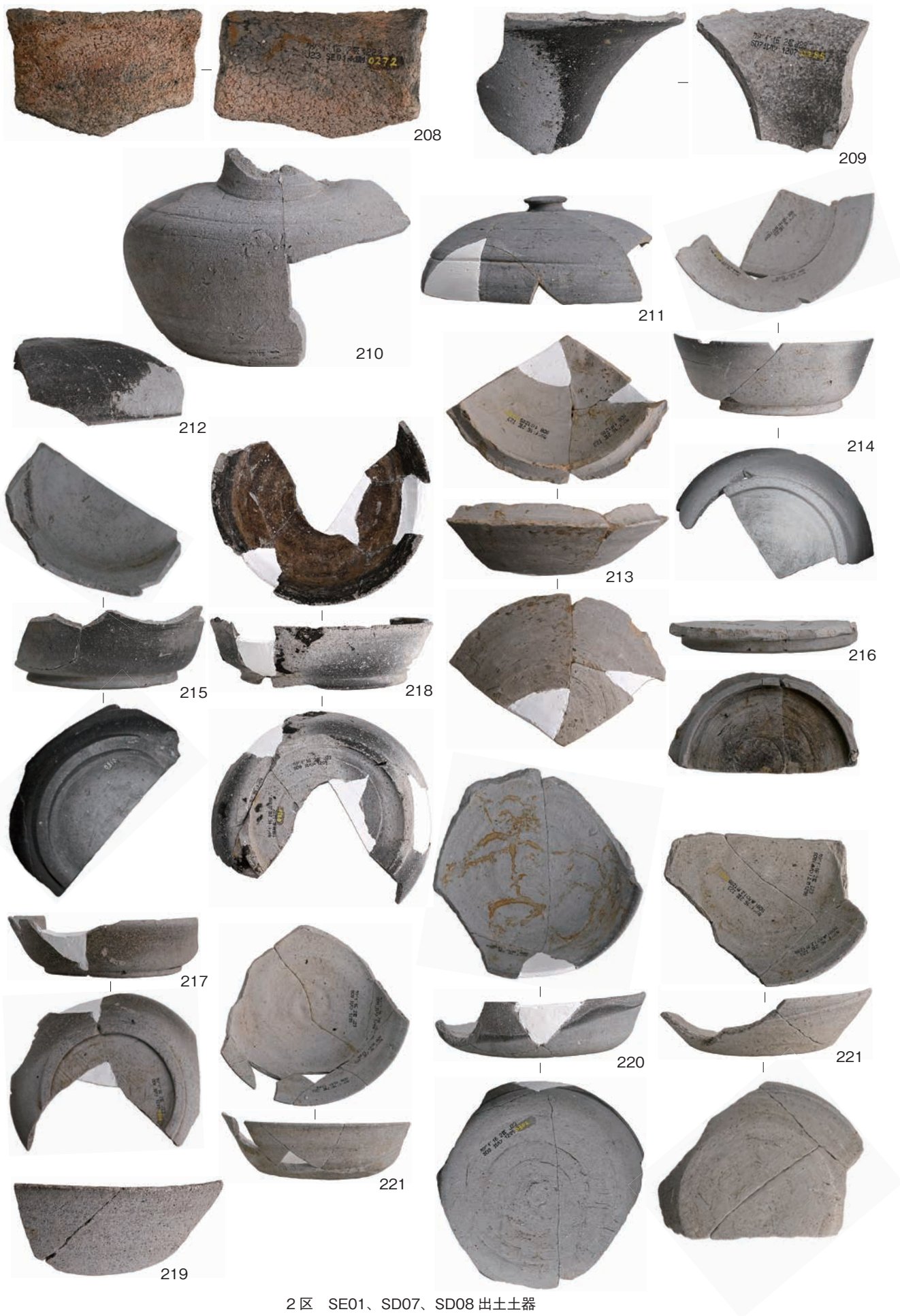
1区 SD01 出土土器



1 区 SD01、SD02、SK01、SK02、SK03 等出土土器



1 区 SK02、2 区 SK02、SK03、SE01 出土土器



2区 SE01、SD07、SD08 出土土器



2区 SD08 出土土器



1 区 包含層等出土土器



1 区 包含層等出土土器





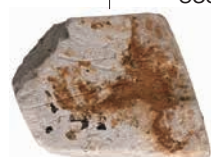
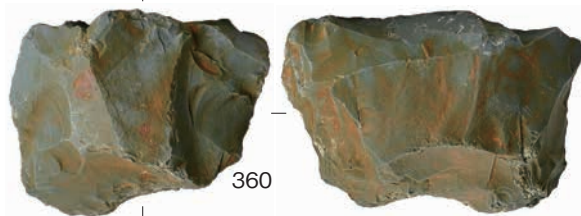
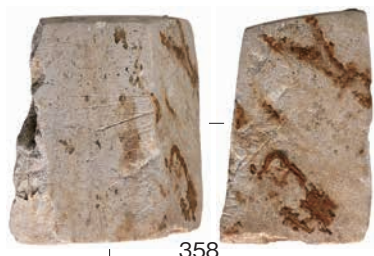
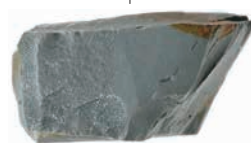
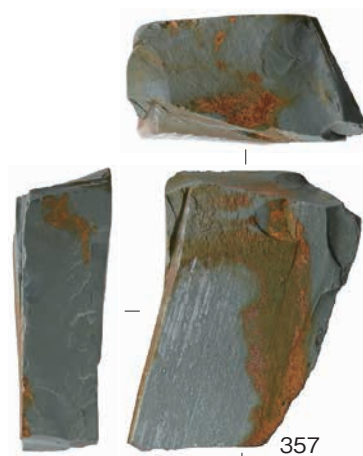
2区 包含層等、1区 包含層等出土土器



1 区 包含層等出土土器



1 区 包含層、2 区 包含層等出土土器



出土石器



362

1 区 SE01 出土木器



1 区 SE01 出土木器



1 区 SE01、SD01 出土木器



1 区 SD01 出土木器



1 区 SD01 出土木器



1 区 SD01 出土木器



1 区 SD01 出土木器



1 区 SD01 出土木器



1 区 SD01 出土木器



1 区 SD01 出土木器





464



465



466



468



467



469



470



473



472



474



475



476



477



480



478



481



479

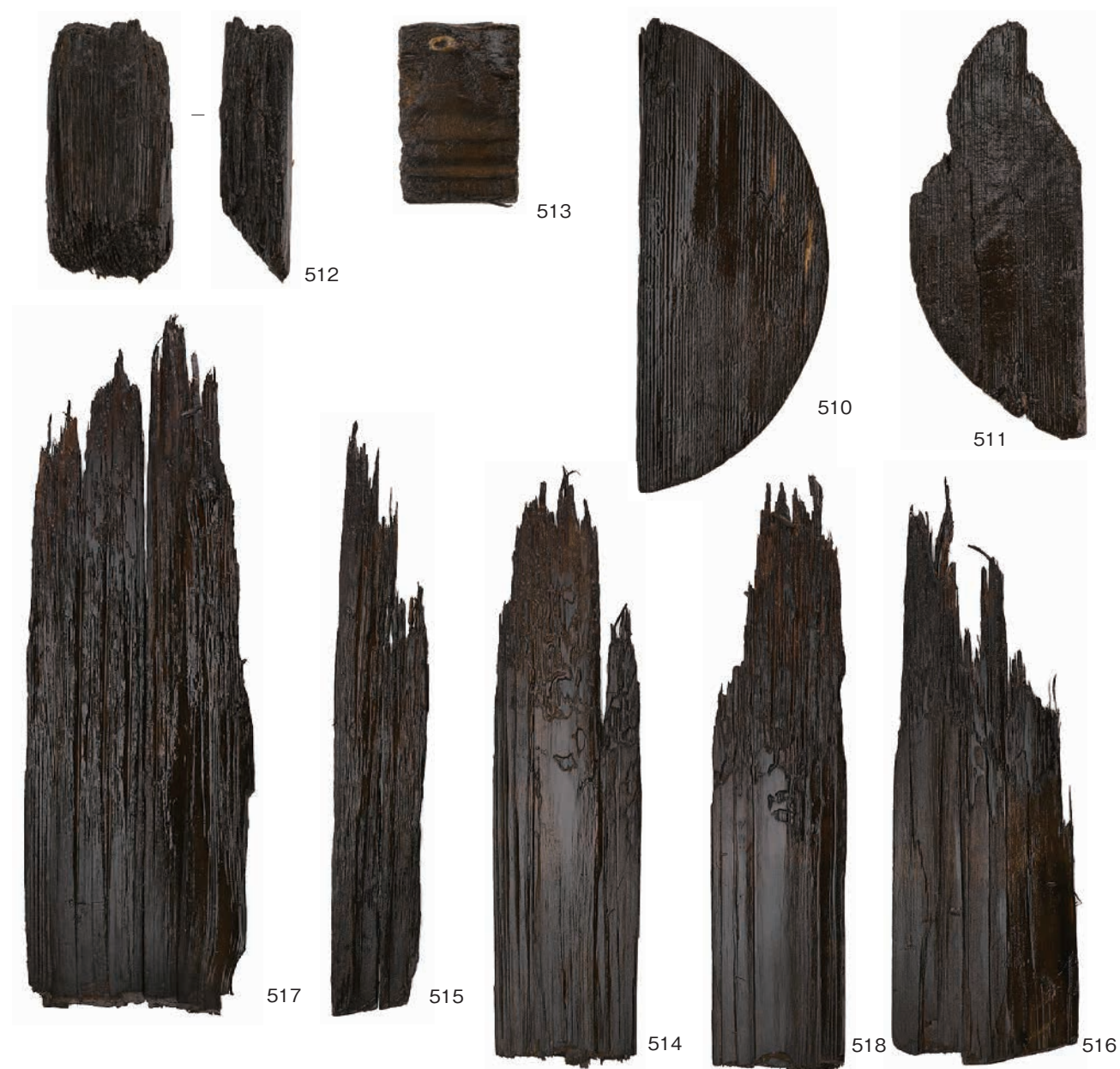


482

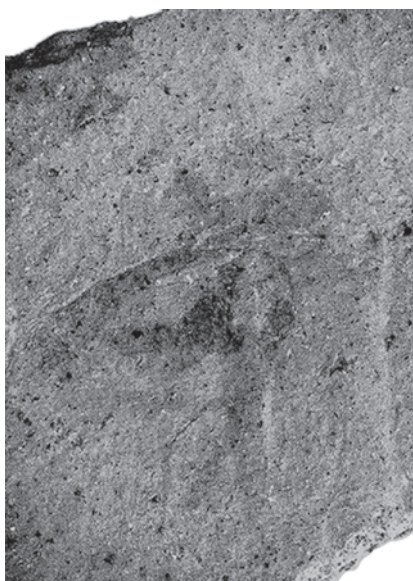


483





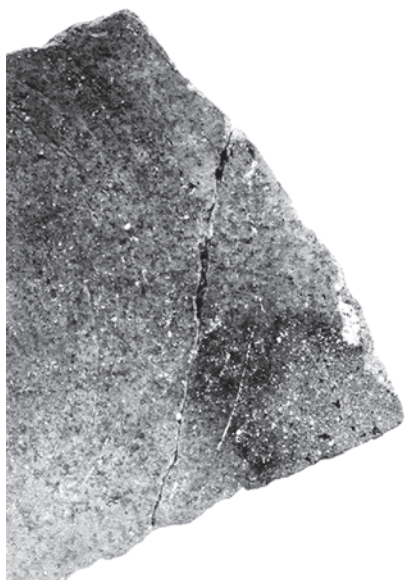
336 赤外



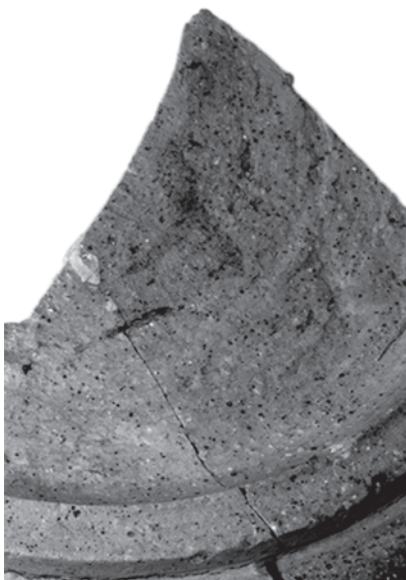
337 赤外



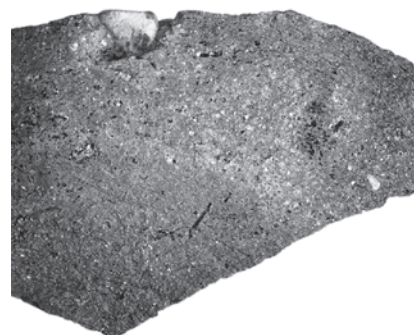
338 赤外



146 赤外



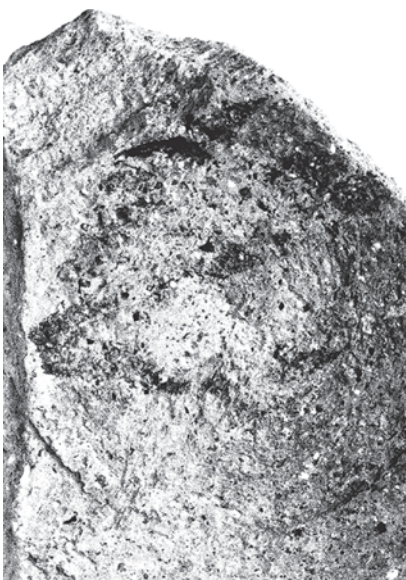
147 赤外



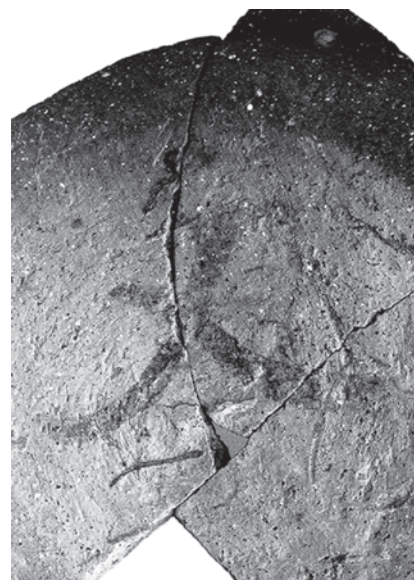
148 赤外



149 赤外



150 赤外



179 赤外

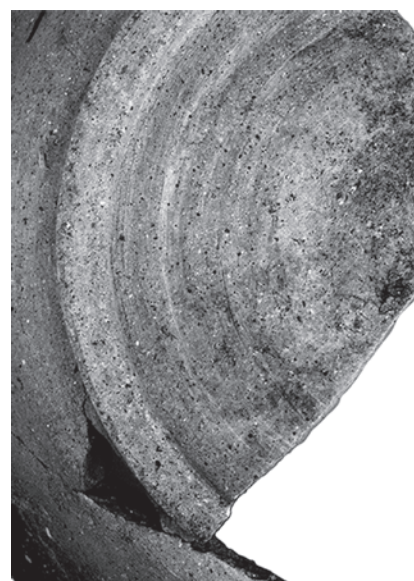


201 赤外



土器の墨書

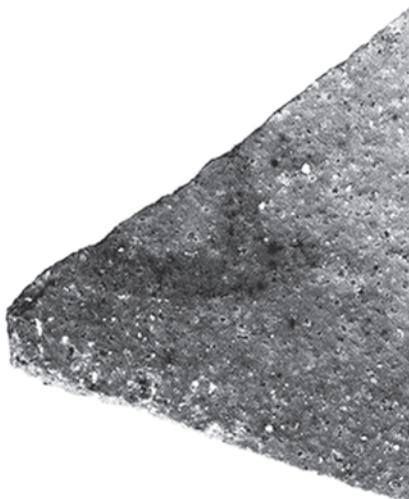
203 赤外



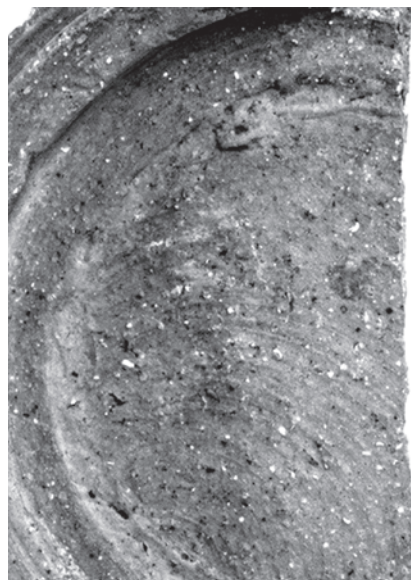
214 赤外



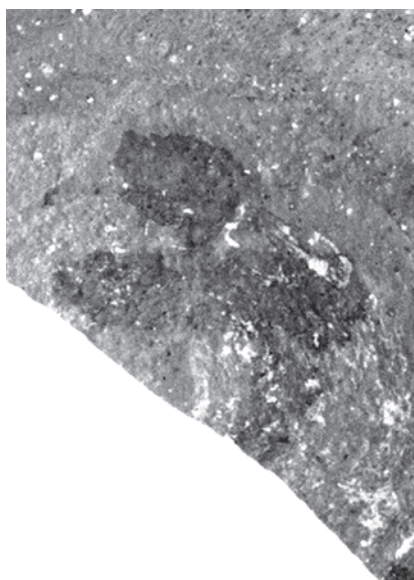
215 赤外



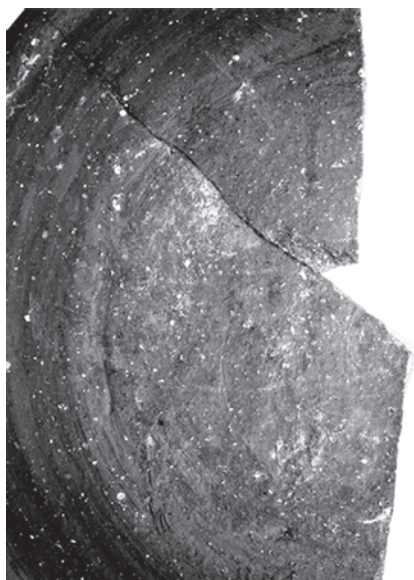
241 赤外



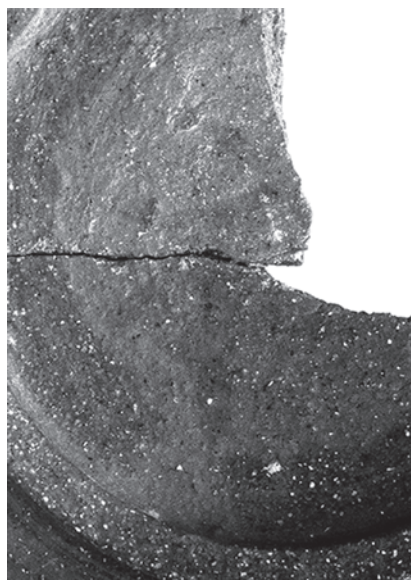
249 赤外



253 赤外



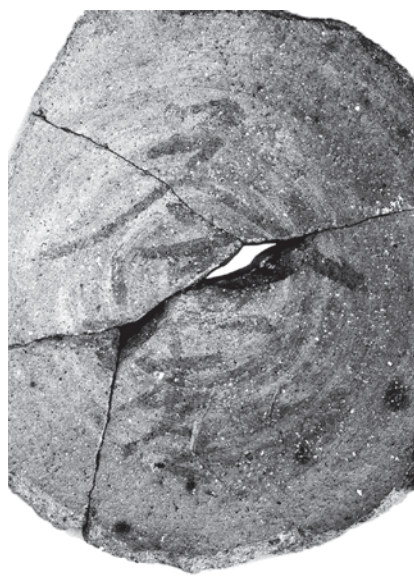
254 赤外



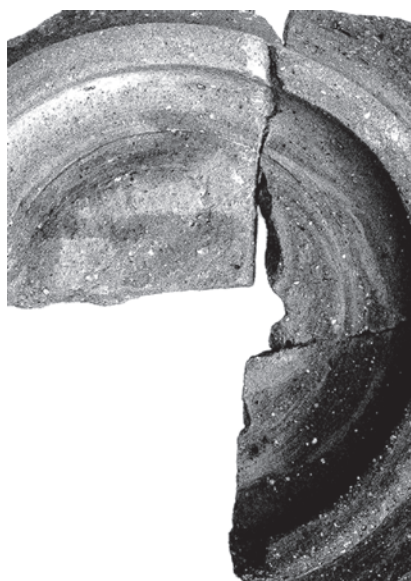
256 赤外



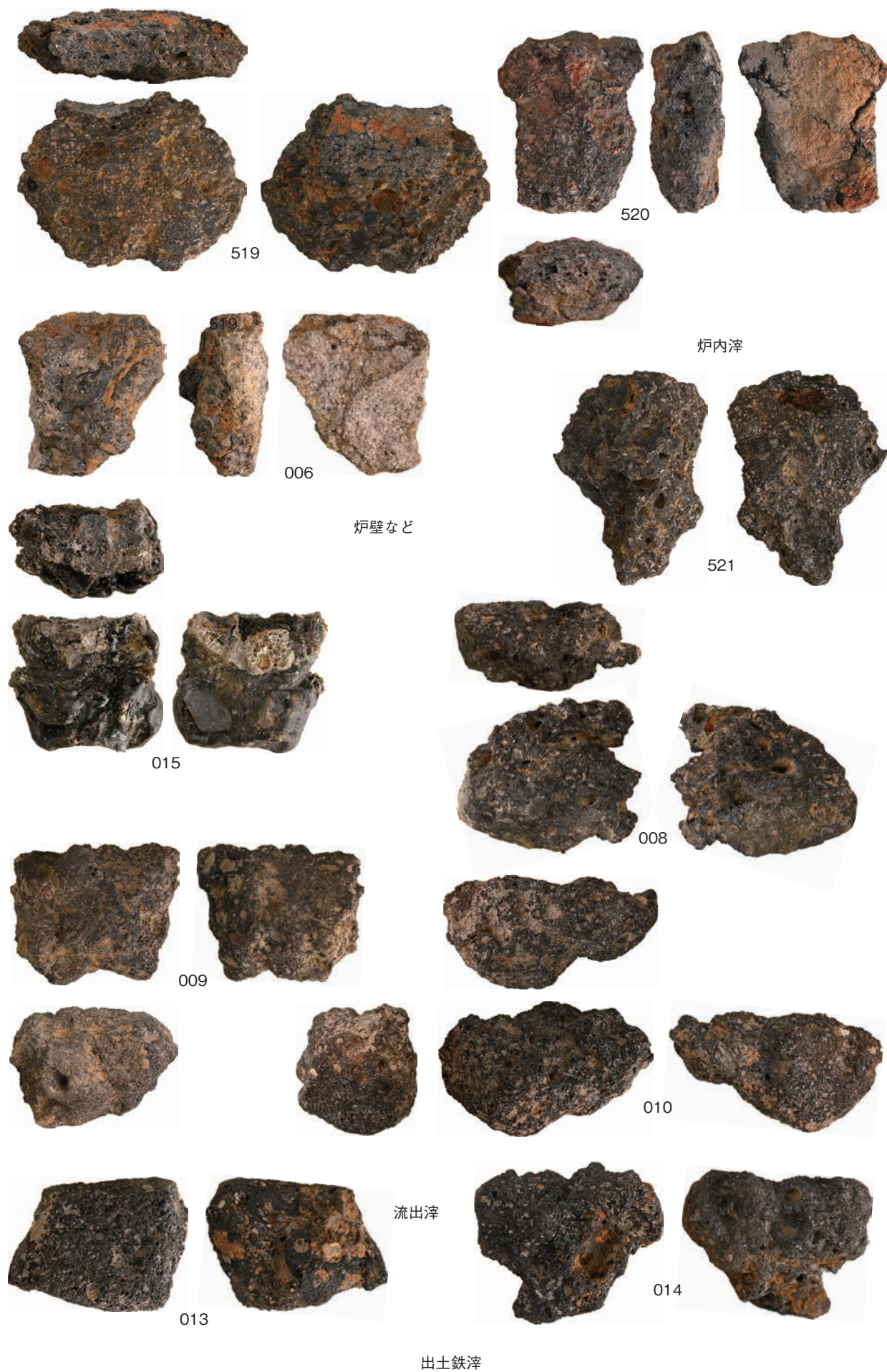
258 赤外



土器の墨書 259 赤外



304 赤外



流出滓



522



524



523



椀形滓



525



527



526



007



鉄鍋



028



011



出土鉄滓

報告書抄録

ふりがな	かがし かじいせいせいせんたーいせき							
書名	加賀市 梶井衛生センター遺跡							
副書名	北陸新幹線建設事業(金沢・敦賀間)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号	8							
編著者名	伊藤雅文、歌代若菜、浜崎悟司、久田正弘、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社 古生態研究所							
編集機関	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町 18 番地 1 TEL (076) 229-4477 FAX (076) 229-3731							
発行機関	石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2023 年 3 月 22 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 (新)	東経 (新)	発掘期間	発掘面積	発掘原因
かがし かじいせいせいせんたー 梶井衛生センター いせき 遺跡	いしかわけん 石川県 かがし 加賀市 かじい まち 梶井町 地内	17206	627600	36度 19分 31秒	136度 23分 31秒	20161024 ～ 20170120	2,540 m ²	記録保存 調査
						20200708 ～ 20200805	150 m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
梶井衛生センター 遺跡	集落跡	弥生	平地式建物、土坑、溝		弥生土器、玉未成品			
		古墳	掘立柱建物、塀、井戸、河道、溝		土師器、須恵器、砥石、舟材、刳貫桶蓋、建築部材			
		古代	井戸、土坑、溝		土師器、須恵器、砥石、鉄滓			
要約	江沼盆地東部、動橋川右岸の氾濫原に立地する弥生時代中期後葉、弥生時代終末期～古墳時代初頭・古墳時代終末期、平安時代前期の遺跡である。弥生時代終末期～古墳時代初頭の河道から多量の土器と建築部材を中心とする多量の木器が出土。東岸に7世紀の舟材転用井戸と掘立柱建物と空閑地そして倉庫群からなる遺構群がある。極めて限定される時期で、公的施設の可能性は低い。							

加賀市 梶井衛生センター遺跡

発行日 令和5(2023)年3月22日

発行者 石川県教育委員会
〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話 076-225-1842(文化財課)

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター
〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
電話 076-229-4477
E-mail daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社ハクイ印刷